
魔法先生ネギま！ 信仰する転生者

baenre

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ 信仰する転生者

【Nコード】

N9598V

【作者名】

baenre

【あらすじ】

ネギま！に酷似した並行世界の人類を守るため、主人公は自分の先祖だという聖人にネギの双子の弟として転生させられる。与えられた能力を駆使して課された使命を果たし、ネギま！世界を謳歌するために主人公が頑張る物語です。

（ 独自設定や独自考察が結構あります ）

プロローグ（前書き）

ご意見・感想等募集中です。

プロローグ

「……ここは？」

目が覚めたら、なにやら一面真っ白な部屋に横たわっていた。

起き上がり、立ち上がってみる……が、体は妙に重い。

周囲を見回してみても、壁らしきモノは見えない。どこまでも白い空間が広がっていた。

「あれ、僕は確か……」

自分は何者なのか、なぜこんな場所にいるのか。思い出せそうでない。思考に霞がかかっているようで、具体的な事は何一つとして思い出せなかった。

「ああ、気付いたか」

声がした。辺りを見回すが、人の姿は見えない。相変わらず、真っ白な空間が広がっている。

「単刀直入に言おう。君はこれからフィクションの世界、具体的に言くと『魔法先生ネギま！』の世界に転生する。」

思考には相変わらず霞がかかっている。こんな状態ではろくな思考はできない。

「自己紹介がまだだったかな。私は聖人なんだ。天草四郎、という

名前なんだが聞いたことくらいはあるんじゃないかな？」

「聖人というものもなかなか大変なものでね、無数に存在する平行世界に干渉して、人間の勢力を衰退させないように管理しなければならぬんだ」

話を聞いているうちに、思考がだんだんクリアになっていく。

「平行世界というのは無数に存在するけど、その中でもきわめて厄介なのは君たち人間が考え出したフィクションの世界だ。君たちがフィクションを作り出すたびに、それに酷似した平行世界が観測されてしまい、我々聖人の仕事が増えるんだ。しかも、何が面白いのか君たちはやたらと世界を危機に晒す。人類の存続が至上命題のわれわれとしては、たまったものじゃない」

「特に最近ばかり出されるフィクションの数が半端じゃない。やむをえず薄汚い異教の連中とも手を組んだんだが、それでも処理が追いつかないんだ」

「実は君、僕の子孫だね。その縁をたぐりよせて、わざわざ君をここまで引つ張ってきたのさ。ここまで言えば、僕が君に何をしてほしいか、わかるんじゃないかな？」

声が問う。

「並行世界のひとつに飛んで、管理をしろと……？」

「ああそうだ、正確に言えば管理じゃなくて調整だけだね。実は君がこれから転生させられることになる世界、これは君もよく知っている『魔法先生ネギま！』の世界だね、あそこでは遠い未来に人類

と薄汚い異形や化物どもが衝突して、人類が滅ぶんだ。君にはそれを食い止めてもらいたい」

「具体的に、なにをすれば……？」

「出会う鬼や悪魔なんかの化物どもは片っ端から消滅させて、異形の連中は滅ぼすか人間と和解させるか、どちらかな。先ほどに言った『転生後に与えるサービス』というのは、君の知るフィクションの能力や技能を君に与えるといったようなものだ」

「制限はあるのか？」

「もちろん、僕は我らが父、全能なる主とは違って単なる聖人だからね。制限としては、『フィクション・ノンフィクション問わず、日本人の神父やシスターが行使した能力や技能』だけを与えられるんだ。与えられるサービスを選ぶのは君だから、君が知ってるものしか与えられないよ」

「ずいぶんと厳しい条件だ。数の制限は？」

「サービスの内容にもよるから、とりあえず君がほしいサービスをいくつか挙げてみてくれ」

「少し、考えさせてくれ」

「ああいいとも、この空間では時間は無限にあるからよく考えてくれ」

思考する。

転生、と言われてもどうにもピンとこない。どうにも前世の記憶がはつきりしないから未練も何もあったものじゃない。不思議なことに前世で積み重ねた知識は思い出せるが、人間関係や自分のパーソナリティについてはほとんど思いだせない。

そもそも、異能を行使する日本人の聖職者って、極端に少ない気がする。

真つ先に思い浮かんだのは、『マーボー神父』の異名を持つ代行者、確か代行者としてはかなり優秀で、八極拳を使ったり鉄甲作用を使いこなしたりしていたはず。となれば、とりあえずは言峰綺礼の戦闘技術は欲しい。黒鍵は異形や化物に対する強力な概念武装だから、自分の使命を考えればぜひとももらっておきたい。

あとは……そうだ、『HELLSING』のシスター由美江が使っていた『島原流抜刀術』なんかは使えそうだ。異端殲滅を行う13課に所属していたならネギま！世界でもある程度は通用するだろう。

「それじゃあ……『Fate/Zero』に登場する言峰綺礼の戦闘技術全般と、『HELLSING』のシスター由美江の戦闘技術の二つを。それと、オプションで黒鍵の生産手段もつけて欲しい」

「ああ、そのくらいなら全然大丈夫だ。黒鍵に関しては……そうだな、黒鍵だけは限定的に『投影』できるようにしておこう。ただし、『壊れた幻想』は使用不可だ」

正直、これだけだと魔法世界で生き抜けるか不安になるが……Zero期の言峰はシエルを上回る戦闘力を持ってたって話だし、あとは自分次第か。

「原作に登場する人物への転生は僕の力じゃ無理だから、君は主人公の双子の弟、ということにしておこう。原作の流れを大きく変え

て物語の主人公になった気分を味わうのもよし、好きなヒロインを口説いて爛れた生活を送るのもよし、自由に生きてくれ。こっちの都合でわざわざ死んでもらったんだから、君にはそれくらいの贅沢は許されてしかるべきだ。ただし、遊びにかまけて本来の使命を怠るようなら神罰が下るけどね」

声は尚も響く。

「しかし、これはまたずいぶんと微妙な能力を選んだね。なんといつか、魔法使いというよりどう考えても剣士だね。徒手での戦いも得物を振り回す戦いでも一流になれると思うけど……まあ、ネギの弟ということで魔力量もそれなりにあるはずだから、がんばれば超一流の魔法剣士になれるだろうね」

ネギの弟、ということとは下手したら悪魔襲撃事件で死ぬ可能性もあるのか……

「そうそう、それと君の魂に祝福を与えておこう。聖人としての位は中の中ほだけど、聖人の祝福なんてなかなか得られるものじゃないよ。神父とか目指してみたらいいかもね」

「ああ、顔の造形はどうしようか。やっぱりネギに似てもつまらないし、かといって母親が母親だからそっちに似せるのもよろしくないな。いつそのこと銀髪オッドアイにしてみうのもありだとは思うけど、やっぱりやめておこう。能力は型月関連があるから、そうだな……ああ、ギルガメッシュなんかどうだろう。母親が金髪だから一応血のつながりは主張できるし、ギルガメッシュも美形だし。うん、そうしようか。そうすると、やっぱり目は赤色かな？ おお、これは我ながらいい案だ」

美貌の青年が満足げに頷いてるような雰囲気の声だ。

「さて、あらかた準備は整った。あとは、君を送り出すだけだね。いやあ、聖人になってからは下界の存在と会話する機会なんてそうそうなかったんだ。久しぶりに楽しい時間が過ごせたよ。それじゃ、せいぜい楽しく過ごせるといいね。いつてらっしゃい」

そう言くと、それっきり声は聞こえなくなった。どこまでも白い空間に、再び静寂が戻る。

しばらくして、僕の意識は徐々にフェードアウトしていった。

プロローグ（後書き）

天草四郎が聖人なのは本作の独自設定です。実際は違います。

ご意見・感想等募集中です。

1話

気がついたら、ウェールズにいた。気がついたら、4歳だった。気がついたら、『パリン・スプリングフィールド』だった。

前世ではただの大学院生で、早くに他界した両親の遺産を食い潰して神学の研究をしていた。彼女はいなかったけど友達はそれなりにいて、研究室の仲間たちとも上手くやれていたはずだ。

それが気がいたら全く別の人物になっていたというのに、何も違和感がない。違和感がないことが怖く思えてしまうほど、違和感がなかった。

パリンとしての記憶は存在する。ただし、記憶というよりはむしろ「記録」と言ったほうが正確だろう……全く実感がわかない記憶ばかりだ。

体の内側には、なにやら得体の知れないふわふわしたものがある。これが魔力というヤツだろうか。すくなくとも、『パリン』になる前の自分にはなかった感覚だ。

今の状況を一言で説明するなら、「自然なのが不自然」。それなりに楽しい生活を送っていたはずが、なぜかいきなり謎の空間に召喚され、自分の先祖を名乗る聖人に転生させられ、次の瞬間には自分が4歳児だと違和感なく理解してしまってる。言葉では説明しづらいが、自分が『パリン・スプリングフィールド』であることは確信をもって断言できる。

それにしても、あの妙な空間では夢でも見てる気分で現実味がなか

ったけど、こうしていざ転生してみるとあの聖人はやっぱり聖人だったのか、と納得してしまう。聖人がいたということはもちろん神も存在する、ということなんだろうけど……まさかこんな形で神を信じる羽目になるとは。

「ネギー！パリンー！朝ごはんできたから、さっさと降りてきなさいー！」

『アーニヤのお母さん』が、僕達を呼ぶ声がする。

4歳児の体も案外よく動くもので、初めて動かす体だというのに支障なく1階にある僕の部屋を出て、テーブルについた。

テーブルには、男の子が1人、それからおばさんが1人座っていた。自分は目の前の2人を知らないが、同時に目の前の2人がそれぞれ『アーニヤのお母さん』『ネギー』であることは理解できた。

「今日は湖に行ってくるね」

食事が終わると、ネギがアーニヤのお母さんに言った。

「気を付けて行ってらっしゃい。日が暮れるまでには戻ってくるのよ」

洗い物をしながら、アーニヤのお母さんはそう答えた。

『パリン』とネギの仲はそれほど悪くもないが、良くもない。ネギは父親のことで頭がいっぱいだし、『パリン』は屋内で本を読むのが好きだったので互いに接点がなかったようだ。

「じゃ、僕はスタンさんの家に行ってくる」

「いつてらっしゃい」

『パリン』は父親を追い求めて無茶ばかりするネギとは違い、普段からおとなしく、また聞き分けも良かったようのであまり心配はされない。

なんだかつまらないな、などと思いつつ家を出てスタンさんの家へと急ぐ。

道中、何回か村の人たちとすれ違った。笑顔で挨拶をすると、皆一様に目を細めて挨拶を返してくれる。記憶を参照すると、『パリン』もネギも村の人たちにはすごくかわいがられているようだ。もつとも、原作知識を持っている自分からすればこの人たちも『千の呪文の男』の信者なのかとげんなりしてしまう。まあ、笑顔で挨拶を返してくれるあたり根は悪い人たちではなさそうだ。

10分ほど歩くと、スタンさんの家に着いた。

「スタンさん、パリンです。今日も地下書庫を使わせてもらえますか？」

扉をノックし、中に声をかけた。

「よく来たの、パリン。鍵はかかってないから、存分に使っておくれ」

サウザンドマスターに似て無茶ばかりするネギとは違っておとなしい僕は、スタンさんにはそれなりに好かれているようだ。

「では、上がらせてもらいます」

そういつて、家にお邪魔する。

スタンさんの家の地下書庫は、この村で一番の書庫だ。主に魔法書が置いてある。

今日は、適正があるらしい影の魔法と、魔法全般に関する基礎知識を補充するために来た。『パリン』の読書レベルはまだ絵本から子供向けの本を読むようになったくらいだが、前世ではかなり英語はできたのでそれなりに難しい本も読める。

初級者向けの魔法書が並べてある棚から、魔法学校の教科書と、初歩的な魔法を解説した本、それと大人向けの魔法理論の本を手に取り、読み始める。

ちょうど魔法学校の教科書を読み終わって、要点を持参した紙にまとめおわったところでスタンさんから声がかかった。気がつけばもうお昼になっている。

好意に甘えて昼食をいただいてから、再び地下書庫にもぐって本を読む。

前世では空想上の存在でしかなかった『魔法』を勉強できるというのはなかなか楽しく、前世の勉強などよりはよっぽど身が入る。初心者向けの魔法の本を読み終わり、続いて大人向けの魔法理論の本を手取る。

魔法理論の本を読み終わったところで、今の自分の状況を紙に書き出して整理する。原作知識などを書き出すということもあって、万が一読まれてしまった時のことを考えて日本語で筆記する。

とりあえず、今の自分は数え年で4歳だ。そして、季節は冬。村が悪魔の襲撃を受けるのは確か春先の雪の日だったから、それまでになんとか身を守る手段を確立しなくてはいけない。原作どおりにことが運ぶのならネギは間違いなく助かるだろうが、『イレギュラー』である自分は助かるかどうかわからない。とりあえず、悪魔から逃げ切れる技術は確保しておかないとまずい。『投影』はあまり人前で使いたくないので、ここではまだどんな物が確認することはできない。家に帰った後、自室に鍵をかけて行っべきだろう。鉄甲作用や八極拳、島原流が扱えるかどうかも確認しなくてはならないが、これらは近郊の山奥で人目につかないように練習すべきだろう。どれも、4歳児が持つには不自然すぎる力だ。

原作ではネギはメガロメセンブリアの思惑通り、英雄として生きるように誘導されていた。

僕の使命、異形や化物の殲滅に関しては……とりあえず、それなりの実力を身につけてから賞金稼ぎやトレジャーハンターなどをつつ行っのがベストか。魔法世界や異形に関する知識が足りない今、判断することはできない。

僕はこの世界でなにをやりたいか、と問われればとりあえずは「前世での研究の続き」と答えるだろう。それほど熱心な力トリックではなかったが、キリスト教神学の研究は楽しかった。だから、わけのわからない老人たちに干渉されて血なまぐさい生活を送るなんて考えただけで怖気がする。そもそも誰が好き好んで絶対に苦勞すると分かっている道を歩むというのか。

となれば、メガロメセンブリアの干渉を撥ね退けられるだけの実力と、強固な後ろ盾を得なければいけない。確か魔法世界の学術都市

アリアドネーは魔法世界でも中立を保っていて、それなりに武力もあつたようだからアリアドネーに所属して庇護してもらうのが最上だろう。学術都市と名乗るなら一応キリスト教神学の勉強くらいは出来るだろうし、とりあえずメルディアナ魔法学校に入学してから留学という形でアリアドネーに行くことを目指そう。できれば麻帆良には行きたくないが、果たして麻帆良行きを回避することはできるのか。メルディアナの校長にもメガロメセンブリアから圧力がかかるだろうし、アリアドネーに留学すること自体も困難かも知れない。

そんなことを日本語で書き出して、懐にしまった。

魔法学校1年生の教科書の内容は大体まとめ終わったので、魔法学校2年生の教科書と魔法世界に関する本を借りて、お礼を言ってからスタンさんの家を出る。

すれ違う村人と挨拶を交わしつつ、家につくころにはちょうど日が暮れるころだった。

家に帰ると、ネギが寝込んでいた。どうやら、湖に飛び込んで風邪を引いたらしい。

原作でもそんなイベントがあつたかもしれない、などと思いつつ風呂に入り、自室へ戻った。ネギにはアーニヤ親子がつきつきりだから、僕がそばにいる必要はないだろう。正直、これからのことを考えればネギと親しくするのはあまり得策ではない。自分の時間ととりにくくなるし、サウザンドマスターに固執するネギとはどうも仲良くできる気がしなかった。

自室で魔法学校の教科書をめくっていると、魔力を使った簡単な身体

強化についての解説が目をついた。ちゃんとした呪文を唱えての身体強化に比べて効率はよくないが、使用者の魔力量によって身体強化のレベルが上がる、というのが魅力的だ。仮契約によって行われる従者の身体強化もこれの応用らしい。

教科書には、自分の魔力を「服を着込むように」体にまとう感覚、と書いてある。試しに自分の中のふわふわしたモノを体の外に押し出し、体を覆うように展開する。

しかし、最初からそう簡単にいくはずもなく、体から押し出すだけでも一苦労で、押し出したとしてもそのまま霧散してしまっただけ。

20分ほどそれを続けていると、なんとか体の回りに魔力らしきものをまとった状態を維持できるようになってきた。原作の神楽坂明日菜はこれをすぐに使いこなしていたが、どれだけのポテンシャルがあればそんなことができるのだろうか。もしかしたら、僕は魔力の扱いがあまり上手じゃないのかもしれない。魔力量が多すぎて扱いが難しいだけなんだ、と信じたい。

魔力をまとった状態では、体が軽く感じる。なるほど、身体強化とはこういうものかと一人で納得し、まとった魔力を霧散させた。

アーニヤ親子はネギの看病で忙しいだろうから、自室に人が入ってくることはたぶんないだろう。さすがに、4歳の子供の部屋に鍵はついてなかった。

黒鍵の投影はどうすればいいのかな、と考えたら、すぐに頭の中に詳細な設計図が思い浮かんだ。

なぜかは知らないが、どのように魔力を使えば黒鍵が投影できるのかも頭の中に知識として存在する。おおかた、あの聖人のサービス

だろう。

設計図を思い浮かべ、ベッドの上に手をかざして、そこに黒鍵を投影するイメージで呪文をつむぐ。

「投影、開始」

手のひらから魔力が抜け、ベッドと手のひらの間の空間に魔力が漂う。それを、設計図に流し込むかのようなイメージで操作すると、次の瞬間そこには黒鍵が投影されていた。

この間、およそ5秒ほど。最初にし手間、まあまあうまくできたのだろう。

ベッドの上に落ちた黒鍵を手にとって、意外と重かったのであわてて身体強化をしてから、まじまじと眺めた。

手に取った感触では、重心は剣の先端のほうにあるようだ。作中は「どちらかというところ矢に近い」などといわれていたから、そういうことなのだろう。もう2本投影し、指と指の間に柄を挟みこむようにして3本を右手で握ってみる。

身体強化を少し強めて、ようやく振り回すことができた。身体強化がなかったら、そもそも一本を握ることさえ不可能だろう。身体強化を強めた状態なら、鉄筆を三本握りこんだくらいの重さしか感じない。

室内で刃物を振り回すのもどうかと思い、投影した黒鍵を消した。消すのはほとんど苦勞せずにできたので、当面は投影する速さを鍛えるべきか、などと考える。

村に悪魔が来るまで、おそらくあと一ヶ月ほどしかない。その間にできるだけ戦闘力を高めておくべきだが、具体的にはどうするのが最善だろうか。

自身の魔力量が尋常じゃなさそうだというのは気づいているが、それをどう生かせばいいのか。身体強化にも限度があり、あまりに大きい魔力を纏った場合には体が耐えられなくなり大怪我をしてしまう。

ならば、悪魔襲来の日にはできるだけネギの近くにいるしかないだろう。今できる程度の身体強化で悪魔たちから逃げ切れとは思わないので、サウザンドマスターに助けてもらえることを期待するしかない。せめて、低位の悪魔程度なら撃退できるように 鉄甲作用を用いた黒鍵の投擲を練習しておくか。

そこまで考えて、今日はもう遅いので眠ることにした。

2 話（前書き）

ご意見・感想等募集中です

2 話

翌朝。

目が覚めて、昨日と同じように朝食をとった後、アーニヤのお母さんに今日は湖に行く旨を伝えた。

「あらあら、パリンくんが外で遊んでくるなんて珍しいわねえ。ネギの看病は私たちがやつとくから、遊んできなさい。くれぐれも、ネギみたいに湖に入ったりしないように」

そういうと、アーニヤのお母さんはまたネギの看病へと戻っていった。信頼されているのはわかるが、それにしてもここまで構われな何とかえって面白い。村の人たちやスタンさんにはそれなりに可愛がってもらっているが、アーニヤのお母さんはほとんどネギに付きっ切りである。まあ、しょっちゅう問題を引き起こすし、どうも情緒不安定気味なところがあるからしょうがないといえましょうがないのだろう。

家を出て、村の裏山越えたところにある湖に向かってあるく。夏は村の猟師なんかがよく歩いている裏山だが、冬にはほとんど誰も立ち入らない。だから、鉄甲作用を用いた黒鍵の投擲の練習にはうってつけだろう。

裏山を越える、といっても村の人たちが湖までの道を整備してくれているので、ちょっとした坂道を登ったり降りたりするだけですぐにつく。身体強化を使ってもより早足で歩いたが、だいたい30分ほどしかかからなかった。

森を抜け、湖畔に着くと早速黒鍵を投影した。まずは一本だけを右手の指に握りこんで、投擲の構えを取る。

黒鍵の投影と同じように鉄甲作用の使用も感覚的に理解できるなら、さまざまな構えを試してみればいいんじゃないか、と考えて次々に構えを変えていく。

3分ほど使って森に向かって色々な構えを試すと、右腕を体の左側までひねり、引き絞るように構えた瞬間に 鉄甲作用が「理解できた」。

その構えのまま、引き絞った腕を体全体を使って渾身の力で前方に振るう。すると、投げられた黒鍵は風を切って前方に飛び、轟音とともに前方に生えていた木を粉碎した。

黒鍵が当たったところを中心に木は砕け散り、黒鍵はその奥に生えていたもう一本の木に深々と突き刺さった。

あまりの威力にしばし呆然としてから、あわてて周囲を見回す。幸い、人影らしきものはまったく見当たらなかった。

それからは、何回か1本ずつ黒鍵を投げてみて、慣れてきたと感じたら今度は2本ずつ投げる、というようにして投擲の練習をした。森林を大々的に破壊するのは忍びないし、何より目立つようなことはしたくないので今度は湖に向かって投げた。

1時間ほど練習すると、右手では3本の黒鍵を同時に投げられるようになった。今度は左腕で、と意気込んで1本の黒鍵を握りこんで投げてみたが、利き腕でないためなかなかうまくいかない。

そうこうしているうちに太陽が真上に昇ってきたので、あわてて強めの身体強化をかけて走って家に帰る。走って帰ったおかげで、今度は15分ほどで家に到着した。

ただいま、と声をかけて家に入ると、ちょうどアーニヤのお母さんがお昼ご飯を作っているところだった。

「おかえりなさい、パリン。もうすぐお昼ご飯ができるから、座って待ってて頂戴」

テーブルについてから5分ほどすると、アーニヤのお母さんが昼食を運んできた。今日の昼食はパスタのようだ。

「そうだ、兄さんの具合はどう？」

「アーニヤが帰ってくるそうだから、そのついでに薬師さんのところにお薬を取りに行ってもらってるわ。それを飲んで寝ていれば夕方には熱は下がると思うわ」

幼馴染のアーニヤは、ネギに対しては典型的なツンデレだ。しょっちゅういじわるをしてはけんかして、翌日には仲直りなんてことを繰り返している。いつもネギにかまってばかりいるので僕とはそれほど親しくしていないが、ネギのために薬をとりに行ったりするところからするといいい娘なのだろう。

パスタを食べながら他愛のないやりとりをして、食べ終わったら自室に戻る。

魔力で身体強化を行っていたにもかかわらず、右腕が少し痛む。昨日スタンさんから借りてきた魔法学校の教科書を開き、ベッドに寝

転んで読み始めた。

子供向けの教科書だから仕方がないが、それにしても文字は大きい
イラストばかりなので、読破するのに1時間もかからない。確か、
原作では悪魔襲撃前に魔法の発動体をもらっていたはずだから、そ
れをもらったらすぐに魔法が使えるくらいには勉強しておきたい。

教科書を一通り読み終わった後、要点をノートにまとめているとネ
カネ姉さんとアーニヤが帰ってきた。

全寮制の魔法学校に通っているはずなのだが、ネギがやんちゃをし
て怪我をしたり寝込んだりするとすぐに帰ってくるのだ。ここ一ヶ
月ほど、一週間に一度くらいは帰ってきている。

ネカネ姉さんとアーニヤが取り乱して、なにやら騒いでいる声が聞
こえる。ネギの部屋は僕の部屋の隣なので、うるさくてかなわない。

ネカネ姉さんはは30分ほどネギの部屋で騒いで、それから僕の部
屋にも顔を出した。アーニヤはどうやら騒ぎ疲れて眠ったらしい。

「パリンはまた読書？ちよっとは外に出なさいよ」

「おかえり、ネカネ姉さん。今日は午前中に湖まで行ってきたから、
一日中引きこもってるわけじゃないよ」

「まあ、しばらく会わないうちにずいぶんと口が達者になって……
そうそうパリン、今日はあなたに渡すものがあつたの」

そういつて、ネカネ姉さんはふっふっふ、なんて笑いながらなにや
ら先端に星の飾りがついた棒きれをとりだした。

見るからにお子様用のそれは、おそらく見習い魔法使いに贈る発動

体なのだろう。

「はい、子供用の魔法の杖よ。パリンも9月からは魔法学校に入学するんだから、それまでに少しは勉強しておきなさいよ。まあ、パリンなら言われなくてもやってそうだけど……」

「今読んでは本は魔法学校の教科書だよ。言われなくても、勉強くらいはしてるさ」

軽口を返して、魔法の杖を受け取る。子供用ではあるが、魔法の発動媒体として使用できるくらいには魔力の通りはよさそうだ。

その後、30分ほど他愛のない会話をこなし、ネカネ姉さんはネギの看病に戻っていった。

教科書のまとめを仕上げ、ネカネ姉さんにもらった魔法の杖を手にとつてしげしげと眺めていると、どうやら夕飯ができたらしくお呼びがかかった。

外を見ると、もう日は沈んでいる。

部屋のランプを消して部屋から出て、久しぶりに大人数での食事を取った。

ネギもどうやら快復したようで、アーニヤと他愛もないことで口げんかをしている。

僕の自意識が目覚めるまでのパリンは、こういった団欒の時には黙ってニコニコしていたようなので、僕もそれに習ってほほえましい気分でアーニヤとネギのやり取りを眺めていた。

「そうだ、ネギとパリンに魔法を教えてあげましょうよ」

ふと、アーニヤが言った。

「アンタたちも魔法学校に入るんでしょうから、『火よ灯れ』くらいは使えなきゃいけないわ。さ、教えてあげるから外に出なさい」

ネギに向かってやたらとお姉さんぶって接するアーニヤを見て、アーニヤのお母さんとネカネ姉さんが苦笑している。

そんな流れで、部屋においてあった杖を取って外に出た。

ネギもどうやら杖をもらっていたようで、わくわくした顔で杖を握り締めている。

「魔法学校に入ってまず最初に習うのは『火よ灯れ』の呪文よ。杖の先にちよっとした火をともすだけの簡単な呪文だから、ネギはともかくパリンならすぐにできると思うわ。始動キーは『プラクテ・ビギ・ナル』を使って頂戴。魔法学校を卒業したら自分だけの始動キーを考えるんだけど、学校にいるうちは『プラクテ・ビギ・ナル』を使うから」

ふふん、物知りでしょう、とでも言いたげに胸を張って解説する。そんなことは1年生用の教科書を読んで全部知っていたが、それを指摘してアーニヤの機嫌を損ねるのも大人気ないので黙っている。

ネギが「アーニヤは物知りなんだね」などといって、素直じゃないアーニヤが顔を赤くしてなにやらブツブツいつているが、そんなことよりも早く魔法を使ってみたかった。

杖に魔力を浸透させ、先端に火をつけるイメージを自分の中に確立

し、呪文を唱える。

「プラクテ・ビギ・ナル、火よ灯れ！」

どのくらいの魔力を注ぎ込めばいいのかわからなかったので、とりあえず精一杯の魔力を注ぎ込んで呪文を唱えた。

すると、せいぜい30cmほどの魔法の杖のから、1mもあろうかというほどの火柱が立ち上がった。

あわてて流し込む魔力を小さくすると、1/10ほどに調整したところでちよつとした松明程度の炎に落ち着いた。

「あー、びつくりした」

「びつくりした、じゃないわよー！なによその馬鹿魔力、魔法学校の先生だってそんな火柱作れないわよ！」

ネギと戯れていたアーニヤが絶叫する。

「まあまあ、ちゃんと大きさも調整できたんだし、そんなに叫ばなくてもいいじゃないか」

そういつてアーニヤをなだめると、なにやら頭を抱えてうんうんとうなりだした。

「だいたい、調整できたって簡単に言うけど普通はそんなに簡単に魔力の制御なんかできないわよ。そもそも、普通の魔法学校の生徒は最初に魔法を成功させるまでに3日はかかるというのに……」

ほめられるのは嬉しいけど、僕は前世の知識とか原作知識とか、ズルをしているようなものだし。なんとなく居心地が悪くなって、話題を切り替える。

「ところで、魔法の属性ってどうやって確かめるんだっけ？」

それなりに魔法の才能があることはわかったが、自分の属性というのも確認しておきたい。

本で読んだ限りでは、得意とする属性によって戦い方も変わってくるようなので、早めに確認しておくに越したことはないだろう。

「それならスタンおじいちゃんが属性の判別ができる魔道具を持っていたはずよ。今日はもう遅いから、明日にでも使わせてもらえば？」

いつのまに外に出ていたのか、近くにいたネカネ姉さんが答えた。

「いきなり窓の外で火柱が上がるんだもの、何かと思ってびっくりしたわ」

「驚かせてごめんね。まさか僕もあんなふうになるとは思ってもみなかったんだ」

なにせ、魔法を使ったのは初めてだったのだ。少しくらい制御に失敗しても、そのくらい許して欲しい。

ネカネ姉さんとそんな話をしているうちに、どうやらネギも着火に成功したようだ。

僕と同じくらいの大きさの火柱を吹き上げているが……いつまでたっても火の勢いがおさまらない。原作でも魔力の制御が上手く行っ

てなかった描写があつたけど、やっぱりかわらないのか。

魔力の制御といえば、本を読んだ限りでは身体強化の魔法は「戦いの歌」と「戦いの旋律」の2つの魔法があるらしい。後者は前者の上位互換で、主な効果としては術者の攻撃力、防御力、その他身体能力の大幅アップに加え、持続性の高い対物魔法障壁の生成が挙げられる。

ただし、これらの2つの呪文は唱えてから強化の度合いを調整することができない。身体強化自体は魔力の扱いに熟達することでのこれらの2つの呪文よりもはるかに柔軟な行使ができるようなので、魔法剣士希望としては呪文をつかわない身体強化を使いこなせるようになりたい。

まだ試してみたことはないが、魔力をまとうのではなく、魔力を『放出する』ことによって身体強化を行つてみることを考えている。

魔力をまとうよりも燃費は悪くなるだろうが、放出する魔力の量を自在に調節できるようになれば、機動力・防御力の大幅な強化が望める。もっとも、独自技術の開発には時間がかかるのが常だから、最低でも年単位の時間が必要になるだろう。そういったことを考えれば、『戦いの歌』だけでも覚えておいて損はない。

悪魔が襲来するまでに『戦いの歌』を覚えることができれば、ひよつとしたら独力で悪魔から逃げ切れるかもしれない。ただでさえ強力な黒鍵の投擲も更に強化することができるし、なにより防御力の向上はとても魅力的だ。魔法障壁の一枚も張れないようでは、いくら攻撃力が優れていてもすぐに死んでしまう。

「だいぶ冷えてきたし、今日はここまでにしておきましょう」

ネカネ姉さんがそう言うのと、僕は真つ先に家に入った。魔法は簡単に成功してしまったし、早くお風呂に入りたかった。ネギはまだ未練たらただったけど、アーニヤが一喝して家に引きずり込む。

お風呂から上がって、30分ほど魔法の行使についてネカネ姉さんに聞いてから、ベッドに入った。明日の朝にネカネ姉さんとアーニヤは魔法学校に戻るらしいので、明日からは『戦いの歌』の練習と黒鍵の投擲の鍛錬に励むことになるだろう。

そういえば、得意な属性のチェックもしておかなければ、などと考えているうちに、僕の意識は闇に落ちていった……

2 話（後書き）

ご意見・感想等募集中です

3 話（前書き）

ご意見・感想等募集中です

3話

冬も終わり、積もった雪から新芽が顔を出しつつあった頃。

その日は、もう春だというのによく雪の降る日だった。

そろそろ悪魔の襲撃があるだろう、ということでもここ5日ほど日が昇っているうちはネギと一緒に遊んでいた。日が暮れてからは、相変わらず魔法書を読んだり、身体強化の魔法のテストをしたりして過ごしている。得意な属性は判明したが、村の魔法使いの中にも使い手がない『影』の魔法に適正があるようだった。スタンさんの地下書庫にも影の魔法に関する本はほとんどなかったたので、影魔法に関しては魔法学校に入学してから学ぼうと思っている。

いつもどおり、湖で追いかけてこをして遊んでいたその日。

そろそろお昼の時間だということで村へ戻る道を歩いていたときに、村の方角からまるで隕石か何かが着弾したかのようなとてつもない轟音が聞こえた。

ネギと顔を見合わせ、村へと急ぐ。

5分ほどして、村の入り口に到着した僕達兄弟が目にしたのは、地獄そのものだった。

燃え盛る家々、空を舞う醜悪な怪物と、そこかしこに飛び散っている血。

若い男のものと思われる千切れた腕や、なにより目に付いたのは石

像と化した大勢の村人達だった。

村長の家の周りに魔法使いが円陣を組んで必死に応戦しているが、数でも負け、しかも頭上を取られた魔法使いたちは一人、また一人と石にされてゆく。

「……………うぐつ、げええええ……………」

隣に立っていたはずのネギは、あまりに陰惨な光景や、ただよう死臭に耐え切れずにうずくまって嘔吐していた。

僕といえば、この光景に対する嫌悪感や、こうなることを知っていながら何も手を打たなかった自分への嫌悪感に苛まされながらも、それを上回る死への恐怖にかられていた。

「プラクテ・ビギ・ナル、戦いの歌！」

ここ一ヶ月を習得に費やしてつい先日使えるようになった身体強化魔法を発動させ、村に背を向けて一目散に逃げる。

待っていればサウザンドマスターがくるだろうから、むしろネギの傍にいたほうがよかったのかもしれないが、自分が殺されるかもしれないという恐怖に突き動かされ、落ち着いて思考するだけの余裕はなかった。

10分ほどで裏山を駆け抜け、湖の向こうまで逃げたとき、3匹の悪魔が追いつがってきていることに気付いた。

その3匹が見るからに貧弱そうな外見をしていたこともあって、僕は落ち着きをとirmどした。

右手に握っていた杖を左手にもちかえ、投影した3本の黒鍵を全力で悪魔めがけて投擲する。

『戦いの歌』を発動した状態で鉄甲作用を用いれば、投擲した黒鍵は岩をも貫通するほどの威力を持つ。黒鍵が対化け物用の概念武装であることもあいまって、黒鍵が命中した2匹の悪魔は一瞬で蒸発した。

突撃してくるかに見えたもう1匹の悪魔は、明らかに戦闘能力がなさそうな子供が一瞬で2匹の同属を屠ったことに驚いたのか、立ち止まって呆然としている。

その隙を突いて、言峰綺礼由来の八極拳で悪魔を吹き飛ばし、投影した黒鍵を投擲して止めを刺す。

止めを刺した悪魔が蒸発したのを確かめると、投影した黒鍵を消して再び全力で逃げ出す。現在の『戦いの歌』の最大持続時間は約30分、黒鍵の投影はせいぜい『戦いの歌』10秒分ほどしか魔力を消費しないので、まだ魔力に余裕はある。

あと10分も走れば、もうひとつの魔法使いの集落がある。そこまで逃げ切れればどうにかなるだろう、と思ってさらに走る速度を上げる。

森を抜け、平地に出てしばらくすると魔法使いの集落が遠くに見える

てきた。

安心して、走る速度を弱めたその時――

後ろから、声がした。

「いやはや、その年にして『戦いの歌』を使えるとはなんとも才能ある少年だ。その才能をこんなところで摘み取ってしまうのは惜しいが、これも仕事でね」

背後で膨れ上がる禍々しい魔力は、間違いなく人間のものではない。振り向いたが最後、凶悪な魔法に消し炭にされてしまうであろうと考え、全力で前方に見える村めがけてダッシュする。

が、突然目の前に現れた人影に停止を余儀なくされた。

奇襲を受けてはひとまりもないので、全力でバックステップする。一気に10mほど後方に飛んで、老紳士の姿をした悪魔と対峙した。

「かなわないと悟るやいなや一目散に逃げ出すその決断力、とても子供のものとは思えないな。英雄の血筋とはかくも恐ろしいものか……」

目の前の悪魔は攻撃する様子を見せない。その余裕たっぷりの様子を見て、パリンも冷静さを取り戻す。

「さて少年、私は落ちぶれたが貴族だと自負しているからね、将来有望な若者に先手を譲ろうではないか！ さあ、どこからでもかかってきなさい！」

そう言つて、悪魔——おそらく、原作に出てきたヘルマンという『爵位持ち』の悪魔——は、芝居気たっぷりに両腕を広げた。

目を凝らすと、ヘルマンの後方から黒い点が徐々にこちらに近づいてきているのが分かる。おそらく、村に派遣するために組織された援軍だろう。

本気でやりあえば僕なんてひとたまりもなく虐殺されるのが目に見えているが、先手を取れるなら少しくらい持ちこたえることはできるはず。

特に、黒鍵は鉄甲作用によって見た目や速さからは想像もできない威力を持っている。

もし子供だと侮つて、障壁を弱めているのならば、反撃の隙を与えないように怒涛の勢いで攻撃をしかければあるいは倒せる可能性もある。

意表をついて、少しの間時間を稼ぐだけなら——ここで、魔力を出し惜しみするべきではない！

「投影、開始！」

『戦いの歌』の効果は、杖を手放しても魔力を供給できる限り持続する。

両手に3本ずつ黒鍵を握りこみ、限界まで腕を引き絞り、悪魔に向かって投擲する！

悪魔は6本の黒鍵を受け止めようとして——自身の障壁に絶対の自信があつたのか——6本の黒鍵が、轟音とともに悪魔の障壁を突き破り、その体突き立った。

黒鍵が突き立った部分から悪魔の体に火膨れが広がり、煙が出る。

「ぐっ、なんだこれはっ！いくら弱めていたとはいえっ、私の魔力障壁が突破された上に、再生を妨げるだっ！」

黒鍵が突き立った箇所から悪魔が強制的に『浄化』されていく。が、流石に『爵位持ち』なだけあつて黒鍵の対化物用の概念も再生を妨げることしかできないでいる。

「投影、開始——！」

追い討ちをかけるようにもう6本の黒鍵を投影し、全力で投擲する。

流石に警戒したのか、強化された障壁に左手で投擲した3本ははじかれた。しかし、新たに3本の黒鍵が体に突き立ち、悪魔はたまらずに悶え苦しみ始めた。

「なんだっ、なんなんだこれは！グアアッ、体が、私の体が灼けていくっ——！」

「投影、開始——！」

さらに6本の黒鍵を投影し、投げつける——が、今度は6本とも障壁に弾かれた。

傷だらけの悪魔は、どうやら全力で障壁を張ったらしい。

忌々しい、と思いつつも今のところ最大の貫通力を持つ黒鍵がきかないとあっては、僕に攻撃手段はない。

もう殺されるしかないのか、と思った次の瞬間、悪魔の言葉を聞いて思わず安堵のあまりため息をついてしまった。

「なるほど、これは少々君をなめていたかもしれない——いずれにせよ、今の状態では変身しても君を殺しきれ自信はない、ここは撤退させてもらうよ。この借りは、必ず返す——次に会う時が、君の命日だ」

全身に黒鍵を突き立てられ、満身創痍といった風の悪魔は、憎憎しげに顔を歪め、捨て台詞を吐くと目の前から消えていった。

前方の村からの援軍が近づいてきたことを確認し、現場に残っていた黒鍵をすべて破棄して地面に倒れこんだ。

どうやら、『戦いの歌』に魔力を使いすぎたようだ……指一本、動かせる気がしない。

「こっちだこっち、子供が倒れているぞ！」

「山向ここの村から逃げてきたのか、この子供は一端村に運ぶぞ！」

「おい、ボウズしっかりしろ！」

駆けつけてきた大人たちが僕を取り囲んで大騒ぎしている。

結局、あんなに親切にしてくれた村人たちを見捨てることになってしまったな……

そう考えて、僕は意識を失った。

目を覚ますと、今寝ている部屋が自分の部屋ではないことに気が付いた。

まわりを見回すと、どうやらここは病院らしい。子供には少々大きすぎるベッドに、白を基調とした清潔感のある部屋、ツンと鼻に付くアルコールの匂い。同考えても、病院だった。カーテンは開け放たれ、もう昼なのか、太陽が高く昇っているのが見える。

とりあえず起き上がろうとすると、次の瞬間激痛が全身を襲った。

身体強化の魔法を限界まで行使したことによって、肉体にツケが来ているのか。

やむをえず、魔力を全身にまとうことでちょっとした筋肉痛程度に痛みを緩和し、立ち上がった。魔力は十分に回復している。

病室の端にある洗面所で顔を洗い、タオルで顔を拭いてから病室の外へ出る。

病室からだと、すぐに通りがかった看護師に声をかけられた。

「ああ、パリン君ももう起きたのね。今先生を呼んでくるから、悪いけど部屋に戻っててくれる？」

看護師は、そういつてから慌しく駆けて行った。

言われたとおりに病室に戻り、ベッドに腰掛けてぼんやりしていると、何人かの人間が部屋に入ってきた。

白衣を着た中年の男性が一人と、ネカネ姉さんにネギ、それにアーニヤ。あとは、いかにも「魔法使い」な格好をしている初老の男性。

白衣を着た男性に、体の調子はどうかなどと聞かれ、魔法を使って体を検査してもらった。

「特にこれといった怪我はありませんね。倒れたのは魔力が切れただけのようなので、もう魔力も回復していますからあと1日安静にしていれば退院できるでしょう」

それだけ言うと、白衣の男は病室から出て行った。

ネカネ姉さんは、唇をかんでじっと俯いている……多分、弟の危機に役に立てなかった自分を責めているのだろう。なぐさめようにしても、僕が慰めるのはなんか違う気がするし……どうしたものか。

ネギは、身長 of 2 倍ほどもある巨大な杖を大事そうに抱えて、少し得意げにしている。

重い沈黙に耐えられなくなつて、僕がなにか言おうとしたその時、魔法使い風の男性が口を開いた。

「はじめまして、かな。パリン・スプリングフィールド君」

「あの……失礼ですが、どういった方ですか？」

「私は、この近くにあるメルディアナ魔法学院の校長だよ。君の祖父でもある」

明らかに愛想笑いだとわかる薄っぺらい笑みを浮かべて、自称祖父はそんなことをのたまった。

どうやら、このやたらと威厳のある人がメルディアナの校長らしい。正直、この世界に着てから真に家族と呼べる人はネカネ姉さんしかいなかった気がする……両親はもちろん不在、アーニヤ親子はネギにかかりきりだったし、あの家では僕はむしろ居候のような気分だった。スタンさんは良くしてくれたが、家族というほど親しくしていたわけでもなかった。

だから、自然とこの人に対する態度もよそよそしくなる。

「それで、その校長先生が僕に何の用ですか？『戦いの歌』の使いすぎで体が痛いので、早く寝たいのですが」

『戦いの歌』、という言葉聴いた瞬間校長が一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに元の胡散臭い笑顔に戻った。

全身の痛みによるストレスもあり、突き放すような物言いになった。よく考えれば、原作ではこの人と麻帆良の学園長は結託してネギの英雄育成計画を進めていた。そのことを考えると、この人は全く信用できない。

「村が悪魔に襲われたとき、君は一体どうしていたんだ？話によれば、近くの村の前で倒れていたそうじゃないか」

「どうしていたもなにも、村が半壊しているのを見て助けを呼ぶために近くの集落に行こうとしたんですよ。もっとも、途中で魔力が切れて気を失ってしまいました」

それだけいつて、口を閉ざす。

「もう寝てもいいですか？」

魔力をまとってごまかしても、あとでもっと苦しむだけなのでさっさと横になりたい。

「待ってくれ、それともうひとつ、パリン君は魔法学校に入学する気はないか？」

少しあわてた様子で、校長はそんなことを提案してきた。

村にいる間に魔法学校の終了課程までは一通り自学自習したし、教科書に載っていたほとんどの魔法も実戦で使えるレベルでこそない

ものの、『使う』だけなら可能なのだ。

その旨を校長に伝えると、校長は疑わしげな顔をして、後ろに立っていたネカネ姉さんに「今の話は本当かね？」などと質問した。

「私はパリンの勉強を見ていたわけじゃありませんから詳しくはわかりませんが……すくなくとも、この年にしては天才的に物覚えがいいですし、あながち嘘でもないと思いますよ」

物覚えがいいのは前世の知識や精神年齢でズルをしているだけだし、やはりほめられても居心地が悪い。

校長はそれを聞いて、しばらくぶつぶつと独り言を言った後、唐突にこう言った。

「では、明後日にパリン君とネギ君のテストをしよう。君達の実力を見るいい機会だし、君がそれほど優秀だというなら魔法世界への留学も考えていいかもしれん」

「わかりました。それでは、おやすみなさい」

ネギやネカネが何か言いたげにしているが、こっちは疲れているのだ。悪いとは思っけど、休ませてもらうことにしよう。

3 話（後書き）

ご意見・感想等募集中です

4 話（前書き）

このタカミチはこの作品一番の苦勞人で、この作品で一番まともな人です。

4話

村が悪魔に襲われてから3日後、昼食を食べ終わってから僕とネギは病院から少し離れた広い公園に杖を持って立っていた。

午前中に魔法の知識を問う筆記テストを受け、休憩と昼食をはさんでから午後に実際に魔法を使うところを見る、という段取りだ。

午前中に受けたテストは、はっきり言って簡単すぎた。魔法学校とというのはだいたい日本の小学生と同じくらいの子供達に通う学校なので、そこで習う内容も小学生が理解できる程度の低レベルなものがほとんどだ。前世では大学院生だった僕にとっては、一ヶ月もあれば修了程度の知識を獲得することはたやすかった。ネギはほとんどわからなかったようだが、僕は満点を取れた自信がある。

僕の得意な属性は影だが、一応闇の魔法も使える。英雄の息子の属性が『影・闇』だとはなんと皮肉な話だ。

そんなことをつらつらと考えていると、メルディアナ魔法学校の校長と、知らない中年の男がこちらに向かって歩いてきた。

「校長先生、こちらの方は？」

僕が校長に尋ねると、よれよれのコートと無精ヒゲがなんとも渋いその男性は、自己紹介をした。

「はじめまして、僕は高畑・T・タカミチ。君達のお父さんの知り合いだよ」

「どうも、パリン・スプリングフィールドです。今日は、やはり僕

「たちの魔法を見るために？」

「ネギ・スプリングフィールドです！今度、お父さんのこと聞かせてください！」

以前なら父親の知り合いと聞いて大はしゃぎするネギに少しイラッとしただろうが、ここ数日ネギは父親のことばかり話すのもう慣れてしまった。

「はは、じゃあネギ君たちが魔法を見せてくれたらナギさんのことを話してあげよう」

そういつて、高畑氏は微笑んだ。

「では、まずはパリン君からだ。まずは一つ、使える魔法を披露してみなさい」

校長が言った。

無詠唱呪文や遅延呪文などの技術こそ身に付けてはいないものの、魔法学校の七年生の教科書に出てくる魔法まではほとんど行使できるし、またスタンさんの地下書庫で読んだ影の魔法の本に載っていた魔法も使うことはできる。

「プラクテ・ビギ・ナル、使い魔召喚・剣を執る影！」

呪文を唱え、影で編んだ使い魔を10体召喚する。

この魔法で呼び出した使い魔は質量をもたないので攻撃力はそれほどでもないが、素早さを生かして囫として使ったり、優秀な対魔・対物理の盾として使用することができる。通常の障壁より防御力は

高く、また複数体を同時に使役できるため使い勝手のいい魔法のひとつだ。

ちなみに、魔法学校では『魔法の射手』と『武装解除』以外の攻撃魔法は教えないので、普通に魔法学校に通っていればこの魔法を覚えることはない。

「使い魔一体当たりの練度もいいし、術式の展開も魔法学校卒業レベルか……ナギのやつとは違って怖いくらいに早熟だな」

校長がつぶやいた。

僕の隣に立っていたネギは、僕がいつのまにか魔法を覚えていたことに驚いたようだ。小声で「パリンはいつのまにそんな魔法を覚えたの？なんでもぼくには教えてくれなかったの？」などと聞いてきた。サウザンドマスターから杖をもらって以来、なんとなく僕を見下していたようだが、僕がネギの使えない魔法を使ったことで兄としてのプライドが傷ついたのかもしれない。

まあ、そんなことは知ったことではない。ずっと前から、ネギはどうも僕を下に見る傾向があったのでいい気味だ。

「では、パリン君は僕が見ますから、校長先生はネギのテストをお願いします」

「うむ、かたじけないがパリンのほうは任せた」

ネギと僕と一緒にテストするのは不味いと悟った高畑氏が、僕の手を引いてこの場から離れようとする。

こんなところで逆らっても何なので、おとなしく付いて行った。

歩きながら、高畑氏は話しかけてきた。

「聞いた話では、魔法を習い始めてからまだ一ヶ月くらいしか経ってないという話なのにすごいじゃないか。ネカネ君に聞いたら村にいた間は魔法の勉強ばかりしていたという話だったけど、やっぱり魔法が楽しいのかい？」

「いえ、他にやることがなかっただけです。村には同年代の子供もあまりいませんでしたし。それに、本を読むのは好きなんです」
本を読むのが好き、というのは嘘ではない。ただ、魔法の勉強に熱心だったのは悪魔の襲撃から生き延びるため、というのがほとんどの理由だった。

「じゃあ、強くなりたいというよりはもっと勉強したい、ということ？」

「勉強は嫌いではないんですけどね。それよりも、英雄の息子なら強くなければいけないでしょう？」

「それは、どういう……」

「サウザンドマスターの功績というのは、そのほとんどが戦場での活躍に由来します。それなら彼に恨みを持つ人なんて星の数ほどいるでしょうし、サウザンドマスターが死んだ今、彼の息子である僕を殺したいと思ってる人間なんて山のようにいるんじゃないですか？」

高畑氏が硬直する。

「賢い子供だとは聞いていたけど、その年でそこまで考えてるなんて……」

「賢いというよりは早熟なだけです。だから、僕は英雄になるつもりはありません。今回の件で、サウザンドマスターという英雄が村一つの壊滅の原因だというのは明らかです。僕は、自分が信じる正しさのために周囲を巻き込むなんてこと、できそうにありません」

僕がそう言つと、高畑氏は胸ポケットから煙草を取り出し、「吸つてもいいかい？」聞いてから煙草に火をつけた。

「僕は君のお父さんがしたことは正しいことだった、と思ってる。確かに彼はたくさんの人を殺したけど、それ以上にたくさんの人を救ったんだ」

煙を吐き出して、複雑そうな顔で高畑氏は続けた。

「だけど、それは殺された人にしてみれば認めたくない正しさだろうし、彼の正しさのせいで彼自身ではなく彼の周囲に迷惑がかかることもしばしばあったんだ。今回の悪魔襲撃にだって、原因は間違いないナギにあるんだろう。僕は、ナギという個人は好きだけど彼の生き方は好きじゃないんだ」

驚いた。原作では、高畑氏は英雄に固執する『正義の魔法使い』の筆頭のような存在だったのに。

「だけど、僕が英雄としての生き方を望まなくても、周りはそれを許してくれないんだ。早熟な君ならわかるかもしれないけど、英雄なんて所詮政治家にいいように使われているだけだからね……」

「メガロメセンブリア、ですか……」

「わかるのかい？」

「ええ、村にいたときには魔法世界の歴史書なんかも読みましたし、大戦の経緯を知ってればそれくらいは察しがつきます」

原作知識などというズルをして、賢しら顔で知ったかぶりをするのは正直反吐が出る。だが、これも自分のためと言い聞かせ、厚顔無恥なお願いを口に出す。

「だから、校長先生に僕がメルディアナに入学したらすぐにアリアドネーに留学させよう言ってくれませんか？アリアドネーの学術機関に所属することができれば、あるいはメガロメセンブリアの干渉から逃れられるかもしれません」

「そこまで考えているとは……一体、君は何者だい？」

黙り込む。僕が何も言わないでいると、高畑氏は続けた。

「まあ、そんなことはどうでもいいか。僕が後悔している道を、君に押し付けるのも気が引けるしね。君が英雄になることを望むなら別だけど、君はどちらかというとそういうことは嫌いみたいだし。留学の推薦の件、できるだけ尽力するよ」

僕に英雄への道を望まなかったのは、高畑さんが二人目だ。スタンさんはサウザンドマスターの実像を知っていたから僕に英雄になつてほしくなかったようだったが、高畑氏は実際に英雄になつてしまったからこそ、僕にその道を歩んでほしくないと考えている。

「さて、それなら君たちがメルディアナに入学するまでは君たちのそばにるようにと言われていたから、その間でよければ強くなる手助けくらいはするよ」

少し暗くなった雰囲気を明るくしようと、高畑氏は明るい声を出した。

「では、身体強化を使った近接戦闘の訓練をお願いします、高畑さん」

「タカミチ、でいいよ。しかし、君は魔法使いだろうか？それなら魔法を使った戦い方を訓練したほうがいいんじゃないか？」

「いえ、僕の属性は『影』ですから、従者は必要ないんですが、近接戦闘ができなければ話にならないかと」

僕がそう言つと、タカミチはそれもそうか、という風に頷いた。

「事情は明かせませんが、八極拳をそれなりに嗜んでいます。でも実戦経験がないので、強くなるために修行というより戦闘における立ち回りとか、そういったことを教えてくれると助かります」

「わかった。じゃあ、まずは君の実力を見よう。どこからでもかかってきてくれ」

僕が使う言峰八極拳は、武術というよりもむしろ実戦的な人体破壊術としての側面が強い。が、タカミチだって仮にも英雄と呼ばれるほどの男だし、借り物の技術が通用するとは思えない。

「では、行きます……！」

結論から言つと、やはりまったくかなわなかった。

タカミチによれば、「その年にはありえないほどの技術だし、技の切れも申し分ないが、やはり戦闘経験が圧倒的に足りないから技術を全く生かせてない」とのことだった。

所詮転生チートなんてこんなものか、と落胆しつつ、疲れた体を引きずってネギたちのところへと戻る。

「それにしても、さっきの中国拳法といい、頭の回転といい、君本当に子供なのかい？」

タカミチは疑問に思っているようだったが、深くは聞いてこなかった。もしかしたら、子供が子供らしく過ごせないでいることを憐れに思っているのかもしれない。

「事情は明かせませんが、少なくとも普通の子供じゃないことは確かです」

タカミチなら事情を話しても大丈夫だとは思うが、それでも事情を打ち明けることはできなかった。我ながら臆病だ。

「高畑君、パリン君はどうだ？」

先ほどの場所に帰ると、校長が一人で佇んでいた。

「申し分ないほど賢いですし、魔法の才能もあるようです。この子には、メルディアナではレベルが低すぎるかもしれません。それより、ネギ君はどこですか？」

タカミチが問うと、校長はちらりとこちらをみて、ひそひそと高畑に耳打ちをした。

何があったのかは知らないが、僕はネギとはあまりかわりたくない。内緒話が終わった様子の大人二人に、ずっと気になっていたことを尋ねた。

「ところで、僕は退院したらどこに泊まればいいんですか？」

「ああ、お主は魔法学校に入学するまでは高畑君のところに泊まりなさい。この近くの一軒家を高畑君に貸しているから、丁度いいだろう」

「わかりました。タカミチはそれでいいですか？」

「うん、僕はむしろ歓迎だよ。広すぎる家だから、一人で住むのはさびしいんだ」

「では、それで決まりだな。魔法学校へ入学するのは9月だから、5カ月ほどはそこで暮らしてもらおう」

そもそもメルディアナに入学するなんて一言も言っていないのに、まるでそれが決定事項であるかのようにしている校長に、激しい嫌悪感を抱いた。

「ネギ君は私のところで面倒をみるから、何かあったら連絡してくれ。それじゃあ、魔法学校で会おう」

そう言っつて、校長は最後まで胡散臭い笑みを顔に張り付けたまま背を向けて帰って行った。

「行こうか、パリン君」

タカミチに連れられて、僕はこれから住むことになる家への道を歩き出した。

4 話（後書き）

ご意見・感想等お待ちしております。

5 話（前書き）

我ながらメルディアナ校長の小物感が半端じゃない。口調は威厳があるのにやっтерることが小物。

5話

魔法学校へ入学してから、なにもかもがうまくいくようになった。

僕ことパリン・スプリングフィールドは、生徒の中でこれでもかといくら浮いていた。

入学テストは史上初の全教科満点、授業で指名されてもすべて正解、宿題の提出は遅れないし毎回授業の後には先生に質問をしに行き、得意じゃない属性の魔法も人並み以上にこなす。そんな感じで過ごしていたら、上級性さえ近づいてこなくなった。一部の学者肌の先生とは意気投合して徹夜で語り明かしたりもしたが、上級生が悪ふざけで僕にけしかけた犬を影の魔法で切り刻んでその上級生の部屋に投げ込んで以来、他の生徒は僕の半径1m以内に近づこうとしない。

先生には僕がいじめに反撃したことは知られていたが、どういう方法で仕返したかまでは知られていなかった。基本的な職員室での評判は非常によかった。賢しら顔で先生のメンツをつぶすようなことは避け、どんな時でも先生を立ててきたのもうこれ以上ないくらいにちやほやされている。

先生たちは、もう1学期の終了なんて待たずにすぐにも魔法世界に留学させるべきだ、と主張していたが、校長は頑として首を縦に振らなかった。昨年の最上級学年の学年末テストを解いて、全教科満点をたたき出すというパフォーマンスを行ったりもしたが、校長は「とりあえず一学期の間だけは通え」と言っただけで意見を変えなかった。

同じ学年のネギとは、最近は会話をしてない。

入学してからすぐのころは（おそらくは無意識なんだろうが）上から目線でいろいろと話しかけてきたものだが、先生が僕の入学試験の結果が全教科満点だったという話をしたり、魔法の実技でどんな魔法もそつなくこなして僕を先生が褒めたりするたびに、ネギは暗い目で睨みつけてくるようになった。そのうち向こうから話しかけてくることもなくなり、ここ最近は何も合わせない。

僕に対し否定的な先生もいた。先日、夜中に起きだして島原流や八極拳の鍛錬をしているのをそういう先生に見つけた時は、怒られるかもしれないと思って身を竦めた。が、むしろ先生はえらく感激し、次の日には「英雄の息子が村を襲った悪魔に対抗するために睡眠時間を削って修行に励んでいる」なんて美談が職員室を席巻していた。その影響がそれまで僕に対してあまりいい印象を持ってなかった先生たちが僕に対して妙にやさしくなったり、魔法の勉強についてアドバイスしてくれるようになったりでなんだか騙しているようで罪悪感にかられた。

まあそんなわけで、一学期末のテストまではあまりにもうまくいきすぎて不安になるような毎日だった。

そして、一学期の期末テストも例によって全教科満点で、先生が模範解答を作るのを放棄して僕の解答用紙を回覧させるくらい完璧な答案だった。

全教科満点の期末テストの答案を片手に校長室に殴りこむと、校長は観念したかのように留学に関する書類にサインした。

「率直に言つて、私は留学には反対なのだがね……」

「校長先生がそういつても、この学校の先生方の九割は僕の留学を応援してくれてますよ」

何人かの気前のいい先生は、留学祝いだといって高価な魔法書や稀少な魔道具をプレゼントしてくれたのだ。

校長が僕を手元においておきたがるのは、メガロメセンブリアからの圧力があるからだろう。だが、僕は戦争や政治の道具として鎖につながるのは御免蒙るし、そもそも政治家の圧力に負けるような教育者に払う敬意は持ち合わせていない。

「それでは、短い間ですがお世話になりました。さようなら」

一礼して校長室を出る。

荷物は既にまとめてるし、お世話になった先生方には既に挨拶を済ませた。親しくしている生徒などいないので、このまま校門でタカミチと待ち合わせて魔法世界へ出発する予定だ。

先生方からの餞別が思いのほか多く、どうやって運ぼうかと難儀していたが、特に親しくしていた先生が月給の半分を費やして買ってくれた魔法書の中に収納スペースの問題を解決できる画期的な魔法が載っていた。

『影の倉庫』という名前のその魔法は、習得はそれなりに難しいものの、非常に素晴らしい影魔法である。

自らの影を異界への門とし、その先に異空間を創造することで有機

物・無機物を問わず物品を収納できるという非常に優れたその魔法は、しかし一般的な影魔法使いには「使えれば便利だけど、使えなくても問題はない」という認識しかされていない。なぜならば、収納できる物品の質量が魔法使いの総魔力量によって決定されてしまうので、一般的な魔法使いではせいぜいリュックサック一つと同じくらいしか物を収納できないのだ。

しかし、僕の魔力量は一般的な魔法使いの約30倍。そして、影の倉庫の収納量は魔力量が多くなるにつれ「二乗に」比例するので、僕の影の倉庫の最大収納量は一般的な魔法使いの 30×30 倍、つまりリュックサック900個分だ。もうカバンを持ち歩く必要すらないのである。

そんなわけで、荷物は全部自分の影に放り込み、校門前でタカミチを待つ。

「久しぶりだね、パリン。まだ準備はできてないのかな？」

手ぶらで校門の前に立っていた僕を見つけて、タカミチが話しかけてきた。

「久しぶり、タカミチ。荷物は魔法でしまっただけだから心配は無用だよ」

またずいぶんと便利な魔法があるんだな、などと呟いたタカミチは、懐から一枚の札を取り出した。

「時間が惜しいからね。『悠久の風』から一枚拝借してきた」

タカミチが取り出したお札は、いわゆる『転移符』というやつだ。高価だが、魔力をつかわずに長距離間を一瞬で移動できる非常に便利な魔道具である。

タカミチが転移符を発動させると、次の瞬間には空港のような場所にいた。いかにも魔法使い然とした格好の人間がそこかしこにすることを覗けば、どこかの国際空港だといわれても納得できるほどに立派なつくりだ。

平日の午前中だというのに、出国するための門の前には長蛇の列ができていた。軽く3時間は並びそうなその行列を見てげんなりする。

「『悠久の風』の高畑・T・タカミチだ。悪いけど、急いであるから通して欲しい」

しかし、手近な職員にタカミチが身分証を提示すると、それだけで列に並ばずに門を通ることができた。

魔法世界に着いて、空港から出るともうアリアドネーだった。パリとローマを足して2で割ったような石造りの街で、町の中央には馬鹿でかい建物がいくつも建っているのが見えた。あれが世界一規模が大きいことで有名なアリアドネー総合大学なのだろう。

空港から出て、タカミチとはここで別れる。

「そっいえば、住むところはどっするんだい？通う学校は全寮制じ

やないみたいだけど」

去り際に、タカミチが尋ねた。

「それなら大丈夫です。メルディアナにもアリアドネーに留学したことのある先生がいたので、その先生にいい場所を教えてもらいました。落ち着いたら麻帆良宛に手紙を出すので、暇なときには遊びに来てください」

「そうか、ならよかった。それじゃあ、幸運を祈るよ」

そう言つて、タカミチは旧世界へと帰った。

魔法学校の先生に教えてもらつたいい場所、とはカトリックの教会である。

魔法世界では地球ほどの勢力があるわけではないが、しかしキリスト教は存在するのだ。僕は今のところカトリックでもプロテスタントでもないが、教会の仕事を手伝うという条件を呑みさえすれば教会は衣食住を提供してくれるのだ。

教会の仕事というのもいくつかあるが、信徒でない人間が手伝える仕事は一つしかない。魔法世界で教会が慈善事業として行っている化物退治に、無償で参加することだ。

魔法世界の治安は悪く、都市の内部でも犯罪は絶えないが、都市の外部の農村などは運悪く吸血鬼に襲われて壊滅したりすることがある。

そついった場合、その吸血鬼を倒すのは賞金目当ての冒険者か、教

会のエージェントだ。しかし、そういった化物を退治する人では常に足りないので、教会も外部の人間を雇うことがあるのだ。

教会に居座って衣食住を提供してもらう代わりに、教会にその武力を貸す。いわば、古代中国における食客のようなものだ。

空港においてあったアリアドネー市街の地図を頼りに、教会を探す。空港を出て20分ほど歩くと、探していた教会は見つかった。

教会と聞いて予想していたのは、故郷のウェールズにある一軒屋より少し大きいくらいの建物だったが、目の前の教会はそれとはかけ離れた大きさだった。

そういえば、このアリアドネー中央教会では神学の研究が盛んで、アリアドネー中の神学者が蔵書を寄付してできた図書館が併設されているらしいと聞いたことがある。

「あの、どういったご用件でしょう？」

重厚な扉を押し開け、中に入ると教会のシスターらしき人が声をかけてきた。

「あー、僕は旧世界からアリアドネーに留学してきた者でして、こちらの教会では慈善活動への参加をすることで宿泊させていただけると聞いてやってきたのですが……」

「身分を証明できるものはお持ちですか？それと、一応聞きますけど本当に活動に参加するんですよね？大丈夫ですか？」

そういえば、今の自分は5歳児だった。だが、こっちに来る前にタカミチから紹介状を貰っているのだ。

「アリアドネー上級魔法学院の学生証と、こっちは師匠からの推薦状です」

そう言つて、学生証と推薦状を手渡す。

「へえ、その年で上級魔法学院なんて凄いじゃない。名前は、パリ・スプリングフィールド……スプリングフィールド？」

ちなみに、僕が留学することになったアリアドネー上級魔法学院は旧世界や魔法世界で特に才能があると見込まれたものだけが入学できる、世界でも最高クラスの魔法学校だ。普通の魔法学校を卒業してから、ごく一部の優秀な魔法使いが更なる研鑽のために入学する、いわば高等学校なのだ。

「ねえ、君つてもしかしてサウザンドマスターの血縁だったりする？」

「ええ、息子ですが？」

「ええっ！ サウザンドマスターに息子がいたなんて初めて聞いたわっ！ それによく見たらこの推薦状高畑・T・タカミチって書いてあるじゃない！ 嘘、本当なの？」

おっとりした雰囲気のススターさんだったが、なんだか凄く大きな声で騒いでる。

まあ、僕が英雄の息子だと知られるのはむしろ好都合だ。アリアド

ネーはきわめて治安がいいから襲われたりする心配もほとんどないし、メガロメセンブリアも干渉しづらくなるだろう。メルディアナの校長は最後まで偽名を使わせようとしていたが、意図が透け透けだった。

「落ち着きたまえ、シスター・フランソワーズ。神の家でみだりに騒ぐなど、聖職者にあるまじきことだ」

そう言っただけ現れたのは、いかにも徳の高そうな壮年の神父だった。

「それで、何があったのだね？この少年がどうかしたのか？」

「それが、彼サウザンドマスターの息子だと言っただけですよ。しかも、高畑・Ｔ・タカミチの推薦状まで持参していますし、こんなに小さいのに上級魔法学院の生徒だと言っただけ、いろんな意味でびっくりです」

「神の僕ともあるうものが、生まれで人をどうこう言っただけはやめたまえ。確かにかの英雄に息子がいたというのは驚くべきニュースだが、な」

神父はシスターを諭し、こちらへ向き直った。

「さて少年、サウザンドマスターの息子がこの教会に何の用かね？」

「僕は旧世界からアリアドネーに留学してきた者でして、こちらの教会では慈善活動への参加をすることで宿泊させていただけると聞いてやってきたのですが……」

「確かに当教会では神への奉仕に励むという者に、神の家に住むこ

とを許している。しかし少年よ、君にはそれだけの实力があるのかね？たとえ英雄の息子だろうと、神への奉仕活動は免除できないが」

「实力に関しては、師匠の高畑・Ｔ・タカミチから推薦状を貰っています。これでは不足でしょうか？」

「高畑氏の推薦ならば大丈夫だろう。たとえその推薦状が偽者でも、实力が足りなければ危ない目にあうのは君だ。では少年、空いている部屋を貸そう、ついてきたまえ」

神父に連れられて教会の中を歩く。客室は3階と4階にあるらしく、僕の部屋は4階だとのことだった。

案内された部屋は、ベッドと机が老いてあるだけの殺風景な部屋だった。広さはだいたい10畳ほどだ。

神父に部屋の鍵を渡され、説明を受ける。

「見ての通り、部屋には最低限のものしかおいてない。基本的に何を持ち込んでもいいが、あまり非常識なものは慎むように。朝食と夕食はこちらが用意するが、昼食は外で食べてきてくれ。奉仕活動についてだが、基本的には不定期だ。近くの町や村に赴くこともあるし、あるいは山や洞窟に入ることもある。短くて2日、長くて一週間ほどはかかる。まあ、出番があるのはだいたい月に1回あるかないか、くらいだな。何か質問は？」

特にないです、と応えると神父はそうか、とだけ応えて出て行った。去り際に、今日の食事は外で食べてきてくれ、と言い残して。

『影の倉庫』から本棚と着替え、蔵書を取り出し、部屋に置く。

大体の荷物を出し終わると、部屋はだいぶ手狭になった。出し終わってから気付いたが、最低限の家具以外は『影の倉庫』から取り出す必要性はなかったようだ。

もういつかいしまうのも気がのらないので、学校へ教科書を取りに向かいがてら街で昼食を取ってこようと、僕は部屋を出た。

6話（前書き）

技の名前を叫ぶのにも、たぶん理由があるんです。

6話

メルディアナの先生に貰った防寒の魔法が掛かった灰色のコートを羽織り、アリアドネー市街の中央区にある上級魔法学院を目指して石畳の道を歩く。

さすがは学術都市というべきか、本を読みながら歩いている人を結構見かけるし、あちこちに書店や魔道具店がある。大都市都市特有の喧騒もそれほどではなく、むしろ昼間の大都市なのに静謐な雰囲気だ。気がただよっていた。

たまに通行人に道を聞きながら、30分ほど歩くとアリアドネー上級魔法学院に着いた。

この学院は生徒のレベルの高さも随一だが、それよりも教師の優秀さと熱心さが群を抜いている。一説にはこの学院の教師の年俸はアリアドネーの統治機構の代表よりも上だと言うし、それが本当なら優秀な教師が集まるというのも納得できる。生徒が優秀ならば教師としても教えがいがある、とメルディアナの教師陣は言っていたので、優秀な教師と優秀な生徒がお互いに触発されてさらなる高みを目指す、良い循環があるということだろうか。

基本的には7年制の学校だが、しかし実質的にはその区分は意味をなさない。この学校に入学するのは大体が将来自分のやりたいことが決まっている人間なので、教養科目である歴史や数学などの授業こそ必修だが、逆に言うとその二つの授業以外はすべて自分で選択し、受講するのだ。そのため、受ける授業の数を絞れば飛び級は簡単なので、僕はネギがメルディアナを卒業するのと同じタイミングで卒業しようと思っている。

麻帆良に行くのはあまり気乗りがしないが、自分の使命を考えてみ

るとリヨウメンスクナは確実に滅ぼさなければいけない。僕の存在が引き起こすバタフライ・エフェクトによって放っておけばスクナの討伐が失敗するかもしれない可能性がある以上、確実にスクナを滅ぼすために修学旅行にはついていかなければいけない。もちろん、このか嬢の誘拐を阻止してしまつてはスクナが封印されたままになつてしまうので、誘拐自体は阻止できないが。

そんなことを考えつつ、重厚な造りの門をくぐつて学院に入り、フード付きの赤いローブを着た教員らしき中年の男性に声をかける。

「すみません、僕は来学期からこの学院に留学することになったパリン・スプリングフィールドと申しますが、入学の手続きなどはどちらでやっているのでしょうか？」

「ああ、君が話題の留学生君か。アリアドネー上級魔法学院へようこそ。事務的な手続きなどは2階のロビーにある事務所で行っているが、君はここに来たのは初めてだろう？ 私が案内するから、ついてきなさい」

話題の、というのが少し気になるがなにもきかないことにした。

「どうもありがとうございます」

「なに、冬期休暇でこっちも仕事がないからね、これくらいで感謝されるとかえって申し訳ない」

そう、今は冬季休暇なので、授業が行われるのはあと2週間ほどたつてからだ。その間は、冒険者ギルドに登録して小遣い稼ぎと腕試しに魔獣の討伐にでも参加しようかな、と考えている。

「あそこに見えるのが事務室だ。学生証はもっているか？」

ええ、と頷くと、親切な教師はそうか、とだけ呟いて僕と別れた。

「すいません、来学期からここに留学することになったパリン・スプリングフィールドと申しますが、留学の手続きを行っていただけますか？」

「事前に発行した学生証をお見せください」

事務職員に学生証を手渡すと、ぎっしりと様々なパンフレットが詰まった大きな紙袋を渡された。

「こちらが当学院の案内パンフレットになります。各教室や研究所についてのパンフレットと、学院の施設やシステムに関する案内も入っております。手続きはあと1分もすれば終わるので、少々お待ちください」

渡されたパンフレットをそのまま自分の影に収納する。

「手続きは完了しました。学生証をお返しします」

「どうもありがとうございます」

学生証を受けると、それも影の中にしまった。影の倉庫は何も地面に伸びている影からしか出し入れができないわけではなく、自分の体によってできている影ならばどこからでも物を出し入れすることができる。学生証や財布などの小物は袖口の影に放り込んだりそこからとりだしたりすることもできるし、メルディアナ時代にはコー

トの袖口から黒鍵を取り出すなどといった首切り判事紛いの動作を練習していた。

学院を出て、近くにあったトンカツ屋で昼食を済ませる。なぜアリアドネーにトンカツ屋があるのかは謎だったが、5年ぶりに味わった味噌汁には感無量の思いだった。

カウンター席しかない、こじんまりとした店で、中年の日本人のオヤジが目の前でトンカツを揚げてくれた。出されたキャベツは瑞々しく、白米も固すぎず柔らかすぎずの絶妙な炊き加減。味噌汁は味噌の味が濃いめで、炊きたての白米との相性は抜群だった。

肝心のトンカツはと言えば、中までしつかりと火が通っているが固くなつてはおらず、噛みしめると口の中に肉汁が広がり、純粹に旨かった。いい肉を使っているのか冷めてきてもあまり固くならなかったし、結論から言うと「大当たり」の店だった。

『パリン・スプリングフィールド』としての人生に不満があるわけではないが、やはりふとしたきっかけでこうして前世が懐かしくなる時がある。

感傷に浸りながら石畳の街を歩き、冒険者ギルドを目指す。

こちらも石造りの立派な建物で、よくある荒くれ者のたむろする酒場のような施設ではなかった。

扉を開けて中に入ると、あからさまな好奇の視線が突き刺さる。まあ、自分だって5歳児が冒険者ギルドの建物に入ってきたりすれば目を疑うだろうが、やはり居心地が悪い。

「すいません、冒険者ギルドに登録したいのですが、手続きはこち

らでよろしいですか？」

「はい、手続きはこちらですが……あの、失礼ですがお客様、本当に冒険者になりたいんですか？」

「一応これでも上級魔法学院の生徒ですし、それなりに高名な方から推薦状をいただいております。お見せしましょう」

そう言つて、学生証とタカミチからの推薦状を懷の影から取り出す。この感じでは、この受付嬢も名前と推薦状を見て驚くんだろう。

「ええーっ、あの高畑・T・タカミチ氏直筆の推薦状に、しかもあなたサウザンドマスターの息子!？」

案の定、受付嬢の絶叫が吹き抜けのフロアに響き渡った。他の受付でなにやら話し込んでいた剣士風の男や、2階の喫茶席でなにやら議論をしていた魔法使い風の集団がなにごとかこちらを振り向く。

その後、奥の部屋から出てきたギルドの偉い人と少し話し、冒険者ギルドに登録を済ませ、説明を受けた。

「基本的に冒険者ギルドでは、どんな依頼を受けても自由です。ただし、期日までに依頼を遂行できなかった場合や依頼に失敗した場合はそれ相応のお金をいただきますし、失敗ばかりする冒険者はそのうちギルドから追放されるので心得ておいてください。複数人でパーティを組んでも、単独で依頼をこなしてもかまいません。出されている依頼はあちらの机に並べてあるルーズリーフに整理されているので、受けたい依頼が決まりましたら依頼書をこちらの受付にお持ちください」

受けた説明の中で重要なのはそれくらいで、あとはギルドの登録証を紛失した時の対応などのこまごまとしたことの説明だった。

登録証を受け取ると、ギルドをでて教会に帰る。ギルドの依頼をこなしてお金を稼いでおかないと欲しい魔法書も変えないし、麻帆良に行ったときに家を買うお金も稼がなければいけない。子供の姿で教師はやりたくないから年齢詐称薬は必須だろうし、女子生徒の部屋に泊まる事態は避けなければならない。

そんなことを考えながら教会に帰り、居住者用の裏口から中に入る。本でも読むか、と自室のドアを開けたそのとき、後ろから声をかけられた。

「ここから10kmほど離れた村で、オーガーの目撃情報が入った。ちようにいい機会だし、私も同行するから君の実力を見せてくれ」

声を掛けてきたのは、さきほどお世話になった神父だった。

「わかりました、装備を整えるので少し待ってください」

そう言って、『影の倉庫』から、魔法的な強化がなされた二尺五寸の和泉守国貞を取り出し、腰に佩く。コートには刀を佩けるよう左の腰の部分にちよつとした細工をしてあるので問題はない。

「サウザンドマスターの息子が剣を振り回すのか？」

少しあきれた顔で、神父が尋ねてきた。まあ、5歳児が日本刀を腰にくくりつけている光景は確かに滑稽だとは思うが、なんとなく腹が立った。

「ええ、僕は魔法より近接戦闘のほうが得意ですから」

そもそも、影の魔法は遠距離戦で使うには向いていないのだ。影の使い魔は術者との距離が離れれば離れるほど制御が難しくなるし、影の槍は貫通力重視なので射程も短い。遠距離からちまちまと槍を投げるよりは、中距離から黒鍵と影槍で串刺しにするほうがよほど効率がいい。

アリアドネーの街を出て、神父が運転するジープに乗りこむ。40分ほど走ると、件の村が見えてきた。

神父がジープから降りて、村へ聞きこみに行った。

「どうやら、ここから少し北に歩いたところにある洞穴にオーガーがいるようだ。まだ村に被害は出てないが、急がなければならない。私は村で見張りをしているから、君が洞穴に行つてオーガーを討伐してきてくれ。証拠の品はなんでもいいが、ちゃんと持ってくるように。では、貴君に神の加護があらんことを」

そう言つて、神父は十字を切った。

言われたとおり北に歩くと、10分ほどあるいたところにいかにもな洞穴があつた。

発動体の指輪を確認し、そつと身体強化の呪文を唱える。

「アリ・ヨリ・ハベリ・イマソカリ、戦いの歌！」

留学が決まつた時点で自分の始動キーを考えていたが、口になじん

で言いやすい単語、というところくらいしか思い浮かばなかった。そもそも、始動キーなんてみんな意味をなさない奇妙な言葉だし、言いやすいならそれでいいのだ。少なくとも、父親の『マンマントロテロ』などというふざけた始動キーよりは百倍マシだと思う。

続いて、両手のコートの袖口から3本ずつ黒鍵を取り出し、洞窟の奥めがけて全力で投擲する。

岩石を打ち砕く轟音とともに、洞窟の内部から怒れる野獣の咆哮が聞こえてきた。

もう6本の黒鍵を構え、オーガーが出てきたらすぐに対応できるよう構える。

30秒ほどして、洞窟の奥から全長3mはあろうかというほどの赤い肌の巨人が、棍棒を握って飛び出してきた。

すかさず黒鍵を投擲し、大威力の投擲武器が6本も突き刺さったオーガーは後方に吹っ飛んでもんどりを打って倒れ伏した。が、溢れるタフネスにものを言わせてすぐさま起き上がる。

オーガーが立ち上がり、不遜な小人めを挽肉にせんと棍棒を振り上げたその瞬間、立ち上がったオーガーの胸めがけて、必殺の居合を繰り出した。

「島原流抜刀術・秋水！」

魔力を浸透させて強化した和泉守国貞の切れ味とその技本来の威力、それに魔法による身体強化が加わり、オーガーは上半身と下半身を完璧に切断され、死に絶えた。

村が悪魔に襲われて以来、初めて見る生き物の死体だが、切断面がきれいなせいで嫌悪感がわかない。悪魔に食い散らかされた村人の死体に比べれば、黒鍵が突き立った場所が抉れて焼け爛れていても、せいぜい便所の床にこびりついたナニカくらいの嫌悪感しか湧かない。

ちなみに、技名を叫んだのにはちゃんと理由がある。魔力や気を込めて剣をふるう際には、技のイメージがしっかりできていれば技名を叫ぶことによって威力が上がるのである。言霊が関係しているらしいが、詳しいことはまだ説明されていない。

オーガーの死体から鼻と耳を切り取り、影の倉庫からビニール袋を取り出してその中にしまった。

刀の血振りを済ませ、村に戻るとそろそろ日が暮れようという時間だった。

神父に証拠品の鼻と耳を渡し、ジープに乗りこむ。

村を出発しようとしたその時、村から村人たちが一斉に飛び出てきた。

「神父様、ありがとうございます」

「本当に毎度毎度、助けてもらってありがとうございます」

「これ度、うちの畑で採れた野菜です！どうも召し上がってください！」

聞けば、この村はそれほど裕福な村ではなく、冒険者を雇うことが

できないらしい。そこで、布教も兼ねて教会が村を守ることを請け負い、化け物の目撃情報が入ってくるたびに調査と討伐に赴くのだとのこと。

なんにせよ、人に感謝されるのは悪い気分ではない。僕のこの力は借り物の力でしかないが、それでもこの力を人のために役立てられた、というのはうれしかった。

6 話（後書き）

神父様の名前は次回でてきます

7話（前書き）

大きく状況が転換します。独自設定のオンパレードな回です。

7話

それからの数日は何も起きず、昼は部屋にこもって魔法書を読み、夜は教会の庭で鍛錬に励む毎日だった。

学院が始まるまであと3日になった日、神父が切り出した。

「この教会には信仰心を数値化できる魔道具があるんだが、使ってみないか？」

「いいですよ」

以前から、天草四郎が言っていた「祝福」がどういったものなのか確かめたかったのだ。聖人の加護などと言われても、具体的にどういったものなのか把握できなければ意味がない。

神父に連れられて教会の地下室に降り、教会の備品をしまっている部屋に入る。

神父は部屋に隅にあった水晶玉を取り出し、手近なテーブルの上に置いた。

「これに手を触れるだけで、水晶の奥に数字が表示される。どういう原理かは知らないが、ヴァチカンから送られてきた品だ。他の教会でも使われているし、うさくさいものではないぞ」

そういえば、この神父の名前はブランシー、というらしい。教会に祈りに来る信者たちは、神父のことをそう呼んでいた。

おずおずと水晶玉に手を触れると、水晶玉の奥がチカツと光り、「1132」という数字が表示された。

「ほう、洗礼も受けてないのに4ケタとは……」

神父が、なにやら感心した顔つきで水晶玉を覗き込んでいる。

「そんなにすごい数字なんですか？」

「ああ、私の場合は1090だが、これでもかなり高いほうだ。洗礼も受けてない一般人が、聖職者より信心深いなど、なかなかにあるものではないが、結構なことだ。その分なら問題ないだろう。ついて来い」

そう言つて、神父は何やらぶつぶつと独り言をつぶやきながら、大きな門のかかった部屋に入り、手招きをした。

「私からの贈り物だ。好きなものを持っていくがいい」

その部屋は、武器庫だった。

刀剣類から鈍器、銃器が所狭しと並べられている。

「この部屋は殉職した神父やシスターの生前の得物を保管する部屋だ。だから、この部屋にある武器にはすべて高度な祝福儀礼がなされていて、信仰心の低いものでは触っただけで火膨れができるような武器もある。武器がたくさんあるのは良いんだが、使う人間がいなくて困っていた。それでも好きなものを持って行ってくれたまえ」

刀剣類は間に合っているし、鈍器は使いこなせない。となれば、銃器かとも思ったが、今の自分では手が小さすぎて引き金を引けない。それでもあきらめずに掘り出し物を探していると、奇妙な手袋を見つけた。白い手袋で、手の甲の部分に聖句が書かれているものだったが、僕が手に取るとまるで僕の手のサイズに合わせたかのように『縮んだ』のだ。

「神父、この手袋は？」

「それは格闘家用の手袋だ。表には聖句が、裏地には治癒の術式が縫いこまれている。魔力を通せば、殴った際に熱衝撃派を発生させて相手を消し飛ばせるというシロモノだ。ほかに、魔力を流せば治癒の術式が発動してどんな怪我でも化物並みの再生速度で治癒させることができる。まあ、便利なだけあってかなり魔力を喰うようだが」

なるほど、かなり便利な装備だ。

「では、とりあえずはこの手袋をいただくことにします」

「ああ、また武器が欲しくなったらいつでも言ってくれ」

神父とともに扉を閉め、地下室を後にした。

「信仰心が1132、か……いつそのこと、神父を目指してみてはどうだ？」

地下室から出て、昼食を済ませるとブランシー神父は言った。

確かに、僕は神を信じていないわけではない。前世では神学をやっていた身だし、聖人を名乗る存在にも会った。だから神というものも存在するのだろうとは思うが、しかしそれとこれとは全く別問題だ。

「神を信じていない、というわけではありませんが……」

「そんなことは、この際問題じゃない。少し場所を変えようか」

そういうと、神父はあたりを見回して手近かな部屋に入り、カギをかけた。

「君は、将来何になりたいと思っているんだ？」

突然、神父が訪ねてきた。

「君がここにきた次の日、一応君のことをヴァチカンで働いている知り合いに知らせておいた。英雄の息子を名乗る人間がここにいるぞ、とな。数日はなにも音沙汰がなかったから特に問題が起きなかったのかと思っていたが、昨日の夜にわざわざヴァチカンの大司教が訪ねてきてな。単刀直入に言う、君はメガロメセンブリアがヴァチカンに送り込んだ刺客なのではないかと疑われている」

「メガロメセンブリとヴァチカンの仲は決して良くはない。表面上は友好を保っていて、勢力もバランスがとれていたが、そこに君が現れた。メガロメセンブリはヴァチカンが英雄の息子を洗脳するつもりだなどと思い込んでいるし、ヴァチカンはヴァチカンで君がメガロメセンブリアが君を口実にちょっかいを掛けてくるつもりなのではないかと警戒している。今、二つの組織は非常に緊迫している

んだ。君自身はちょっと教会にお世話になろう、くらいの軽い心積もりだったのかもしれないが、このままでは下手したら戦争すら起こる」

いきなりスケールの大きい話をされて、硬直する。
が、すぐに持ち直し、状況を分析する。

「僕が教会から出て行って、普通の宿屋に泊れば解決するのでは？」

「ここで教会を出ても帰って怪しまれるだけだ。どっちつかずな態度をとっていると、どちらからも敵と認識されるぞ」

「メガロメセンブリアの狗になるか、ヴァチカンの駒になるか。そういうことですか？」

「君のような幼い子供にこんなことを言うのもなんだがな、自業自得だ。もうすこし、自分のネームバリューを考えて行動するべきだったな」

悔しさに涙が出そうになる。あれほどメガロメセンブリアに取り込まれまいと努力したのに、まさかヴァチカンとメガロメセンブリアの仲が悪いなんて。

「ヴァチカンに与せ、とは言わないのですか……？」

「私の神父としてのささやかな矜持だよ。神父が信仰を強制するなんて、そんなことをするくらいならむしろ私は法王すら呪うだろう」

「……わかりました、申し出を受けましょう」

やむを得ない決断だ。頭の回転が速いわけでもなく、原作知識とちよつと高い精神年齢を持つだけの僕では、狸どもと頭脳戦を繰り広げるのはとても無理だ。

「カトリックには帰依します。メガロメセンブリアに行けば戦争の道具にされるだけでしょうが、少なくともヴァチカンなら殺す相手は化物です。こっちのほうが数倍マシでしょう」

「そうか。私としては信仰を強制するようで心苦しいのだが……」

「自業自得だって、さっき言ったばかりじゃないですか。それに、悪いことばかりじゃない」

「それは、どういう？」

「聖職者だけが使える魔法、教えてくれるんでしょう？あとはそれなりの自由とお給金をくれれば、それで満足です」

油断した、というよりはようやく現実を直視する気になった。

よく考えれば、ろくに情報収集もせずに異国に乗り込むなんて、正気の沙汰じゃない。一般人なら問題はなかったが、自分は『スプリングフィールド』なのだ。メガロメセンブリアに目を付けられている現状では、うかつな行動は慎むべきだったか。

『メガロメセンブリアの干渉から逃れることができて、ヴァチカンという強力な後ろ楯を得た』と考えてもいいかもしれない。ヴァチカン側の意図は見えないが、少なくとも宗教団体が戦争を引き起こすなんて考えるはずが……いや、カトリックなら十分ありえるか。

どの道、情報が不足している今どちらに組み沿うがほとんどかわらないのだ。ならば、せめて自分のやりたい勉強がしやすいような環境にとどまることを選択するのがベストだろう。教会は趣味の神学の勉強にはうつてつくだ。

それに、よく考えればあの聖人に課された『できる限りの化物を屠る』という使命がある以上、メガロメセンブリアに『戦争兵器』に仕立て上げられるよりは、ヴァチカンに対化物の兵器として運用されたほうがいいだろう。

「……1週間後の夜に大司教猥下がいらつしやる。洗礼を行うのはもつとカトリックを勉強してもらってからになるが、そのときまでにはきちんと考えを整理しておきなさい」

「はい、わかりました」

そう言つて、神父は礼拝堂に戻つていった。

自室に戻り、ベッドに横たわつて頭を抱える。

「やつぱり、僕に頭脳戦は無理なのか……」

何もかも見通しが甘かったといわざるをえない。そもそも、前世の知識を持っているからといったただの元大学院生が権謀術策で飯を食つて人間と対等に勝負できるはずはないのだ。

「せいぜい、死なないように強くなることくらいしか思いつかないな——」

ヴァチカンが僕に何を求めているのかはわからないが、戦闘力はあ
るに越したことはない。メガロメセンブリアと敵対する道を選べば、
邪魔に思われて刺客が差し向けられる可能性だってある。

前回のオーガー討伐でわかったが、やはり子供の体は肉弾戦に向い
ていない。かといって、影の魔法は遠距離を攻撃する魔法はほとん
どないし、今の僕の技量では複数の使い魔の遠隔操作などできそう
にない。すると、残された選択肢は……

「銃器か、教会魔法だな」

どちらが自分の長所を生かせるか、といったらやはり教会魔法だろ
う。

教会魔法というのは、カトリックの神父・シスターのみが使用でき
る魔法で、遠距離攻撃・回復・エンチャントの3つがメインとなっ
ている魔法だ。最大の特徴としては、消費する魔力は誰が使っても
同じだが、それにもかかわらずその威力にはかなりの個人差がある、
ということだ。

通常の魔法は、魔力の多いものが使おうと魔力の少ないものが使お
うと、それほど威力に差はつかない。使用に多くの魔力を必要とす
る大呪文を使えることが強さに直結するので、無理やりまとめると
魔力量Ⅱ1発の威力Ⅱ最大弾数ということになる。

だが、教会魔法は違う。教会魔法を使う場合、同量の魔力を消費し
たとしてもその威力は大きく変わる。個人の信仰心の強さこそが、
魔法の強さにつながるのだ。分かりやすくいうと、魔力量Ⅱ最大弾
数、信仰心Ⅱ1発の威力ということだ。

神父との会話から推測すると、どうやら僕の信仰心の強さは相当なものらしい。ならば、最大魔力と信仰心の強さ、どちらも兼ね備えている自分ならこれまで無理だと思っていた固定砲台的戦闘スタイルも使えるようになるかもしれない。

まあその辺りは実際に使ってどんなものか試してみないとわからないらしい、教会魔法の魔法書は異教徒が読むと発狂するようなプロテクトがされているようなので、今の段階では知識の収集は無理だろう。結局、その日は疲れてそのまま寝てしまった。

7 話（後書き）

戦う神父は男のロマンだと、常々思っています。

8話（前書き）

作中最強キャラ入りました！。

8話

ヴァチカンの偉い人が来るまでに残り二日となった今日、僕はアリドネー上級魔法学院の始業式に出席していた。

この学院では、必修の授業以外の授業はすべて自分で選択し、自分で時間割を作らなければいけない。例えば僕が編入することになる2年生では、必修の授業が数学と歴史の2つしかないのに対して、選択できる授業は200個前後だ。学年が変わるごとに自分のカリキュラムを変更することができるので、各教師は毎年その教師の講座を受講したいという生徒を対象に試験を行い、その成績に応じて生徒が自分のどの講座に入るのかを決定する。そのため、選択制の授業では学年の違う生徒が机を並べて授業を受けるのが当たり前のことと化している。

3年生まで魔法薬学を専攻して4年生からは魔道具の作成について学ぶ、ということもできるし、5年生まで色々な分野の学習を万延なくやって、6・7年生で自分のやりたい勉強に専念する、というようなこともできる。この学院に入学する生徒は大体が入学時点で将来の進路を決めている人間ばかりなので、後者のような選択をするのはかなり稀なのだ。

7学年の生徒数は大体350人程度だが、それに対して先生の総数は500人ほどもある。他の学校や研究機関に所属している魔法使いでも、業績を認められて講師として招聘されることが多いので、500人のうち半分はそういった魔法使いだ。

僕自身は、教会魔法を勉強する時間を取らなければいけないし、卒業は原作のネギと同じタイミングにしたいから、後1回飛び級すれ

ばいい。大半の生徒は自分のやりたい勉強をある程度形にするまでは学院に残るので、中には7年では時間が足りないなどと言ってわざと必修授業で落第することによって留年する猛者もいる。

選択したのは>影の魔法・中級戦闘呪文講座<と>初級・無言呪文講座<、>初級・遅延呪文講座<に>初級・広域殲滅用闇属性魔法講座<の4つだ。それぞれ週に4コマずつ講義があり、1コマが120分なので、週に1コマずつある数学と歴史の授業を含めるとかなりタイトなスケジュールになる。

始業式が終わると、生徒達はそれぞれ1コマ目の教室へと歩いていく。僕も教えられた教室のほうに行こうとするが、いかんせん体が小さいのでどうしても押し流されてしまう。僕はまだ5歳だが、まわりは皆10代なのだ。もっとも、稀にだが長命種の子供も入学してくるらしいので、5歳児の容姿をしても注目されることはない。実年齢がばれば騒がれるかもしれないが、自分からそのことを話さなければいいだけの話だ。

地図を片手に>影の魔法・中級戦闘呪文講座<の教室へと向かっていると、後ろから黒いローブの男に声をかけられた。

「もし、君は今学期からの留学生かね？」

黒いローブを着て、見た目50代くらいの男性はそう聞いてきた。魔法使いには珍しく金属性の杖を携えている。

「はい、パリン・スプリングフィールドと申します」

「やっぱりそうか。私は>影の魔法・中級戦闘呪文講座<の担当を

しているダラマール、という者だ。教室に案内するから着いて来なさい」

そう言つて、ダラマール先生はしっかりと足取りで僕を教室まで案内してくれた。

「私が先に教室に入るから、私が手招きしたら教室に入ってきたさい」

ダラマール先生が教室に入ってからしばらくして、扉の向こうで先生がこちらに向けて手招きした。引き戸を開けて、教室に入る。

「旧世界からの留学生のパリン・スプリングフィールド君だ。スプリングフィールド君、自己紹介をしなさい」

教室に入ると、大体10人前後の学生がこちらをいつせいに見つめてきた。

「ええと、パリン・スプリングフィールドです。旧世界のイギリスと言つ国から来ました。趣味は読書と鍛錬です。よろしくおねがいします」

緊張して、少し早口になってしまう。

「席はどこにでも自由に座りたまえ。さて、それでは授業を始める」自由に座れと言われたので、適当なところに腰掛けて、影から教科書と筆記用具、ノートを取り出す。

ちよつとは驚くかなー、と思つたらこの経室では皆が『影の倉庫』

を使えるらしく、他の生徒も自分の影から学習用具を出していき
こしがっかりした。

「では、今日は影の使い魔を複数同時に操作する際の術式の最適化
についてだが、……」

ドラマール先生の授業は、基本的に週の4コマのうち2コマを魔法
の解説、残り2コマを実習に使うらしかった。解説は中々分かりや
すく、魔法書に載っていない感覚的な部分まで上手く説明してくれ
たので、非常に分かりやすい内容だった。

授業が終わると、生徒は学習用具を影にしまつて、教室から出て行
った。

僕も次の教室に急ごうと思ったが、ドラマール先生が話しかけてき
た。

「ところで、次の授業は何の授業を受けるんだ？私は次のコマには
授業が入っていないから、教室まで案内してやるっ」

「次の授業は 初級・広域殲滅用闇属性魔法講座 ですが……」

「なにっ、お前あの講座を取ったのか!？」

僕が答えると、ドラマール先生は目を見開いて激しい語調で問い詰
めてきた。

「いや、そもそもテストに合格したのか？」

「ええ、一応70点は取りましたけど……」

「スプリングフィールドの血筋は化物なのか……」

知的かつ厳格な雰囲気を漂わせていたダラマール先生がここまで感情をあらわにするなんて、どういうことだろうか。

「いいか、知らないようだから忠告しておくが、あのひとの授業についていこうとおもったら並大抵のことではすまないぞ。彼自身がこの学院で、いやこの世界でもトップクラスの闇の魔法使いだから、生徒に求めるレベルが非常に高い。冗談抜きで落第率が9割9部なんだ、舐めてかかると死ぬぞ。実際、過去に授業で何人も死人を出している」

「そんなにヤバイ先生がこの学院にいるんですか？何で逮捕されないんです？」

「いいか、あの人を、レイストリン・マジエーレを逮捕だなんて紅き翼でも無理な話だ。命がけで勉強に打ちこまないと殺されるぞ。なにせ、一回目の授業のあとは講座を取った生徒が全員サボタージュしているんだ。相当不機嫌なはずだ。やっぱり、お前を案内するのはやめにした。私も命が惜しいんでな、まあがんばりたまえ」

「はあ……」

そんな話をされても実感がわかない。そもそも、レイストリン・マジエーレなんて名前聞いたこともなかった。

初級・広域殲滅用闇属性魔法講座の教室は、どうやら地下にあるらしい。地図を片手に時間ギリギリに教室にたどり着くと、その

教室には一人の男がたたずんでいるだけだった。どうみても生徒ではないから、生徒が全員サボタージユしたと言う話は本当らしい。

恐る恐る引き戸を上げて教室に入ると、教壇で本を読んでいた黒口ーブの男が顔を上げた。

一体どんなマッド魔法使いかと思ったら、フードの中は少し不健康そうな、青白い優男の顔があるだけだった。ドラゴンの鉤爪がこぶし大の水晶玉をつかんでいる意匠の、風格のある木の杖を教壇に立てかけている。

その男は、瞳が異常だった。金色の瞳、というだけでもあまり見かけないのに、よく見るとその男の瞳孔は砂時計のようにくびれているのだ。

「あの、今学期から留学してきたパリン・スプリングフィールドという者ですが……」

「授業はここでやる。付いて来い」

そう言っ、魔法使いは懷から、ダイオラマ魔法球マジックボールを取り出した。

魔法使いが魔法球に手をかざした瞬間消えたので、僕も魔法急に近づいて同じように手をかざす。すると、次の瞬間にはなにもない砂浜に立っていた。

「闇属性魔法の最大の特徴、それは実体が無いということだ。光属性のそれも一見実体がないように思えるが、実際には光属性の魔法の多くは光と熱による攻撃を行っている。しかし、闇属性の魔法と言うものには実態がない。それにもかかわらず闇属性の魔法が物理的な破壊力をもちうるのは、闇というものが流転し、変化するもの

だからだ。これから教える闇の広域殲滅魔法は膨大な種類がある。
『闇の嵐』、『闇の火炎』、『闇の奔流』、『闇の氷嵐』……闇とは、使いこなせなければ物理的な干渉力はないに等しいが、闇に習熟すれば風も、炎も、氷も水も、すべてを再現し、凌駕できる。例外があるとするば影だけは闇では再現できないが、しかし闇の圧倒的質量の前に影は無力だ」

立ち尽くす僕に向かって、魔法使いは滔々と語る。

「闇を真に理解し、手足のように扱うためには、生涯をかける必要がある。だけど、君たち無能はそんなことも理解できないようで、わずかな時間で闇の魔法を覚えただる。だから、少しでも時間を有効に使えるよう、これからは授業はダイオラ魔法球の中で行う。2時間を4日間に設定してあるから、繊細な闇の操作はともかく大雑把な大火力の魔法くらいは使えるようにしてやる。君はテストの成績もよかったし、魔力の量もこれまでの凡愚とは比べ物にならないから、根気さえあれば僕の弟子にしてやろう」

「名乗るのを忘れていたが、僕の名前はレイストリン・マジエーレ。
『過去と現在の主』とか『大魔法使いフィスタンダンティラス』とか、色々な名前で呼ばれているが、今の僕はあくまでレイストリン・マジエーレだ」

過去と現在の主、その名前には聞き覚えがあった。

5世紀も前の闇の魔法使いで、時間を遡る魔法の使い手でもあった伝説上の人物だ。死んだという記録はなかったが、そのころには真相化の秘儀は喪われていたはず。

「不老不死にいたれないならば、他人の肉体を奪えばいいのだ。簡単な話じゃないか」

愕然とする僕を見て、馬鹿にしたかのように嗤う。

「僕の正体を知った人間には例外なく僕の秘密を話せなくなる呪いをかけているからね、外で話そうとしても無駄だよ」

まるで、思考を読んだかのように指摘してくる。

「さて、それじゃあ授業を始めようか」

授業は、一言で言えば地獄だった。

最初の練習は、様々な属性が入り乱れて飛んでくる『魔法の射手』を、一つ一つ閻属性の『魔法の射手』で打ち落とすと言うものだった。ただ打ち落とすだけではなく、一瞬で飛んでくる魔法の射手の属性を見極め、閻の性質を流転させることで相反する物理現象を起こし、完璧に相殺する練習を行った。失敗すると容赦なく魔法の射手が着弾し、そのせいで死に掛けてもすぐさま蘇生魔法で蘇生し、

授業は続けられた。

4日間ろくに寝させてもらえず、魔力も枯渇寸前まで使った。魔力が枯渇して倒れると、どこからか即効性の魔力回復薬を取り出して無理やり飲ませ、そのまま練習を続けた。

地獄のような4日間が終わると、砂浜に倒れこんでピクリともうごかない僕に向かって、マジエーレ師（そう呼ぶように強制された）は言い放った。

「闇の殲滅魔法を使えるだけの魔力量はあるようだから、この一年で基礎はみっちり叩き込んでやる。サボったら殺しに行くから、体を引きずってでも来るように」

魔法球から放り出され、外に出るとまだ2コマ目が終わったばかりだと言うことに気付いて、絶望した。次の授業は学年全体で受ける数学だったが、最後尾で爆睡していたら、気がついたら授業が終わっていた。どうやら僕が 初級・広域殲滅用闇属性魔法講座 を受けていることは皆知っているらしく、やさしく接してくれたので思わず涙が出そうになる。

そして、学院を出て教会に帰る途中で、大事なことに気が付いた。

「このまま週に4回ダイオラマ魔法球を使い続けたら、普通よりも早く年を取るんだよね……」

週に4日×4回ということは、一週間が23日になるということだ。

そうすると、卒業までにあと5年あることを考えたら、麻帆良に行くころには20歳を少し超えた辺りになっている計算だ。まあ、流石に10歳の子供の姿で教師をやるわけにもいかないし、ちょうどいと言えばちょうどいいのか？

なんとなく前途に不安を抱きながら、その日は自室に帰るなりベッドに倒れこんで、そのまま意識を失った。

9 話（前書き）

レイストリン・マジエーレ（あるいはフィスタンダンティラス）を出したのは若返りフラグの伏線でした。

9 話

「過去の自分から、肉体を奪う……？」

「そうだ。僕が種族的には人間であるにもかかわらず何百年も生きているのは、肉体が古くなったら並行世界の自分の肉体を篡奪し、乗り換えているからに他ならない。時間を跳び、世界を跳ぶ秘術を獲得すれば、そのくらいのことはできるようになる」

始業式の翌日、魔法球の中でマジエーレ師はそんなことを話していた。

「僕が他の世界の神々に授かった秘宝、これを用いて魂を移し変える術式を発動し、過去の自分の肉体に自分の魂を移し変えることで、知識や人格を保ったまま若く健康な肉体を手に入れることができる。過去に跳んだり世界を飛んだりする技術を持たなかったうちは他人の肉体を奪っていたけれど、やっぱり僕自身の肉体が一番落ち着くんだ」

「マジエーレ師の知識があれば、真祖化の秘術も使えるのではないのですか？一々肉体を取り替えるのはいささか非効率な気がします」

「確かに僕は真祖となって不老不死の肉体を手に入れることもできる。だけど、そんなことをして力を手に入れても、頭の固い連中に追われるはめになるだけだ。君は真祖になりたいのか？」

「いえ、僕はあくまで化物を退治する側の人間ですから、死んでも化物に身を落としたりはしませんよ。まあ、不老不死に興味がある

かといわれれば多少はありますけど」

そう、自分は化物を退治する側の人間だ。ミイラ取りがミイラになったりすれば、あの聖人に何をされるか分かったものではない。

「その気になれば過去の君を持ってきて、現在の君の魂を過去の君の肉体に移し変える事もできるけど、君はまだそれほどの価値を見いだせないな。卒業するころには少しは成長しているだろうから、君が望めばあるいは若返らせてあげてもいいかもしれない」

「寿命が延びるのはやぶさかではありませんが……そのような秘術を僕などに使つてよいのですか？」

「他人に魂を移したことはあるけど、他人の魂を移したことはないんだ。実験のついでさ、そう何度もやつたりはしない」

「はあ、そうですか……」

まあ、肉体年齢云々については卒業するときにも考えればいいだろう。タカミチに相談してみるのもいいかもしれない。

「それじゃあ、今日の授業だけ……」

今日はマジエーレ師の授業が最後だったので、疲れた体を引きずって教会に帰る。

教会に帰ってもそのまま寝るわけにはいかず、今日の授業の復習をしておかなければいけない。

晩御飯を食べてから復習を終え、そのまま寝てしまいたかったが体に鞭打って外に出て、近接戦闘の鍛錬を始める。学院に通うのがこれほど疲れるものなら、明日からは鍛錬は早朝に行うべきかもしれない。

当初の予定では2時間は続けるつもりだったが、体がもたなかったので30分もしないうちに諦めて自室に戻り、ベッドに横になる。1秒もかからずに、僕の意識は消えていった。

翌朝、いつもより一時間ほど早く起きた僕は、教会の庭に出て鍛錬を行っていた。

魔法学院で教わっている攻撃魔法は、中距離、遠距離で使用する魔法がほとんどなので、毎日の鍛錬は大事だ。ドラマル先生の授業で教わった影の使い魔の操作もかねて、人型の使い魔を一体だけ呼び出し、連携を考えながら鍛錬を行う。

まだまだ影の使い魔の操作は未熟で、10m以上離れると魔力を送ることができずに実体化が解除されてしまうので、よく練習しなければいけない。>影の魔法・中級戦闘呪文講座<の終了試験では1

0体以上の影の使い魔を30mほど遠くから複数同時に操ることが求められるので、授業だけでなく自主的な復習もおこななければ来年も同じ講座を受けるはめになってしまうのだ。

一時間ほどを鍛錬に費やした後、自室に戻って着替える。アリアドネー上級魔法学院には制服はないが、ほとんどの生徒はフード付きのローブを着ている。ローブの色は各自の自由だが、大体は自分の得意とする属性のイメージカラーで決めるらしい。だから、僕は黒のローブを着ることにしている。汚れもめだたないから、マジエーレ師の授業でボロボロになってもあまり注目をあつめないのだ。

朝食のシチューとパンを食べ、ゆっくりと歩いて学院へと向かう。朝のアリアドネーは、空気も澄んでいて石畳もひんやりとしているので、非常に気持ちがいい。

学院に付くと、1コマ目と2コマ目の授業のあと、1時間のお昼休みがある。お弁当を持ってくる生徒もいれば学院内のカフェテリアで食べる生徒もいるが、僕は学院の傍にあるとんかつ屋で昼ごはんを食べるのがここ最近の習慣だった。値段も安いし美味しいのだが、なぜか学院の生徒はあまりこない。まあ、魔法世界では白米を食べる習慣はほとんどないみたいだし、当然といえば当然か。

昼食時のとんかつ屋は、店内の半分ほどの席が埋まっている。ただ、ここ最近通うようになって分かったが、そのほとんどが常連客なのだ。たまに勇気のある一見さんが来るが、白米や味噌汁に恐れをなして涙目になりながら詰め込んだ後、逃げるようにして店を出て行くらしい。そういう意味では、はじめてきたときから美味しそうにとんかつを食べる僕は結構目立っていたのだと、親しくなった常連客の一人に教えてもらった。

時間割の都合でコマが空いているときは、学院に併設されている図書館や訓練所で時間を潰す。

ここの図書館は中々蔵書の量が多く、司書の管理も行き届いているので居心地がいい。本のしおりは絶対に本の中に挟んであるし（しおりのヒモを本の下から出した状態で書架に本を戻すと本が傷む）、あまり手にとられていない本でもちゃんと埃が払われている。蔵書の傾向としては魔法の理論についての本や古い時代の喪われてしまった魔法についての本など、実に8割ほどが魔法に関する本だった。残りの二割は歴史書や数学書、それから医学書で、フィクションは1冊も入っていない。

図書の貸し出しは基本的に行っておらず（図書館は24時間開いているので、読みたかったら授業のない夜に読めとのこと）、どうしてもという生徒や先生は必死になって写本をすることになっている。「あまり長い期間に一人の人間が図書を独占するのはよろしくない」という司書の方針で、写本の期間は2週間しか与えてもらえないのだ。コピー機を使うのは、本が傷むからダメらしい。まさに司書の鏡である。

そうして4コマ目の授業を終えた後、生徒は自宅に帰る。寮があるのでそこに帰る生徒もいるが、寮は定員が少なく、入れるのはほとんど優秀な生徒かよほどお金を出した生徒に限られるので、ほとんどの生徒は自宅から通っているのだ。試験前になると徹夜で図書館に泊り込んで勉強したり（一応仮眠スペースがある。利用は1日2時間までだが）、開いている教室をお金を出し合って借りて泊り込みの勉強会を開いたりすることもあるそうだ。

そんな毎日を何日か繰り返したある晩、とうとうヴァチカンからの使者がやってきた。

「ヴァチカン国務省外務局長のトマス・クランマーだ」

僧衣をまとったその男は、そう名乗った。

「はじめまして、大司教猥下。パリン・マジエーレと申します。本日わざわざ貴重なお時間を割いてもらい、恐悦至極に存じます」

「そう堅くならんでもいい。同じイギリスの出身だ、仲良くしようじゃないか。用件はブランシー司祭から聞いているな？」

「はい、伺っております。僕はカトリックに入信する決心を定めました」

「そう焦るな、洗礼は当分先の話になるだろうし……」

「大司教猥下、驚くべきことにこの者は既に我々の信仰に関して十分な知識をもっております。長年司祭として様々な信徒に接してきましたが、彼はその多くの信徒より博学で、神に対する敬虔さも持ち合わせております。俗な事情もございますし、いまこの場で洗礼の儀を執り行っても問題はないかと存じます」

ブランシー神父が口を挟んだ。

「なに、それは本当か？」

「はい、本当です。私自身信じられませんが、この子はこの年齢では尋常じゃない位本を読みますし、そう考えると不自然なことではないかと存じ上げます」

「うむ、信徒としてあるまじき考えだが、この場合洗礼は早いに越したことはない……少年よ、もう一度聞くが本当に決心は固まっておるのだな？」

「はい、決心はできております」

「よろしい、ならば洗礼だ。準備はできているのかね？」

「はい、地下の聖堂で準備を整えておきました」

「では、私が儀式を執り行おう」

「よろしくおねがいします」

その後は、普通に賛美歌を歌い、聖書を朗読し、洗礼を受けた。

洗礼名はアウグステイヌス、だ。イングランドの初代カンタベリー大司教のほうではなく、神学者のアウレリウス・アウグステイヌスのほうから取った。大学院時代によく研究していた人物だから、結構気に入っている聖人の一人だ。

洗礼の儀を執り行い、再び礼拝堂に集まって話し合う。

「スプリングフィールド君の扱いについてだがね、とりあえずは助祭ということになる。その若さでは異例だが、状況をかんがみれば

まあ妥当だろう」

「所属はどうなるんですか？仕事とかはどうなるんです？」

枢機卿にたずねた。学業に専念できるならそれに越したことはないので、多少の交渉も辞さない。

「この教会に所属させようという話もあったんだが、それではダメだということになってね。君は、ヴァチカンの特務局13課からアリアドネーに出向、という形になる」

「特務局13課？」

なんだろう、この非常にいやな予感がする名前。

「公的には存在しないことになっているがね、異端・異形の殲滅を行う部署だ。魔法世界の亜人種なんかは独断で狩ってはいけないが、化物やそれに類するものなら現地の司法組織を無視して独断で狩ることができる。戦闘能力は折り紙つきみたいだし、『スプリングフィールド』を生かすならやはり戦闘だということになってね、すまないがこれは決定事項だ」

「出向、ということは、具体的にはどういう仕事をすればいいのですか？」

「学院を卒業するまでは見習い扱いだから、長期休暇に何回か先輩と一緒に化物を狩るくらいかな？悪魔崇拝者や人体実験をやってる科学者・魔法使いも狩りの対象に入るけど、基本的には魔法使いが使役する悪魔やら鬼やらを滅するのが仕事だ。13課だとわざわざ魔法使いを雇って悪魔を呼んで、その場で滅したりとかしているみ

たいけど、流石にそこまではやらなくていいよ。ただ、近いうちに13課から色々と贈り物があるそうだから、ひよっとしたらそういう事態になるかもしれないということは心に留めておいてくれ」

悪魔を呼び出してその場で狩るって……なんというか、そのうち魔界にまで乗り込んでいきそうな仕事意欲だ。

「詳しい説明は後日パンフレットが贈られてくるから、それを読んでくれ。それでは、私はこれで失礼させてもらっ」

「説明ありがとうございました。お氣をつけて」

「わざわざお越しいただいてありがとうございました、大司教猥下」

玄関を出て大司教を見送り、僕と神父は教会の中へと戻った。

「そういうわけで、特に仕事はしなくていいそうだ。中々好条件じゃないか？」

「そうですね。最前線に送られることもあるかも知れない、と思ってたのですが、予想以上に甘い処遇だったのほっとしました。そういうえば、教会魔法は教えていただけるんですか？」

「手始めに教会魔法に関する本を渡すから、それを読んできてくれ。私も若いころは13課にいたこともあるから、教会魔法もそれなりに使える。だから、君が教会魔法に関して十分に知識を得たと思ったら、実践を教えてあげよう」

「ありがとうございます」

薄々感づいてはいたが、やはりブランシー神父はそれなりに強いらしい。歩き方もいいし、常に背筋がまっすぐなので何かの武道の経験者なのでは、と思っていた。

その場で本を受け取り、自室に帰って読み始める。疲れてはいたが、新しい魔法が学べるという高揚感が、僕の体から疲れを消し飛ばしていた。

結局、その日は朝日が昇るまで本を読み、1時間ほど仮眠を取ってから学院に向かった。

9 話（後書き）

神父ってのは俗称で、司祭っていうのが正しい呼び方です。プロテスタントでは牧師っていますが、こっちは正式な名称でもあります。

9・5話（前書き）

主人公の初任務の話です

9・5話

僕がアリアドネー魔法学院の2年生を修了した夏、13課の先輩3人に連れられて魔法世界の片田舎の街を目指していた。

街の規模は中くらいで、人口はおよそ5万人ほど。小規模だが騎士団も駐屯していたはずなのだが、つい先日強力な吸血鬼が出現し、街は半壊状態にあるらしい。騎士団の本部が1000人からなる吸血鬼討伐軍を編成し送ったようだが、軍が街に着いたとたん連絡が途絶えたとのことで、急遽13課に討伐の命令が下った。

僕は戦闘には参加せずおとなしく見学している、と言われたが、自衛のためなら多少は戦ってもいいとの許可が出たので、少し待ち遠しかった。

化物と言えばウェールズで一瞬だけ見たあの光景が思い浮かぶが、先輩たちの話によれば今回はそれより悪質で規模が大いから、決して油断しないように、とのことだった。

アリアドネーの街を出発して3日後、僕達はその街を見下ろせる小高い丘の上で作戦会議をしていた。

「今回の吸血鬼は、魔法はやや苦手だがグールの操作能力と身体能力に優れている。俊敏さは通常の吸血鬼など足元にもおよばないレベルだろうから、街の外に逃げられればおしまいだ。だから、まず3人で結界を張り、その後ヤツが陣取ってる街の中心部へと向かう。今回はできる限りグールとの戦闘は控えて、体力を温存するように」

今回のリーダーである、30代の神父が言った。

皆が了解の意を示すと、神父はでは行くぞ、と言い、僕達4人は街へと向かった。

丘から降り、街を取り囲むように結界を発動させて街の入り口へと近づく——すると、真っ先に入っただのは地獄そのものだった。

おそらく、元はヒトだったであろう怪物——グールがそこらじゅうを徘徊し、死体を喰い、共食いすら平然と行っていた。

あちこちに死体が散乱し、そのほとんどがグールによって『喰われた』跡があった。おそらくは妊婦であったのだろう女性の死体は——腹を引き裂かれ、悶え苦しみながら死んでいた。その横には、おそらくは赤ん坊のものだったと思われる、小さな頭が転がっていた。目はくりぬかれ、頬の肉は食い千切られた跡がある。

鳥が死体をつまんでいる。死体の肉という肉を鳥に喰われ、血に染まった人間の骨と血溜まりが見受けられる。

徘徊するグールの肉は削げ落ち、全身の肉を腐らせながらも、彼らは食料を求めて動き回っていた。中には、同胞にのしかかり、その肉を喰っているグールもいる。彼らのほとんどは文字通り生気の無い目で歩き回り、立ったまま鳥に喰われていることもあった。また、歩き回っているグールをよく見ると、彼らのほとんどには蛆が沸いていた。蛆に全身を喰われ、倒れこんでいるグールもそこかしこに散乱している。

腐った人肉の匂いと、血と体液と糞尿が混ざった匂い——ここは、どうしようもなく地獄だった。

ウェールズの光景で耐性ができていたとはいえ、猛烈な吐き気に襲われる。先輩に言われて、朝食を抜いてきたのは正解だった。さもなければ、絶対に膝を突いて嘔吐していただろうと確信する。

「目を逸らすな。これが吸血鬼だ、これが化物だ。お前の故郷を焼き、お前の隣人を喰い、お前の家族を奪った化物どもだ。太古の昔からこうして人類を餌食にし、神に逆らおうとする怪物だ。お前が滅ぼすべき、仇だ」

思わず目を逸らしかけた僕を、神父が叱責する。

「恐いなら闘わなくてもいい、恐ろしいなら逃げてもいい、だが、憎いなら——武器を取り、立ち上がれ。君の目は、復讐者の目だ」

神父に叱責され、心の奥底にしまっていた化物への憎しみが溢れ出してくる——スタン爺さんを石にし、村人を石にし、そしてネカネ姉さんをも手につけようとした怪物。それらへの憎しみが、心の中で渦を巻き始める。

袖口から黒鍵を取り出し、闘う旨を伝えたと——神父は満足げに頷き、宣言した。

「我らは神の代理人、神罰の地上代行者。我らが使命は、我が神に逆らう愚者を、その肉の最後の一片まで絶滅すること——Amen

！
」

先輩たち3人が十字を切り、武器を構える。どうやら、グールに感づかれたようだ。死体の群れが、新鮮な食料を見つけ、緩慢な足取りでこちらへ向かってくる。

まず最初に、向かってきたグールの群れに、銃弾と黒鍵が襲い掛かる。祝福儀礼を受けた銃弾は一撃でグールを粉碎し、それを蒸発させた。

鉄甲作用を付与された黒鍵はグールを何対も纏めて貫き、それらすべてを蒸発させる――そして、正面に見えるグールは、その数を半分ほどに減らしていた。

リーダー格の神父の教会魔法により、空から巨大な十字架が降り注ぐ。十字架は轟音を立ててグールを押し潰し、衝撃波と神による祝福を振りまき、周囲のグールを一掃した。

「よし、市街中央の神殿まで一気に走るぞ！」

リーダー格の神父がそう叫ぶと、僕達4人はいつせいに駆け出した。自身に『戦いの歌』をかけ、凄まじいスピードで疾走する先輩たちになんとか食らいついていく。

途中に現れるグールはすべて銃弾によって打ち倒され、足止めにするならなかった。

神殿の入り口にたどり着くと、中の祭壇に一人のマントを着た男が

座っているのが見えた。

「討伐対象を確認——各自、攻撃開始！」

神父がそう叫ぶと、黒鍵が、銃弾が、十字架が、魔法の火の玉が、いつせいに男に向かって飛んでいく。

男は視認するのがやつとの速度でそれらすべての攻撃を避け、こちらに接近してきた。凄まじいまでの殺気に、心がくじけそうになる。が、神父の叱責を思い出すと、不思議なくらいに心が落ち着いた。

僕達は同じタイミングでそれぞれ違う方向に跳び、そこから吸血鬼を攻撃する。

最も与しやすそうと考えたのが、僕のほうに向かってくる吸血鬼を——和泉守国貞で切り伏せる。

だが、刀は避けられ、お返しとばかりに吸血鬼の拳を喰らう。『戦いの歌』を使っているにもかかわらず数メートルほど吹っ飛ばされ、一瞬だけ意識が飛んだ。

一瞬の後に意識を取り戻し、飛び掛ってきた吸血鬼を避け、6本の黒鍵を投げる。それを交わした吸血鬼は、警戒したかのように僕から距離をとろうとして——後ろから、巨大な十字架を叩きつけられた。

壁に激突して怯んだ吸血鬼を、3人の先輩が取り囲み、浄化のルーンを刻んだ銃弾を叩き込んでいく。吸血鬼がボロボロになり、血溜まりに体を沈めて動かなくなると――3人は、容赦なく『浄化の炎』の教会魔法を発動させる。

吸血鬼の死骸が灰になったのを確認すると、先輩たちは懷から聖水を入れたビンを取り出し、灰にふりかけた。

「目標は討伐した。早いところこの街を焼いて、引き上げるぞ」

リーダー格の神父がそう言うと、他の二人は頷いた。

「おい、立てるか？」

「はい、なんとか」

心配するかのよう問いかけられたので、黒鍵を杖代わりにして立ち上がる。

「まあ、初仕事でここまで働けるなら大したものだろう――では、帰るぞ」

吸血鬼を燃やした浄化の炎が、汚染された神殿にも広がり始めている。これ以上ここにいるのは危険だった。

影の倉庫から手袋を取り出し、治癒魔法を発動させ、あわてて3人の先輩についていく。

街へ出ると、グールたちは既に活動を停止し、倒れ伏していた。鳥が空を埋め尽くし、死体をむさぼっている。

「では、これから手分けして街を炎で覆わなければならない——各自、散開して火をつけて来い」

街中に浄化の炎をひろげ、街から出ると、既に夜になっていた。

リーダー格の神父が懷から転移符を取り出し、魔法を発動させた。すると、一瞬後に僕達4人はアリアドネーの教会の礼拝堂に立っていた。

「じゃあ、2人は先に帰っててくれ——」

神父がそう言うのと、他の2人の神父は扉を開け、帰っていった。

「さて、聞こうか——13課に、入るつもりになったかな？」

僕の眼をじっと覗き込んで、神父は問いかけてきた。

「はい、お願いします」

きつぱりと、神父の目を見返してそう言った。

元々、ウェールズで村を襲われたときから、化物に対する復讐心はあった。

それが今回、化物に襲われた街の惨劇を見て、大きく変わった。あんなものは、この世に存在してはいけない。人間が、葬り去らなければいけない。そう考えるようになっていた。

元々、共存しようと言うほうが無理なのだ。大きすぎる力を持った魔法使いが民衆に迫害されたように、人間は自分より大きい力を持

つ化物を恐れる。姿形も価値観も異なる化物と仲良く暮らすなんて、夢物語もいいところだ。

ならば、スプリングフィールドの血を引き、聖人に使命を与えられた自分は――化物どもを駆逐する、神の兵であるべきだろう。

「わかった。では、明日からは私について来い。この夏で、13課の基本を叩き込んでやる」

「はい、わかりました」

そう返事をして、その日はベッドに入った。

10話（前書き）

戦闘描写の練習がてら書いてみましたが、意外と難しいものです。

10話

洗礼を受けてから2年後、僕は上級魔法学院の5年生になっていた。5年生になってからは>影の魔法・中級防御魔法講座<と>上級・無言呪文講座<、>上級・遅延呪文講座<に>中級・広域殲滅用闇属性魔法講座<に>中級・結界魔法講座<を取っていた。やはり1年だけでは修了できない講座もあり、最初から講座をある程度絞っておいて正解だったと安堵している。

現在、肉体年齢は15歳ほどだ。マジエレ師にも、「この分なら卒業時には若い肉体を用意できる」と評価されているし、学業面は順調だろう。遅延呪文や無言呪文も形になってきて、闇属性の「魔法の射手」ならば5分は遅延させて発動することができるし、20矢くらいなら無言呪文で運用することもできるようになった。学院での授業になれてきてからは教会で神学の本を読む余裕もできているし、タカミチと過ごした5ヶ月間と同じくらい楽しい毎日だ。

夏休みやイースター（旧世界ほどではないにしろ魔法世界でもキリスト教信者は多いので学院も休暇になる）などには、13課の先輩と一緒に異端狩りの小旅行に赴いたりしていたので、実戦経験もかなり積めていると思う。マジエレ師の授業では悪魔を召喚して闇属性魔法のみで戦う、というような実戦演習もやっているし、心身ともに成長している。

影で作った使い魔も現在では50m以内なら20体を同時に操作できるし、2〜3体なら感覚共有の術式を取り入れることによって5km先から遠隔操作ができるようになった。実戦では、影の使い魔には銃器を持たせて近接戦闘をする僕の援護をさせるか、剣と盾を持たせて闇属性の殲滅魔法を使う僕の援護をさせるか、という2つ

の運用方法を試している。マジエーレ師は無詠唱で小さな津波にも匹敵する威力の殲滅魔法を使えるが、僕は馬鹿みたいに長い詠唱を取り入れてもせいぜい中規模の土砂崩れ程度の攻撃しかできない。なので、詠唱中には隙が大きくなるし、パートナーもいないので使い魔に盾としての役割を振っているわけだ。

教会魔法については、やはり素質があるということとでブランシー神父が熱心に教えてくれた。

教会魔法には決まった詠唱はなく、聖書の一節を謡うことで魔法が発動する。聖人クラスの使い手ともなれば無詠唱で海を割ることすらできるらしいが、あいにくと僕は治癒・エンチャントの魔法ばかりを勉強しているので教会魔法による攻撃手段は持っていない。闇属性の殲滅魔法でも、特別なエンチャントを施して祝福した黒鍵を魔法の発動媒体にすることで、異形の消滅はできるので教会魔法で攻撃をする必要性を感じなかったのだ。

エンチャントに関しては、自分で武器や弾薬に祝福儀礼をほどこせるくらいには使えるようになったし、治癒魔法に関しては「Ameln」の一言で脱臼を直すことができるレベルに成長した。

そして、今現在5年生の夏休みを堪能していたが、法王庁からの命令で「1人で」悪魔崇拝者を狩って来い、との命令を受け、旧世界の中東へと来ている。

13課の制服でもある黒いカソックを着て、じりじりと日差しが照りつける中東を歩くのは正気の沙汰ではなかった。過激なイスラム原理主義者に襲われるし、魔法が使えないから体術のみで武装集団を相手にしなければいけなかったりと、目的地にたどり着くまでに

2週間もかかってしまった。この任務が終わったら力ソックに保冷の術式を縫いこもう、などと現実逃避しながら、件の悪魔崇拝者について調べる。

自分ひとりでの調査にはまだなれていなかった。豊富な資金を活用して現地人にも探らせる。カトリックの信者が寄付した金がい

スラム信者の懐に入るさまを苦々しく思いながら、早く調査能力を伸ばさなければ、と考えた。

目的地にたどり着いて、調査を始めてから4日後、件の悪魔崇拜者の隠れ家が見つかった。報告では1人とのことだったが、調べてみれば隠れ家には十数名の異教徒どもがたむろしているらしい。ちょっと目を放した隙にうじゃうじゃと増殖しやがる、これだから異教徒は、などと愚痴りつつ、1日をかけて周辺の地理を探り逃走経路を確保した。

悪魔崇拝者達は、生意気にもビルをひとつ借り切って悪魔を召喚していた。5階建てのそこそこ大きいビルの中には、悪魔崇拝者が十数名に下級の悪魔が10匹ほどいる。

逃げられても面倒なので、特殊なエンチャントと祝福儀礼を施した聖書を2冊用意し、ビルの外面に貼り付け、結界を作る。特に強力なモノを持参したので、悪魔のみならず悪魔崇拝者まで脱出不可能にするほどの結界を張ることに成功した。

「? ? ? ? ? ? ? ? ? ?」

? ? ? ? ? ? ? ? ! ? ? ? ? ? ? ? ?

「????? ? ???? ? ? ???? ? !」

なにやら喚いているが、異教徒どもの言葉なんて聞く必要もないので翻訳の魔法を解く。

1階の玄関から進入すると、玄関にはすでに1匹の悪魔と異教徒がいた。異教徒がこちらを指差してなにやら喚いたかと思うと、次の瞬間には悪魔が襲い掛かってくる。

アリアドネーの教会から頂戴した手袋の効果確かめたいので、あえて右腕を差し出す。狙い通りに、犬の頭を持つ悪魔は僕の右腕を食いちぎった。

痛覚を麻痺させる魔法をあらかじめかけておいたが、それでも少しは痛い。腹いせに、左手で黒鍵を三本投げつけ、悪魔と悪魔崇拜者を殺す。悪魔は2本の黒鍵を受けて瞬く間に蒸発し、悪魔崇拜者は腹にボーリング玉ほどもある穴があいて次の瞬間絶命した。

手袋の裏地に魔力を流し込み、完全治癒の術式を発動させる。すると、僕の最大魔力量のおよそ1/2ほどの魔力を消費して、喰いちぎられた腕が再び生えてきた。なぜか、カソックや手袋までが再生する。

再生には30秒ほどかった。その間に、2匹の悪魔が玄関に降りてきたが左腕に発動媒体としての黒鍵を握り、無詠唱の閻属性の魔法で灼きつくす。

再生が完了すると、先程悪魔が降りてきた階段を駆け上がり、2階へと突入する。

2階へ駆け上がった瞬間、包囲されていることに気がついた。4方向から一匹ずつ、悪魔が襲ってくる。

手袋に魔力を流し込んで前方の1匹に掌底をかまし、蒸発したのを確認する前に後方の悪魔に回し蹴りを叩き込む。吹き飛んだ悪魔が壁に叩きつけられてうずくまったのを確認し、左右から襲い掛かってきた悪魔に対し抜き打ちに斬りつける。

「島原抜刀流・震電」

2匹の悪魔を祝福儀礼済みの和泉守国貞で両断する。つづいて、懷から拳銃を取り出し、うずくまっている悪魔に1発、祝福儀礼済みの弾丸を叩き込む。

この銃は異形を殲滅するためにわざわざ特注した銃で、銘を「ジャッカル」といい、全長39cm、重量16kg、装弾数6発、純魔力弾および純銀製マケドニウム加工弾殻に法儀式済み水銀弾頭装薬にマーベルス化学薬筒NNA9を用いた専用の13mm炸裂徹鋼弾を使用する。製作者曰く「もはや拳銃とはよべないナニカ」。銃身に「Jesus Christ is in Heaven now」と刻まれており、強力な祝福儀礼が施されているという、非常に強力な武器だ。ちなみに、影の使い魔用には「ハルコンネン」という兵器を発注し、装備させている。こちらは劣化ウラン弾及び爆裂徹鋼焼夷弾を用いて、主力戦車を除く全ての地上・航空兵器を撃破できる怪物兵器だ。全長は2m以上、重量もかなりあるので身体強化を施した魔法使いでも扱うのは難しかったりする。

2階の悪魔をすべて撃退したのを確認すると、3階へと上がる。悪魔崇拝者どもは最上階の部屋の隅でガタガタ震えて命乞いでもしているのだろっ、3階にもその気配はなかった。

3回への階段を上ると、またしても3匹の悪魔が襲ってきた。ジャ

ツカルの引き金を3回引いただけで、3匹ともあっけなく蒸発する。身体強化をかけていても反動を感じる辺り、ジャツカルの威力の高さがうかがえた。

どうやら悪魔はこれで最後だったらしく、5階まで上がってももう襲ってこなかった。

5階に上がり、かたっぱしから部屋のドアを開けて悪魔崇拜者を捜索する。全員が最奥の部屋に閉じこもっていたが、僕に見つかると思っせいに悲鳴を上げて逃げ惑うばかりだったので、武器を使うのも馬鹿らしくなり、1人ずつ素手で頭を潰していく。最後の1人を殺すと、部屋は飛び散った血と脳漿にまみれて、殺人に慣れてきた僕でも少しだけ気分が悪くなったので、早々に退散する。

後始末はやらなくていいとのことなので、残り少ない魔力で返り血の付いたカソックを浄化し、再度の祝福をほどこす。ビルを出て、そのまますぐタクシーに乗り込み、空港に直行する。空港についてから時間を確認すると、予約しておいたフライトまではあと1時間あった。携帯電話を取り出し、ヴァチカンの本部まで衛星電話をかける。

「もしもし、スプリングフィールドです。任務完了しました」

「生存者と目撃者は？」

「どちらも0です。あと、ジャツカルの弾薬が残り少ないんで、工房のほうにもつと作るように言っておいてください」

「了解した。よくやったな、スプリングフィールド。これでようやく一人前になれたわけだ」

「ありがとうございます。それでは」

「ああ、じゃあな」

そう言つて、電話を切る。実弾が切れてもジャッカルは魔力を凝縮して物質化した弾丸を撃つことができるが、実弾よりは威力が劣るのでできれば実弾のほうがいい。手元には6発入りのマガジンが15個しかないので、拳銃の訓練をしているとすぐになくなってしまふのだ。魔力弾は反動がないので、訓練にならない。

カモフラージュのために持ち歩いてるスニーカーから日本の小説を取り出し、読み始める。そろそろ日本語を忘れかけてきたので、ときおりこうして日本語を忘れないように日本を読んだり、音読をしたりしているのだ。

文庫本を1/3ほどまで読み勧めたところで、搭乗のアナウンスがかかる。名残惜しいが文庫本をスニーカーにしまい、ヴァチカンへ向けて出発した。

10話（後書き）

評価・感想等いただければ嬉しいです。

11話（前書き）

ようやく麻帆良到着です。

11話

「すでに肉体は用意してある。儀式魔法の準備も終わらせた。さあ、儀式に入ろうか」

アリアドネー上級魔法学院の卒業試験に無事合格し、卒業資格を得た日の夜、僕とマジエーレ師は学院内のマジエーレ師の研究室にいた。

部屋は暖炉の暖かさが隅々までいきわたっており、思わず手に取りたくなるような貴重な魔法書が壁に取り付けられた本棚を埋め尽くしている。小綺麗なガラスの小卓には果物の盛られた小鉢と上等のワインが載っており、非常に居心地のよい部屋だった。

「それでは、お願いします」

平行世界の自分の肉体を前にして、昔の自分はずいぶんと華奢だったのだな、などと感慨にふける。毎日の鍛錬を欠かさなかったためか、今の肉体は華奢ながらもずいぶんと筋肉がついている。いわゆる細マツチヨ、というやつだろう。

儀式用のナイフで目の前に自分の首筋に傷をつけ、マジエーレ師がブラッドストーンのパendantをその血に浸す。続いて、今度は自分の手首に傷をつけて、その血を若い自分の首筋から滴り落ちていく血と混ぜ合わせ、魔力をこめる。

「では、当初の予定通り魂の移し換えは僕が行う」

そういうと、マジエーレ師は杖を握って長い長い呪文を詠唱し始め

る。

呪文の詠唱が進むにつれ、肉体の感覚がなくなっていく、視界もだんだんと暗くなっていく。同時に魔力が若い自分の肉体に流し込まれるのを感じ、不快感に怖気がした。

意識が闇に落ち、次の瞬間あつという間に覚醒した。まるで長く暗いトンネルを抜けて、一気に光に満ちた光景を目の前にしたかのような錯覚に陥る。

徐々に肉体の感覚が戻っていき、それにつれて魔力が自分の体の中に満ちていることにも気がついた。

5分ほど経つと、ようやく起き上がれるまでになった。まだ多少ふらつくが、何とか支えなしで起き上がる。

「やっぱり、視点が低いですね……」

新しい体を手に入れてから、最初に感じたことはそれだった。覚悟はしていたが、やはり面白くない。

「さて、ようやく正式に僕の弟子として認めることができるところまで成長したね。そこでパリン、君にはこの『マギウスの杖』を卒業の記念として与えよう」

そう言って、マジエーレ師は虚空から一本の杖を取り出した。それはいつもマジエーレ師が使っている杖とまったく同じ意匠の杖で、やはりドラゴンの三本の鉤爪が水晶を握り締めているものだった。感激に、手が震える。

「マジエーレ師、このような杖をいただいてもよろしいの

でしょうか……？」

「なに、僕はその杖をまだ何本も持っているんだ。それに、何の縁か知らないが君は僕の甥と同じ名前を持っている。ならば、この杖は君が使すべきだろう」

ひどく気だるげな様子でいすにもたれかかっているマジエーレ師が、そう言って杖を押し付けてきた。

「僕はあと1000年はこの世界にいる。なに、会いたいと思えばすぐわかるから安心してくれ。それでは、よい旅を」

「今までいろいろとありがとうございました。それでは、またいつか」

別れの挨拶を交わして、重厚な木の扉を開けて外の廊下に出る。既に深夜0時をまわっているからか、学院では図書館の明かりがこうこうと輝いているだけで、校舎は真っ暗だった。

学院の卒業式は終え、証書も授与されているので、これからメルデイアナ魔法学校に向かい、そこで卒業証書を受け取る予定だ。アリアドネー上級魔法学院の卒業資格があるならメルデイアナの卒業資格などいらないのだが、高度に政治的な事情とやらで出席せざるを得なくなった。

なんでも、メガロメセンブリアでのカトリックの布教を完全に自由にする交換条件として、僕の麻帆良行きが決定されたい。それを聞いたとき、13課の先輩がものすごく悔しそうな顔をしていた

のが印象に残っている。こんなに忙しいのに直前で期待の新人が離脱するとは、私の有給を返せ、などとばやいていた。ご愁傷様である。

個人的には、麻帆良行きは楽しみである。タカミチとも久しぶりに会えるし、あそこは毎晩鬼や悪魔が侵入してくるのだ。学園町と交渉して警備員の仕事を回してもらえば、異形どもを毎晩退治できる、非常においしい職場だと思う。

荷物は全部影の倉庫に収納して、影の使い魔に乗って空を飛び、旧世界へのゲートへと向かう。

10分ほど飛んで、アリアドネー郊外にある『空港』に到着した。今回はタカミチは同行していないので、おとなしく行列に並ぶ。深夜だというのに、電光掲示板には『現在の待ち時間：100分』と表示されている。100分もあれば魔法書を一冊さらつと流し読みくらいはできるかな、と思って列の最後尾に並び、影の使い魔を絨毯状にして浮遊の術式をかけたものの上に座り、本を開く。

ちなみに、もう卒業してしまったので学生証は有効期限が切れてしまった。現在使っている身分証はヴァチカン発行のもので、表向きは『特務局3課』に所属していることになっている。

ちょうど本を読み終えたところに、前に並んでいた人間が手続きを終え、出国した。

「ええと、次の方、身分証をお見せください」

「はい、こちらになります」

影の使い魔から降りて、中年の眼鏡ねをかけた職員に身分証を差し

出す。

「パリン・スプリングフィールド様、10歳。確かに確認しました、どうぞお通りください」

ゲートを通り抜けると、ロンドン郊外にある『空港』に出た。

『空港』を出て、周りに一般人の目がないのを確認すると、飛行用の影の使い魔を呼び出し、防寒用のコートを羽織ってから飛び乗った。

まだ8月だが、ロンドンの上空は寒い。特に高速で飛行しているならなおさらだ。眼下に見えるロンドンの夜景に、魔法世界にはない文明的な輝かしさを感じ、少し前世の日本が懐かしくなった。アリアドネーではとにかく以外の日本料理が食べられなかったので、早く日本に行って寿司が食べたかった。朝からこっそりした肉料理を食べる食生活にだけは、何年経ってもなじめなかったのだ。実のところ、麻帆良行きを受け入れた理由の3割は、日本料理が食べたかったから、というものだ。そもそもアリアドネーでは新鮮な魚がめったに手に入らないので、魚料理といえば缶詰に干物、それだけだった。新鮮な刺身など食べられるはずもなく、生の魚が食べたいとぼやいていたら魔法学院では『ゲテモノ好き』などという非常に不名誉な称号を手に入れたこともあった。

吹きすさぶ寒風に耐え、2時間ほど飛行するとなつかしいメルディアナ魔法学校が見えてきた。時計を確認すると、すでに朝の4時だ。ちなみにメルディアナ魔法学校に教会は併設されていない。だから大嫌いなプロテストタントも数は少ないので、比較的安らかな気持ちで大地に降り立つことができた。

鼻歌を歌いながら、人影のない校舎の中を歩く。もちろん歌うのは賛美歌、今日は『いつくしみ深き』。神父に誕生日プレゼントとしてこの曲のオルゴールをもらって以来、お気に入りの曲だ。

賛美歌、というのは音痴の矯正にはもってこいだ。僕は前世ではものすごく音痴で、高校時代に音楽の実技試験で赤点を取ったこともあるほどの、筋金入りの音痴だった。だが、洗礼を受けて以来毎朝賛美歌を歌うようになってからは、日に日に歌がうまくなっていった。賛美歌というのは老若男女が入り乱れて歌うので、どんな人でも歌いやすいように作曲されている。毎日歌っていれば、自然とうまくなるのも道理だろう。

校舎の構造なんてとくに忘れ果てていたが、なんとなく人のいそうなほうへと進んでいくうちに、だんだんと道を思い出してきた。校長室にたどり着き、扉をノックする。校舎には誰もいなかったから校長もいないかな、と思っていたが、どうやら既に校長室にいたようである。僕が呼び出されたのは早朝の5時だから、多少早めに来ていたのだろうか。

「パリン・スプリングフィールドです。証書を受け取りに参りました」

「うむ、入ってくれ」

はじめてあったときとは似ても似つかない、老けた声が聞こえた。

「ほれ、これが証書じゃよ。課題はすぐに浮かび上がると思う、コーヒーでも飲んでいかんかの？」

何年かぶりに会った校長は、これ以上ないというくらい老けていた。ざまあ見る異教徒め。生徒を政治に巻き込んで保身を図るから天罰があたったんだ。

「結構です。では、僕は麻帆良に向かうので失礼します」

そう言つて、校長室を出る。

すぐ麻帆良にいくとは言つたが、その前に1人会わなければいけない人がいる。

そう、ネカネ姉さんだ。

アリアドネーに在学しているときも何度か手紙のやり取りをしていたし、裏事情は伏せてあるものの洗礼を受けたことも報告してあるし、ネカネ姉さんとはいまだに仲がいい。ヒースロー空港で6時に待ち合わせをしているので、また影の使い魔を呼び出し、ロンドンに向けて飛び立つ。

魔力を半分ほど消費し、全速力でロンドンに向かって飛ぶ。ガチガチと歯が震えるが、一刻も早くネカネ姉さんに会いたいので、ノンストップで飛び続ける。

全速力で飛ばした甲斐もあって、待ち合わせ時刻の十分前には空港の正面玄関上空にきた。

「Amen」

一言つぶやき、自分の周りに認識阻害結界を張って、上空10000mから飛び降りる。

地面に激突する寸前で浮遊の術式を発動させ、ふわりと着地すると、すぐにネカネ姉さんが駆け寄ってきた。今発動させた認識阻害結果の効果は非魔法使いにしか及ばないので、上空から高速で落下してきた僕はすぐにネカネ姉さんの目に留まったのだろう。

「久しぶり、パリン！大きくなったわね、元気にしてた？日本に行くっていったけど、卒業試験？」

久しぶりに再会した姉さんは、僕を抱きしめて矢継ぎ早に質問を繰り出した。

「久しぶりだね、ネカネ姉さん。姉さんも元気そうで何よりだ。うん、日本に行くのは卒業試験だよ。向こうで先生をやるんだって」

「日本で先生、ねえ。パリンは昔からたくさん本を読んだから、向いてるんじゃない？」

その後30分ほどネカネ姉さんと雑談して、成田行きのフライトに乗った。さすがに疲れたので、飛行機の中ではぐっすりと眠る。

成田空港に着くと、結構周囲からのからの視線が痛い。まあ、10歳の外国人の子供がスーツを着ていればそりゃ目立つだろう。なんとなく居心地が悪くなったので、無詠唱で簡易な認識阻害の結界を張った。

成田空港を出て、タクシーを拾い、麻帆良まで一眠りする。日本円もあらかじめ100万円ほど両替していたので、支払いは心配していない。

タクシーの運転手に起こされて、麻帆良学園都市の入り口に着くと、

もうそろそろ夜だった。このまま学園長に会いに行くのもどうかと思ったので、タカミチにメールして、学園長に明日時間をとってくれるようお願いしてもらうことに。そのままビジネスホテルまで歩き、チェックインしてすぐにベッドにダイブする。

大分疲れたのでスーツを脱ぐのも面倒くさくなって、そのまま僕の意識は闇に落ちた。

11話（後書き）

評価・感想などいただけたらうれしいです

12話（前書き）

たつみーファンとせつちゃんファンの皆様ごめんなさい。そして作者のだいすきな美空ちゃんが登場します。

12話

麻帆良に到着した翌朝、僕はビジネスホテルの前でタカミチと待ち合わせしていた。早朝だというのに、照りつける日差しが暑い。コートの中の裏地に保冷の術式を刻み込んでおいて正解だった。

夏休みだからか、学生の姿はほとんど見えない。今もってる携帯電話も古くなってきたし、せっかく日本に来たんだから懐かしのガラケーに買い換えるのも悪くはないか、などといったことを考えながら、携帯電話に入れたインベーダーゲームで遊ぶ。

10分ほど遊んでいると、向こうからタカミチがやってくるのが見えた。

「やあ、2年ぶりだね。体が縮んでるみたいだけど、例の術式が成功したのかな？」

「久しぶり、タカミチ。術式は成功して、すっかり頭脳は大人、体は子供さ。しかし、本当に麻帆良は広いね。タカミチに道案内を頼んでよかったよ、僕だけなら絶対に迷ってた」

「ははは、まあ日本一の学園都市だからね。じゃあ、学園長室は女子校エリアにあるから、案内するよ」

タカミチについて歩いていくと、たまにすれ違う生徒が興味深げにこちらを見てくる。まあ、金髪赤眼の外国人の子供がスーツを着て教師と並んで歩いてる、っていうのもなかなか奇妙な光景だし、生徒としては興味を引かれるのだろう。ただ、ここまであからさまにじろじろ見られるとどうにも緊張する。ここに来るまでに、かなり

禁欲的な生活を送っていたので女子学生のミニスカートは目に毒である。子供の視点だと見えてはいけない何かが見えそうになるので、口の中で聖書の一節をつぶやいて自分を律しなければいけなかった。どうやら、神父としてはまだまだ修行が足りないようだ。

神よ、われらを誘惑に陥らせず、悪からお救いください。Amen。

心の中で十字を切りながらタカミチの隣を歩き、学園長室へと向かう。

半ばタカミチの言葉を疑っていたが、実際に学園長室は女子校エリアの真ん中にあった。むしろ、学園長室の周りに女子校エリアを作ったのではないかと錯覚してしまうほど、学園長室は絶好のスポットにあった。

「はじめまして、パリン・スプリングフィールドです」

「おお、君がパリン君か。タカミチ君から話は聞いておる」

学園長は、明らかに異常だった。

その異様な後頭部が目に入った瞬間、もしや異形の類かと誤認して、黒鍵を取り出しかけてしまったほどだ。悪魔崇拝者の中には悪魔の体の一部を自分に埋め込むようなキチガイもいたが、目の前の生物の異常さはそういった人工的な異常さではなく、あくまで自然体な異常さなのだ。あまりにも生物として不自然すぎるそのフォルムは、いったいどういう突然変異を起こしたらそうなるのか、小一時間ほど問い詰めたくなる。ガンマーフィールドの中央に赤ん坊とゆりかごを置いて一ヶ月生活させたら、あるいはその子孫はこうなるのか、もしれない、というような生物だった。

あからさまに警戒している僕を見て、学園長はなんとも底の知れない笑みを浮かべた。保身に長けた政治家のような、一見無害そうだが何を考えているのかわからない笑い方だ。隣に立っているタカミチがわずかに嫌悪感をあらわしているのを見て、少し驚いた。めったにそういった感情をあらわにすることのないタカミチのそういう顔は、長い付き合いだが一度も見たことがない。しいて言えば、Mの話をするときの苦りきった顔と少し似ているかもしれない。

「教育実習の件ですが、数学教師をやることになってしていると伺つてます。辞令では2月から授業を担当することですが、当然、今数学を教えていらっしゃる先生の授業を見学させていただく機会がありますよね？」

生前の僕の学校にも教育実習の先生が来たことは結構あつたが、来た初日に授業をやった先生はいなかった気がする。だいたい、最初はその教科の先生の授業を見学して、少ししたら実際に授業を担当する、という形だったはずだ。少なくとも、僕は初日から授業ができるほど頭のいい人間ではない。

「おお、そうじゃったな、忘れとったわい。ところで、ネギ君はいつ来るのか知っておるかな？」

学園長ともあるうが「忘れとった」の一言で流すとは……ぶち殺すぞ、異教徒め。生徒を何だと思つてるんだ。

「兄とは連絡を取ってないので存じ上げません。それより、宿泊施設の件ですが」

「おお、今はちょっと空いてる部屋が無くてな、悪いが生徒の部屋に住んでもらうことになる。桜咲君、龍宮君、入ってきてくれ」

学園長が声をかけると、後ろの扉から生徒が2人入ってくる気配がした。と同時に、右手に黒鍵を三本と左手にジャッカルを構え、学園長の机に飛び乗って、入ってきた生徒を睨み付ける。『戦いの旋律』を無詠唱で発動し、いつでも戦闘が開始できるように、油断無く2人の異形を睨み付けた。

スーツの下に隠している異形を感知するロザリオが、生徒が入ってきた瞬間に僕にしか聞き取れない警報を発したのだ。

「どういうことですか学園長！空き部屋くらいあるでしょうし、僕と相部屋でもいいじゃないですか！よりもよってこの2人なんてパリン君とは相性が悪すぎる！」

珍しく焦ったタカミチが、学園長に詰め寄ってつばを飛ばしながら怒鳴る。

入ってきた2人、いや異形は、武器を構えて殺気を振りまく僕に対抗するかのように、それぞれ長刀と拳銃を構えている。

「これこれ3人とも、武器をしまつて落ち着いてくれんかのう」

悪びれもせずぬけぬけと言いつつ爺に、本気で殺意が沸く。頭が沸騰しそうだ。

「黙れクソ異教徒。こつちが下手に出ればつけやがりやがつて、グダグダ抜かさず部屋を出せ！ヴァチカンとして、13課として、異形と同じ空間で寝泊りなど死んでもお断りだっ！」

「学園長、これはどういうことですかっ！いきなり呼び出されたか

と思えば武器を突きつけられ、拳句の果てにこの私を化け物などと……！」

化け物の片割れは顔を真つ赤にして激昂しているが、もう片方は落ち着いてこちらに拳銃を向けている。拳銃程度なら『戦いの旋律』の恩恵で何もしくなくてもはじけるが、駆逐すべき化け物に武器を突きつけられているという状況が我慢ならない。

「まあまあ、とりあえず双方とも武器をしまつて。ここで暴れたら一般人にまで魔法バレの可能性がある」

間に割って入ったタカミチのおかげで少し落ち着き、黒鍵とジャッカルを影の倉庫にしまふ。同時に、先方も武器を納めた。

学園長の机からは降り、それでも化け物どもを警戒して刀の間合いには近寄らない。

「で、どういうことだクソ爺？」

「どういうこともなにも、わしはパリン君と生徒に仲良くなってもらおうと思って……」

「化け物と仲良くする司祭がどこにいる、頭沸いてんのか？」

この状況においても、相変わらず学園長は不気味な笑顔を浮かべている。クソッ、忌々しい。

「さつきから、あなたどういふつもりですか！人のことを化け物呼ばわりして、そんなことが許されるとも——」

「黙れよ化け物。テメエらは半分は人間かもしれないが、半分は化け物だ。カトリック舐めんなよフリークス、人目が無かったらとつくに殺して燃やしてる」

刀を持っていた混じり物が何かをわめいているが、無視して学園長を問い詰める。

「本当に部屋は空いてないんだな？」

「う、うむ、じゃから、少し妥協してくれと——」

「それじゃあ、僕は空き部屋が用意できるまで今のビジネスホテルに泊まってますね。部屋が用意できたらご連絡ください。それではまた今度」

そう言い捨てて、窓ガラスを割って外に飛び出る。あと少し引き止められていれば、発作的にあの2人の化け物を殺していたかもしれない。

化け物や異教徒が絡まなければそれなりに紳士的に振舞えるのだが、どうにもスイッチが入ると汚い言葉が出てしまう。島原流を使つてると二重人格になるのかな、などと思いつつ、ホテルの部屋に戻り、宿泊期間を一週間延長した。宿泊費は学園長に請求すればいいし、手持ちは100万円ほどしかないが、ユーロを両替すれば総資産は2000万円ほどあるのだ。お金には困っていない。

部屋に戻るとスーツを脱ぎ、着慣れたカソック姿に戻る。上着の下に隠していた十字架も外に出し、どこへ出してもはずかしくない立派な神父の出来上がりだ。身長は気にしたら負けだと思ってる。

そういえば、麻帆良にもカトリックの教会があつたな、と思い出した。挨拶に行くのもいいだろう、と思い立ち、ヴァチカンの同僚に買い求めさせたイタリア土産のパスタの乾麺を片手に、教会を目指してホテルを出た。

そういえば原作でもシスターが登場していた気がする。赤松ワルドの登場人物ならそれなりに可愛いんだろうな、などと他愛もないことを考えつつ、緑豊かな学園都市を歩く。アリアドネーは石畳のお洒落な街ではあつたけど、自然豊かとはいいがたかつたから、麻帆良の空気はアリアドネーに比べてはるかに美味しい。

そういえば、この世界ではやはり聖職者は結婚が禁じられている。が、13課だけに伝わる抜け道として、「結婚はダメでも本契約は許される」というものがある。昔から最も死亡率の高い職場である13課では、同じ聖職者で裏の事情に通じている人間となら本契約を結んでもいいという決まりがあるらしく、13課の先輩たちの中にもパートナーと同棲している、という人は何人かいた。もつとも僕は本契約を結ぶ前に必ず上層部に相談しろと釘を刺されているから、自由な恋愛などできっこないわけだが。

30分ほど歩くと、教会は見つかった。学園都市は広がったが、そのためかところどころに詳細な地図が掲示されていたので、はじめて通る道でも迷わずにすんだのだ。異端狩りの出張では見知らぬ街を歩くのはいつものことだったし、地理を把握する能力は人より優れているという自負がある。

重厚な扉を押し開け、教会の中に入ると、突然女性の怒鳴り声が聞こえてきた。

「春日さん！あなたは一体、何度言えば分かるんですかつ！もう少し、淑女のたしなみというものをですね……」

中学生くらいと思われる日本人のシスターを叱りつけていた黒人のシスターは、扉を開けて入ってきた僕のほうを見て、説教をやめた。

「おや、見慣れない顔ですが、どこの教会の方でしょうか？」

一瞬で穏やかな顔に戻り、先程の怒鳴り声とは似てもつかない落ち着いた声で問いかけてきた。

「あ、どうも、僕はヴァチカンから来た、パリン・スプリングフィールドって言います。訳あってここで教師をやることになったので、ご挨拶をと思い……あ、これイタリア土産のパスタです。どうぞ召し上がってください」

心なしか早口になった。複数人の女性に正面から見つめられたことなんてほとんどないのだ、上がってしまったても仕方ないことだと思う。

「あら、法王庁と学園長から話は聞いてます。私はシャークティーと申します。私たちも魔法関係者ですから、何かあったらお気軽にご相談ください」

「……初等部のココネです……」

「麻帆良学園本校女子中等部、2-Aの春日美空です。ねえねえ、君何歳？先生やるって本当？」

「まあ、さっきもあれほど言ったのにあなたという人は、いいです

か春日さん、パリンさんも教師ですし立派な司祭様なんですから、もう少し礼儀正しく接しなさい」

「えっ、まだ子供なのに司祭？しかも先生？どんだけエリートなのよ……」

「スプリングフィールド司祭はかの英雄ナギ・スプリングフィールドの息子ですし、アリアドネー上級魔法学院の卒業者でもあります。遊んではっかりのあなたとは違って真面目なんですよ、春日さん？」

「えっ、アリアドネー上級魔法学院？」

ココネ、と名乗った黒人の小さなシスターが聞き返してきた。

「うげっ、魔法世界の出身か……」

春日、と名乗ったそのシスターはなぜかげんなりした顔をしている。

「ところで、そのアラモード？上級ナンタラって、頭いいの？」

「分かりやすいいえば東大レベルよ、春日さん。わかったらもつとちゃんとした話し方を……」

「いえいえ、別にいいですよそんなにかしこまらなくても。どんな学校を出たとしてもまだまだ子供ですし」

「でも13課の方にそんな失礼な口をきく訳には……」

「えっ、パリン君で13課なの？あの幻のイスカリオテ？うわー、13課ってほんとにあったんだね。サインくれない？サイン」

「春日さんっ！」

ほとんど絶叫といっても差し支えないような声量で、シスター・シャークティーが叱責した。

「まあまあ、シスター・シャークティ、そう怒らずに。シスター・春日、そんなに気になるならアドレスをお教えしますから、あまりシスター・シャークティに迷惑をかけてはいけませんよ」

「おっ、話が分かるじゃん。赤外線送ってー」

「これでいいかい？」

「はい、受信と。んじゃ、あとで空メール送るからよろしく」

シスター・シャークティが頭を抱えている隣で、アドレスを交換した。これでこの携帯に登録されたアドレスは4件目だ。

「それでは、私はそろそろお暇します。ご迷惑かけてすみませんでした」

「いえいえ、こちらこそお見苦しいところをお見せしてしまって。今週の日曜日にミサを行うので、よろしければ来てください。夏休みはいつもの神父様が実家に帰ってしまっているのです、できれば手伝っていただければ……」

「わかりました、手伝いましょう。では、また後日」

「はい、よろしくおねがいします」

そうやって教会の扉を押し開け、ホテルへと帰った。

12話（後書き）

次回はこの話のタカミチ視点です

12・5話（前書き）

少々短めですが、12話のタカミチ視点です。

12・5話

（タカミチ視点）

パリン君から麻帆良についたので、ホテルまで迎えに来てくれという旨のメールが届いたので、久々に友人に会えることを嬉しく思つて、彼が泊まっているというホテルまで急ぎ足で向かった。

彼は昔から大人びていて、賢いけど大人の事情には疎いネギ君とは違い、MMに縛られることを嫌つてアリアドネーに留学し、気が付いたら敬虔なクリスチャンになっていた。最初にあつたころはなんて冷たい目をした子供なのだろう、と思つたこともあつたが、今では彼が心よりどころを見つけられたことにとても安堵している。洗礼を受けてから、月に2〜3回は手紙を交換していたし、互いに上手く休暇が組み合わさったときは一緒に旅行したこともあつた。彼の話を書く限り、アリアドネー上級魔法学院ではいい先生・いい友人に恵まれているようだったし、親代わりのブランシー神父という人も、実際に会つたらとてもいい人だった。過去にどんな経験があつたのか知らないが、世の中の酸いも甘いも噛み分けたというような風格を持った、独特の人徳がある人だった。

おそらく、人間関係で言えばネギ君よりはるかに豊かな毎日を送っていたのだろう。ネギ君はパリン君がアリアドネーに留学して以来良い成績を取つて強い魔法を覚えること以外に興味を示さなくなつたし、ネカネやアーニヤといった以前からの知り合いとしか交流がなかったようなので、少し心配だ。二人について深く知らない第三者が見ればパリン君のほうがよっぽど歪んでいるのかもしれないが、僕はむしろその逆だと思つている。一見ネギ君は優等生で人当たりも良いが、しかし父親がかかわることになるとまるで周囲のこ

とが目に入らなくなるし、あのこの父親に対する執着は既に妄執と呼んでいいレベルのような気がする。まあ基本的にはいい子だし、最近は何んとも仲良くしたい、というようなことを相談してくるようになったから、昔に比べればだいぶ丸くなったのかもしれない。MMがネギ君に干渉するのはもはや僕ではとめられないので、せめて彼に降りかかる火の粉は身を挺してでも僕が払おうと決意している。

「やあ、2年ぶりだね。体が縮んでるみたいだけど、例の術式が成功したのかな？」

僕が指定されたホテルの前に到着すると、既にパリン君はそこにいた。最後にアリアドネーであったときよりもずいぶん背が縮んでいるので、パリン君のお師匠様とやらが試した魔法が成功したようだ。彼が全幅の信頼をおく人物なら心配はないだろうと思っていたが、やはりこうして安堵のため息が出てしまう。長いことMMの鎖につながれてきたおかげで、常に悪い想像をするのが習慣になってしまっているようだ。

「久しぶり、タカミチ。術式は成功して、すっかり頭脳は大人、体は子供さ。しかし、本当に麻帆良は広いね。タカミチに道案内を頼んでよかったよ、僕だけなら絶対に迷ってた」

そう言って、彼は快活に笑った。父親のナギにも、母親のアリカ姫にもにている顔つきだが、父親に勝るともおとらない美少年だ。本人は恋愛に興味がないらしいので、宝の持ち腐れというやつだろうか。

「ははは、まあ日本一の学園都市だからね。じゃあ、学園長室は女

子高エリアにあるから、案内するよ」

パリン君と並んで歩くのはおよそ一年ぶりだろうか。あのときよりはうぶんと背が縮んだが、強い意志の力を感じさせる赤い瞳は体が縮んでもかわらない。

学園長室の前に着くと、パリン君に先に入るように促す。

「はじめまして、パリン・スプリングフィールドです」

「おお、君がパリン君か。タカミチ君から話は聞いておる」

パリン君が学園長を見た瞬間、正確にはその後頭部を視認した瞬間、一瞬だが部屋に凄まじいまでの殺気が膨れ上がった。パリン君と一緒に旅をしていたときに悪魔の集団に襲撃されたことがあったが、そのときと同じ種類の殺気だ。パリン君が“バケモノ”にだけ見える、狂信を感じさせる殺気。おそらく、学園長の頭を見てエイリアンが何かだと勘違いしたのだろう。僕も初対面ときはぬらりひょんななかの仲間だと思ったから、パリン君のこの反応は予想していた。

一瞬だが殺気を受けたというのに、学園長はなんとも底の知れない笑みを浮かべている。MMの元老院議員がよく見せる、一見好印象を与えるがよく見ると嫌悪感を催す、爬虫類のような笑い方だ。隣に立っているパリンが嫌悪感をあらわしているのを見て、やはりな、と心の中で一人ごちる。

「教育実習の件ですが、数学教師をやることになっていると伺っています。辞令では2月から授業を担当することですが、当然、今数学を教えていらっしゃる先生の授業を見学させていただく機会は

ありますよね？」

敵意の満ちた声で、聞き様によつては恫喝と取れなくもないかのよ
うな抑揚で彼は学園長に詰問した。聞き方は多少問題があるかもし
れないが、彼の言つてること自体は正論だ。僕の勤める麻帆良学園
本校女子中等部でも、通常教育実習生を引き受けるときはそうして
いる。

「おお、そうじゃったな、忘れとつたわい。ところで、ネギ君はい
つ来るのか知つておるかな？」

学園長ともあるうが「忘れとつた」の一言で流すとは……パリン君
の殺気がちくちくと首筋を刺激する。そろそろ胃が痛くなりそうだ。
学園長からのストレスで胃を痛めた場合、労災は適用されるのだろ
うか。

「兄とは連絡を取つてないので存じ上げません。それより、宿泊施
設の件ですが」

「おお、今はちよつと空いてる部屋が無くてな、悪いが生徒の部屋
に住んでもらうことになる。桜咲君、龍宮君、入ってきてくれ」

パリン君が言いかけたところを、わざわざ遮つて自分の意見をこり
押しする学園長。って、この2人はいくらなんでもまずい！

「どういふことですか学園長！空き部屋くらいあるでしょうし、僕
と相部屋でもいいじゃないですか！よりもよつてこの2人なんて、
パリン君とは相性が悪すぎる！」

焦つて、学園長に向かって胸倉をつかみかねない勢いで詰め寄る。

横目で状況を確認すると、パリン君は一瞬で得物を取り出し、学園長の机の上で入ってきた2人に武器を向けていた。

入ってきた桜咲君と龍宮君は、武器を構えて殺気を振りまく彼に對抗するかのよう、それぞれ長刀と拳銃を構えている。

「これこれ3人とも、武器をしまつて落ち着いてくれんかのう」

悪びれもせずぬけぬけと言い放った学園長に、思わず居合い拳を打ち込みたくなった。

「黙れクソ異教徒。こつちが下手に出ればつけやがりやがつて、グダグダ抜かさず部屋を出せ！ヴァチカンとして、13課として、異形と同じ空間で寝泊りなど死んでもお断りだつ！」

ああ、パリン君がとうとうキレたか。こうなつてしまつては僕では止めることはできないので、桜咲君と龍宮君をいつでも守れるよう、さりげなく移動する。

「学園長、これはどういうことですかっ！いきなり呼び出されたかと思えば武器を突きつけられ、拳銃の果てにこの私を化け物など……！」

桜咲君が真っ赤にして激昂しているが、龍宮君は落ち着いてパリンに拳銃を向けている。パリン君の心配は全くしていないが、このまま学園長が事態を收拾しなければ最悪死人が出る。なので、いつでも咸卦法を発動できる状態で、2人の間に割つて入った。

「まあまあ、とりあえず双方とも武器をしまつて。ここで暴れたら一般人にまで魔法バレの可能性がある」

生徒二人はまだ警戒しているが、僕が間に入ったことでパリン君は少し落ち着いたようだ。

学園長の机からは降り、それでも2人どもを警戒して刀の間合いには近寄らない。

「で、どういうことだクソ爺？」

「どういうこともなにも、わしはパリン君と生徒に仲良くなってもらおうと思って……」

「化け物と仲良くする司祭がどこにいる、頭沸いてんのか？」

この状況においても、相変わらず学園長は不気味な笑顔を浮かべている。パリン君が極度にいらだっているのが手に取るように分かった。

「さつきから、あなたどういふつもりですか！人のことを化け物呼ばわりして、そんなことが許されるとでも——」

「黙れよ化け物。テメエらは半分は人間かもしれないが、半分は化け物だ。カトリック舐めんなよフリークス、人目が無かつたらとつくに殺して燃やしてる」

桜咲君が刀の柄に手をかけて抗議するも、パリン君は無視して学園長を問い詰める。

「本当に部屋は空いてないんだな？」

「う、うむ、じゃから、少し妥協してくれると――」

「それじゃあ、僕は空き部屋が用意できるまで今のビジネスホテルに泊まってますね。部屋が用意できたらご連絡ください。それではまた今度」

そう言っで、パリン君は腹いせ紛れに（と、少なくとも僕にはそう見えた）窓ガラスを割って、飛び去っていった。

「学園長、僕はこの2人を連れて帰ります。あまりおふざけが過ぎるようなら、僕だって怒りますよ」

そついい捨てて、学園長に背を向け、僕が担任する女生徒2人を外に連れ出す。

「高畑先生、さっきのはどういふことだい？魔眼で確認したら、彼は懷に十字架を忍ばせているようだったし、取り出した武器も祝福儀礼済み……まさか、13課なのかい？」

龍宮君は鋭い。魔眼持ちの彼女をごまかすのは無理だろうと判断して、本当のことを話すことにした。

「色々複雑な事情があつてね。彼の名前、パリン・スプリングフィールドって言うんだけど、ご想像の通り13課所属さ」

「スプリングフィールド？まさか、英雄の息子か」

「そついうことだ、龍宮君。だから、これ以上聞くと君の身が危険に晒されるかも知れ無いつののも、聡明な君なら分かるだろう？」

「……ああ、わかったさ先生。ちなみに、もしかして彼、私たちのクラスに来るって言う教育実習生だったりするのかい？」

「担当は数学だよ。まあ、職務に忠実なだけで根はいい子だよ。だから、君達もあまり彼を刺激するような真似はしないでくれ。多分、今の彼は本気を出した僕と同等か、それ以上の実力を持っている」

「あの、さっきからどういふことがよくわからないのですが――」

「あとで自室で説明するさ、刹那。とりあえず、あの子供には手を出さないほうがいいってことだ。多分、彼が13課なら私とお前の2人がかりで挑んでも返り討ちにされるのがオチだろう。とにかく、詳しいことは寮で説明する。ありがとうな、高畑先生。おかげで助かったよ」

「生徒を助けるのは当然のことじゃないか。じゃあ、あまり無理はしないようにね。また今度」

そう言って手を振り、僕は龍宮君たちと別れた。

12・5話（後書き）

評価・感想等いただけると嬉しいです

13話（前書き）

美空らぶ。

13話

結局、その日の夕方に学園長電話がかかってきて、女子高エリアの外に一軒家を用意するからそれまではホテル暮らしで我慢してくれ、と言われた。

夕方には小さくなった身体になれるために川辺で鍛錬を行い、有料のシャワールームを使って、それからホテルに帰った。

ホテルで出前を取り、今世では初めて食べる寿司の味に舌鼓を打つ。やはり、魚料理とはこうでなくてはいけない。懐かしい味を十分に堪能すると、侵入者感知のための13課直属工房謹製の結界石を置きに行く。この結界は侵入者を感知して術者に知らせるだけの結界だが、隠密性に関しては世界一と言っても差し支えないだろう。

影の使い魔に乗って、自身に認識阻害の教会魔法をかけてから、学園都市の外縁に沿って12個の結界石を設置する。ちなみに、この結界石はヴァチカンの工房と霊的なパスをつなげてあるらしく、魔力の維持に関しては心配ないとのことだ。

すべてを設置し終えるには2時間ほどだったが、設置し終えてから術式を発動させるとさっそく異形が探知された。ここから1km程離れた森に20体ほど反応がある。

影の倉庫から装備を取り出し、13課の制服でもある特殊な術式が施されたカソックを着る。影の使い魔に乗って5分ほどで現場に急行すると、森の中で化け物同士が殺し合っていた。よくみれば、片

方の勢力は昼間に学園長が連れてきた混じり物だ。

本音を言えばここで化物ともども葬ってしまいたいが、万が一でもバレル可能性がある以上、ここで殺すわけにはいかない。抹殺の優先順位は純粋な化物のほうが高いので、混じり物たちが少しずつだが化物を『還して』しまつてる現在、最善の手は混じり物を退却させ、残った鬼どもを『殺す』ことだろう。

さてどうするか、と使い魔の上に仁王立ちしながら戦場を見下ろし、状況を分析する。見たところ、優勢なのは外からの侵入者のようだ。銃使いは弾薬を切らしたようで格闘戦に移行しているし、刀使いも数に押されて苦戦している。

「混じりものに手を貸すのは癪だが、ただ化け物を送り還すだけつてのは我慢ならねえな……」

そう呟いて、影の使い魔を霧散させ、鬼に取り囲まれている二人の混じり物のそばに降り立つ。

「いい夜だな、化け物ども」

黒鍵はまだ使わない。手の内は隠して置いた方がいいし、最近実践で島原流を使うことがなかったし、身体が小さくなったから近接戦闘の勘を取り戻さなくてはならない。

「お前はっ——」

刀使いが鬼の攻撃をしのぎつつも、こちらに向けて殺気をとばして

くる。

「安心しろ、今日は加勢しにきただけだ」

そういつて、手近な化け物を斬り飛ばす。祝福儀礼済みの和泉守国貞によって真つ二つにされた鬼は、切断されたところから煙を噴き上げて蒸発した。

「何の用だい、13課？」

「俺が殺気を抑えられているうちにとつと逃げろ、混じり物。俺は13課としての、神罰の地上代行者としての役目を果たすだけだ」

そういつて、背後から襲ってきた2匹の鬼を横薙ぎに斬る。悲鳴を上げる間もなく、2匹は煙を上げて蒸発した。

「氣にくわないが、撤退させてもらおうとしよう。おい刹那、撤退するぞ！退路を作ってくれ！」

そろそろ集中力が切れてきたのか、刀を持った方の混じり物は体のところどころを鬼に斬られている。

「わかった、少し待ってる——神明流奥義、雷鳴剣！」

気を使った一閃によって化物が3匹ほど吹き飛ばされ、鬼たちの包囲網が一瞬だけ崩れる。その隙を付いて、2匹の混じり物は走って逃げていった。

「おい、追っぞ——」

「いや、化物。貴様はここで死ぬ」

そう言つて、ジャッカルを抜き、3回撃つ。リーダーらしき鬼は消し飛び、僕を包囲する鬼たちは警戒する素振りを見せる。

「化物同士が殺しあつてくれればなによりだが、これ以上お前達を『還されては』かなわん。貴様らは還るのではなく、ここで『死ぬ』のだ。AMEN！」

神への祈りを叫び、全力で6本の黒鍵を投擲する。岩をも貫く威力で投擲された黒鍵は、一撃で鬼を粉碎し、その後ろの鬼までも『殺す』。

一撃で包囲網の半分を削った僕は、身体能力を生かして木の上を駆け上り、詠唱を開始する。

「来たれ黒の月、女王の息子。暗黒の怪物よ、わが敵を滅ぼせ。『闇の奔流』」

魔法の発動媒体としての黒鍵を掲げ、それを振り下ろす。と、鬼の足元から具現化した『水』の性質を与えられた闇が溢れ出し、局地的な津波となつて鬼を押し流す。祝福によつて退魔の力を授けられた『闇』に飲み込まれた鬼は、その全員が祝福によつて灼き尽くされ、塵も残さずに死んだ。

闇の具現化を解除すると、まるでゲリラ豪雨にでもあつたかのような森の中は、嘘のように乾いていた。『闇の奔流』によつて倒れた木々はあるものの、混じり物が退却するときに発生した雷で発生していた森林火災を防げたので、結果オーライだ。

タカミチに事情を説明するメールを送り、後始末を頼む。僕はまだ正式な警備員ではないので、こんなことをしてかしたと知られたくはないのだ。ついでに、混じり物2匹への口止めも頼んでおく。

久々にいい仕事のできたので、上機嫌で鼻歌を歌いながら影の使い間に飛び乗り、ホテルまで帰った。今歌っているのは『アヴェ・マリア』。初仕事のときに先輩が歌っていたもので、これも思い入れの深い曲だ。

ホテルに帰り着いて本を読んでいると、タカミチからメールが入った。

混じり物2匹が学園長ににこのことを報告していたらしく、口止めは間に合わなかったらしい。それで、事情の説明をしてもらいたいの、今から学園長室に来て欲しいとのことだ。

「今何時だと思っているんだ……仕方がない、行くか」

そう呟いて、カソツクのまま外へ出て、学園長室へと向かう。

学園長質につき、扉をノックすると中から学園長の声がした。

「入ってくれい」

部屋に入ると、混じり物2匹が学園長の後ろに控えている。仕事上がりで機嫌が良かったので、殺気を抑えて、比較的穏やかな気分を維持できた。

「それで、どういったご用件でしょうか」

「うむ、大体のことはタカミチ君や龍宮君から聞いておるがのう、君からも事情を聞いておきたいのじゃ」

結界に関しては、話さない方が賢明だろう。それに関して伏せて、都合のいい情報だけを教えることにする。

「学園の地理を把握しておこうと使い魔に乗って学園上空から全体を見回していたら、なにやら化物の気配がしたので、現場に駆けつけ、苦戦してるその2匹に替わって化物を『殺した』。それだけのことですが」

「……報告では、周りの木々にかなりの被害が出ていたという話じやが、何をしたのかね？」

「そのこの混じり物が撤退するときに雷なんか使ったものですから、山火事になる一歩手前だったんです。化物退治がてら、魔法を使って鎮火しました。何か問題が？」

「いや、それなら結構じゃ。ところでパリン君、君はこの学園の警備員をする気はないかね？」

「願ってもない話です。ぜひおねがいします」

何らかの策謀である可能性も捨てきれないが、そんなことはどうでもいい。僕にとっては、化物を『殺せる』ということが至上の喜びなのだ。

「条件としては、関東魔法教会には所属したくないので、純粋な契

約という形で警備員の仕事をさせてもらうことと、仕事は基本的に学園への侵入者への対応だけに限ること、この2つです。あと、仕事外でも化物を自由に討伐していいという許可をください」

警備員にかこつけてMMに絡み取られては元も子もないし、純粋に化物退治をいただけないので、たとえば学園長の孫の護衛などといったことは請け負うつもりがなかった。

「……うむ、それでいいじやろう。では、明日の夜、深夜0時に世界中広場前に来てくれたまえ。同僚にも紹介せねばなんのでのう」

「わかりました、それではさようなら」

そろそろ混じり物と一緒にいるのも辛くなってきたので、早々にホテルへと帰る。

自室に戻ると、携帯電話を取り出し、ヴァチカンの上司へと電話をかけ、今回の件を報告する。

『……わかった、活動を許可しよう。念のため、あまり妙なことはするなと、MMに伝えておく。ご苦労だったな』

「ありがとうございます」

『では、スプリングフィールド司祭の健闘を祈る』

電話を切ると、どっと疲れが押し寄せてきた。

「今日はもう、寝るか……」

カソックを脱いで畳み、寝巻きを着てベッドに入る。10歳の体には、ビジネスホテルのベッドは少し大きい。

ベッドに入って数秒もしないうちに、僕の意識は沈んでいった……

翌朝、起きると携帯電話にメールが一件、来ていた。

タカミチからかな、と思つて携帯を開くと、なんと差出人は先日アドレスを交換したばかりのシスター・春日だった。

何でも、シスター・シャークティが僕と話がしたいそうなので、教会に来てくれないか、とのこと。時刻はとわないとのことなので、することもない僕はいそいそとカソックに着替え、教会へと向かった。

教会の扉を押し開け、中に入るとシスター・シャークティが出迎えてくれた。

「どうもすいません、わざわざ呼びつけたりして。本当はこちらから出向ければよかつたんですが、お客さんが来るかもしれなかったの……」

「いえいえ、お気になさらず。それで、相談したいこととはなんでしょうか？」

「学園長先生から聞きましたが、スプリングフィールド司祭は今日から学園の警備員も務めるそうですね？」

「ええ、そういうことになっています」

「そこでお願いなのですが、ミソラを預かっていただきたいのです。以前から扱いにはほとほと困っておりまして、私では対処しきれないと学園長に相談していたのです。中々いい解決策は見つかりませんでした。今日の朝学園長から連絡が入りまして、貴方にミソラを預かってもらいなさい、とアドバイスされたのです。迷惑かもしれませんが、どうかミソラを預かって欲しいのです」

ふむ、と考え込む。個人的にはシスター・春日は嫌いではないし、弟子を取るデメリットもない。彼女はあまり魔法が好きでないようだが、信仰心そのものは結構なものだろう。運動神経もいいうたし、弟子としてはいい素質を持っている。問題は性格面だが……

「僕はいいですが、本人に相談はされたんですか？」

「ええ、話をもちかけたら二つ返事で承諾しましたわ。多分、13課のことなんてほとんど知らないんでしょうね。家の事情もあって彼女にはいずれ力が必要な時が来ます。司祭様、どうかあの娘に、最低限でもいいので力を付けさせてやってくださいませ」

そういつて、シスター・シャークティは深々と頭を下げた。

「顔を上げてください、シスター・シャークティ。隣人を助けるのは、われわれの務め。むしろ、シスターのお役に立てて嬉しく思っています」

「まあ、ありがとうございます、司祭様。それでは、あの娘のことをよろしく願います」

そういつて、シスターはまた頭を下げた。

「確かに、引き受けました」

しっかりと頷いて、了解の意を示す。

そして、僕は教会を立ち去った。

13話（後書き）

評価・感想などお待ちしております

14話（前書き）

P Cの液晶が割れました。

14話

その日の夜、僕は指定された時間に世界中前の広場へと来ていた。5分前には来たのだが、僕が到着したときには既にほとんどの魔法生徒・魔法先生が集まっているようだった。目だたないように、カソックの上からマントを羽織り、フードで顔を隠して適当な場所に佇む。

「おほん。今日集まってもらったのは他でもない、新しい警備員を紹介するためじゃ」

時間になると、学園町は広場の中央に進み出て宣言した。

「スプリングフィールド君、出てきておくれ」

学園町がこちらを向いてそう言ったので、僕はフードを脱ぎ、いささか緊張しながら広場の中央に進み出た。

「諸君はもう知っていることだと思うが、この度サウザンドマスタ一の息子であるパリン君とネギ君を麻帆良に教育実習生として迎えることとなった。パリン先生はネギ先生より一足先に日本へ来てくれたので、先に紹介することになった。パリン君、自己紹介を」

「パリン・スプリングフィールドです。先日アリアドネー上級魔法学院を卒業し、同時にメルディアナ魔法学校も卒業しました。卒業試験の一環として、ここ麻帆良で教師として働くのが卒業課題です。未熟者ですが、よろしくおねがいします」

緊張しながら、かまないように注意してゆっくりと話す。いつまで

たつても、大勢の前で話するのは苦手だ。

僕の自己紹介を聞いて、大体の魔法先生・魔法生徒は「あの英雄の息子か」などと小さな声でささやき合っている。僕がヴァチカンに所属していることは政治に関係する人間以外にはあまり知られていないし、そもそも表面上ヴァチカンとMMは友好的なので、タカミチや学園長くらいしか、僕を取り巻く政治的事情について知る者はいない。

「パリン君の実力についてはタカミチ君からお墨付を貰っておる。昨今は警備のための人員も不足しておるので、パリン君には警備員としての仕事も請け負ってもらうことに相成った。修行としての意味合いもある、とのことじゃから、彼はシフトに入っていないなくても警備を請け負ってくれるそうじゃ。皆もよろしく頼む」

学園長がそう言うと同時に、何人かの魔法先生が抗議の声を上げた。

「学園長！いかにアリアドネー上級魔法学院卒業とはいえ、彼はまだ子供ではないですか！」

「そうですよ学園長！もし彼に何かあつてからでは遅いんです！」

「いくら実力があつても、子供に務まる仕事ではありません！」

声を上げたのは、比較的若い先生たちが中心だった。それなりに経験のありそうな先生方は、タカミチのお墨付ということで信頼しているのか、それとも上級魔法学院の名前が効いているのか、特に抗議の声を上げたりはしなかった。彼らは魔法生徒を引き連れているし、子供を戦わせているということの後ろめたさから黙っているのかもしれない。

「やめておきなさい、彼自身が希望していることです。それにかの

英雄の息子なんです、遅かれ早かれ厄介ごとには巻き込まれるでしょう」

「しかし、刀子先生！」

「安心してください、少なくともこの子供先生は、あなた方が束になつてかかってもかなわないだろうと思います。実力的には問題はないでしょう」

手を上げて若い先生を制したのは、刀子先生とよばれた若い女の先生だった。

「パリン先生、申し訳ないけど私と少し手合わせしてくれませんか？それくらいしないと、あの人達は分かりそうにないので」

僕の傍まで近づいてきた刀子先生は、かろつじて聞き取れるくらいの声でそう言った。特に異議はないし、神鳴流と手合わせしたのは数えるほどしかないのだ。修学旅行のことを考えると、ここで刀子先生と手合わせするのは悪いことではない。

「わかりました、お受けしましょう」

「悪いですね、今度何かおこります」

そう言つてウィンクすると、刀子先生はまだ声を張り上げている若い先生方へと怒鳴った。

「じゃあ、私がこの子と手合わせするので、見ていてください！」

叫んでから、刀子先生は腰に刺していた長刀の柄に手をかけた。

「うむ、パリン君の実力を披露するいい機会じゃ、わしが審判を務めようぞ。では両者、構えい！」

学園長がしゃりり出て仕切っているのが少し気に障るが、影の倉庫から和泉守国貞を取り出し、構える。

数年の研鑽と実戦での研究によって、預かり物の力でしかなかった島原流に独自のアレンジを加え、磨いてきた剣術にはそれなりに自信がある。真っ向から自分の剣技を試したいので、今回は魔法は身体強化以外つかわないつもりだった。

「では、始め！」

学園長がそう叫ぶと同時に、刀子先生が『瞬動』で一気に距離をつめてくる。勢いをつけて繰り出された一撃を左手で握った鞘で受け流し、その勢いを利用して後ろに飛び下がった彼女めがけて鉄甲作用を付与して鞘を投擲する。

刀子先生は飛んでくる鞘を刀の峰で弾こうとしたが、鉄甲作用によって通常の何倍もの威力を持った鞘によって刀を弾かれそうになり、慌てて気を使って体制を整えた。

「今のはなんなんですか、ずいぶん重い一撃ですね」

「企業秘密、ですっ！」

警戒したかのようにこちらを注視してくる刀子先生に向かって、距離をつめて下段から斬り上げる。易々と防がれたが、そのまま連続して右籠手、首筋、脇腹と素早く斬りつけていく。反撃の隙を与えず、威力より手数重視で斬り付けることによって、相手の動揺を誘う。

しかしそこはプロ、徐々に追い詰められながらも冷静に戦況を分析し、正確に刀を振るっている。劣勢に追い込まれながらも冷静さを失わない強靱なメンタルは、僕にはないものだ。

数合ほど打ち合い、距離をとる。剣の技量ではこちらが上だが、体格差や実戦経験の差はかなりある。短期決戦で決着をつけないと、こちらは不利になるだけだ。

刀子先生は長刀を逆八双に構え、待ちの構えに入っている。睨み合いに持ち込んで精神力を削ろうという考えだろうが——しかし、僕の得意とする間合いは中距離。袖口から三本の棒手裏剣を取り出し、投擲するとともに刀子先生めがけて距離を詰めた。

「神鳴流奥義——うぐっ」

棒手裏剣を交わしたところで、反撃とばかりに奥義を発動させようとする。が、既に間合いをつめていた僕は、起死回生の一手を打とうと息を吸い込んだ刀子さんの脇腹に、峰打ちを叩き込む。刀子先生は後方に10mほど吹き飛び、世界樹の幹に叩きつけられた。

神鳴流の大きな欠点の一つは、技を発動させるためには毎回技名を叫ばなくてはいけないことだ。気を用いる関係上か、言霊をもちい

ないと極端に威力が下がるので、隙を作るとわかっててもどうしようもないのだ。それに、神明流を知っている相手と戦うときには、その弱点は圧倒的な不利をもたらす。隙を作ったうえに手の内を大声で宣言するのだから、相手にとってやりやすいことこの上ないだろう。

「参りました、どうやら私の負けのようです」

しばらくしてから立ち上がり、鞘に収めた刀を杖にして歩いてきた刀子先生はそう言った。周りは、思っていた以上にハイレベルな剣戟を前にして、皆呆けた顔をしている。

「では皆の者、改めて問おう。パリン・スプリングフィールド君が実力不足だと思うものは手を挙げい」

学園長が皆を睥睨してそういうと、今度は誰も抗議をしてこなかった。

「では、この場においてパリン・スプリングフィールド君を正式にこの学園の警備員とすることにする。では、今日はこれにて解散じゃ！」

学園長がそう宣言すると、呆けたような顔をしていた魔法先生・魔法生徒たちはようやく顔を引き締め、それぞれが自分の住居へと帰っていった。

僕もホテルの自室に帰ろうと、刀を影の倉庫にしまって身なりを整

え、歩き出す。が、数人の魔法先生とタカミチが後ろから声をかけてきたので、振り向いた。

「やあ、パリン君。またずいぶんと腕を上げたようだね」

「こんばんは、タカミチ。まあ、鍛錬は趣味だからね。継続は力なり、っていうことだよ。ところで、後ろのお2人は魔法先生ですか？」

タカミチの後ろに立っている強面でサングラスをかけた男性と、細面で柔らかな表情の男性に声をかける。

「魔法先生をやっている神多羅木だ。先程の戦いは見事だった」

「同じく、明石です。大学部で教授をやってます」

「パリン・スプリングフィールドです。若輩者ですので至らない点多々あるでしょうが、よろしくおねがいします」

お互いに会釈して、自己紹介をする。

「パリン君はアリアドネー上級魔法学院の卒業者なんだって？その年であそこを卒業なんて凄いじゃないか。そのわりに刀子先生との戦いでは魔法を使ってなかったけど、治療系なのかい？」

「いえ、得意なのは影属性と闇属性です。ただ、どっちも殺傷能力が高すぎるので使えなかったといえますか……」

明石教授が尋ねてきたので、丁寧に答える。

魔法を使わなかったのはちょっとした意地のようなものだったが、実際に対人で使うには殺傷力が高すぎるので使用は控えている。異教徒相手ならためらいはしないが、マジエーレ師に教えてもらった魔法は単なる腕試しに使うには洒落にならない凶悪な呪文が多すぎるのだ。かといって、影の使い魔は銃器の使用を前提に術式を自分なりに書き換えているからやっぱりつかえない。神明流に飛び道具はきかないと言うが、音速を超えて飛来する劣化ウラン弾の雨を捌ききれるとはとてもじゃないが思えないのだ。

「となると、普段は魔法剣士タイプなのか？」

「うーん、特に戦闘タイプは決めてないですね。遠距離から銃や魔法で攻めることもできますし、近距離で剣や格闘もこなせますし。投擲武器を使った戦法が一番得意なので、一定の距離を維持しながら、相手によって戦法を変えています」

神多羅木先生が尋ねてくる。

そう、僕はまだ自分の戦闘スタイルを確立させていない。基本的にどんな闘い方もできる上、器用貧乏を通り越して万能に至ってるので、戦法を固定するよりは変幻自在に戦法を変えて戦うことで相手を翻弄する戦法こそ最も効率的な戦法なのだ。もっとも、大抵の相手はそんな策を使うまでもなく打ち倒せるのだが。

「その年でそこまでの境地に達しているとは……タカミチ君からよく聞いていたが、実際に目の当たりにするとやはり凄いものだな」

「いえいえ、技術はあってもまだまだ経験が足りませんから。だから、実戦経験をたっぷり積める警備の仕事は僕にとっても都合がい

いのです」

「そういつてくれると助かるよ。最近、タカミチも出張が多くて学園の警備は手薄だからな。子供を戦わせるのは私の信条に反するが……君の場合はどれだけ実力があっても足りないくらいだろう、がんばってくれ」

確かに、英雄の息子ということもあって様々な人間から恨まれていて僕には、降りかかる火の粉を払えるだけの実力が必要だ。個人からの恨みだけではなく、犯罪組織や武器商人などからも恨みを買っているので、実力があるに越したことはない。

「ありがとうございます。では、今日はこれで失礼させていただきます」

「じゃあパリン君、今度は僕とも手合わせしようか。それじゃ、また今度」

「タカミチと戦えるならいつでも大歓迎だよ。じゃ、また今度」

手を振って、3人の先生と別れる。短い会話だったが、2人ともいい人そうなのでこれから仲良くできればな、と思う。神多羅木先生は少し怖い外見だったが、話してみると中々気さくな先生だったのが好印象だった。

その日は、ホテルに帰って風呂に入ってから寝巻きに着替え、そのままベッドに潜って寝てしまった。本を読もうと思っていたが、子供の体なので夜更かしは辛いものがあるのだ。

ベッドに入ると、1分もしないうちに僕は意識を失った。

14話（後書き）

神多羅木先生はかつこいい。

15話

魔法先生たちとの顔合わせの翌日、僕は影の倉庫からブランシー神父に貰った武器を取り出して、悩んでいた。

シスター・シャークティに春日君のことを任されたはいいものの、
どういう風に育てるべきか迷っているのだ。

あの娘の両親はマギステル・マギとその従者だということで、僕の父親ほどではないがそこそこ恨みも買っているらしい。両親の意向で、せめて身を守るだけの力を付けさせようと麻帆良に放り込まれたらしいが、その本人がいまいち強くなりたがらないのだ。

せめて得物だけでも渡そうと、13課の先輩たちが遺した様々な武器を手にとってあれこれと思索している。

運動神経はいいようだが、接近戦を好むタイプにも見えない。かといって攻撃魔法が得意かといえばそうでもない。悩ましいところだが、それでもいくつか案はある。

1時間ほど悩んだ末、出した結論は『弓がいい』ということだった。

ブランシー神父がくれた武器の中にあつた、魔法の弓。信徒以外が触ると手が焼け爛れるほどの聖性を備えているが、反面信徒が扱えば魔力を消費せずに矢を射ることができる。使い手のイメージしただいで長弓・短弓、洋弓・和弓などどんな弓にも変化できることと、セットで扱う魔法の矢筒からは魔法の付与された矢を無限に取り出

せるのが売りだ。

魔法の矢はそのまま扱ってもかなりの威力が出るが、教会魔法によるエンチャントによって更に強化することができる。シスター・シヤークティに渡された春日君のデータには、教会魔法はエンチャント系が得意、と記載されていたから、上手く使いこなせばそれなりの戦力になるはずだ。

そうと決まれば善は急げと、彼女にメールして教会に呼び出す。協会の地下室を借りて、簡単な稽古もするつもりなのだ。

しばらくして春日君から返信が入り、あと5分もすればそっちに着くよー、とメールが来た。どうも先生として見られていない節があるが、子供の外見では仕方ないのか。

「どうもー、パリン君おひさー」

陽気な声をあげ、教会へと入ってきた。

「やあ、春日君。シスター・シヤークティから事情は聞いてる？」

「うん、聞いてるよ。パリン君が私の指導してくれるんだってねー、シスター・シヤークティのお説教には辟易してたから助かったよ」

春日君の言葉を聴いたシスター・シヤークティがこちらを凄い形相でにらんでいるが、春日君は気付いた様子がない。

「……まあ、そういうことさ。今日はとりあえず、君に手っ取り早く成長してもらうための下準備、つてところかな。2時間もあれば済むから、地下室についてきてくれない？」

「オーケーオーケー、シスター・シャークティの4時間耐久お説教に比べたら2時間くらい屁でもないっすよー」

のんきに頭の後ろで腕を組んで、嬉しそうに笑いながら付いて来る。なんともお気楽なことだと思いながら、地下室の扉を開けた。

そこそこに広い地下室は、今は隅々まで魔方陣と魔術文字で埋め尽くされていた。苦手な幻術系魔法を発動させるために、4時間もかけて準備した訓練用の魔法である。

「せんせー、この見るからに魔法ちつくな模様はなんでしょうかー」

「この魔法陣に魔力を流し込むと、部屋の中にいる人間を強制的に幻術空間へと転移させることができるんだ。それだけなら珍しくもなんともないけど、しかしこの魔方陣にはなんと、幻術空間内での時間の流れを、現実世界の72倍の速度にする効果がある。まあ、いわゆる『別荘』のようなものだと思うってくれ。もともと、アレとは違って肉体はもちこめないから、訓練できるのは魔法とか精神力、武器の扱いだけなんだけどねー」

話している間に扉を開けて逃げようとした春日君を、無詠唱の影魔法で捕らえ、引きずり戻す。

「人の話は最後まで聞きこうか、春日君。では、この4日間でいたい基礎を叩き込むつもりだから、覚悟してね」

そう言って、地下室の扉を閉め、魔法陣に魔力を流し込んで魔法を発動させる。どんどん周りの風景が溶けていき、代わりに僕がイメ

ージしたとおりの、アリアドネー上級魔法学院の訓練場の風景が見えてきた。

幻術空間が完全に作動したのを確認すると、訓練場の床に膝を着いてがつくりとうなだれてる春日君に向き直る。

「せんせー、さすがにこれはひどいっすよー、私は普通にサボって過ごせばそれでいいのに……」

「まあ、悪いようにはしないさ。それに、強くなればなるほど、お金も稼げるようになる。だったら、大学にいくまでは我慢してお金を貯めて、大学に入ってから貯めたお金でたつぷりと遊べばいいじゃないか」

「でも私面倒なこと好きじゃないし」

「ま、今日のところは本当に初步の修行しかしないからさ、騙されたと思ってやってみなよ」

そう言っ、影の倉庫から『手袋』を取り出す。

「この魔法具は殉職した13課の先輩が使っていたモノで、アーティファクトと同じように『アダアット』と唱えると弓と矢筒が現れる仕様になってる。弓に関しては、自分がイメージしたとおりの弓が出るようになってるから、和弓・洋弓どんなものでも出してくれ。剣とか槍の訓練は痛いけど、弓ならそれほど痛い思いはせずに済むしさ、ちよつと使ってみてよ」

そう言っ、手袋を渡す。

手袋を渡された春日君はというと、なぜかとても感激した顔で手袋を手にとって、こちらを見つめて質問してきた。

「パリン君、この手袋、どんな弓でも出せるって本当？」

「うん、一応本人のイメージがちゃんとできてるなら大丈夫だけど……どうかしたの？」

「いやいや、それなら『闇夜弓【影縫】』とか、『龍木ノ古弓【日神】』とかも作れるわけだね！すごいじゃない、ありがたくもらいます！」

そう言つて、春日君は早速手袋をはめ、呪文を唱えた。

「アデアット！」

呪文を唱えると、左手には黒い羽のような飾りがついた弓が、右手には背中に回せるようベルトが取り付けられた矢筒が出現した。

「わお、これはすごい！ちょっとやる気出てきたわ、ありがとう先生！」

突然、テンションが上がり始めた春日君に戸惑いながら、質問する。

「さっきからそんなに興奮してどうしたの？それに、その弓は……？」

「え、先生つてもしかしてモンハン知らないの？」

問いかけると、意外、という風に聞き返された。

「もんはん？」

「モンスターハンター、って言うゲームなんだけど、まあ外国から来たなら知らないか……とにかく面白いゲームで、私はそのゲームで弓を使ってるの。だから、この手袋ならゲームで使ってる弓も再現できるかなー、なんて」

さっきまでとは打って変わって、本当に機嫌がよさそうだ。

「それならちょうどいいや。1週間後から学園の警備に参加してもらうから、それまでになんとか弓を扱えるようにできる？」

「私はやるときはやる女つすよ、できるに決まってるじゃないですか！これ、魔力は使わないんすよね？」

「基本的に魔力は使わないよ。普通の魔法での強化はできないけど、教会魔法のエンチャントは付与できるから、少し工夫してみるといいかもね。あと、弓の威力はどんな形を取ってるかにもよるけど、基本的に普通の魔法使いの障壁程度なら抜けるみたいだから、ちゃんとコントロールできるように頑張ってね？」

「わかったよパリン君。じゃ、早速はじめちゃっていいかな？」

「僕はそこで魔法の練習でもしてるから、何か問題が起きたら言ってくれ。ちなみに、ここは幻術空間だから飲み食いとかトイレはいらないよ」

「りょーかいりょーかい。ではでは、この4日で弓の扱いをマスターしてやりますよー!」

そう言つて、春日君は弓を担いで、さつそく矢を番えて練習を始めた。

僕は影の倉庫から魔法書を取り出し、魔術文字を使った武器の加工について読み始めた。

適当に休憩を挟みながら4日が過ぎ、幻術空間は解除された。部屋に戻ると、4時間もかけて準備した魔方陣と魔術文字はすっかり消えている。が、腕時計を見ればまだ現実世界では2時間しかたっていないことが確認できた。

「いやー、すっかりハマっちゃったよ先生。弓つて楽しいじゃない」

春日君は、そう言つてニコニコと笑っている。幻術空間で4日も過ごしたのだから少しは疲れていてもおかしくないはずなのに、元気一杯、といった感じの笑顔だ。

「そうか、それじゃあコレを渡しておくから、これからは肌身離さずに持ち歩くように」

そう言つて、懷から『手袋』を取り出し、渡す。

「そういえばアソコで使ってた手袋は幻術だったんだっけ。ま、ありがたくもらうときます」

そう言つて、機嫌よさげにニヤニヤしながら、彼女は手袋を懐にしまった。

「よつぽど気に入ったみたいだね、その手袋」

「そりゃあ、ゲームの武器が再現できるなら誰でも夢中になりますつて。性能はあまり反映されないみたいだけど、楽しいじゃないすか！」

「まあ、本人がそう思うならいいんだけど……」

そんなくだらない会話をしながら、地下室を出る。

まあ、一番の難関だった本人のモチベーションという問題があつさり解決したのは喜ばしいことなのだろう。そう思つては見るものの、やはりどこか釈然としない気持ちがあつた。シスター・シャークテイの心のこもった話より、ゲームのほうが影響が大きいというのはどうなのだろうか。

「それじゃ、明後日の、同じ時間に来れる？」

「うん、夏休み中は陸上部は自由参加だから、基本的に時間はいつでも作れるっすよ」

「じゃ、また明後日」

「はい、りょーかい」

敬礼の真似事をする春日君に手を振って、ホテルの自室へと帰る。
明後日までに、また教会の地下室にこもって魔方陣と魔法文字を準備しなくてはならないようだ。

ホテルのフロントに鍵を取りに行くと、イギリスからのエアメールが届いています、といって手紙を受け取った。

部屋に戻り、開封してみると、手紙はネカネ姉さんからだった。
幻術系の魔法を応用した、本人の立体画像が出てきて話しかけてくるといふ、最近出回るようになった便箋だ。早速手にとって、魔法を発動させる。

姉さんからの手紙は、姉さんの近況報告や僕に対する心配、ネギのこと、アーニヤのこと、等等結構長かった。30分以上しゃべり続ける姉さんの幻影に、よくもまあこれだけ話すことがあるな、なんて妙な感心をしつつ、暖かい気持ちで姉さんの声に聞き入る。

変わったことといえば、ネギが僕と仲直りしたがつてるから、ネギが日本に行ったときには仲良くして頂戴、といわれたことだった。てつきり、僕はネギに嫌われているものと思っていたので、意外に思って目を見開いた。

『あの子も、色々あるみたいだから……きっと、周りの期待が重いの頼れる人がいないから、寂しいんじゃないかしら。アーニヤもいるけど、やっぱりネギも男の子だし。だから、兄弟のパリンと仲良くしたいんじゃない？本当は私が傍にいてあげたいのだけど…』

…』

そう言つて、ネカネ姉さんの幻影は唇をかねて俯いた。弟分の悩みを解決して上げられない自分がゆるせないのだろう。なんでも自分のせいにしてしまうその気質は、どこかネギと似通っている。

「わかつたよ、姉さん。姉さんの頼みなら、断るのもなんだしね」

遠いウェールズの地にいるネカネ姉さんにはとどかないと分かっているが、それでも目の前で俯いてる姉さんの幻影を慰めようと、了承の意を示した。

ネカネ姉さんは、おそらくこの世界で僕が守るべき数少ない人のうちの一人だ。ブランシー神父は老いたとはいえまだまだ強いし、マジエーレ師には散々お世話になったけど、あの人は世界を敵に回しても問題ないほどの力を持っているから心配することはなにもない。守るべき人といえば、ネカネ姉さんと春日君くらいだろう。

僕が庇護し、導くにはネギは幼すぎるし、MMがそんなことはみとめないだろう。だが、兄弟として互いに切磋琢磨するくらいのことなら、僕にもできるかもしれない。

「まあ、原作の初期はうる覚えだけどずいぶん酷かった記憶があるから……軌道修正は、必要な」

ベッドに横たわって、そう独りごちる。当面の大きな目標はスクナの完全な討伐だが、1人の魔法関係者としては魔法がバレることや、一般人を危険に巻き込むことだけは避けなければいけない。

決意を新たにして、目を閉じると、僕の意識はすぐに闇に落ちていった。

15話（後書き）

ネカネ姉さんマジ聖母

16話（前書き）

主人公の思わぬ弱点がついに公開

16話

「スプリングフィールド司祭！貴方は一体何を考えているのですか！」

学園長が家を用意してくれてから5日後、僕の家にはシスター・シャークティの怒声が響き渡った。

「一体どうしたんですか、シスター。落ち着いてください」

「これが落ち着いていられますか！いいですか、貴方はまだ10歳なのです！ですから、外食とカップラーメンだけの食生活なんて言語道断です！」

「こればかりはシスター・シャークティの言うとおりだね……」

「……」

春日君とココネ君が、呆れたような目で僕を見下ろす。

事の発端は昨日。春日君と組んでの初任務を成功させ、打ち上げと称して回転寿司に行ったときのこと。シスター・シャークティと春日君、ココネ君、僕の4人で回転寿司を食べに行ったのだが、その時にふと喋ってしまったのがまずかった。

何を隠そう、僕は料理が全くできないのだ。

故郷の村にいたときはアーニヤのおかあさんがご飯を作ってくれたし、アリアドネーにいたころは教会でご飯が出た。アリアドネーでのお昼はとんかつ屋で食べていたし、こちらへ来てからすぐのころは、ホテルのレストランで食事を取ることがほとんどだった。

ろくな料理スキルもないまま一軒家での一人暮らしを始めた僕は、当然のことながら自炊なんてするわけがない。毎回外食しているとすぐに舌が肥えてしまうから、朝はカップラーメンですませていたのだが、これがまずかった。

翌日、ミサを手伝ってもらおうと僕のところを訪ねた3人のシスターに台所の惨状を知られてしまい、こうして正座させられてお説教をされているわけである。

「せめて、お願いですからちゃんと野菜を取ってください！最後に野菜を食べたのはいつだか、覚えていますか！？」

「ええと、確か3日前にタカミチと明石教授、ガンドルフィーニ先生と一緒に焼肉に行つて、そのときに野菜サラダを……」

「いいかげんにしてください！！」

シスター・シャークティが吼えた。

「いいですか、これからはきちんと野菜を取つて、くれぐれもカップラーメンなど食べないように！わかりましたか！」

「はい……」

「なんですかその返事は！」

「すみません……」

正直、あまり気乗りがしない。自分は魚や肉を食いに日本に来たのであって、断じて野菜を食べるために日本に来たのではないのだ。しかし、目の前のシスター・シャークティには逆らえる気がしなかった。

「では、時間がないのでこの続きはまた後にしましょう。それよりも、今はミサの準備です。早く来てください」

そう言つて、シスター・シャークティはずんずんと大股に歩き去っていく。春日君とココネ君は呆れたような顔をしながら、早足でシスターの後を着いていった。

僕もあわててカソックを整え、戸締りを確認して家を出る。

教会について、準備をすませ、もろもろの確認をしてから、ミサが始まった。

「……父と子と、聖霊の御名によって」

『アーメン』

「主、イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、皆様とともにありますように」

『また、司祭とともに』

「皆さん、私たちの罪を思い、感謝の祭儀を祝う前に、心を改めましょう……」

「全能の神と、」

『兄弟の皆さんに告白します。わたしは、思い、言葉、行い、怠りによって、たびたび罪を犯しました。聖母マリア、すべての天使と聖人、そして兄弟の皆さん、罪深い私のために神に祈ってください』

「全能の神が、私たちをあわれみ、罪を許し、永遠の命に導いてくださいますように」

『アーメン』

しかし、ミサを執り行うのは結構久しぶりだ。アリアドネーにいたころはそれなりにこなしていたが、あそこを卒業してからほとんど司祭としての仕事をしていなかった気がする。

「祈りましょう。喜びの源である神よ、あなたは今日、麻帆良中央教会の創立60周年を記念するため、私たちを集めてくださいました。私たちは、感謝と喜びの心をひとつにして祈ります。キリストの復活を信じる私たちが、日々の仕事を通じて神の国の証となるこ

とができますように。聖霊の交わりの中で、あなたとともに世々に生き、支配しておられる御子、私たちの主、イエス・キリストによって」

「コリントの信徒への手紙。私たちがあなたに伝えたことはわたし自身、主から受けたもののなのです。すなわち、主イエスは、引き渡される前夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのための私の体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主がこられるときまで、主の死を告げ知らせるのです。神に感謝」

その後も、順調に祝祭は執り行われ、閉祭の歌を歌った後、礼拝堂に残ったのは僕とシスター・シャーケティ、春日君とココネ君だけだった。

「いやー、せんせーもいつもの神父様と同じくらい立派だったじゃない」

「美空、だったらあなたはもう少し敬意と言うものを……」

「まあまあ、いいじゃないですか。信徒の皆さんだって最初は戸惑ってみたいですし」

「まあ、司祭がそついうのなら……」

もはや、このやり取りは僕達4人が集まるたびに行われている気がする。

「そーいえせんせー、せんせーはもう図書館島を見た？」

4人でお茶を愉しんでいると、唐突に春日君が聞いてきた。

「そういう場所があるとは聞いているけど、まだいったことはなかったかな」

「じゃあ、わたしが案内してあげるから、今から見に行かない？」

「いいけど、なんでまた急に……」

怪しい。いつもはそういうことを面倒くさがる春日君が積極的にボランティアを願い出るなど、何か裏があるのだろうか。

「美空、今日の教会の食事当番は……」

「あ、帰りが遅くなると思うので、せんせーに超包子でおごってもらおうとおもいます。だから、今日の食事当番はできません」

「いや、お財布に余裕はあるけど、当番サボるのはまずいんじゃない……」

「そうですか。そういうことなら、許可しましょう」

「えっ、いいんですか、シスター・シャークティ？」

信じられないことに、シスターが春日君の提案を受け入れた。

「ええ、構いません。今日は信徒の方から上等の黒毛和牛のお肉をいただいたので、ココネと二人でステーキを食べようかと思えます」

「あつ、ずるい！ならやっぱり明日にします！」

「いいえ、あなた自らが買って出たことなのですから、今更そんなことを言うのは許されませんよ。気をつけていつてらっしゃい」

慈母の微笑で、しかし譲渡する気配を微塵も見せずに僕達を教会の外へと押し出すシスター・シャークティとココネ君。「してやったり」と言わんばかりの二人の笑みが怖くて、抵抗する気にはなれなかった。

腕時計を確認すると、ちょうど3時だった。

「くつ、ココネまで裏切るとは……わたしの黒毛和牛……」

隣で歯噛みしている春日君をつついて、言った。

「まあまあ、今日はいくらでもおごるから気にしないで。夏休みもあと3日だし、その記念と思っていくらでお食べちゃっていいから」

「ほんと！？ありがとー、せんせー！」

僕がそう言つと、すぐに手のひらを返す春日君。元気そうで何よりです。

「じゃあ、図書館島に案内するわね。中学生が入っているのは地下

三階までだけど、先生が同伴するならいつもより深くもぐれるかもね。あと、せんせーなら大丈夫だと思うけど、あそこはトラップが山のようにあるから、油断していると命にかかわるよ。まあ、覚えておけばいいのはそのくらいかな」

「図書館にトラップって、話には聞いてたけど本当なのか……」

「あはは、本当に何考えて作ったんだろうねー」

春日君と談笑しながら、図書館島に向かう。その途中、春日君と同じくらいの年頃の見える女の子が向こうから歩いてきた。

「あ、美空ではないですか。あなたが図書館に来るなんて珍しいところで、お隣の方は……？」

「お、夕映じゃん。こっちの人は、今度うちのクラスに来る教育実習の先生だよ。パリン・スプリングフィールド君って言うの。まだ10歳だけど、凄く頭いいから大丈夫だと思うよ」

春日君には、既に僕が2・Aを担当することを伝えてある。夏休みの宿題の消化を手伝ったりもしたので、教師としてはそれなりに信用されている……と信じたい。

「私は綾瀬夕映と申します。スプリングフィールド先生は、どちらの出身ですか？」

「どうも、パリン・スプリングフィールドです。イギリスのウェールズの生まれで、この夏にオックスフォードを卒業したばかりだよ。親の知り合いの伝で、麻帆良で教師をすることになったんだ」

「それはまた大変ですね。日本語は流暢に話せてますが、ご両親が日本の方なのですか？」

「いや、日本で教師をすることが決まってから勉強し始めたから……半年前くらいからかな、練習し始めたのは」

「たった半年で日本語を話せるようになったのですか？」

綾瀬君が驚いた顔で尋ねてくる。

「まあ、そういうことになるかな」

「なるほど、これが天才少年と言うやつですか……正直、架空の存在だと思ってました」

「それを言うなら、僕にとってはプラトンを読む中学生も架空の存在だったんだけどね……」

そう言つて、綾瀬君が抱えている『プラトン全集』を生暖かい視線で見る。

「むっ、それでも10歳で英語教師をやるチビっ子のほうが希少です……」

「いや、僕が教えるのは数学だよ？」

「はい？失礼ですが、専攻は？」

「神学だけど。どうかしたの？」

「うっ、このチビっ子、非常識の塊なんです……」

そう言っ、頭を抱えて落ち込む綾瀬君。なにやら、全身からやさぐれたオーラを出している。

「あはは、まあわたしもはじめてせんせーの話を聞いたときは耳を疑ったし、そのうちなれるよ、夕映」

「ありがとうございます、美空。では、私はそろそろ帰らなければいけないので、失礼するのです」

「さいならー」

「さようなら。お気をつけて」

そう言っ、綾瀬君と別れる。

その後、僕達は図書館島の地下三階まで探検し、そろそろ晩御飯の時間だと言っことで2・Aのクラスメイトが経営していると言っ『超包子』へと向かつていた。図書館島では常に監視されているような気配を感じていたので、今度時間ができたら監視者の正体をじっくりと確かめようと思っ。

「やあ超りん、相変わらず繁盛してるみたいだね」

「美空、久しぶりネ。そっちの坊主は誰かな？」

「この子は夏休み明けから教育実習に来ることになったパリン・ス

プリングフィールド君だよ」

「パリン・スプリングフィールドです、よろしくおねがいします」

「こつちこそよろしくネ」

そう言つて、超君と握手する。

今となつては原作知識もうろ覚えだが、それでもこの娘のことは覚えていゝる。未来のネギの子孫で、火星に移り住んだ人類の子孫。学園祭では、タイムマシンを使つたり、世界中を使つて世界に魔法を認知させようとしたりしていたはずだ。

この世界の彼女がいた未来では、僕は存在していたことになつてゐるのだろうか。興味はつきないが、超君の営業スマイルの裏を読み取ることはできない。元々、頭脳戦や腹芸は苦手なのだ。

春日君と並んでカウンターに座り、適当に注文する。

少し時間が経つてから、厨房から太目の女の子と、どう見てもアンドロイドな女の子（？）がお皿を持ってやってきた。

「ご注文の品をお持ちしました」

感情が読み取りづらい、平坦で冷たい声。なるほど、だとすればこれが『茶々丸』か。本当に心があるのかを探ろうと、無詠唱で『読心』の魔法を使つてみると……所詮、よくできたAIに過ぎないことが分かつた。もし『読心』が効いていたら、すぐさまヴァチカンに報告して開発者を暗殺しなければならなくなるところだつた。

「いや、学生の店だと思って敬遠してたのが間違いでした。これは毎日来ても飽きないかな」

散々に追加注文して満腹になった後、思わずそう呟いた。

「でしょ？ やっぱりおすすめしてよかったっス」

春日君はそう言って、バチリとウィンクする。なんとも言えない微妙な沈黙の後、僕は店員さんと呼んで言ったのだった。

「会計お願いします」

16話（後書き）

感想・評価等いただけると嬉しいです

17話（前書き）

原作開始は次の次くらいだと思います。

17話

夏休みが明けた。

今日は始業式だが、僕は新人の教育実習生なので、朝早くに登校して、麻帆良学園本校女子中等部の職員室で、先生方に挨拶をしている。お世話になる学年主任の新田先生と僕の指導を担当する瀬流彦先生には、菓子折りを持っていた。礼儀正しく振舞うことを心にかけているおかげで、今のところ新田先生や瀬流彦先生には親切にしてもらっている。

瀬流彦先生の隣で始業式に参加しながら、2 - Aのクラスが座っている辺りをなんとなく眺める。春日君は上の空で校長の話聞き流している振りをして、講堂の上空に待機させた透明な鳥状の使い魔と視界を共有し、手元に持った漫画を読んでいた。

春日君には弓の鍛錬の一環として、常に3匹の鳥状の使い魔を飛ばし、視界を共有するという課題をやらせている。春日君自身は平均的な視力しかもっていないが、複数の使い魔と視覚を共有できれば、弓使いとしての能力は段違いに上がるのだ。特に、春日君の使う弓はやろうと思えば3km先にまで矢を飛ばすことができるので、弓の腕が追いつけば、3km先から正確な狙撃を連射できる、恐るべき魔弾の射手となるだろう。もっとも、現状では教会魔法によるエンチャントを使っても500m先からの狙撃で精一杯なのだが。

本人は「これでテストも楽勝だね」などといっていたが、その発言を聞きたがめたシスター・シャークティによつて3時間ものお説教をされていたので、多分実行することはないだろう。聖職者がカンニングなど、もつてのほかである。

そうこうしているうちに始業式が終わり、各担任は自分のクラスへHRをしに行く。僕は2 - Aの副担任も務めることになっていたの
で、タカミチと合流して2 - Aの教室へと向かった。

「じゃあ、僕が先に入るから、僕が手招きしたら教室に入ってきて
くれ」

タカミチがそう言ったので、無言で頷く。例によつて、多人数を前
に話すのはいぶ緊張するので、少しひざが震えている。ただ、教
室の中から複数の人外の気配がするのが気がかりだ。以前遭遇した
2匹の混じり物がこのクラスにいるということは聞いていたが、こ
の気配は2匹どころではない気がする。

「ではパリン君、入ってきてくれ」

タカミチがそう言つて、僕を手招きした。ちなみに、3学期からは
僕の兄が赴任してくるとあらかじめ説明してあるので、混乱を防ぐ
ため僕のことには「スプリングフィールド先生」ではなく「パリン先
生」と呼ぶことになっていた。

教室に入り、教壇に立つて生徒と向き合う。大勢の女学生に見つめ
られて今にも発狂しそうだが、ビシビシと感じる人外の気配によつ
てなんとか緊張を押し殺して自己紹介ができた。

「今学期から教育実習生としてこのクラスの副担任を担当すること
になったパリン・スプリングフィールドです。2学期の後半から数
学を担当する予定です。まだまだ未熟者ですが、よろしくおねがい
します」

そう言いながら、最前列の一番右の空席にちらりと視線を向ける。微弱だが、人外の気配を感じる。姿が見えないし、出席簿の写真はどうにも古いようなので、おそらくは自縛霊か何かだろう。放課後にもでも除霊しておかねば。『除霊』の教会魔法は得意な部類に入るので、大層な儀式を行う必要もない。マギウスの杖を発動媒体にすれば、聖書の一説を口ずさむだけで除霊できるだろう。

現実逃避していると、女子中学生の黄色い悲鳴が僕の耳を痛めつけた。

「夕映が言ってたのってホントだったんだ」

「何人？」

これは酷い、と混乱する頭の片隅でそんなことを考えて、タカミチに視線で助けを求める。が、タカミチは無言で肩をすくめただけだった。自分で何とかしろ、ということらしい。ちくしょう、今度食事をおごらせてやる。

魔法の詠唱で鍛えた咽を使って、叫ぶ。
僕をもみくちやにしていた女学生達はそれでいくらか落ち着いて、
席へ着いた。

「ふひひひつ、それじゃあパリン先生に対する質問はこの朝倉和
美が取り仕切るよっ！」

そう言つて、勢いよく立ち上がったのは出席番号3番の朝倉君だ
つた。

「うん、お願いするね」

「はいはい、お任せされたよ。それじゃあまず第一問、先生はど
この出身？」

「イギリスのウェールズ出身だよ」

「年齢は？」

「今年でちょうど10歳」

「教員免許は持つてるの？学歴は？」

「オックスフォード卒で、教員免許も持つてるよ」

ただし偽造したものだけだね、と心の中で付け加える。教員免許な
んて取ってる暇はなかったが、一応自分なりに勉強してきたし、2
学期の前半は授業の見学を続けるつもりなので、教師としてはやつ
ていけるだろう、と考えていた。あがり症が克服できれば、の話だ

が。

「趣味は何かある？」

「読書と鍛錬かな。一応拳法をやってるから」

僕がそう応えた瞬間、一部の生徒がガタガタと反応したが、務めて無視することにする。目を爛々と輝かせてこちらを見てくる若干2名、名簿で確認すると……古君と長瀬君か。

「今はどこに住んでるの？」

「学園都市の郊外の家に住んでいます」

なんとなく、緊張しているせいか口調が定まらない。

「はいはい、質問タイムはここまでだ。ほかに聞きたいことがあったらHRが終わった後に彼に聞きに行くように。今日はHRが終わったらずくに放課だから、クラスの係分だけ決めてしまおう」

タカミチが手を打ち鳴らして、取りまとめる。すると、朝倉さんも着席し、教室は静かになった。もっとも、ひそひそ話は絶えないのだが。タカミチは尊敬すべき大人の見本のような人間だと思っているけど、こうやって上手く生徒を取りまとめているというのも尊敬すべき点の一つだ。

向けられる殺気をたどって、人外の気配を探してみたら、存外な大物がいた。出席番号26番、マクダウエルだ。真祖の吸血鬼、『闇の福音』。忘れかけていたが、原作でもかの怪物はこのクラスにい

たんだつけ。

吸血鬼のほうはこちらを挑発するかのよう軽い殺気を飛ばしてきており、正直他の生徒がいなければ今すぐにも縊り殺すところだが、これほどの大物ともなればヴァチカンの上層部に相談して対応しなければいけない。だから、今回は軽く睨み返すだけに留めておく。

出席番号31番の魔族に関しては……なんともつかみどころがない。一応、裏にかかわっているかどうかは現時点ではわからないので、こちらも対応は保留せざるをえないか。後で学園長に確認を取らなければいけないだろうが……どうにも、腸が煮えくり返る。

幽霊に関しては、除霊してしまっても問題はないだろう……専門家の僕でも気配の探知に力を注がなければならなかったほどの隠密性、それにいつ成仏するかわからないという幽霊の特性上、バレなければ何も問題はない。今夜にでも校舎に忍び込んで、ちよろつと除霊してしまおう。

そんなことを考えているうちに、今日のHRは終わったようだった。

「きりーっ、きをつけー、れい」

「……………さようならー……………」

出席簿を小脇に抱えて教室を去るタカミチについていこうとするが、背後からにゅっと伸びてきた2本の手に肩をつかまれ、引き戻される。

「先生、ぜひ拙者と腕試しを……」
「先生、勝負アルよ」

これはこれは、なんとも好戦的な女子中学生もいたものである。まあ、そろそろ1人での稽古も飽きていたところだし、ちょうどいい機会かもしれない。タカミチは基本的に忙しいので、そうそう相手をしてもらえないのだ。

ちらりと首筋に視線を感じると、面白いものを見た、とてもいいかげに春日君がニヤニヤと笑っている。直接着いて来る気はないようだが、大方使い魔を飛ばして見物するつもりなのだろう。

「せめて、どっちか1人してくれない？」

「じゃんけんでござる、古」
「いいアルよ、楓」

じゃんけんの結果、どうやら本日の対戦相手は出席番号12番の古君になるようだった。

「ではでは、拙者も見学させてもらつてござる」

「うん、じゃあ明日は長瀬君とだね」

そう言って、古君がいつも稽古に使っているという河原まで歩く。

「先生はどんな拳法を使うアルか？」

「型は崩れてるけど、八極拳かな。師匠曰く、実戦向けに崩した、とのことだから、自分で言うのもなんだけど結構強いと思うよ」

師匠なんていないが、言峰綺礼はそんなことを言っていた。だから、あながち間違ってもいないだろう。

取り留めのない会話をしているうちに、河原に着いた。

お互いに制服とスーツだが、何も殺し合いをするわけでもないのかまわないだろう、ということで早速はじめる。長瀬君は少し離れたところからこちらを見ているようだ。

古君の技は、自力で習得したとすればとんでもないほどに冴えている。僕やタカミチのような実戦で磨かれた技でこそないが、表の間としては最高峰の実力だろう。

だが、身体強化の魔法を使わなくても手加減して相手をするのは余裕だった。吸血鬼や上位の悪魔はもつと疾かったし、技もあまり実戦向きではないから見切りやすい。技そのものは優れているが、戦い方と身体能力の問題でどうしても今まで戦ってきた敵に比べればはるかに格は落ちる。

蹴りや掌底をいなし、お返しとばかりに肩に肘撃を叩き込む。よろめいたところに反対側の肩を掌底で一撃。首筋に手刀を擬して、あっけなく勝負がついた。

「くっ、まさかこんなに簡単に負けるとは思わなかったアルよ……」

「まあ、生徒に負けるわけにもいかないしね」

そう言つて、誤魔化すかのように笑う。

「先生はとても強いアルね。よかつたら、これからは一緒に稽古するアル！」

「あはは、気持ちはありがたいけど、僕は一人で鍛錬していたほうが落ち着くからね。折角だけど、遠慮させてもらつよ」

そもそも、僕は裏の人間なのだ。たかが稽古とはいえ、古君の綺麗な型が僕の殺人拳に影響を受けるようなことがあつては目も当てられない。たまに実戦形式で組み手をするのならいいかもしれないが、それにしたつてあまり頻繁にやるべきではないだろう。正直、対戦前はそこまで考えていなかったが、古君の綺麗な型を見てからはそういう気持치가強くなっていた。

「ははは、強いでござるなあ、先生は」

目を細めて笑いながら、長瀬君がこちらへ歩いてきた。

「古がこんなにあつさりと負けたのは久しぶりに見るでござる」

「まあ、先生だから」

少し調子に乗りすぎたかも知れない、と思つて冷や汗をかきながら誤魔化する。長瀬君の面白がるような目が直視できない。

「それじゃあ、明日の放課後は拙者とも戦ってもらうでござる」

「了解。じゃあ、僕は用事があるからこの辺で失礼させてもらうよ」

そう言つて、逃げるように背を向け、脱兎の如く駆け出す。純粹に武芸を高めている彼女達の姿勢を見て、転生のオマケでしかない自分の武芸を披露するのが急に恥ずかしくなってきた。穴があったら入りたい気持ちだ。

そういえば、この前図書館で感じた監視者の正体を突き止めてないな、と思い、これから図書館島に行こうと思い立つ。影の倉庫にカソックをしまつてあるので、近くの公園の公衆トイレに入つてカソックに着替え、図書館島を目指した。

17話（後書き）

次回は図書館島の性悪司書との邂逅です。個人的に、タカミチの次に好きなキャラクターだったりします。

18話

無詠唱の『戦いの旋律』を発動させ、図書館島の中を最大速度で走る。その間も、ずっと監視の視線は感じていた。

地下三階を突破し、螺旋階段の吹き抜けを落下する。着地の直前に浮遊の術式を発動し、衝撃を緩和して地面に降り立つ。

監視の視線は相変わらず感じる。が、このあたりに来てからそれは別に、何か強大な魔法生物——おそらくはドラゴンの、途方もない魔力を感じた。

「なるほど、門番というわけか……」

それほど強力な竜種でもなければ、時間はかかるが倒せる自信はある。影の使い魔を前衛にして、マギウスの杖を発動媒体に強力な闇属性の魔法を発動させればそれでいい。

念のためにカソックに縫いこまれた防護のルーンに魔力を通し、さらに多重の魔法障壁を展開させ、影の使い魔を30体ほど出現させる。ドラゴンの気配をたどって図書館島の最奥へと進んでいくが、監視の視線は絶えなかった。おそらく、監視者はこの図書館の最奥部にいる。

遅延呪文によって、闇属性の『魔法の射手：255矢』を待機状態にした。遅延できる時間は最長でも十分。気配を探ると、ドラゴンは目の前の扉をくぐったすぐ向こうにいるようだから、これで準備は万端だろう。

扉をくぐり、ドラゴンと対峙する。

西洋竜としては一般的なサイズのそのドラゴンは、一つの巨大な石扉を守護するようにそこに鎮座していた。目測では体長およそ15m以上の、威圧感あふれる竜だ。

影の使い魔を特攻させ、マギウスの杖を右手に握り、浮遊術を発動する。20の使い魔に翻弄されている竜めがけて、遅延していた魔法の射手を放った。

「魔法の射手・連弾・255矢！」

『雷』の性質を付加した闇の矢が、一斉に竜に衝突する。視界を埋め尽くすほどの魔法の射手は、しかし大したダメージを与えたようには見えなかった。

マギウスの杖を高々と掲げ、朗々と呪文を唱える。次に唱えるのは、僕の使える呪文の中では中の下の威力しか持たないが、詠唱の短さと燃費の良さは折り紙付きの魔法だ。

「来たれ黒の月、暗黒の女王の息子。奈落より出でし暗黒の焰よ、わが宿敵を撃滅せよ！『暗黒の業火』！」

そう唱えると、いまだ地上の使い魔たちに翻弄されている竜の足元から黒い火柱が噴きだし、竜を焼く。

「ゲギヤアアアアアアアア！！！！！！」

咆哮をあげてのたうちまわる竜が、ふとこちらを見た。

優先して倒すべき獲物を視界にとらえた竜は、不届き者を焼きつくす息吹を吐こうと、その巨大な顎を開いた。その瞬間を逃さず、無詠唱の闇の射手・151矢を竜の口内に叩き込む。

『雷』の性質を纏った闇の射手によって口中を攻撃され、竜が悶え苦しむ。使い魔は先ほどの『暗黒の業火』に焼かれて焼失したが、隙だらけの竜相手に前衛は必要ない。

「来たれ夜の月、暗黒の女王の息子。混沌の司る破壊の槌よ、暗黒を身に纏い、敵を粉碎せよ！『暗黒の破城槌』！」

『暗黒の業火』よりさらに1ランク上の呪文を唱え、『重力』の性質を持たせた闇の槌によって竜を叩き潰す。

頭を叩き潰され、虫の息の竜にとどめを刺さんと最後の呪文の詠唱を開始する――が、突然飛んできた魔法の射手に集中を妨げられ、やむを得ず地上に降下する。

「これはこれは、わざわざいらしていただくなくてもこちらからお招きしようと思っていたのに。門番をここまで痛めつけられては困ってしまうではないですか」

そう言つて、竜が守護していた扉から出てきたのは――青い髪、20代前半くらいの優男だった。

「図書館に来てみれば無粋な視線を感じたもので、何か用があるのかと思つて伺つてみれば竜が鎮座しているんじゃ、誰だつて驚きますよ。そうでしょう、アルビレオ・イマ殿」

そう言つて、マギウスの杖を片手に魔法使い風の優男を軽く睨みつ

ける。いま思い出したが、そういえばこの男は紅き翼の一員で、大戦の英雄の1人、アルビレオ・イマだ。

「その杖、どこかで見たことがあると思えば……それ、誰からもらったんですか？私の記憶が確かなら、その杖の持ち主はとくに消息を絶ったものだとばかり思っていましたか」

アルビレオ・イマが、訝しむような眼で僕の握るマギウスの杖を見てる。

「消息を絶ったからといって、死んだわけではない、ということじゃない？少なくとも、これは僕の師匠、レイストリン・マジエーレ、もしくはフィスタンダンティラスから譲り受けた杖で間違いはないけど」

「なるほど、先ほどの魔法もそういうわけですか。とくに使い手がなくなつた魔法をどうしてあそこまで使いこなすのかと思えば、開発者の弟子だというわけですか。彼は今もお元気ですか？」

「うん、相変わらず魔法の研究に熱を注いでるよ」

「そうですか。まあ、立ち話も何なのでどうぞお入りください。一応、お茶の用意くらいはしてありますから」

そう言われて、扉の中に戻るアルビレオ・イマに続き、彼の住居へお邪魔する。どうにもつかみどころのない人物だが、彼の雰囲気は嫌いではなかった。

「わお、これはまたいかにもな……」

扉をくぐると、そこはいかにも「魔法使いの家です」というような、現実離れた空間だった。

「どうぞ、おかけください、パリン君」

いつの間に名前を調べたのだろうか、と一瞬不審に思うが、おそらく春日君と図書館島に来た時の会話も聞いていたのだろう。

「アップルパイとアールグレイです。お口に会うかはわかりませんが……」

「ありがとう」

そう言つて、差し出された紅茶とパイを受け取る。紅茶もパイも、かなり美味しい。

「こんなところに引きこもつてると道楽といえは料理くらいしかなくなつてしまいます。めったに表にも出られませんから、人生の蒐集もできませんしね……」

「なんだか知らないけど、なんでまた英雄さまがこんなところに引きこもつてるのさ」

「うーん、俗世に飽きたといいますが、ナギとの約束といいますが……ああそつだ、彼の遺言を持ってますけど、興味ありますか？」

「いや、それは僕よりもむしろネギに見せるべきだろうね。僕は父さんのことには興味ないし、僕と違ってネギはサウザンドマスターの熱心な信者だから」

「おやおや、これはこれはませた子供もいたものですね。ナギなんて、いくつになっても落ち着きがなかったというのに」

「親がいなかったもんで、苦労したんだよ。やさぐれて不良になるよりはよっぽどましじゃない？」

「まあ、一理あります」

それより、と司書は話題を変えた。

「『過去と現在の主』に師事したというのならその技量も頷けますが、パリン君は本当は魔法剣士なのではないですか？先ほどから気になっていましたが、身のこなしが尋常じゃない」

胡散臭い笑顔で問い詰めてくる、アルビレオ・イマ。

「まあ、近接戦闘も魔法も、あるいはそれらを組み合わせても、それなりに戦えるさ」

「そうですか、それは結構なことです。あわよくば私の暇つぶしに近接戦闘も教えようと思いましたが、どうやらその必要はなさそうですね。『過去と現在の主』に師事しているなら、魔法に関しては心配いらなんでしょうし」

「模擬戦につきあってくれるなら大歓迎だよ。タカミチは忙しいし、全力で相手ができる人がほかにいないからね」

そう言って、肩をすくめる。

「そうですか、暇つぶしにもちょうどいいですし、私でよければ相

手になりました。まあ、今は少し都合が悪いので明日以降ということになりますが。一応電話は引いているので、後で番号をお教えます」

そう言つて、どこへしまいましたっけ、などと呟きながらローブのポケットをあさる司書。どうやら、電話番号をメモした紙をどこにしまったか忘れたらしい。

そんな緩い雰囲気のまま、3時間ほど雑談に興じていた。あえて戦争や政治のことには触れず、本の話をしたり、女学生のスカートの丈について語ったり、手早く作れてそれなりに美味しい料理を教えてもらったりと、充実した時間だった。

「いやはや、すっかり夢中になってしまいましたね。やはり、地下に引きこもつてるとどうしても人恋しくなるものです」

そう言つて、アル（そう呼んでください、と言われた）は微笑みながら見送つてくれた。手土産に、彼お手製のクッキーをもらったので、帰りは最近習得した『影の転移門』を使つて帰ることにする。ここに来るときは気配を探りながらだったから使えなかったが、地上部に戻るだけなら問題はない。

『影の転移門』を使つて図書館島の裏手に転移すると、すでに日が暮れかけていた。

ちょうどいいから、超包子で晩御飯を食べようと思い歩き出すと、5分ほどしてからタカミチから電話がかかってきた。

「やあパリン、ちょうどこれから瀬流彦君と明石教授と一緒に焼鳥屋に行くんだけど、君も一緒にどうだい？」

「いいね、僕もこれから外食しようと思ったとこだよ。いつものお店でいい？」

「うん、僕たちも今向ってる途中だから、店の前で合流しよう」

「了解。じゃ、お店で」

電話を切って、少し歩く速度を速める。このところ2日に1回は同僚の魔法先生とご飯を食べに行っているが、麻帆良の飲食店はみな美味しいし、先生たちもいい人だから何も問題はない。ちなみに、先生たちからお誘いが来ない日は春日君やココネ君を連れだして奢ったり、店屋物をとって食べたりしている。

しばらく歩いて、以前タカミチとガンドルフィーに先生に連れられてきたことがある焼鳥屋に向かう。ガンドルフィーニ先生は普段は堅物だが、お酒が入ると決まって奥さんや娘さんの話をしだすので、魔法先生たちの間では評判がいい。逆に、普段は外見に似合わず茶目っ気がある神多羅木先生はお酒が入ると娘が反抗期に入って辛い、と泣きだすので、人柄はいいのだがあまりお酒には誘われならしい。もっとも、人のいい魔法先生たちは神多羅木先生も定期的に飲みに誘うようなのだ。

焼鳥屋に着くと、すでにタカミチたちはそこにいた。

「ごめんねタカミチ、図書館島にいたから遅くなっちゃってさ」

「いやいや、僕たちも今着いたばかりだから気にしないでいいよ。さ、入ろうか」

そう言つて焼鳥屋の引き戸を開け、定位置らしいカウンターに腰掛ける。毎回思うのだが、カウンターの椅子は存外に高くて、よじ登るようにして座らなければいけないのは屈辱の極みである。

目の前でおっちゃんが焼鳥を焼くのをぼんやりと眺めながら、タカミチたちはお酒を、僕はアップルジュースを飲む。以前、タカミチが僕にお酒を飲ませようとしたことがあったが、どうにも僕は酒癖が悪いらしく、その時の記憶はないがそれ以後僕がお酒を飲むのは禁止されている。

「しかし、パリン君も緊張していた割にはずいぶんうまく話せていたじゃないか。この調子なら、教育実習もうまくいくと思うよ」

左隣に座ったタカミチが言った。

「まあ、最初のうちは戸惑うことも多いかもしれないけど、困ったことがあつたらいつでも相談してね」

右隣に座った瀬流彦先生が、そう言つて僕の肩を叩く。

「ご期待に添えるかどうかは分かりませんが、がんばります」

「おいおい、うちの裕奈を預かってもらつてるんだ、ちゃんとやつてくれなきゃ困るじゃないか」

明石教授が、冗談めかしてそんなことを言った。

「明石教授は幸せですよー、あんなに娘さんに慕われてて。神多羅木の娘さんなんか、最近は口もきいてくれないらしいですよ」

タカミチが言った。

「そういう高畑先生こそ、いい加減結婚したらどうですか？そろそろ身を固めてもいいと思いますけど」

既婚者の余裕か、明石教授がにやにや笑いながらそう言った。

「年齢層関係なくモテる高畑先生はいいですよ、僕なんかこの年になってもまだ彼女の1人も出来やしない」

早くもお酒が回ってきたのか、そう言ってやさぐれたオーラを漂わせる瀬流彦先生。僕から見れば、若くてイケメンで定職にもついて、収入も同年代の中ではそこそこ高い彼がなぜモテないのか不思議でならない。多分、人には言えない趣味とかあるんだろうなあ、などと無責任な想像をする。

「ははは、僕はまだ『悠久の風』の仕事があるからね、そうそう結婚はできないさ」

そう言って笑うタカミチ。モテるのを否定しないあたり、言われるほど鈍くはないのかもしれない。

「うう、モテなくてもいい人がモテて、モテたい僕が持てないなんて不公平だと思いますよ！パリン先生も何とか言ってやってください」

い！」

顔を赤くした瀬流彦先生が、大声を張り上げて無茶苦茶なことを言っている。日頃から学園長に無理難題を押し付けられて苦労しているみたいだし、ストレスたまってるんだろっなあ。

「まあ、なんというかファイトです」

「流された！子供にまで見捨てられた！」

どうでもいいけど、さっきから焼鳥屋のおやじの視線が痛い。なので、まあまあ、と背中をさすって慰める。

「大丈夫ですって、若くて収入もいいんですから、そのうち可愛い彼女ができますって」

そう言っつて、瀬流彦先生を慰める僕。タカミチと明石教授はニヤニヤしながら瀬流彦先生を眺めている。多分、この二人も酔っぱらってるんだろっ。

「絶望した！子供に慰められて一瞬でも安堵した自分に絶望した！」

多分、こういうところが女の人からはダメ出しを食らうんだろっな、などと思いつつ、とりあえず口に焼鳥を詰め込んで黙らせる。初めて瀬流彦先生と食事に来た時は戸惑ったが、最近では酔った瀬流彦先生の処理が確実にうまくなっている気がする。

その後も、酔って騒ぐ瀬流彦先生とダンディズム全開で紫煙をくゆらせるタカミチ、愚痴に見せかけて惚気る明石教授を相手に楽しいひと時を過ごし、家に帰ったのは10時頃だった。

18話（後書き）

魔法先生はしょっちゅう連れだって飲みに行きます。アルビレオは意外と家庭的でした。

19話（前書き）

地下に何年もこもるって、結構苦痛だと思います。

19話

始業式から3週間が経ち、いい感じに学校になじめて来た僕は、今学園の警備の仕事の一環として侵入者の討伐を行っている。

以前張った結界が侵入者を探知したら、春日君を連れて使い魔を飛ばして偵察しながら接近し、そのまま遠距離から攻撃するのがいつものパターンだ。弓での長距離狙撃もどんどん成長して、今では魔法によるエンチャントを使えば1km先の敵に8割くらいの確率で命中させることができる。

弓も矢も高度な祝福儀礼を授けられているので侵入者の使う悪魔や鬼に対しては抜群の効果を発揮し、だいたい一撃で蒸発させることができる。鬼や悪魔を遠距離から全部掃討したところで、影の使い魔を送り込んで術者を捕らえる。

僕達2人は瞬動こそ使えないものの、春日君はアーティファクトによって凄まじい機動力を発揮できるし、僕は現在開発途中の新しい身体強化魔法によってそれとおなじくらいの機動力を発揮できる。

全身から魔力を『放出』することによって、魔法の射手程度ならば無効化し、さらに移動力の大幅な強化と瞬発力の増大を図るのだが、いかんせん消費する魔力が尋常じゃないので、術式の効率化を模索している。また、宝石や貴金属には魔力をある程度貯められるということが判明したので、魔力の貯蔵についても研究中だ。

ここ麻帆良には、毎晩侵入者がやってくる。酷い時には一晩で10組以上の侵入者がやってくることもあり、春日君が実戦経験を積むには最適だ。もっとも、侵入者の撃退は本人曰く「ゲームみたいで

楽しい」このことで、最近はどうも「ヘッドショット」に異常にこだわり始め、そのおかげで弓の腕自体は怪物的な速度で成長している。

「しかし、敵さんも飽きないもんだねえ。2学期に入ってから累計150キル突破しちゃったよ」

侵入してきた陰陽師を拿捕し、警備のシフトを終えて春日君を協会まで送る道すがら、春日君はそんなことを言った。

「考えてみればノーデスで150キルってすごいよね。アタシって実は凄腕？」

「まあ、弓の腕前はすごい速度で成長してるけど……使ってる弓がいいから、ってこともあるし、慢心は良くないよ」

「そういえばせんせー、桜どおりに吸血鬼が出るって噂、聞いたことがある？」

ふと、春日君がそんなことを聞いてきた。

「ああ、あの噂か。噂っていうより、むしろ事実なんだけどね」

「どういうこと？」

いやなことを思い出して、思わず苦虫を噛み潰したかのような顔になる。

「2-Aにエヴァンジェリン、って居たでしょ？アレが犯人さ。し

かも、ただの吸血鬼じゃなくて魔法界では600万ドル級の賞金首だったこともある、札付きの化け物さ」

「うわー、あいつそんなやばいヤツだったんスカ……あのクラス、マジ魔窟ツスね。でも、犯人だつてわかつてるならなんでやつけないの？それこそせんせーなら命令も待たずに殺しにいきそうなのに」

不思議そうな顔で、春日君が聞いてきた。

「殺そうと思つた矢先に、ヴァチカンから手を出すなどのお達しが来てね。どうやら、学園長はヴァチカンに大金を貢いでもあの吸血鬼を守りたいらしい。タカミチに聞いた話では、三学期から赴任してくる僕の兄に対する試練なんだつてさ。馬鹿らしい」

ふーん、といって興味なさげな顔をする春日君。

「ま、厄介ごとは御免だから首を突つ込む気はないんスけどね。あたしには関係ない話だし。せんせーは大変ですねー」

「まあ、腸が煮えくり返ることは確かだけど……向こうから襲ってきたら返り討ちにしていいみたいだし、条件の裏をかく方法も見つかつてるしね。時を待つだけなら、我慢できないこともないさ」

そう言つて、肩をすくめる。

MMは闇の福音にネギを師事させる事を考えているらしいが、情報はすべてタカミチから筒抜けなのだ。

ほんの少し前まではタカミチが学園側、MMの情報をもらすことな

どなかったが、近頃では学園長のある計画をきっかけに少しずつ僕に情報を漏らしてくれるようになった。どうやら、学園長がネギとアスナ、近衛このかを同居させる計画をタカミチに話したようだが、アスナには表の世界で幸せに生きて欲しいと考えているタカミチは、彼女をネギのパートナーにするという学園長に付き合いきれなくなつたらしい。僕とガンドルフィー二先生を誘つて、「アスナ君を守れなかった」と悔し泣きしながら潰れるまで飲んでいたのが印象に残っている。

「じゃ、送つてくれてありがと、せんせ。おやすみー」

そう言つて、春日君は教会の扉を開け、僕に一礼してから教会へと入つていった。

今夜は3組の侵入者と戦つて少し疲れているので、『影の転移門』を使って自宅まで戻る。

自宅に帰ると、一通り銃のメンテナンスをして、購入した宝石に魔力をためる作業を開始する。大粒のダイヤの宝石に、限界まで魔力をためるとだいたい僕の魔力量の10パーセントほどをこめることができる。宝石にためた魔力は長い年月がたつても減ることがないので、非常に重宝する。今貯めているのは、修学旅行で対スクナ戦の夜に使うためのものだ。闇の福音抜きでスクナを完全に討ち斃す方策はすでにヴァチカン上層部に上げて検討している段階であり、あと2週間もすれば認可が出る。作戦の準備にはかなりのお金がかかるが、それも今回学園側が闇の福音を見逃してくれ、と送つてきた金で十分賄える。たかが吸血鬼一匹のために25億も出すとは、ずいぶん太っ腹な爺さんだ。

3つのダイヤに魔力を貯め終わり、影の倉庫にしまつてから寝巻き

に着替え、布団に入る。数秒もしないうちに、意識は溶けて消えていった。

翌日は土曜日で学校は休みだったので、春日君、ココネ君と一緒に図書館島最奥部のアルのところまで遊びに行く。地下から出られない彼は、どうやらこの間持つて行ったファーストフードのフライドチキンがたいそうお気に召したらしく、最近は「クウネル・サンダース」などと名乗っている。

彼に教えてもらった秘密の抜け道をとおり、彼の住居へと出る。前日に遊びに行くことは伝えていたので、お茶やお菓子の準備は万端だった。

「やあ、おはようパリン君。約束のもの、もって来てくれたみたいですね。ありがとうございます」

相変わらず胡散臭い笑顔で挨拶してくるアルに、購買部で買い求めた数々のレトルト食品を渡す。どうも、ここ最近ジャンクフードやインスタント食品、レトルト食品にハマってるようだ。いくら美味しくて、14年も自分の料理を食べていると飽きるらしい。引きこもり稼業も大変である。

「でははじめましょうか。私は昨晚、HR6まで行きましたよ」

そう言つて、懷からPSPを取り出すアル。春日君と最初に会ったときに、モンハンを借りたらハマったらしく、ここ最近はずっとゲームばかりしているらしい。春日君にPSPとUMDを返した後、僕に頼んで一式を買いそろえ、すさまじい速度でHRをあげている。ちなみに、僕は現在HR7だが（夏休みの終わりがごろに買った結構面白かったので今も続けている）、このペースだと明日にでも追い抜かれそう。オンラインゲームを薦めなかったのは正解かもしれない。

「おーけー、じゃあグラフィモスク工行こうか」

「……了解」

春日君とココネ君も、いつの間にかPSPを取り出している。僕も影の倉庫からPSPを取り出し、オンライン集会所に入った。

アルがライトボウガン、春日君が弓、ココネ君がハンマーで僕はランスを使っている。

「睡眠弾行きます、爆弾用意してください」

「じゃあ睡眠瓶も使っちゃうよー」

「……起爆は、私が」

「爆破したら腹狙うから、ココネ君は頭で打撃よろしく」

そんな調子で、仲良くゲームに興じる。春日君とココネ君はどちらもプレイ時間が1000時間を越えている廃人なので、集会所上位

なら比較的楽にクエストを進められる。

お昼まで連続でゲームをして、お昼になったら僕が影の転移門で地上に戻り、ファーストフードのフライドチキンを買ひ、再びアルの部屋へと戻る。

皆でワイワイと語りながらフライドチキンを食べ、飲み物を飲んでから再びゲームを始める。そのまま夜遅くまで居座ってゲームに興じ、7時くらいになったらまたしても僕が地上に戻って寿司の詰め合わせを買ひ、アルの部屋で晩御飯を食べる。

11時くらいまでさんざんゲームをしてから、さすがにもう遅いということので地上へ帰った。

春日君とココネ君は特例で教会の居住部に住み込んでいるため、地上に出て教会まで送る。吸血鬼のこともあるし、こんな夜遅くに若い女の子だけで歩かせるのは教師として容認できないのだ。

教会の前で春日君たちと別れ、自宅まで歩く。

そういえば、2-Aの幽霊を除霊した夜もこんな静かな夜だったな、などと感傷にひたりつつ、桜通りを歩く。夜の教室にいないのでどこに行ったのかと探したら、なんとも可笑しな事にあの幽霊はコンビニにいたのだ。目を合わせて手招きして、人通りのないところまで連れ出してからグサリと一撃。それだけで、幽霊は消滅した。隠密性の高さから相当位の高い霊かと思っていたら、どうもそうではなかったらしい。

桜通りを歩いていると――ふと、人外の気配を感じて振り向く。案の定、そこにいたのは幼い女の子の姿をした化物だった。

「いい月だな、パリン・スプリングフィールド」

「学園長から何も聞いていないのか。俺が殺意を抑えているうちに早く立ち去れ、フリークス」

「無粋な奴め。今日はちょっとした挨拶さ、狂信者」

「わざわざ狙撃兵を配置してのご挨拶か。言っておくが、俺は従者に対する攻撃までは制限されていないぞ」

そう言つて、近くの樹上で銃を構えるロボットに視線をやり、脅すように黒鍵を構える。何のつもりかは知らないが、非常にいらだたしかった。

「フン、そのくらいはできる、ということか。茶々丸、今夜は引くぞ」

そう言つて、化物はマントを翻し、何が面白いのか高笑いをしながら飛び去っていく。

「クソッ、忌々しい——」

腹立ちまぎれにつばを吐き捨て、気分を害したのでさっさと転移門で家に戻る。

気分を落ち着かせるために島原流と拳法の鍛錬で汗をかき、シャワーを浴びてすっきりする。そのころにはもう3時になっていたが、目覚ましをいつもどおりにセットして、眠りに就いた。

19話（後書き）

次の話でネギが赴任してきます。

20話（前書き）

原作開始。

20話

充実していれば充実しているほど、日々が過ぎるスピードは速くなるらしい。

二学期の中間試験が終わり、教壇に立つようになってあっという間に期末試験、そして冬休みが過ぎ、ついにこの日がやってきた。そう、今日はわが兄ことネギ・スプリングフィールドが赴任してくるのである。

タカミチは一週間前まで散々飲んだくれて神楽坂君のことを嘆いていたが、どうやらふつきれたようで最近は元気なようだ。影から彼女を守るため、さらに修行に励んでいる。しかし、三学期に入ってからこれまでに以上に出張が増えたので、僕とはほとんど顔を合わせていない。

普段より早めに学校に出勤し、先生方に兄をよろしくお願いしますと挨拶して回る。最初は子供だということ以轻んじられていたが、最近では職員室の先生方にもそれなりに信用されているようで、うれしい限りだ。

ネギのことで新田先生と話し込んでいると、源先生がやってきて、学園長が呼んでいるからすぐに学園長室に来てくれ、と伝えられた。急ぎ足で学園長室に向かい、扉をノックする。

「開いておる。入ってくれ」

「失礼します」

そう言つて学園長室に入ると、まず最初にネギと目が合った。ネカネ姉さんから言われたこともあつて仲良くするつもりだったので、軽く笑いかけると、ネギは少し驚いた顔をしてから微笑み返してきた。

「学園長、どういったご用件でしょうか？」

学園長に向き直り、質問した。

「うむ、今日からネギ君が2・Aの担任を務めることは以前言つたと思うが、そういうわけで彼を教室まで案内して欲しいのじゃ」

「承りました。兄さん、着いてきて」

頷いて、ネギを学園長室から連れ出す。扉から出ると、僕とネギはほとんど同時に口を開いた。

「久しぶりだね、兄さん」

「久しぶりだね、パリン」

なんとなくおかしくなつて、二人でクスツと笑つた。そのまま、とりとめのない話をしながら教室まで歩く。

「じゃあ、これがこのクラスの出席簿。よろしくね、ネギ先生」

「うつ、緊張してきた……」

不安そうな顔だったが、いきなり何かを決心したかのような顔をして、引き戸を開けた。

落ちてきた黒板消しを後ろからつかんで、実行犯の双子へと投げつける。

「うぎゃっ」

額に黒板消しがクリーンヒットし、鳴滝君（姉）は額を抑えて変な声を出した。

ネギはといえば、あわわわ、などといって僕と鳴滝君（姉）の顔を見比べている。

「いつものことだから気にしないで。さ、そんなことより早く挨拶を」

そう言つて、背中を押す。と、足をロープに引っ掛けたらしく、上から水の入ったバケツが落ちてくる。たぶん春日君の仕業なんだろうな、と思いつつ、水をこぼさずにバケツをキャッチし、床に置く。

教壇ではすっころんだネギがおもちの矢に刺されて涙目になっているが、まあ通過儀礼のようなものだと思つてあきらめて欲しい。

あらかじめ僕の双子の兄が来ると伝えておいたので、クラスの面々は驚いてはいない。興味津々と言つた感じで、目を輝かせてネギを見ている。

「え、えーと、ボク、今日からこの学校でまほ……いえ、英語を教えることになったネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけど、よろしく願ひします」

少しおどおどしながら挨拶するネギ、そして叫びだす2 - A。

[illegible]

「うるさい！ 静かにしてくれ！」

あまりにもうるさいので、怒鳴る。

ただ怒鳴つても効果がないのはこれまでの教育実習でいやというほど体験してきたので、黒板の棧に置いてあるチヨークを引っつかみ、鉄甲作用を用いて全力で床に叩き付ける。

チヨークが粉々に砕ける音がして、もくもくと白い粉が舞う。少々過激だが、このくらいしないとこのクラスは静かにならないのだ。

「静かに、静かに！朝倉、質問は君が取り仕切れ」

「りょーかい、そうこなくっちゃ！じゃあみんな、ネギ先生への質問はアタシが取り仕切るよー！」

そう言って、ネギを質問攻めにしていく朝倉君。

僕が赴任してきたときと同じような質問をしている朝倉を、ころあ
いを見て手を打ち鳴らして制する。

「はいはい、今日は授業もあるから質問はここまで！じゃあネギ先生、僕は他の教室に授業をしにくから、授業がんばってね。僕用の踏み台が教壇の下においてあるから、板書するときに使うといいよ」

そう言つて励ますように笑いかけて、教室から出る。

ちなみに、僕用の踏み台は僕が担当するすべてのクラスに置かれている。いちいち持つて歩くのは面倒だったのだ。

2・C組で一時間目の授業を行う。僕の授業は、基本的に宿題の答えあわせと回収をやつてから教科書の例題を解き、それから少し時間をとつて演習問題を解かせ、ランダムに指名して黒板で回答させる、といった流れで行われる。宿題の答え合わせは授業の最後に出席番号順で生徒を指名し、その生徒が次の時間の直前に黒板に解法と答えを書いておく、という風にやらせている。

寝ている生徒や宿題を忘れた生徒には、容赦なくチヨーク投げをお見舞いしている。長年黒鍵を投げ続けてきたので、たとえ獲物がチヨークに変わつても、僕の投擲は驚異的な威力と命中率を誇るのだ。舟をこいである場合は眉間（実は急所で、物が当たるとすごく痛い）に容赦なく当てるし、机に突つ伏して寝ている場合は机がガタンと揺れるくらいの威力で机に当てている。

いつもどおりに授業を終え、ネギの様子を見に来たらしいタカミチと廊下で合流した。話を聞くと、朝っぱらから神楽坂君に武装解除をお見舞いしたらしく、タカミチはとても複雑そうな顔をしていた。

「ネギ先生、初授業はどうでしたか？」

タカミチが、教室から出てきたネギに話しかけた。

「最初は緊張したけど、あやかさんが手伝ってくれたのでうまくいったよ！」

そう言つてうれしそうに笑うネギ。初授業がうまくいったのはいいけど、とりあえず同僚には敬語を使おうか、と思つた。あとで教え

諭しておこう。

「そりゃあよかった、雪広君、これからもネギ君を手伝ってやってくれ」

ネギの後ろでニコニコしている雪広君に向かって、タカミチが言った。

「はい、しかと任せましたわ」

雪広君は、そう言ってしつかりと頷いた。

「じゃあ、僕は学園長に用事があるからお先に失礼するよ。がんばってね、ネギ先生」

安心したかのように笑って、タカミチは去っていった。おそらく、学園長に最後の交渉をしに行くのだろう。必要なら借金して家を買ってでもネギ君とアスナ君を引き離す、と昨晚意気込んでいた。

「じゃあ兄さん、次の授業もうまくいくといいね」

「ありがとうパリン、がんばってみるよ！」

そう言っで、次の教室へと向かうネギ。魔法バレを防ぐために、今日からは彼につきつきりで監視しなければいけない。とんだ災難だが、まあ仕方ないか。

一日の授業が終わり、放課後になった。

兄さんのバカ魔力をたどり、彼が石段に座ってたそがれているのを発見する。同時に、2・Aの宮崎が本を大量に抱えて階段のそばを歩いているのを見つけた。

「宮崎君、よければ持つのを手伝おう」

そう言つて、彼女の抱えていた本の半分を取つて、両腕で抱える。

「あつ、パリン先生、ありがとうございます」

今思い出したが、本来はここで宮崎君が階段から転落して、魔法を使つて助けたネギによつて神楽坂に魔法がバレたのだった。危ない危ない、と思いつつ、宮崎には階段の内側を歩かせ、転んでもすぐに支えられるよう、気を抜かずにそばを歩く。

無言で女子寮まで歩き、出迎えた綾瀬君と早乙女君にそれぞれ本を持たせ、またネギのところへと戻つた。

相変わらず石段に腰掛けてたそがれてるネギに声をかけた。

「やあ兄さん、こんなところでどうしたんだい？」

「あ、パリン。聞いてよ、さっきD組の授業でね……」

どうやら、授業でちょっとした失敗をしてしまつて、自信をなくして落ち込んでるようだった。

「まあ、初めての授業なら上出来なほうだと思うよ。明日からまたがんばればいいさ」

「うーん、そんなもんかなあ……」

「大丈夫だって。僕も、初めのころは兄さんよりよっぽどダメだったんだから」

そう言つて、過去の失敗を面白おかしく話す。ついでに、魔法バレの危険性についても釘を刺しておく。

「あははは、なんかパリンの話を聞いてたら、明日からがんばればいいやつて気持ちかわいてきたよ。ありがとう」

「どういたしまして。そういえば、どこにとまるかはもう決まったの？」

「うん、しばらくは2・Aの近衛さんと神楽坂さんのところに泊めてもらうんだ。神楽坂さんはちょっと怖い人だけど、近衛さんは優しいから大丈夫だと思う」

「よかったじゃないか。じゃあ、また明日」

「うん、また明日」

そう言つて、嬉しそうにしているネギと別れ、自宅へと戻る。

「確か次は、図書館島だったっけか……」

ネギが来たことで忘れかけていた原作のイベントをおぼろげながら思い出してきた。

「アルに頼めば何とかなるか？ いや、学園長も一枚噛んでるだろうし……どうしたものかな」

思案に暮れる。が、いい策は思いつかない。

「いつそのこと僕が同行するか？ いや、そうなると地上に残された生徒が……なら、ネギを地上に残して、僕が図書館島に入るか。それなら問題はないだろう」

結局、満足のいく方法ではないが、僕の思いつく限りではこの方策が最善だろう、ということで準備をする。

アルに電話して、図書館島の詳細な地図が欲しいから今からとりに行く、と伝える。了解してくれたので、『影の転移門』を使ってすぐさまアルの部屋へと赴いた。

「珍しいですね、パリン君が頼みごととは。どうかしましたか？」

「いや、学園長が期末テストにかこつけて何かたくらんでるみたいだから、準備をしておこうかと思って」

「なるほど、もう知っていたのですか。A3版とA2版があります
が、どうします？」

「両方くねると助かる」

「わかりました。少し待っててください」

そう言つて、ごそごそと机をあさる司書。

「ありました。コピーはありますが、一応使い終わったら返してくれると助かります」

「了解。ありがとね、アル」

「どういたしまして」

そう言つて、アルの部屋を辞去する。

再び自宅に戻り、即効性の睡眠魔法薬を作り始める。いざとなつたら、眠らせてから記憶を処理して、全員まとめて寮に運んでしまえばいい。

「成績のほうは何かなるだろうから、魔法バレへの対処が最優先かな？少なくとも数学は演習量を増やせばどうにかなる科目だし、英文法と日本史、生物は暗記シートを作つて詰め込ませればそれなりに効果は見込めるはず。超にでも頼んで、成績不振者用の学習教材でも作つてもらつか」

ぶつぶつと独り言をつぶやきながら、魔法薬を合成する。

三時間後、ようやく薬が完成した。

「よし、完成。成績不振者への対策もまとまったところだし、今日は寝るか」

そうひとりごちて、ベッドに横になった。

20話（後書き）

今のところ、ネギとアスナは他人行儀です。アスナとしては厄介ごとを押し付けられた、程度の認識で、魔法バレもしてません。

21話（前書き）

主人公が今までになく教師です。

21話

「パリン先生、どうも屋上で2・Aの生徒と高等部の生徒が揉めているようなのですが……一応ネギ先生もいるはずですが、様子を見てきてくれませんか？」

ネギが赴任してきてから5日後、職員室で提出された宿題のチェックをしていたら、新田先生に声をかけられた。

「高等部とですか……わかりました、様子を見てきます」

「すまないな、パリン先生。では、よろしくおねがいします」

今のところ魔法バレはしてないみたいだし、先生としてもそれなりにうまくやれているようだ……いかんせん、こういった経験は圧倒的に足りないネギのことだ。大方、揉め事をおさめようとしてさらに騒ぎを大きくしているに違いない。

彼女らは屋上で騒いでることなので、椅子にかけていた上着を着て、屋上に向かう。

「で、では、両クラスでスポーツをして、勝ったほうが屋上を使うということでしょうか？」

僕が屋上に通じる扉の前に着くと、何を血迷ったのかネギがそんなことを言っているのが聞こえてきた。そもそも高等部の校舎にだってバレーボール用のコートはあるはずだし、2・Aが場所を譲る理由などないのだ。スポーツで決めるまでもなく、そのことを主張すればいいだけの話ではないか。

「話は聞かせてもらった。とおりあえず高等部の諸君、君らは高等部の校舎に戻りたまえ」

屋上に通じる扉をわざと荒々しく開け、こっちを振り向いた高校生たちに言い放つ。

「パリン！どうしたの？」

「どうしたもなにも、ここは中等部の校舎じゃないか。なぜ高校生がいるのか、理解に苦しむ。さ、君たちは早く戻りたまえ」

そう言つて、2・Aの面々をかき分け、高校生たちに対峙する。

「そうは言つても先生、私たちは今から高等部に戻つてもろくに時間がとれません。せつかくですし、ここで中等部の方々と親睦を深めるのもいいと思います」

「わざわざここまで出張つてきたのは君らだ、そのせいで君らの授業時間がなくなるうがなんだろうが、僕の知ったことではない」

冷たく言い放つて、さっさと出てけ、という風に顎をしゃくる。

「先生！馬鹿にされたまま引きさがるなんて嫌です！試合をさせてください！」

神楽坂君が、背後でそんなことを叫ぶ。

「これ以上くだらないことを抜かすなら、高等部の先生を呼ぶが…それが嫌だったら、早く戻りたまえ」

神楽坂君を無視して、高校生に最後通牒を突きつける。

「……わかりました。高等部に戻ります」

高校生たちをまとめていた生徒がそう言い、唇を噛みながら屋上から立ち去る。ほかの高校生も、黙ってそれに続いた。

「さ、君たちはバレーだろう、僕は職員室に戻るから、ネギ先生に監督してもらいなさい」

そう言つて、屋上を立ち去る。

背後では気まずい沈黙が漂っていたが、気にするまでもない。切り替えの早い2-Aの面々のことだ、バレーを楽しんでいるうちにいつもの騒がしい雰囲気に戻るにきまっている。

職員室に戻り、再び宿題のチェックを始める。わからない問題があつても空欄にせず、友人か先生に質問しろと言っているのに空欄を残したまま宿題を出す生徒が多いのが、最近の悩みだ。

宿題のチェックが終わり、次の授業で使うプリントを印刷していると、ネギに声をかけられた。

「パリン、さつきはありがとう。やっぱりパリンも教師なんだね、僕も見習わなくちゃ」

少し落ち込みながら、そんなことを言うネギ。

「まだ慣れてないんだろうから仕方ないさ。一つだけアドバイスしておく、日本の学生はほんの一部を除いたらぐうたらな人間ばかりだから、こっちが厳しくしないとダメだよ。兄さんの授業は見たことがないけど、生徒の自主性に任せていたら生徒はいつまでたっても勉強しないさ。大事なことは3回以上言わないと覚ええないし、宿題や試験がなければほとんどの学生は勉強しない。程度をわきまえていれば体罰だって有効だし、兄さんみたいに生徒を甘やかしていると生徒がダメになるよ」

教育実習を始めてから実感してきたことをそのまま伝える。

「どういう風に授業をしているかを話してくればアドバイスできるから、よければ聞かせてくれない？」

プリントを印刷しながら、ネギの話を聞く。

予想通りというか、ネギの指導はだいぶ甘いようだった。

「いいかい兄さん、ここは公立の学校じゃないんだから、そんなに甘くする必要はないよ。高校受験が必要なのは中高の6年間を使って大学受験に備えさせるためであって、生徒を甘やかすためじゃないんだ。もう少し厳しくしないと」

「でも、アスナさんは僕の授業が難しいって言ってましたし……」

「彼女は学年でもダントツに成績が悪いんじゃないか、授業が難しく感じるのは当たり前だよ。言葉ってのはどんなに馬鹿でも話せるものなんだから、彼女が英語の授業についていけないのは彼女が勉強してないからなんだよ。英語だろうが数学だろうが、少なくとも

高校レベルくらいまでなら誰だって努力すればできるようになるんだ。そりゃあ個人差はあるだろうけど、才能がないなんて言葉を言い訳にして努力をしない生徒は厳しく叱るべきだよ」

「そういうものかな……」

どうにも甘いネギに、教師とはどうあるべきか、みっちりと教え諭す。とつくに印刷は終わっていたが、今日は二人とも授業はないので、印刷室にこもって2時間近く話を続けた。

「ありがとうパリン、僕が間違ってたんだね。これからはもっと厳しくして、みんながちゃんと努力するようにしてみるよ！」

「うん、わかってくれたならいいんだ。さ、時間も遅いし、今日はこれで」

「じゃあ、また明日」

そう言つて、心を入れ替えたネギと別れ、自宅に戻る。

自宅へ戻りパソコンを起動し、一週間前からやっている期末テストの問題作成を始める。本来は正式な先生である瀬流彦先生が作るはずなのだが、僕なら大丈夫ということで作問まで担当することになってしまったのだ。

宿題のプリントの中でも特に間違いが多かった問題と、授業で解説した問題の類題、それから教えた範囲の知識を応用すればなんとかとけるくらいの応用問題、この3種類の問題を組み合わせで試験を作る。私立なので平均点は気にしなくてもいい、というのはなかなか

かにありがたい。素点平均が90点満点中30〜40点で、平常点が10点中平均が6〜7点くらいになるように問題を作る。ただ難しくするのではなく、普段からきちんと勉強している子なら七割は取れる問題だが、普段から勉強していないとほとんど点が取れないという問題が理想だと思っているので、そうなるようにほかの先生の意見を聞きながら試行錯誤している。この問題なら、学年トップクラスの超や葉加瀬、雪広なら満点をとれるだろうが、2・Aのバカレンジャーと呼ばれる5人は一問も解けないだろう。まあ、普段から勉強してないのだから仕方がない。

だいたい問題を作り終えると、すでに日付が変わっていた。何部かプリントアウトし、明日の朝に瀬流彦先生に見てもらおう、と思いつつカップラーメンをすすする。

カップラーメンの容器を捨て、歯を磨いてからベッドに入る。いつもお風呂には朝入っているの、なんら問題はない。ベッドに入ると、すぐに意識は消えていった。

期末テストの一週間前の朝、僕とネギは源先生から学園長の最終課題を渡された。

課題の内容は、「次の期末試験で2 - Aを最下位から脱出させること」だった。

彼らの成績を知っている僕としては不安だが、課題である以上こなさなくてはいけない。

どうしようか、とネギと相談しつつ、2 - AにHRをしに行く。副担任はHRに参加しなくてもいいのだが、担任がネギでは何かと不安なのでネギが来てからは毎日2 - AのHRに出席している。

「えーと、みなさん、期末試験も近いので、今日のHRは自習ということにしたいと思います！期末試験で最下位を脱出できなければ大変なことになるので、気合を入れて勉強してください！」

そう言って、僕と共同で作った英語のプリントを配るネギ。僕に叱

られてから、学習面では生徒に厳しくしているようなので、生徒からの人気は当初よりは下がっているが、先生としてはうまくやれている、と職員室でも話題になっている。学年主任であり生徒指導の担当でもある新田先生が、「生徒の評判を気にしていたら教員は務まらない」と常日頃から主張しているので、むしろ子供らしい甘さがないのはネギの長所として評価されている。

「それと、宿題を未提出の長瀬さん、綾瀬さん、佐々木さん、古さん、神楽坂さんは、明日までに提出してくれなければ1週間トイレ掃除と宿題の増量です。わからないところがあれば友達や僕に聞いてくれて構わないので、早く提出してくださいね」

そう言つて、では自習を始めてください、と言つて教室を出るネギ。ちなみに、宿題未提出者にトイレ掃除をやらせるといふのは新田先生がよくやる手法だ。今回はどうあつても2・Aを最下位から脱出させなければいけないため、手段は選んでられないのである。

「しかし、よりもよつて一週間前にこんな課題を渡さなくても……短い間に詰め込んだ知識なんて、試験が終わったら忘れるのがオチなのに」

「まあ、とりあえず今日からは厳しくしないとね、パリン。居残り授業も、今日は全員がきつちり理解できるまでやることにするよ。魔法を使おうかとも思ったけど、考えてみれば自分で努力させなきゃだめだよね」

期末テスト対策についてネギと話しながら、職員室へと向かう。正直、数学は演習量がものを言うからテスト前に詰め込んでもあまり効果はないのだが……まあ、やるしかあるまい。

職員室へ戻って、さっそく2・Aの底辺用のプリントを作り始める。今教えている単元の基礎的な部分だけなら一週間で詰め込めるだろうと計算し、何が何でも理解させるために計画を練り始める。

その日の授業を順調にこなした後、一つ案をひらめいたのでネギに電話して伝えておく。

「雪広さんと超さん、葉加瀬さんに頼んで、これからテストまで毎晩2・Aの面々で勉強するように伝えておくのはどう？雪広さんは協力的な生徒だし、超さんたちも悪い人じゃないからネギが頼めばうなづいてくれると思うよ」

「そうだね、頼んでみる。不安だから、僕が監督してくることにするよ」

「まあ、無理はしないようにね」

そう言って、電話を切った。

テスト前だというのに、今日も侵入者はやってくる。さすがに春日君を連れまわすわけにもいかないの、今日は一人で侵入者に対処しなければいけない。

一人で侵入者に対処するときは、基本的に影の使い魔に乗って上空から強襲し、異形をすべて殺した後で侵入者を捕縛する、というのが基本だ。隠行のための教会魔法を使えば、あっけないほど簡単に強襲が成功するので、半ば流れ作業と化している。

5組の侵入者をとらえ、シフトを終えて帰宅する。この時期は先生方も何かと忙しいので、今日は徹夜だった。

帰宅すると、家の電話にアルから留守番電話が入っていることに気がついた。

『あー、あー、クウネルです。これ、本当に録音されてるんですね？それはともかく、中学生くらいの女の子6人が図書館縋の奥までやってきましたよ。どうやら魔法書が目当てだったようです。今は地底図書室でおとなしくしています。学園長に言われているので手出しはできませんが、あなたには伝えておきます。どうにも騒がしいので、引き取ってくれるとうれしいです』

どうやら、留守番電話の機能を使うのは初めてらしい。そういえば、携帯電話の番号を覚えておくのを忘れていた。

「まあ、ネギが同行していないなら救いはある……気が乗らないが、とつと連れ戻しに行くか」

そう呟いて、返り血のついたカソックを脱ぎ捨て、スーツに着替える。新田先生と瀬流彦先生に電話で事情を説明して今日は遅刻する旨を伝え、瀬流彦先生には魔法書の件も含めてネギにも伝えてもらえるよう頼んでおく。

「さて、馬鹿どもを連れ戻しに行くか」

そう呟いて、ネクタイを締め、図書館島の最奥部、アルの部屋へと『影の転移門』で向かう。

部屋では、アルがソファでPSPを握りしめたまま寝ていた。どうやら、モンハンをやってる最中に寝てしまったらしい。

この前もらった図書館島の詳細な地図を取り出し、眺めながら地底図書室へと向かう。30分ほど隠し通路を歩き、扉を抜けると地底図書室についた。

「せやから、この例文の英訳は……」

近づいていくと、近衛君が教師役で、皆で勉強会をしているようだ、ということに気付いた。

「あ、パリン先生」

さらに近付くと、こちらに気がついた近衛君が驚いたような顔をしながら声を掛けてきた。

「君たちはいったいこんなところで何をしているんだ？中学生が入ってもいいのは地下三階までだ、すぐに戻りなさい」

「で、でも、出口が見つからなくてっ」

僕が叱りつけると、佐々木君が反論してきた。

「司書から地図をもらっている。僕が案内するから、ついてきなさい」

そう言つて、荷物をまとめさせて6人の生徒を連れ、滝の裏にある隠し出口へと向かう。

「フオ、フオ、フオ、ここからは出られんぞ、観念するのじゃ」

6人を連れ立って歩いていると――湖の底から、明らかに学園長が操作していると思われるゴーレムが出てきた。が、躊躇せずに懷からジャッカルを抜き、6発の弾すべてを撃ち込む。

「フオブツ、な、何をするんじゃ――ギャッ」

学園長の声を聞いてイライラしてきたので、ジャッカルをリロードして再び6発の弾丸を撃ち込み、怯んだところを殴ってゴーレムを粉碎する。

「い、今の実銃ですかっ!？」

「いや、エアガンだが?そんなことより、早くここから脱出するべきだな――Amen」

記憶改変の魔法を発動し、今のやり取りを強制的に忘れさせる。副作用は数分上の空になる程度なので、問題はない。神楽坂君にはなぜか魔法が効かなかつたが、幻術と組み合わせで少し複雑な魔法を使うと、綺麗にわすれてくれた。

滝の裏の隠し扉から螺旋階段に出て、地上部分へと戻る。螺旋階段の途中にはなにやら問題が書かれた石板があつたが、僕がすべて正解したので障害にはなりえなかつた。

地上行きのエレベーターに乗って、地上に戻る。そのころには皆も

副作用が解け、僕の方をおびえたようにちらちらと伺ってくる。正直、今回の件にはかなり頭にきているので、大人げないとわかってはいるのだが、溢れだす殺気を抑えきれない。

重苦しい沈黙が支配するエレベータが地上につき、重苦しい雰囲気のまま6人と僕は地上に戻った。

「生活指導室まで行きなさい。新田先生と高畑先生を呼んでいるから、3時間は説教されるだろうな。自業自得だ」

そう言って、6人を生活指導室に行かせ、僕はそのまま職員室へと向かう。時計を確認すると、既に12時だった。

職員室へ着くと、真っ先にネギがこちらに向かってきた。

「パリン、大丈夫だった!？」

「うん、6人は無事連れ戻した。今生活指導室で説教されているけど、あとで兄さんからもきっちり叱ってやってくれ」

「わかったよ。さすがに今回ばかりは、先生としては認められないからね。まったく、自分の成績が悪いのを棚に上げて魔法の本に頼るなんて……」

ネギは、自分がメルディアナでは努力を惜しまずに勉強に打ち込んでいたこともあって、最近では勉強しない生徒に対して一層厳しく当たるようになっていく。もちろん、単なる嫌悪感からではなく、本当に生徒のことを思いやって「嫌われてもいいから『努力する習慣』をつけさせたい」などと、殊勝なことを言うようになっていく。

「ところで、勉強会はどんな感じだった？」

「うん、雪広さんをお願いしたらすごく熱心に手伝ってくれたから、この調子なら最下位脱出もできると思うよ」

「それはよかった。じゃあ、6人組への説教は任せるね」

「わかったよパリン」

そう言っで、ネギと別れて自分のデスクにつく。遅くなっですみません、と周りの先生方にあやまっでから、宿題のチェックを始めた。

21話（後書き）

詰め込んだら文字数が増えました。次回は期末試験で、そのまた次から「闇の福音編」です。

22話（前書き）

タカミチ魔改造入りましたー

22話

期末試験が終わった。

結論から言うと、2 - Aは最下位を脱出し、学年5位にまで順位が上がった。

図書館島に侵入した6人を連れ戻してからは特筆すべきこともなく、ネギ監督の勉強会が成果を挙げ、底辺の5人を中心にそれなりに成績は上がったようだ。ただ、数学だけはやはりそううまくいかず、底辺層はほとんどが一桁の点数しか取れなかったので、春休みに補習を行った。中学二年生の内容が曖昧なまま進級すれば、周囲とはますます差がつくだけだ。数学と英語は地道に積み重ねることが大切なので、春休みは基礎の部分を徹底的に鍛えた。

僕とネギは正式に先生として採用されることになり、明日から2 - Aの副担任と担任を務めることが決まっている。

「しかし、明日から中3か。なんだか実感ないな」

教会の掃除をしていた春日君がそんなことを言った。

「毎日ゲームばかりしてるからだよ。少しは勉強したら？」

掃除の手を止めずに、そう返す。

僕も人のことはいえたものではないが、それでも魔法の勉強と鍛錬は欠かしていない。春休みは一日に一回はアルと模擬戦をしているし、マジエーレ師に理論だけは教わっていた技術の習得にもかなり時間を費やしている。

「英語と数学はダントツにいいんだからいいじゃん、社会理科なんて高2の夏からで十分間に合うんだって」

そう、春日君は英語と数学の成績は学年でもトップクラスだ。その分、社会や理科は全く勉強してないので、成績は中ほどののだがまあ、大学受験を見据えて効率的に勉強しているという点は評価できる。

教会の掃除を終わらせると、珍しくタカミチが教会を尋ねてきた。

「パリン君、いるかい？ちょっと相談があるんだけど、時間ある？」

「うん、今は暇だけど……何の話？」

「ちょっと修行に行き詰ってね、パリン君に協力して欲しいことができたんだ。友人に『別荘』を借りてきたから、その中で話すよ」

そう言つて、ついてきてくれ、と歩き出すタカミチ。シスター・シヤークティは行ってきなさい、という風に手を振ったので、手を振り返して教会を出る。

タカミチの家について、掘りごたつの上においてある別荘に触れると、一瞬の後に別荘の中に転移した。

「修行に行き詰ったって言うけど、咸卦法があるならそれで十分なんじゃない？」

「僕もそろそろ年だからね。魔力はともかく、気に関しては年をと

ると衰えるから、咸卦法も年々使いづらくなっていくのさ。このままじゃ戦闘力は劣化する一方だ。アスナ君を守るには今の力でも足りないくらいだから、もっと力をつけたいんだよ」

タカミチの言うことは至極もつとものだ。だが、究極技法と呼ばれる咸卦法を習得し、魔法の才を持たない凡人としてここまで上り詰めた彼に、まだ伸び代があるとは思えなかった。

「この春休みに魔法世界に行ったら君のお師匠様に会って、ね。少し手合わせをする機会があっただけけど、本気を出しても全く敵わなかったんだ。それで、少しアドバイスを貰ったのさ」

「マジエーレ師に…… ああ、なるほど。それで、どうしたいの？」

確かに、マジエーレ師にはタカミチでもかなわないだろうな、と苦笑いする。なにせ、僕の全力の魔法が普段から展開してるたった一枚の障壁に防がれるのだ。無詠唱で天から無数の雷を降らしたこともあったし、そもそも勝負にならないだろう。

「数百年前に喪われたはずの『魔力の完全物質化』、それを咸卦法に応用しようと思う。君のお師匠様に聞いた話では、君は『魔力の完全物質化』ができるそうじゃないか」

『魔力の完全物質化』とは、文字通り魔力を物質に変換する技術のことだ。

通常の魔法では、出現する雷や炎はあくまでも魔力によって編まれ

たものであり、そのためやり方次第ではレジストすることもできるし、なによりその見た目に反して威力はそれほどでもない。これは、魔力で編まれた物質は完全にはその物質の性質を再現することができないという法則によるもので、例えば魔力によって編まれた雷は、本来の速さで進んだりできないのだ。

だが、『魔力の完全物質化』は文字通り魔力を完全に物質へと変化させることができる。この技術を用いて雷属性の『魔法の射手』を使えば魔法の射手は雷速で飛ぶし、光属性ならやはり光速で飛ぶ。僕は影と闇の性質に特化しているのであまり使い道はないが、闇の性質を流転させ、さらに『魔力の完全物質化』を行うことによって雷を具現化することはできる。ただ、この技法は使うたびに全身に激痛が走るので、あまり好きではない。

「……本来なら習得には10年近くかかるけど、死ぬほど痛いのを我慢できるなら一瞬で覚えることもできるよ。ただ、あまりの痛みに本当に死んでしまう可能性も少なくはないから、おすすめはしないけど」

僕自身は、この技法は闇属性魔法の応用だったこともあって、わずか7年近くで習得できたが、タカミチなら下手をすれば10年以上かかる。が、少々強引な方法を使えば短時間での習得も可能だ。

特殊な術式を用いて、タカミチの体に流れる魔力を僕が変化させ、『魔力の完全物質化』を行うという手法なら、短時間で『魔力の完全物質化』の感覚をつかむことができる。だが、これは文字通り「死ぬほど」痛いし、そもそも『魔力の完全物質化』は数百年前に滅んだ技術とされていたので、文献の中で半ば御伽噺的に扱われてい

るだけなのだ。

「弱いころは、敵に捕まって死ぬ一歩寸前まで行くような拷問にかけられたこともあるんだ。それに、僕は絶対に守るべきものを残して死んだりはしない」

並々ならぬ決意を湛えた目で、タカミチは宣言した。

「……そう。じゃあ、始めるよ」

マジエーレ師に教えられた、他人の魔力に干渉する術式を発動し、タカミチの魔力を掌握する。ちなみにこの魔法は、相手が抵抗した場合簡単に解除されてしまうので実戦には向かない。

タカミチの額に手を当て、目を瞑って魔力の流れを捉える。数分ほどを費やして完全に魔力の流れを制御できる自信を得ると――タカミチの魔力を外側に放出し、彼の魔力属性である『火』を具現化させる。

「ぐつ——あ あ あ あ あ あ あ あ あ
く あ あ あ あ あ あ あ あ つ、ぎ あ あ
あ あ つ、あ あ あ あ あ あ あ あ あ

」

タカミチの　いつそ断末魔なのではないかというほどの悲鳴が響き渡る。全身からあふれ出す魔力を『火』として具現化している。あらかじめ防護の護符を持たせておいて正解だった。

全身を淡い光が包み込み、肉がえぐれて血まみれになっている箇所がほとんど治療されていく——それと同時に、タカミチはどうやら眠ったようだった。魔力制御の術式を解き、砂浜にタカミチを横たえる。

彼の治療をして、魔力回復薬を飲ませてから別荘内で10時間が過ぎた。ようやく目を覚ましたタカミチに、祝福の言葉を送る。

「おめでとう、これで第一段階はクリア、あとはひたすら修行あるのみだよ」

「ありがとう、さっきは本当に死ぬかと思った——できれば、もう二度と体験したくないね」

そう言つて、ブルツと体を震わすタカミチ。見ているこちらまで激痛に苛まされそうなほどの痛がりっぷりだったから、彼がどんな試練に耐えたのかは想像を絶する。正直、他人のため、正義のためにここまでできるタカミチは、本当の意味で『英雄』なのだろうと、ふとそんなことを思った。

「それで、次は何をすればいいんだい？」

「手から魔力を放出して、それが『火』に変わる様子をイメージしてみて」

『魔力の完全物質化』を覚えるということは、体内に魔力を物質に変換するための特殊な魔術式を刻み込むということだ。僕は前世の世界で言う、型月世界の『魔術回路』と同じようなものをイメージしている。使用するたびに全身に痛みが走るということもあって、両者は中々似ていると常日頃から思っている。

「なるほど、こうかな——ぐっ」

タカミチが魔力を変換した瞬間、一瞬だけ手のひらから炎が噴出し、すぐに収まった。

「なるほど、使ったびにこんなに痛いんじゃない、使い手が少ないわけだ——パリン、これは完全にモノにできるまでどれくらい時間がかかるんだい？」

「自分の魔法性質なら2週間あれば完璧に扱えるようになるけど、それ以外の性質は——具体的に、どんな属性が使いたいのか？」

「『地』と『風』、『雷』を」

「それなら全部マスターするのに大体一年くらいだね——だけど、咸卦法との組み合わせは僕でもわからないから、自力で模索するしかないね」

とりあえず『火』を完璧に制御できるようになれば、自分の具現化した『火』で自分を傷つけることは無くなるし、居合い拳に炎をまわけて飛ばしたり、あるいは火属性の魔法をある程度まで無効化できたりするので、相当強くなれるだろう。咸卦法との併用ができるようになれば、タカミチは拳を振るうだけで上位古代語魔法並みの威力の一撃を放てるようになるはずだ。

「よし、それじゃあ僕は修行に入るよ。パリン君、本当にありがとう」

そう言って、タカミチは修行を始めた。一心不乱に、鬼気迫る集中

力でもって修行に打ち込んでいる。

「……僕も、あまり差を付けられないように頑張らないと」

そう呟いて、僕も修行を始める。今のところでは僕の実力は本気を出したタカミチと同じ位だが、この分ではうかつかしているところだ。という間に差をつけられてしまいそうだ。

そう考えて、僕もまた修行を始めた。

22話（後書き）

感想・評価などいただけると嬉しいです

23話（前書き）

エヴァ編開幕。3～4話ほどの予定

23話

翌日、始業式を終えて3・Aの担任・副担任となったネギと僕は、3・AでHRを行っていた。

3・Aの騒がしい面々をなんとか制して、連絡事項を伝え終わったそのとき、ネギが一瞬だけびっくりしたかのように教室の左奥――真祖の吸血鬼のほうを見た。どうやら闇の福音がネギに殺気を飛ばしたらしい。兄さんは一般の魔法使いよりは少し強い程度だし、これまで平和に暮らしてきたから殺気への耐性がほとんどないのだ。

「そ、それでは今日は身体測定なので、皆さんすぐに脱いで準備してください！」

わけのわからないことを口走って、しまった、という顔になるネギ。僕は本能的に危険を察知して、教室の外に退避した。

「『ネギ先生のえつちいー！』」

予想通り、僕が教室を飛び出してから数瞬後に生徒たちの声が教室に響き渡った。

「すいませーん！まちがえましたー！」

ネギがあわてて教室から涙目で飛び出してくる。教室では、そんなネギを皆で笑っていた。こうやって生徒に慕われているあたり、僕とは違って人をひきつける才能があると思う。

「ははは、災難だね、兄さん」

「うう、また生徒にからかわれちゃったよ……」

ネギが落ち込むのを見てひとしきり笑っていると、ネギの後ろの廊下から一人の女性とがかけてくるのが見えた。

「先生―っ、大変や！まき絵が、まき絵がつ！」

「佐々木君がどうかしたのかな？」

一瞬固まったネギを押し分け、女生徒に落ち着いた声で聞いた。

「桜通りで倒れてるところを見つかつて、今保健室にいます！」

「えっ！ウソっ、大丈夫なの？」

3 - Aの教室から何人が生徒が飛び出してきた、あわてて質問攻めにする。

「騒がしい、少し静かにしなさい。3 - Aの中で特に佐々木君と仲がよかったものは着いてきなさい、僕とネギはこれから保健室に向かう。ほかの生徒は僕たちが帰ってくるまで教室でおとなしくしているように」

騒ぐ3 - Aを制して、ネギと一緒に保健室へと急ぐ。佐々木君と親しい大河内君と和泉君、明石君も一緒についてきた。

保健室に駆け込んで、先に来ていた源先生に病状を聞く。

「保健室の先生に聞いたら、ちょっとした貧血だそうよ。今日は無理しないほうがいいけど、明日には治ってるって」

「よかったあ、たいしたことなくて……」

源先生から病状を聞いた明石君が、安堵のため息とともにそう漏らした。ほかの二人も、コクコクと頷いている。

佐々木君は一見ただの貧血のようだが——しかし、首筋には魔力の残り香をかすかに感じる。

ネギと顔を見合わせ、とりあえずはHRに戻ることにした。話し合う時間は昼休みにでもとればいい。

その日の授業を終え、職員室での仕事を終えてからネギと合流し、話し合う。

「佐々木君の首筋に感じられた魔力、あれは人間のものじゃなかった——貧血で倒れていたこと、桜通りの吸血鬼の噂、首筋の魔力。多分、犯人はうちのクラスのマクダウェルだろう」

「エヴァンジェリンさんが？名簿には、タカミチが困ったときに相談しなさい、って書いてくれてるけど……」

「彼女はタカミチの知り合いでもあるが、同時に魔法世界では60万ドル級の賞金首だったこともある真祖の吸血鬼だ。今はサウザ

ンドマスターによつて麻帆良に縛られているみたいだけど、それでも吸血鬼であることに変わりはない。十中八九、犯人は彼女で間違いないと思うよ、兄さん」

ちなみに、ネギには僕は13課に所属していることは伝えていない。伝える必要もないし、そもそもネギは13課の存在自体知らないだろう。

「でも、それだけで生徒を疑うのはよくないと思うから……今夜から、桜通りを中心に見回りをしようと思う」

「じゃあ、僕も夜は使い魔を飛ばして探ってみるよ」

そう言つて、ネギと別れて自宅へと向かう。うろ覚えの原作知識では、最初に闇の福音と戦うのは今夜。一般人を巻き込まないことを最優先に、闇の福音の戦力の低下、つまりは従者の破壊を行おうと考えている。

封印状態の吸血鬼など、たとえ満月であろうと恐れることはない。それよりも何倍も強い力を持った吸血鬼と戦ったこともあるし、従者に関しても、近接戦闘で機械に負ける可能性などないに等しい。

夜になったので、桜通りの近辺に偵察用の使い魔を4体配置し、自分のはるか上空で使い魔に乗って監視を行う。

監視を始めてから一時間ほどたったとき、ようやく動きが見られた。3-Aの宮崎がたまたま一人になったところを闇の福音が襲い――ネギが、すんでの所で宮崎を救出した。共有しているのは視覚だけなので何を言っているかはわからないが、それよりも今は宮崎と、

音を聞いて駆けつけた神楽坂たちへの対処を優先しなければ。

ネギが宮崎を神楽坂たちに押し付け、闘争の場所を他へ変えた後――上空から飛び降り、神楽坂たちの目の前へと降り立つ。

「パリン先生――？」

「悪いが、記憶を改竄させてもらっ」

そういうと同時に、無詠唱で幻術を発動し、そこから記憶改竄の術式を発動させる。しばらくはぼんやりとするはずだが、これで宮崎が襲われたことも僕のこと、覚えていないだろう。

「さて、ネギは――」

ちらりと、ネギの魔力を目印に彼の場所を探す。と、ネギは寮の屋上で闇の福音と対峙しているところだった。

闇の福音の従者が現れたのを見て、『影の転移門』を発動し、ネギの後ろに出現する。

「……つまり、パートナーのいないお前では私たち二人には勝てないということさ」

「なるほど、ならば僕が参戦すれば勝機はあるわけか、吸血鬼」

驚いた表情のネギをかばうように前へと進み出て、ジャッカルを抜く。

「くっ、加勢か……茶々丸、」

「了解しました、マスター」

従者がいきなり僕に殴りかかってくる。だが、そんな遅い攻撃があるはずもない。

後ろのネギに攻撃があたっては元も子もないので、カウンターで従者の鳩尾に掌底を叩き込み、よろめいたところにジャッカルを3発撃ち込む。

「茶々丸っ！」

「マ、マスター……」

制約によって吸血鬼には手を出せないのも、従者を徹底的に破壊する。続けて3発の銃弾を撃ち込み、さらにリロードしてもう6発。それだけで、機械仕掛けの従者は動かなくなった。

「貴様、よくも茶々丸を……！」

「おっと、動くなよ吸血鬼。そこを動けば、従者のメモリーデータを完全破壊する」

そう言つて、従者の頭部にジャッカルを突きつけ、影の倉庫から特製の手錠を取り出す。これに拘束されれば、化物は完全に魔力を扱えなくなるという、13課でよく使われるマジックアイテムだ。

手錠を吸血鬼のほうに差し出し、脅すように引き金に指をかけると

——吸血鬼は、血が出るほどに唇をかみながら、ゆっくりと手錠を自分に手に嵌めた。壊れてバラバラになっている機械じかけの従者は打ち捨てておく。

「さて兄さん、マクダウエルを学園長のところに連れて行こうか」

「……そうだね、見逃してあげたいけど、さすがにこの状況じゃ無理だね。行こうか、パリン」

ネギは闇の福音から目をそらし、言った。

「じゃあ、乗ってくれ」

多人数が乗れるように大きめの影の使い魔を作り出し、闇の福音とネギを乗せ、学園長室へと向かう。

黙り込んでいるネギと吸血鬼を引きつれ、夜遅いというのに煌々と電気のついている学園長室の扉をノックする。

「パリン・スプリングフィールドです、生徒に対する暴行未遂の現行犯を連れてきました」

「……うむ、入ってくれ」

学園長室では、学園長が一人机に向かっているだけだった。

「中等部3 - Aのマクダウエルです。学園長、処分はどうしましょう？生徒に対する暴行未遂と教師に対する理不尽な暴力、および魔

法の隠匿の無視など、とても無視できるような罪ではありません。退学が妥当かと思いますが」

「パリン君、君はまだ教育実習生で、修行中の身じゃ。エヴァはわしがあずかる、君たちはもう帰って寝なさい」

吸血鬼をかばうつもりなのか、強引に話を終わらせようとする学園長。

「で、でも学園長！マクダウェルさんは宮崎さんを襲っていたんですよ！」

僕の後ろにいたネギが、学園長に抗議する。

「駄目なものは駄目じゃ、わしは学園長なのじゃ。君たちも教師である以上、したがってもらうぞい」

不気味な薄ら笑いを浮かべながら、そんなことを言う学園長。半ば予想していたことだが、やはり猛烈な怒りを感じる。思わず、齒軋りの音を立ててしまった。

「さ、エヴァの手錠を外して、帰りなさい」

「……チッ」

舌打ちして、吸血鬼の手錠を外し、荒々しく部屋を出る。ネギも怒った様子で僕の後を着いてきた。

「あのままじゃ、宮崎さんは殺されていたかもしれないのに。学園

長はマギステル・マギじゃなかったのかな？」

「さあ、僕にはよくわからないな。とりあえず、今後は今日みたいなことが起きないよう気をつけなきゃ」

学園長に対する不信感をあらわにして、ブツクサと文句を言うネギの気をそらすように言った。

「そつえばパリンは強かったね……僕は情けないところを見せちゃったかな」

「お師匠様やタカミチが鍛えてくれたからね。大丈夫、ネギだつてサウザンドマスターの息子なんだから、がんばればすぐに強くなれるさ」

本音が半分、嘘が半分だ。ネギは魔法に関してなら僕より才能豊かだが、いかんせんいい師匠がいない。鍛えてくれる人がいなくては、原石は宝石にはなれないのだ。

そう思ってから、ふと、アルのことを思い出す。闇の福音は討伐するつもりだし、ネギには化物などに師事してほしくはないから、この件が片付いたらアルに紹介して、彼に弟子入りさせるのはどうだろうか、と思案する。なかなか悪くはなさそうな案だ。

「まあ、今日のところはとりあえず帰ろうか。明日も学校だし、いざとなったら僕が駆けつけるから安心してよ、兄さん。そうだ、吸血鬼に効くお守りを持ってるから、渡しておくよ」

そう言つて、懷から宝石がちりばめられたロザリオを取り出す。僕自身が高度な祝福を重ねがけたもので、これをもっていれば多少はマシになるはずだ。

「ありがとう、パリン。僕も早く強くなって、パリンみたいになりたいなあ」

昏い表情で、ぼそりとネギがつぶやいた。やはり、弟に助けられたのは悔しかったのだろう。

その後、ネギとは別れ、僕は自宅へと戻った。

24話

吸血鬼を学園長に引き渡した3日後、学校に出勤すると、学園長からの書状が机の上においてあった。開封して読んでみると、どうやらマクダウエルも反省してるようだから今回の件は不問にする、とのことだった。クソが、と小声ではき捨て、気持ちを切り替えてデスクへ向かう。

職員室で宿題のチェックを行っていると、超と葉加瀬がやってきて、茶々丸は損傷がひどくて修理の必要があるのではらくは休みます、来週の月曜からは復活すると思います、と報告を受ける。2人とも茶々丸が何者かに襲われて壊されたことに憤っているようだった。

宿題のチェックを終え、ギリギリに出勤してきたネギと一緒に職員朝礼に出る。最初のころ、ネギは生徒と同じ時間に登校して職員朝礼には出席しなかったが、新田先生にそのことでしかられて以来、毎日欠かさず職員朝礼に出席するようにしている。基本的に注意すればすぐ態度を改めるので、新田先生の細やかな指導を受け、ネギは日に日に人間的な成長を遂げている。

職員朝礼を終え、ネギと一緒に3・Aへと向かう。まだ3日前のことを引きずって沈んでいるだろうか、などと気になっていた。が、注意してみれば少し元気がないように見えるかもしれないという程度で、少なくとも外面はとりつくろえているので教師としては及第点だろう。

順調に授業をこなし、放課後になった。

昼休みに、結界を越えて侵入者が入ってきたようだが、あいにく学校から出ることはできなかったので逃してしまった。まあ、学園の敷地内にそれほど強い魔力や気は感じられないから、おそらくは式神か何かの類だろう。さして脅威ではないので、ほうっておくことにする。

久々に早く帰宅し、自宅で魔法書と呼んでいると、ネギから電話がかかってきた。

「パリン、ちょっと相談したいことがあるんだけど、これから女子寮の前に来てくれない？」

「べつにいいけど……魔法関係？」

「うん、知り合いのおこじょ妖精がさつき来たんだけど、さすがにアスナさんやこのかさんと一緒に住んでるのに飼うわけにはいかな
いかな、って。詳しくは会ってから話すよ」

女子寮の前に着くと、すでにネギはそこにいた。肩には胡散臭い小動物を乗せている。

小動物が口を開きかけたのを見て、あわてて認識阻害と視線逆誘導の魔法を使い、ネギに近づく。

「へへっ、お初にお目にかかりやす。おいら、ネギの兄貴に昔世話になったことのある、オコジヨ妖精のアルベル・カモミールという者でさあ。ネギ兄貴の弟君だということで、今後ともよろしくお

願えます」

猛烈に違和感のある、江戸前な口調で話すオコジヨ。僕が認識障害の魔法を使わなかったらどうしたのだろうか。僕たちの周囲には今のところ人影はないが、それでも誰が聞いているかわからないのに。

「カモ君が言うには、僕にはパートナーが必要ってことらしいんだけど、よかったらパリンにパートナーになってもらおうかな、って」
そう言つて、上目遣いでこちらを見つめてくるネギ。

「うーん、仮契約かぁ……申し訳ないけど、辞退させてもらつよ」
そもそも、僕にメリットがないのだ。魔力による身体強化は自前でできるし、一応マジエーレ師と仮契約しているからアーティファクトも持ってるし。

「どどど、どうしてっすかパリンの兄貴！」

「別に仮契約なんてしなくても封印状態の吸血鬼くらいは狩れるし、僕にメリットがなさ過ぎる」

「で、でも身体強化や魔力供給はそれなりに使えるはずですよ！」

「いや、僕も魔法使いだから身体強化の魔法くらい使えるし、肉弾戦も得意だから魔力がなくても何とかなるし」

それでもしつこく食い下がってくるオコジヨをつまみ上げ、ジャッカルを突きつけて脅す。

「これ以上しつこくするなら、どてっ腹に風穴開けてもいいんだよ？」

「すみませんでした」

頭の悪い会話を繰り広げた後、ネギに向き直って言う。

「というか、そもそもなんでパートナーが必要なのさ？」

「やっぱり、マギステル・マギになるためにはパートナーがいなきゃだめかな、って……」

少し落ち込んだ顔で答えるネギ。

「それって、目的と結果が入れ替わってるんじゃない？パートナーを得てマギステル・マギになるならいいんだろうけど、マギステル・マギになるためにパートナーを、ってというのはどうなのさ。本当のマギステル・マギってというのは、何もしなくてもパートナーができるものだと思うよ」

そう、ネギやカモミールの考えは本末転倒だ。確かにマギステル・マギにはパートナーがいるものなんだろうけど、パートナーがいればマギステル・マギになれるわけじゃない。そもそも、仮「契約」はお互いがお互いを守ることを前提として結ぶものなのだから、自分の身を守ることすらできないネギがパートナーをつくるうなど、百年早い。

「で、でも、実際にマクダウェルさんには勝てなかったんだし、やっぱりパートナーがいないと……」

食い下がるネギに、少し頭にきたので説教をする。

「なんでパートナーにこだわるの？別に兄さんの事を守らないって言うてるわけじゃないんだから、いいじゃないか。僕は前衛も後衛もこなせるし、封印状態の吸血鬼とその従者なんて、目を瞑ってでも相手にできる。そもそも、兄さんがしゃばる必要はないんだよ」

「確かにそうかもしれないけど、僕は先生として生徒を――」

「ろくに力もないのに生徒を守る？そういう台詞は、強くなるために努力してから言うべきだね。今の兄さんじゃ逆立ちしたってあの吸血鬼には勝てないし、勝つためにパートナーを、っていうのはパートナーを道具としか見てない最低な考えだよ。とにかく、僕は兄さんのパートナーになるつもりはないし、兄さんにパートナーは分不相応だ。じゃ、僕は帰るから」

説教しているうちに、大切な人を守るため文字通り血を吐きながら強さを求めたタカミチのことを思い出して、柄にもなく熱くなってしまった。僕の力は半分以上はズルで手に入れた力だが、闇属性の魔法や使い魔の操作、協会魔法は間違いなく自分で努力して手に入れたものだ。だからこそ、強くなる努力を放棄して安易な手段で戦力の増強を図るネギがたまらなく鬱陶しかった。

なにやらわめいているネギたちに背を向け、自宅に戻る。少し熱くなりすぎたことを悟ったので、一人で頭を冷やしたかった。

学園長の計画を肯定するのは癪だが、確かにネギには実戦経験が圧倒的に足りない。ネギが英雄を目指すのなら、彼に何かあつてはネカネ姉さんが悲しむだろうから、ネギを徹底的に鍛えなくてはいけない。だから、闇の福音と戦闘させるのはいい手段ではあるのだと思う。

そんなことを思いながら自宅で魔法書を読み、夜は警備のシフトが入っていたので春日君と一緒に化物どもを狩り、侵入者をひつとらえてストレスを解消した。僕がいつもよりも憂鬱そうな顔をしているのを見て、何も言わずに肩を叩いて励ましてくれた春日君には、感謝してもしきれない。彼女のおかげで、だいぶ楽になった。

「せんせーが何に悩んでるのは私には関係ないし、関係したくないけどさ。せんせーは、馬鹿みたいに突撃して敵を蹴散らしてるのが似合ってると思うよ。頭いいわけじゃないんだから、悩んだってムダムダ。へんなこと考えないで、直感で行動すりゃいいじゃない」

シフトが終わってから、春日君はそう言った。

「うん、そうだね。ありがとう、春日君」

「ははは、感謝の印は食券20枚でよろしく。じゃ、私は先に帰っ

てるねー」

警備のシフトは明け方までだったので、時計を確認するとすでに朝の5時だった。家に帰ってシャワーを浴び、スーツに着替えてから学校に出勤する。今日は土曜日だが、部活動などは普通にやっている。学校は開いている。片付けたい書類がいくつかあったので、休日だが出勤するのだ。徹夜明けで眠いが、アリアドネー時代はよく勉強時間が足りなくて徹夜することもあったし、大丈夫だろう。

出勤して一時間ほどすると、職員室に神楽坂君と近衛君が駆け込んできた。休日だというのに、何の用事だろうか。

「パリン先生っ！ネギ先生が行方不明ですっ！」

「行方不明？つまり、どういうこと？」

「それが、昨日の夕方に外に出かけたきり帰ってこないんです！携帯電話に電話しても通じないしっ、クラスの人にも電話して聞いてみたけど、誰も見てないって」

「わかった、僕のほうでも探しておこう。知らせてくれてありがとう」

神楽坂君と近衛君に礼を言って、書類をまとめて鞆に突っ込み、職員室を出る。

麻帆良学園都市は広いが、索敵に特化した影の使い魔を50体動員すれば、日付が変わるまでには見つけることができるだろう。校舎の屋上で人払いと認識阻害の結界を張り、さらに幻術を使って僕が

いないように見せかけ、影の使い魔を一斉に放つ。

長期戦になると踏んでいたのも、普通に人間に擬態させた使い魔を超包子まで走らせ、肉まんを数個買わせる。朝から何も食べていないので、おなかがすいているのだ。

肉まんをもぎゅもぎゅと食べながら、使い魔に時速40kmの速さで上空や地上を探し回らせる。赤毛で眼鏡をかけた少年を捕捉したらずくにわかるように術式を組んだので、肉まんを食べ終わると給水塔の上に寝転がって、眠り始めた。

突然、頭の中でサイレンが鳴り始めたので飛び起きる。すると、あたりはすっかり暗くなっており、あわてて腕時計を確認すると夜の10時だった。ネギを発見した使い魔と視覚を共有すると、ネギは3-Aの長瀬君と一緒にテントで寝ていた。何があったのかは知らないが、明らかにネギは杖を握り締めて寝ているし、もしかしたら魔法がバレたかもしれない。

視覚を共有した使い魔の場所を確認すると、影の倉庫からマジウスの杖を取り出し、転移魔法を使う。スーツ姿で杖を握り締めたまま山の中に飛び出した僕は、あわてて周囲を確認する。長瀬君とネギが寝ているテントは、僕の背後にあった。

「シラク」

辺りが暗かったので、とりあえず明かりをつける呪文を唱えた。マギウスの杖の水晶がほんのりと光る。

テントの中に長瀬君とネギがいることを確認すると、テントから少し離れたところまで歩き、携帯電話を取り出して神楽坂君の部屋に電話をかけた。

「もしもし、パリンです」

『パリン先生！ネギ先生は見つかりましたか？』

「ああ、長瀬君と一緒にキャンプをしていたようだ。僕が叱っておくから、安心してくれ」

『ああ、良かった。ありがとう先生、わたしこれからみんなに知らせてきます！』

興奮した声で言って、神楽坂君は電話を切った。

通話を終了し、ふと後ろに気配を感じると、そこには長瀬君が立っていた。少し強いだけの一般人だと思っていた彼女に背後をとられたことになり驚く。

「その杖を見るに、どうやらパリン殿も魔法使いでござったか。いやはや、本当にいるものなのでござるなあ」

しげしげと、マギウスの杖を眺める長瀬君。やはり、ネギはとうとう魔法バレをしてしまったらしい。

「安心するでござる、魔法使いの存在こそ知らなんだものの、拙者は甲賀者。一応は、裏社会に生きるものでござるから、ネギ先生がおこじょとやらにされることはないかと」

そう言つて、にっこりと微笑む長瀬君。ネギはいつたいどこまでしゃべったのだろうか。

「聞けば、ネギ先生はエヴァ殿に命を狙われているとのこと。忍びは他人の戦にはかわからぬが掟でござるが、世話になっている恩師が命を狙われているとあつては、助太刀くらいはさせてもらうでござるよ」

「命にかかわるかもしれないということとはわかつているのか？」

「拙者はまだまだ半人前でござる。技術が云々ではなく、仕える主を持たぬ忍びは皆半人前。今日一日をネギ坊主と過ごしてみて、今はまだその器ではないものの、将来が楽しみだと思つた故、しばらくはネギ坊主のそばにしようと考えているでござる」

何があつたのかは知らないが、この一日で相当打ち解けたようだ。基本的に淡白な人付き合いを好む長瀬君がここまで言うとは、ネギには人誑しの素質があるのかもしれない。

「君がそうと決めたなら、僕は応援することしかできないが——まあ、がんばってくれ」

そう言つて、肩をすくめる。ネギが長瀬君をパートナーにすること

に決めれば、タカミチが必死になって守ろうとしている神楽坂君も裏の世界に関わらなくても済むかもしれない。だから、あまりほめられたことではないとわかってはいても、長瀬君とネギが親しくなったのは喜ばしいことだと内心思っていた。

「では、拙者はテントに戻るでござる。パリン殿はどうするでござるか？」

「僕は自宅に戻るよ。魔法を使えば、自宅までは一瞬だからね。それじゃ、ネギをよろしく頼む」

「あいあい」

長瀬君にネギを託し、僕は自宅へと転移した。

24話（後書き）

ネギに楓フラグが立ちました。 いや、作者の私見ですけどあの二人
って相性いいと思うんですよ。 僕、楓好きですし。

25話（前書き）

次の話で闇の福音編完結。今回、パリンがまともに詠唱します。

25話

月曜の朝になり、ようやくネギは戻ってきた。

何があつたかは知らないし、知りたくもないが、長瀬君と過ごした二日間はネギに大きな影響を与えたい。職員室に来るなり、僕のところに来て頭を下げたのだ。

ネギと仲直りし、紅茶を啜りながら書類を片付けていると、職員室に吸血鬼の従者が訪れてきた。どうやら、超君と葉加瀬君が直したらしい。

「ネギ先生、パリン先生、先週の欠席届けを提出しに参りました。それと、今日はマスターは風邪を引いているので休みます」

「わかりました、茶々丸さん」

そう言つて、欠席届を受け取るネギ。

「それと、彼女に伝えておいてください。僕はいつでもあなたと戦う準備はできてますから、風邪が治ったら闘いましょう、と」

「わかりました。では、また教室で」

吸血鬼の従者は一礼して職員室を去っていった。それにしても、真祖の吸血鬼が風邪で寝込むとは。ざまあみろ。

「しかし兄さん、勝算はあるのかい？おそらく、あの吸血鬼は明日

の停電に乗じて結界を解除する心積もりだ。いくら僕でも、封印解除状態の闇の福音には勝てる気がしないけど」

「メルディアナの禁書庫の本で覚えた、超高等殲滅呪文——アレを発動できれば、あるいは勝てるかもしれない。楓さんも手伝ってくれるって言うし、パリンと楓さんが時間を稼いでくれば、勝機はあるよ——本当はタカミチにも手伝ってもらおうかと思ったけど、今は出張中みたいだからね」

「おや、長瀬君を巻き込むのかい？あの娘も君の生徒なのに」

「エヴァンジェリンさんを放置すれば、そのうちもつとひどいことになるかもしれない——背に腹は変えられない」

どうやら、ネギは長瀬君を完全に「こちら側」へと引き込むことを決心したようだ。あの娘も元々一般人とは言いがたかったから僕も反対はしないが、ネギは本当に躊躇がない。

「そういうことなら、僕も手伝おう——それと、兄さんの魔法の師匠になれそうな人を知ってるから、吸血鬼退治が終わったら紹介するよ。サウザンドマスターの知り合いでもある魔法使いで、格闘術にも精通してるから兄さんの師匠にはうってつけたと思うよ」

「本当！？ありがとう、パリン！」

アルのことを伝えると、ネギは飛び上がって喜んだ。アルにも一応許可は取ってあるので、明後日の放課後に訪れる予定だ。

「ところで、あの吸血鬼はどうするの？——殺すのか、捕縛するか、決めておかないと。殺すなら対吸血鬼用の武装を用意するし、捕縛するにしても専用のマジック・アイテムが必要になる」

用意するも何も、それらはすべて影の倉庫に収納されているわけだが、ネギに聞いておく。どのみち、封印解除状態の真祖に手加減などできるはずもないが、意思の統一はしておかなくてはいけない。

ちなみに、吸血鬼を殺す計画はヴァチカンで既に準備を始めているので、今回の作戦で殺せなくてもなんら問題はない。

「まがりなりにも生徒だし、父さんのことを知っているようだったから、捕縛だけにしておくよ——それに、僕は吸血鬼とはいえ生徒を殺す気はない。茶々丸さんはメモリーさえ壊されなければ修復可能らしいから壊してもいいけど、エヴァンジェリンさんは捕まえるだけだ」

「了解。それじゃあ、決闘は明日になると思うから準備をおこたらないようにね」

兄さんに釘を刺して、再び書類仕事を始めた。

翌日、HRで停電に関する諸注意を伝え、一時間目の授業に向かうと教室を出ると、そこには吸血鬼とその従者がいた。

「今日の停電後、麻帆良大橋に来い。貴様ら兄弟に決闘を申し込む」

「承りました、エヴァンジェリンさん」

「首洗って待つとけよ、吸血鬼」

僕達二人はそれぞれ承諾の意を示し、時間がないのでで急ぎ足で一時間目の教室へと向かう。

吸血鬼への対策は既に整えてあるし、魔力をストックした宝石も僕の魔力の最大量のおよそ2倍ほど用意してある。また、ハルコンネンやジャッカル等の銃器についても整備を終えて、実弾も十分に用意した。速攻で従者を潰して、3対1でかかれば捕縛くらいには持ち込めるかもしれない。

学園長にこのことを話して対策をとらせるという手も考えたが、今回はネギに実戦経験をつませることを考えてその案はやめた。それに、あの腹黒爺が早々計画を諦めないであろうことは身にしてみて分かってる。

長瀬君とも話し、吸血鬼に関する情報を交換したり、戦略を練ったりした。彼女の使う影分身は吸血鬼をかく乱するには十分なレベルのようだし、前衛としては僕と相性がよさそうだ。

授業をこなして、放課後。麻帆良大橋にネギと楓君を来させて、下見と準備を行う。

「パリン、それは何？」

「これは祝福儀礼済みのクレイモア地雷さ。先にこの場所に来て、地雷を埋めた場所に吸血鬼かその従者を誘導したいから、長瀬君の影分身で何とかしてくれる？」

「あいあい、了解でござる。しかし、地雷とはこれまた物騒なもの

を使うでござるな」

「吸血鬼相手じゃ手段を選んでられないからね。捕縛を目的にするなら少なくとも4時間は持ちこたえなきゃいけないし、罠の類はできるだけ用意しておくべきだね」

認識障害と人払いの結界を張って、橋を掘り返して地雷を埋める。いくら真祖の吸血鬼といえど、体の再構築にはそれなりに時間がかかるから、エグイ罠は用意しておくに越したことはない。これまでの経験で、吸血鬼は再生中には動きが極端に鈍ることを知っている。ので、クレイモア地雷で動きを鈍らせて、その際に従者を破壊しようという作戦だ。従者を破壊してしまえば長瀬君の影分身と僕の影の使い魔による物量作戦で時間を稼ぐことはできる、かもしれない。

地雷を埋め終わり、時計を確認すると既に7時30分だった。停電まで後30分だ。

ネギはこの日のためにそろえた装備の点検をしているし、長瀬君もクナイや巨大手裏剣の点検をしている。クナイを使うなら、今度鉄甲作用を教えるかな、などと考えつつ、マギウスの杖を片手にあちこちに設置型の対吸血鬼用の罠を仕掛ける。これは人外にのみ作用するというステキな代物で、人外が近くに来たことを感知すると魔力弾を射出するのだ。当たればそれなりにダメージを与えるので、牽制としては上等な部類に入る。

まだ時間に余裕があったので、橋のあちこちに聖書の頁を貼り付け、簡易な結界を張る。人外を侵入させないためのものではなく、この結界の中に人外が侵入すると力が弱まるというものだ。破壊するには12枚の聖書の頁すべてを取り除かなければいけないため、あえて手を出しにくい橋の裏側に貼る。ついでに、聖書の頁を貼り付け

た周辺にも罫をいくつか設置する。

十分に準備が整って、最終的な打ち合せをしているところに、吸血鬼がやってきた。いつもの機械仕掛けの従者のほかに、趣味の悪い人形を抱えている。

結界にはいるととたんに顔をしかめたが、こみ上げる不快感を無視してこちらへやってきた。

「随分と不愉快な真似をしてくれるものだな、小僧ども」

「あいにく、一般人を襲うような誇りのない吸血鬼にはらう礼儀は持ち合わせてないからな」

仏頂面で文句を言う吸血鬼を挑発する。予想通り、顔を真っ赤にして怒ったようだ。

「さて、20時までではあと2分。ネギ、長瀬君、打ち合せどおりに頼む」

「わかったよ、パリン」

「了解でござる、にんにん」

緊張の抜けないネギと、泰然自若としている長瀬君。やはり、この

二人は相性がいい。

影の使い魔を30体召喚し、影の倉庫から武装を取り出して足元におく。ハルコンネンを扱える特別仕立ての使い魔は僕の傍に控えさせ、僕の後ろに立つ長瀬君とネギを守るように、祝福儀礼済みの近代兵器で武装した使い魔を整列させる。

「フン、桜咲や龍宮から聞いた話からてっきり剣士かと思っていたが……存外に器用なようだな。あの男の息子とは思えん」

「御託を並べてないで構えろよ、フリークス。ああ、殺したくてウズウズする」

化物と対峙する甘美な緊張感に体を震わせ、僕自身も黒鍵とジャッカルを構える。僕の言葉を合図に、長瀬君とネギもそれぞれ戦闘体制をとった。

「封印結界への電力停止——予備システムへのハッキング開始……成功しました」

従者がそういうと同時に、どくん、と、強大な魔力の波動が感じられた。

「あはは、ふはははは、そうだ、これこそが私の真の力だ！さあ決闘を始めるぞスプリングフィールド、銃を構えて杖を掲げろ、ああ、今夜はこんなにも月が美しい」

吸血鬼が両手を広げてそう言うと同時に、影の使い魔がパンツァーファウストを構え、発射する。

轟音とともに30発の対戦車擲弾が吸血鬼の足元に着弾し、衝撃で人形と従者を後方へと吹き飛ばす。

「ケケケ、久シブリニ動ケルト思エバイキナリコレトハ、手荒ナ歡迎ダ。御主人、コイツラヲヤッツケレバイインダナ？」

「油断するなよチャチャゼロ、金髪のほうはかなりの手練、忍者娘も同様だ」

吹き飛ばされた人形に警告する吸血鬼にジャツカルを6発撃つ。それと同時に、長瀬君のクナイとネギの魔法の射手が吸血鬼に命中する。が、予想通り障壁に阻まれ、傷つけることはかなわなかった。

「吸血鬼と機械は僕がひきつける、長瀬君は人形を、兄さんは長瀬君の援護を！」

春日君が今が上空から戦いの眺めているのを確認する。どうやら、彼女は戦いに参加するつもりはないらしい。

長瀬君の巨大な手裏剣が人形を襲い、それを人形が避けた所で魔法の射手が人形に命中する。中々いいコンビネーションだ。

「戦闘中に余所見とは余裕だな、パリン・スプリングフィールド！来れ氷精、爆ぜよ風精『氷爆』」

氷が出現し、僕に向かって爆発する。が、この程度なら避けるまで

もない。

「Whoever will save his life shall lose it: and whosoever will lose his life for my sake shall find it.」

早口で聖書の一説を唱え、教会魔法による防御の盾を形成する。

「教会魔法！？貴様、まさか、」

「ああ、神罰の地上代行イスカリオテ、ヴァチカン特務局第13課さ」

驚愕の表情で問う吸血鬼に、答える。ネギたちは遠く離れたところで人形と戦っているので聞こえる心配はない。

「どうした吸血鬼、能書きたれてねえでかかって来い！Hurry, Hurry!」

吸血鬼を挑発し、影の使い魔によって機関銃の一斉掃射を行う。機械仕掛けの従者は空に逃げようとバーニアを噴射して飛び上がったが、僕の投げた黒鍵によって頭部を貫かれ、墜落して動かなくなった。

強固な障壁を頼みに、銃弾の雨をもとめせず接近する吸血鬼——が、地上を走ったのが仇になり、ワイヤートラップによって仕掛けられたクレイモア地雷が作動する。

たとえクレイモア地雷といえど僕の張った盾は貫通できない。だが、

祝福儀礼によつて、吸血鬼の魔法障壁は簡単に貫通する。

500あまりの小さな鉄球によつて全身を蜂の巣にされた吸血鬼は、しかし驚異的なスピードで再生し始める。

再生する吸血鬼に黒鍵を3本投げ、両足と口に突き刺す。真祖に対しては再生速度を遅くさせる程度の効果しかないが、しかしそれでも全身に走る苦痛や口をやられたことによつて、5分は移動も詠唱もできないはず。

「Suffer the little children to come unto me and forbidd them not, for of such is the kingdom of God. Verily I say unto you, Whosoever shall not receive the kingdom of God as a little child, he shall not enter therein. And he took them upon his arms, put his hands upon them, and blessed them. And when he was gone forth into the way, there came one running, and kneeled to him, and asked him, Good Master, what shall I do that I may inherit eternal life? And Jesus said unto him, Why callest thou me good? the re is none good but one, that is, God. Thou knowest the comma

ndments, Do not commit adultery, Do not kill, Do not steal, Do not bear false witness, Defraud not, Honour thy father and mother. And he answered and said unto him, Master, all these have I observed from my youth. ²¹ Then Jesus beholding him loved him, and said unto him, One thing thou lackest: go thy way, sell whatsoever thou hast, and give to the poor, and thou shalt have treasure in heaven: and come, take up the cross, and follow me. And he was sad at that saying, and went away grieved: for he had great possessions. And Jesus looked round about, and said unto his disciples, How hardly shall it be for them that have riches to enter into the kingdom of God! And the disciples were astonished at his words. But Jesus answered them, again, and said unto them, Children, how hard is it for them that trust in riches to enter into the kingdom of God! It is easier for a camel to go through the eye of a needle, than

n for a rich man to enter into
the kingdom of God.”

かなり長い詠唱を終え、吸血鬼の周囲半径3mに僕が使える中でも
っとも強固な結界を張る。特別な祝福が施された聖書を半球状の結
界に貼り付け、吸血鬼を閉じ込めることには成功した。

ネギたちの方へ視覚共有をした使い魔を飛ばすと、どうやら追い詰
めているようだった。『影の転移門』でネギたちの戦場へと転移し、
加勢する。

「吸血鬼は封印結界に閉じ込めた、あれで少なくとも2時間は持つ
はずだ！」

「ありがとう、パリン！」

「パリン殿、お手柄でござるー！」

人形とは一端距離をとり、3対1で人形と対峙する。

「ケケケ、御主人八閉ジ込メラレタカ」

長瀬君と目を合わせ、黒鍵を投げる。それを避けた人形にクナイが
襲い掛かり、手に持ったナイフでクナイを弾き返した人形にネギの
呪文が襲い掛かった。

「光の精霊11柱。集い来たりて敵を射て。『魔法の射手・連弾・
光の11矢』」

魔法の射手が人形に命中し、人形がボロクズによって吹き飛

ばされる。そこに、さらに僕が追撃を加える。

「闇の精霊123柱。集い来たりて敵を穿て。『魔法の射手・連弾・闇の123矢』」

『炎』の性質を持った闇の矢が人形に襲い掛かり、人形を焼く。黒い炎が収まると、そこには一握りの灰が残っているだけだった。

「よし、これで吸血鬼の従者はなくなった。後は吸血鬼を捕縛するだけだ」

「うん、作戦成功だね、パリン。じゃあ、エヴァンジェリンさんのところへ向かうか」

「にんにん」

そう言って、僕達は吸血鬼のほうへ足早に向かうのだった。

25話（後書き）

主人公の立てた作戦が上手くいかないのがデフォルトになりつつあってなんだかアレですね。

26話

僕謹製の封印結界に閉じ込められた吸血鬼は、半球状の結界の中で歯軋りしていた。僕達が近づくと、なにやらこちらにわめいてくるもつとも、遮音の効果もあるから何を言っているかは聞きとれないのだが。

「さて、どうしようか、兄さん」

「結界の持続時間は2時間なんだよね？うーん、他の先生や学園長を呼ぶ、とか？」

「今は停電のせいで結界が解けてるから、先生方は侵入者の掃討で忙しいみたいだよ。多分、こっちに割ける人員はいないと考えたほうが妥当だね」

「拘束具は結界ごしじゃつかえないの？」

「うん、対吸血鬼用の手錠と猿轡を用意したけど、この結界は2時間が経過するまで解けないからね。結界が解けたら吸血鬼も魔力を開放されるだろう。罾をほとんど使い切ったし、従者を破壊された吸血鬼が手加減するとは思えない。さっきは手加減してみたんだからなんとか結界に閉じ込められたけど、今度は無理だと思う」

3人で考え込む。

「そうだ、茶々丸さんがいないなら4時間もたたないうちに結界は復旧するんじゃないかな」

「そういえばそうかもしれない。じゃあ、僕が吸血鬼を見張ってるから、長瀬君とネギは大学部の明石教授のところに行ってきてくれる?」

「わかった」

「あいあい」

頷いて、大学部へと向かうネギと長瀬君。

「さて、どうしたものかな……」

結界のほうを見やると、吸血鬼が必死に何事かを叫んでいる。聞こえていないと気付いていないのか、あるいはわかってても叫んでいるのか。どのみち、化け物の言うこと何ぞ聞きたくもないので、橋全体に張り巡らした結界を更に強化する。

腕時計を確認すると、現在時刻は21時15分。結界はあと1時間半ほど持続する。

この結界は重ねがけはできないし、結界が切れた瞬間に吸血鬼が襲い掛かってくるであろうことは想像できるので、別の策を考えなくてはいけない。

とりあえず先程破壊した機械仕掛けの従者を完全に破壊しておこうと、マジウスの杖を握って無詠唱の『魔法の射手』を発動させ、『炎』の性質を持たせた闇の矢によって燃やす。人肉と違って中々燃えにくかったが、影の倉庫の中から業務用のサラダ油を取り出してぶちまけると、面白いくらいに燃えはじめた。吸血鬼が結界に触れた手が焼け爛れるのも気にせず、結界から脱出しようとあがいている

のを見て、大声で笑ってやった。殺せないのは残念だが、こうやって精神的に苦痛を与えられるだけでもだいぶ気分がいい。

10分ほどして、従者が完全に燃えたころ、そういえばネギは茶々丸を殺したくないといっていたな、と思い出す。まあ、純粋なネギのことだ、適当にごまかせばなんとでもなるだろう。

結界の中に影を作ればそこから影の魔法が使えるのではないかということに気づいたので、さっそく実行に移す。封印結界の中では闇の福音はその力のほとんどを封じられ、一般人とかわからない能力しかもたないので、上手く行けばこのまま拘束できる。

結界内の影からはやはり魔法が使えたので、そのまま影を触手状に変形し、四肢を縛り上げ、猿轡をかます。こういう精密操作は得意なほうなので、ついでに目隠しもした。

結界内の影から拘束用の手錠を取り出し、吸血鬼の手にかける。これで、結界が解けても封印状態は持続されたままになるはずだ。

ちょうど手錠をつけて、ついでに銀製の猿轡を口にはめたとき、長瀬君とネギを背負って凄いスピードで走ってきた。ネギは杖に乗っているが。

「パリン！明石教授が言うにはあと30分もあればエヴァンジェリンさんの魔力を封じる結界は復旧するって！」

「あー、悪いけど兄さん、封印処理ならもう済ませちゃったよ。結界の中の影から魔法が使えたからさ、『影の倉庫』から封印用のマジックアイテムを取り出して封印しちゃった」

「あ、そうなんだ……」

「無駄足だったでござるか……」

意気消沈する2人をなだめて、影の倉庫から椅子とテーブルを取り出して3人で座る。

「あれ、そういえば茶々丸さんは？」

「あの従者なら、なんか自爆したよ。日本のロボットに自爆装置が付いてるのは知ってたけど、本当に見たのは始めてかも」

「うーん、できれば茶々丸さんにも反省してもらいたかったんだけどなあ……まあ生徒とは言ってもロボットだったし、別にいつか」

そう言つて、ころりとたまされるネギ。長瀬君はなにやら難しい顔をしているが、まあからくり人形なら仕方ないでござるな、と呟いて納得したようだった。何年もクラスメイトをやったならもう少し情が移つてるかと思つたが、案外そうでもないらしい。まあ、交流があつたようには見えないから当たり前といえば当たり前なのか。

その後、結界が解除されるまで優雅にティータイムを楽しみ、結界がきれたら吸血鬼を捕まえ、腰紐をつけて頭に袋をかぶらせ、学園長室まで連行する。ときおりすれ違う魔法先生や魔法生徒がぎよつとした顔でこちらを見てきたが、皆警備に忙しいようで無視して通り過ぎていった。

学園長室の前に到着し、扉をノックする。

「入ってくれ」

扉を開け、一礼して中に入る。

「学園長、今回の件はご存知かと思いますが、この吸血鬼はどうしましょうか？」

中に入るなり、単刀直入に用件を切り出す。

「うむ、明石君から報告は入っており。エヴァンジェリンくんが結界を解いて、君らに攻撃を加えたようじゃな」

「つまり、この吸血鬼は反省するどころか、反省するふりをして反撃する機会をうかがっていたわけです。どうするんですか、学園長？」

「……相応の処分はする。さ、君らはもう帰りなさい。エヴァンジェリン君の相手はわしがする」

「そ、そんな！学園長先生、いくらなんでも、それは」

重々しく帰るように言った学園長に、ネギが食い下がる。僕としてはこの吸血鬼を殺す算段は立っているし、学園長の対応も予想できていたので特に驚かなかったが、マギステル・マギを目指すネギにとって学園長の対応は容認しがたかったようだ。

「前回の学園長先生の対応は間違いだったんじゃないですか！どうしてそこまでしてエヴァンジェリンさんをかばうんですか！？」

「うむ、実はエヴァンジェリン君は君の父親——サウザンドマスターから預かっているのです、へたなことをするわけにはいかんのです」

愛想笑いを浮かべて、「サウザンドマスターから預かった」のくだりを強調する学園長。瞬間、ネギの表情が一変し、学園長をあわて問いただした。

「学園長先生、父さんがエヴァンジェリンさんを連れてきたって本当ですか！？どういうことなんですか！？」

「今から15年前、サウザンドマスターが警備員としてエヴァンジェリン君を連れてきての。そのころから学園は人手不足じゃったし、サウザンドマスターのお墨付じゃったから信用して警備員として雇ったのじゃ」

「父さんが、エヴァンジェリンさんを信用していたなんて……」

「最初は、エヴァンジェリンの呪いは3年で解く予定だったのじゃがな。6年前にサウザンドマスターが死んで以来、エヴァ君はずっと学園に縛られておるのじゃよ。15年間も束縛されたんじゃないから、これくらいは見逃してやってくれないかのう？」

一見人のよさそうな笑みを浮かべながら、しかし目の奥には爬虫類

じみた不気味な濁りを湛えて、学園長はネギを説得する。

「なるほど、15年も学園に拘束されたんじゃないかもしれないかもしれませんがね……学園長先生、エヴァンジェリンさんは今回は許してあげてください」

「フオッフオッフオ、言われなくてもそのつもりじゃ。ご苦労だったの、ネギ君、パリン君、長瀬君。さ、帰ってゆつくり休むがよい」

いとも簡単に説得されたネギに不安を感じながらも、学園長室を退出する。手錠は外さず、吸血鬼は学園長室に置き去りにした。

「ネギ坊主、本当によかったのでござるか？」

「うん、確かに襲われた人たちには申し訳ないけど、死人が出たわけじゃないし、エヴァンジェリンさんにも事情があったなら仕方ないよ」

「むむ、ネギ坊主がそういうなら拙者には異論はないでござるが……」

難しい顔をして、考え込む長瀬君。この娘もこの娘なりに、ネギに対して色々と思うところはあるのだろう。

「じゃあ、僕は帰るよ。兄さんも長瀬君も、寄り道しないでまっすぐに帰りなよ」

「じゃあね、パリン」

「また明日でござる、パリン殿」

2人と別れ、停電中の学園都市を歩く。しばらく歩いていると、街路樹の上から春日君が飛び降りてきた。

「いやー、せんせーも中々えげつないことするけど、吸血鬼つても凄いいんだね。全身蜂の巣なのに5分で元通りなんだもん、本当に化物だねありゃ」

やはり、使い魔を飛ばして戦いの経過を見ていたらしい。戦いを娯楽と割り切っている春日君らしい行動だ。

「ところで、学園の警備の方はいいのかい？ まだまだ侵入者は絶えないと思うけど」

「高畑先生がちょうど出張から帰ってきたから、生徒は休憩時間なんだよ。それより、せんせーもまだまだ体力あるでしょ？ 私敵に近づかれたら逃げなきゃいけないから、一人だと狩り効率悪いんだよね。手伝ってくれない？」

「まあ、魔力は余裕ないけど手伝いくらいなら大丈夫かな」

頷いて、念のために魔力をこめたトパーズを一粒飲み下す。これで魔力は最大量の30パーセントほどまでには回復しただろう。

「警備する地区は北部の山岳エリア、侵入者の傾向としては関西の陰陽師と図書館島目当てのとレジャーハンターが大半、だってさ。殺してもいいけど、できるだけ捕縛するようにな、ってシスター・シヤークティは言ってた」

「了解。じゃあ、向かうか」

そう言つて、2人乗り用の使い魔を作り出し、学園都市北部へと向かう。

「うわー、これはひどい……」

空から眺めると、学園都市の境界付近ではあちこちで爆発や閃光、火柱などが出現している。認識阻害結界は張つてあるようだったが、先生方も存外に苦戦しているようだ。

使い魔に乗つて空から春日君が狙撃し、近づいてきた敵を僕が黒鍵やジャッカルで撃ち落とす。たったそれだけの単純な戦法だったが、しかし面白いように戦果を上げられた。夜だから視界は悪いが、梟に似せた使い魔を使役する春日君にとってはこの程度の暗さなら問題はないらしい。

「ヘッドショットキル、今晚だけで31キル目。うひゃー、たまんないッスね」

地上ではガンドルフィー二先生と刀子先生が侵入してくる敵を次々に撃破している。が、いかんせんエリアが広すぎる割に人手がたりない。広範囲殲滅呪文を使えばいいのだが、あいにく魔力も残り少ないから使いたくないし、そもそもこれは持久戦なのだ。可能な限り魔力は節約しなければいけない。

上空からでは黒鍵を投擲しても命中しないので、『風』の性質を持

たせた『魔法の射手』で侵入者を切り裂いていく。『風』の性質は捕縛も得意だが、切断もまた同じように得意なのだ。

2個目の宝石を飲み下して、これは後でたつぷりと経費を要求しなければ、などと考えつつ、侵入者の迎撃を続ける。春日君は疲れたのか途中で寝入ってしまったので、休憩時間中のシスター・シャークティに預けて、再び北部で迎撃を開始する。

結界が復旧しても侵入者の数は依然として衰えない。どうやら、侵入者の撃退で警備員が疲弊したところを叩こうと考えた侵入者が多いらしく、先生方の中にも怪我人が出始めていた。

苦しい戦いを続け、僕自身も何回か軽い手傷を負いながら戦い、ようやく侵入者の波が収まるころには時計の短針は午前三時を指していた。

ほとんど残っていない魔力をかき集めて自宅に転移すると、歯も磨かずにそのままフローリングの床に倒れこみ、僕は意識を失った。

26話（後書き）

結構要望があるようなので、他の原作キャラ視点の閑話を書いてみようか、と思ってます。書いて欲しいキャラがいればどうぞお知らせください。

26・5話（前書き）

番外編1 エヴァ視点の物語

【エヴァ視点】

あの男の息子だという2人の糞餓鬼は、双子だということが信じられないほどに似ていなかった。

双子の兄だというネギ・スプリングフィールドはヤツの面影を強く受け継いでおり、しかしその性格はヤツとは似ても似つかぬほどに生真面目だ。利口なのは認めるが、さしたる脅威ではなさそうだった。身のこなしも素人同然、魔力の制御も下手で、私がその気になれば封印されたこの身でさえ打ち倒し、殺すことができるような、そんなお人よしの餓鬼だった。

一方、双子の弟だというパリン・スプリングフィールドは——その金髪紅目の容貌は父親や兄との血のつながりを感じられないほどに似ていなかった。性格は——歳にしては不相応なほどに落ち着いており、他の生徒には弟か何かのように可愛がられている兄とは違い、幼いながらも逆らいがたい何かを感じさせる目をしていた。兄とは違いなにか武術でも修めているのか、身のこなしも達人クラスで、一部の隙も感じられなかった。魔力も緻密に制御されており、無詠唱で認識疎外の結界を張ったりするなど魔法の才にも恵まれているようだった。

だが、この餓鬼の一番異常なところは、その服の下に下げている十字架——ヴァチカン特務局13課のシンボルである、ユダの名が刻まれた十字架だった。

桜咲や龍宮に聞いたところ、どうやらあの餓鬼は本当に13課に所

属しているらしい。私を封印したヤツの息子が、かつてこの私を幾度となく追いつめた狂信者たちの後継とは、なんとも皮肉なことだ。何度かあの餓鬼の戦う様子を見た桜咲と龍宮は、口をそろえて「勝てる気がしない」などと言っていた。仮にも13課に所属するなら弱いはずはないのに、最強種としての慢心ゆえかこうしてあの餓鬼に負けるまで、彼女らはあの餓鬼を過大評価しすぎているのではないかと考えていた。

初めてあの兄弟と手を合わせて茶々丸を破壊されたとき、私は怒り狂った。襲うのは素人丸出しの兄だけのつもりだったので、停電の日を待たずに奴に喧嘩を吹っつけたのだが、結果は完璧な返り討ちしかも、大切な従者を（後で復活したとはいえ）破壊されたのは自尊心を大いに傷つけられた。最強種の私が、真祖の吸血鬼が、手錠をかけられじじいのところへと連行されるのは屈辱の極みだった。

力を取り戻すためとはいえ一般人にまで手を出し、さらにはじじい程度に温情をかけられ、私はいますぐにでも舌を噛み切って死んでしまいたい気分だった。だが、私の大切な従者であるチャチャゼロを動けるようにしてやるまでは、何があっても死ぬわけにはいかない。吸血鬼となってからナギの奴と出会うまで、私の唯一の家族であり、何度も危ないところを救ってくれたチャチャゼロだけは、なんとしてでも呪縛から解放してやりたい。それが、私が信念を曲げてもナギの呪縛から逃れようとする理由だった。

2人目の家族の茶々丸をあそこまでボロボロにしてくれたパリン・スプリングフィールドには腸が煮えくり返る思いだったが、封印状

態の私があゝの餓鬼に挑んでも勝てないのはわかっていたし、おとなしくかねてよりの計画通り、停電の日に結界の呪縛から逃れあの兄弟の血を吸い、殺すつもりだった。

私のことを侮っているのか、それとも動揺を押し殺しているのか、決闘を申し込んでもあの餓鬼はピクリとも表情を動かさずに了承した。

そして、決闘の時間——私は、完膚なきまでに負けた。従者を二人とも破壊され、私自身は捕縛され、なんとも情けない姿を晒すことになった。

おそらく私も全力を出せば勝てたのかもしれないが——学園の魔法先生や魔法生徒が増援に駆けつける可能性を考えると、あまり大規模な魔法はつかえなかったのだ。それに、パリン・スプリングフィールドと私は極端に相性が悪かった。いかに私が真祖の吸血鬼とはいえ、あの餓鬼はそれを狩る事を生業にするもの。使う得物はどれもこれも祝福儀礼が施されており、本来なら全身を再生するのに一分もかからないと言うのに、祝福儀礼によって再生を妨害され、結果として結界に封じ込められた。結界そのものの強度は全盛期の魔力さえあれば簡単に破れる程度だったが、そもそも結界に干渉することすらかなわないほどの強力な祝福がかけられた聖書が用いられていて、脱出は不可能だった。

じじいのところへ連行され、形ばかりの説教を受ける。

今でこそ自身の地位と権力に固執する小物でしかないが、このじじ

いも昔は孫を守るために努力する好々爺だったのだ。私がここに連れてこられた15年前は、教育者としてもマギステル・マギとしても、学園の人々から尊敬されていたものだ。

いつからだろうか、孫を守るための『手段』だった地位と権力が、『目的』へと変わってしまったのは。

私も長い時を生き、それなりに人間と関わって生きてきた。大切な物を守るために身を砕いてでも力を手に入れようとする人間も見えてきたが、手に入れた力に溺れ、その力そのものを目的とするようになった人間も見えてきた。いつからかじじいがそうなってしまったときから、嫌悪と憐憫、その2つの感情をじじいに抱き続けている。

まあ、順当に考えて近衛このかが全うな人間として生きられるはずがないのだ。英雄の娘であり、膨大な魔力量を持ち、自分達の手駒の孫でもある。そんな次世代の英雄としては打ってつけな人材を、MMが見逃すはずがない。孫を裏の世界に引きずりこまないために、じじいと詠春は膨大な量の犠牲を払った。権力と人脈を駆使し、英雄の息子を麻帆良に引き込んで、一般人をも巻き込んで英雄の息子を育て上げることをMMに約束し、やつのことで近衛このかの自由を勝ち取った時——既に、じじいは権力という蜜のとりこになって久しかった。

権力に異様なまでに妄執するようになっていたじじいは、ついに娘婿の制止を振り切って孫を英雄の息子への供物となすことで、さらなる地位と権力を手に入れようと画策している。

残った時間も少ないというのに、権力なんぞに執着するじじいの気持ちはさっぱりわからない。不死者であるゆえか、人間と理解し合えたことなど両手で数えるほどもないが、じじいの権力への妄執は

人外である私をして薄ら寒さを覚えさせる何かがあった。

どうやら、話を聞くにじじいはネギ・スプリングフィールドを私に師事させたいらしい。くどくどと嫌らしく、遠まわしにそんなことを言ってくる。

昔は中々好感が持てる人間だったのだが、人間とはたった15年でここまで変われるものなのか。

じじいに了承の意を伝え、どうやってあの正義馬鹿のネギ・スプリングフィールドに私を押し付けるのかを訊くと、なんでも今関西の連中がリョウメンスクナを召喚して西洋魔法使いに復讐する計画を立てているそうで、それを逆手にとって坊やとその周りをくつつけ、スクナを討伐して西側に恩を売り、さらに私の力を見せ付けることでネギ・スプリングフィールドを私に師事させるのだという。

一歩間違えば自分の孫娘が殺されかねないような計画を平然と語るじじいに呆れて、気分が悪くなったと言い捨てて足早に学園長室を退出する。

茶々丸もチャチャゼロも修復不可能なまでに破壊されてしまった今、私は真に天涯孤独だ。じじいとは用がなければ話さないし、唯一私に話しかけてくるのはタカミチくらいか。そのタカミチも、最近は忙しいようで一月にいったん話せばいいほう、という有様だった。

桜咲や龍宮とはたまに情報を交換するが、それはあくまで情報交換に過ぎないし、私事について話したりなどしない。

600年を生きていれば孤独にも慣れるものだが、家族の暖かさを知ってしまった私にとって、孤独でいることはあまりにも耐えがたく、そして苦痛だ。

住み慣れたログハウスに戻る道すがら、孤独に苛まされながらそんなことを思う。じじいの計画が上手くいけば、ネギ・スプリングフィールドが私に弟子入りすることになるのだろうか……はつきり言って、今はそんなことをする気力がおきない。呪いが無ければこのまま家に引きこもって100年は外に出たくない気分だ。

そのまま家へ帰って、なんとなくベッドに倒れこむ。もう世話を焼いてくれる茶々丸も、軽口を言って気を紛らわせてくれるチャチャゼロもないのだと思うと、じわりと涙がにじんできた。真祖となつて以来涙を流したことなど数えるほどしかなかったが、家族を喪つたことによる喪失感はその私に涙を流させるほどのものだった。

ベッドのシートで涙を拭い、布団を被る。いつそのまま目覚めることがなければどんなに幸福だろうかと考え、そこで私は考えるのをやめた。

26・5話（後書き）

14日まで更新が滞ります。その後は元のペースに戻します。

27話（前書き）

今日からは毎日更新です。

27話

停電の翌日、七時半に起きた僕は朝食を抜いて急いで学校へと出勤した。疲れはぬけないが、これくらいなら何とかなるだろう。

学校に到着し、ちょうど超君を見かけたので肉まんを数個買い求め、職員室の自分のデスクで肉まんを頬張る。相変わらず、頬が落ちるほどに美味い。

HRを終えて職員室に戻り次の授業のプリントを作り始めたとき、源先生がやってきた。

「パリン先生、ネギ先生に『学園長が放課後に学園長室に来るようにと言っていた』と伝えていただけますか？」

「わかりました。それでは、6時間目のすぐ後に伺いますとお伝えください」

昨日の疲れか、デスクで舟を漕いでるネギをちらりと見て返事をする。源先生はそんなネギのことを見て苦笑した後、一礼して去って行った。

先程のHRでは、茶々丸とエヴァンジェリンは出席していなかった。もっとも茶々丸は既に復元不可能だから、今後何らかの形で除籍されることになると思うのだが。

さて、吸血鬼に氣をとられて忘れかけていたが、修学旅行まであと一週間をきっている。スクナ討伐のための準備は整っているし、ま

た援軍として送られてくるであろうエヴァンジェリンを始末する用意も整えたが、今回は相手が相手なのでできる限り慎重に動かなくてはならない。なにせ、双方とも軍隊と真正面から戦えるほどの実力の持ち主なのだ。少しでも計画が狂えば、予定より少し早く神の国へ送られることになってしまう。

美空くんは今回は好きなように動くとのことなので、戦力として数えていない。彼女は自分の安全が保障されなければわざわざクラスメイトのために体を張ったりはしないだろうし、僕の邪魔をするとも思えないので放置しておいていいだろう。

重要なのは、近衛君が確実に「3日目に」敵方に捕まって、その日のうちにスクナが復活することだ。計画の都合上それより前でも後でもないけなので、3日目まではさらわれないように、3日目には絶対にさらわれるように仕向けなければいけない。素人の神楽坂君ならともかく長瀬君はそれなりに腕が立つので、計画通りに近衛君を誘拐させるのはかなり難しいだろうが……まあ、手がないわけではない。近衛君の護衛だとか言う混じり物に関しては、そもそも護衛としてろくに仕事ができいないようなので無問題だ。僕のような万能型ならまだしも、剣士である彼女が護衛対象から離れるなど埒外である。これだから化物のやることは。

今日は放課後にネギと長瀬君をアルのところまで連れて行く予定だ。修学旅行のための買い物は既に済ませてあるとのことなので、時間は十分に取れるだろう。

やるべきことを整理して、隣の机で寝ているネギをたたき起こし、眠気覚ましの紅茶をいれてやる。僕は鍛えているからちよつと睡眠が足りない程度何とかなるのだが、ネギはそうもいかないらしい。

寝ぼけ眼で礼を言うネギに源先生からの用件を伝え、印刷室までプリントを刷りに行く。このごろはプリントのレイアウトやフォントに凝るのが楽しくなってきた。貯金をはたいてAdobeのDesign Standardとモリサワのフォントセットを購入したのだ。作業用のハイスペックPCの代金を含めると100万円ほどが飛んだわけだが、元々貯金はたくさんあるし、スクナ討伐が成功すれば特別ボーナスが出るという話なので少し奮発してみた。

その日の授業を終え、ネギを学園長室へと向かわせる。最近は何ギも授業に慣れてきたようで、よく生徒が質問しに来るようになっていた。怖がられるあまり、質問を宿題のプリントの裏側に書かれる僕とは大違いだ。まあ、質問してくれるということはそれなりに信用してくれているということなのだろうけど……どうにも不公平な気がしないでもない。

宿題の採点を終え、修学旅行関連の書類をチェックしていると、ネギが戻ってきた。

「パリン、修学旅行の行き先は京都で決定だつて。それと、関西呪術協会への親書の受け渡しを頼まれたから、修学旅行の間は何かとお世話になると思う。迷惑かけてごめんね」

「了解。じゃあ、新田先生から修学旅行の詳細な行程表と教員用の

諸注意を預かつてるから、一通り目を通して置いて」

認識阻害の結界を張って、小声でやり取りする。やはりネギはふとした拍子に魔法関連の単語を洩らしてしまうので、これからも指導していかなくては。

「関西呪術協会といえばあそこの長はサウンドマスターの戦友らしいよ、兄さん。親書を渡すついでに一泊して話を聞かせてもらえば？」

ネギにいくつかの資料を渡すついでに、ふと思い出したので言うてみる。

「えっ、父さんの！？あー、でも僕先生だし……」

「いや、さっき新田先生に相談してみたら、『行方知れずの父親の知り合いなら、むしろ是非とも会って来い』だってさ。僕は宿に残るから、行つてきなよ」

「いいの！？ありがとう、パリン！」

興奮して声が大きくなるネギをなだめて、椅子に座らせる。少しでも原作どおりの流れに誘導するようにしないと、計画に支障をきたすかもしれないのだ。学園長やタカミチのような経験豊富な大人を騙せる自信なんてこれっぽっちもないが、父親に傾倒しているネギなら簡単に誘導できる。

「あと、関西呪術協会って近衛君の実家でもあるんだよね。だから、家庭訪問ついでに近衛君も連れていったら？」

「このかさんの？うーん、とりあえず本人に相談してみることにするよ」

「わかった。じゃあ、そろそろ行こうか」

「うん、クウネルさんだっけ？僕の師匠候補だっという人」

「そう。強いし、サウザンドマスターの知り合いでもあるし、師匠にはうってつけの人だよ。長瀬君は？」

「仮契約は済ませたから、人気のないところに出たら念話で呼んでみる」

そんなやり取りをしながら、職員室を出て図書館島へと向かう。途中でネギが長瀬君を呼んで、3人で図書館島に潜る。

職員用の秘密通路を使い、認識障害と身体強化を使って全速力で移動する。そうでもしないと、アルのところにとどり着くころには日が暮れてしまうのだ。ネギは長瀬君に背負われているが、長瀬君本人は涼しい顔で僕についてきている。従者とはいえ、女の子に背負われる魔法使いというのも格好が悪いものだ。

30分ほど走り、長瀬君の額にもうつすらと汗が浮かび始めたころ、僕達はようやくアルの部屋へと続く門の前にたどり着いた。門番のワイバーンがこちらをちらりと見たが、僕がいるのを見ると興味なさげに目をそらす。ワイバーンの巨大にあっけに取られている2人の手を引いて、アルの部屋へと入った。

「ようこそ、ネギ・スプリングフィールド君、長瀬楓君。私はクウ

ネル・サンダースという、しがない魔法使いです。お茶の準備はできているので、とりあえず座ってください」

久しぶりに胡散臭さ全開の笑顔を見せるアル。ゲームをしているときやジャンクフードを食べているときの柔らかな笑顔と表情は同じはずなのに、受ける印象は真逆だ。

「ネギ・スプリングフィールドです。父の知り合いのことですが、父とはどういった仲だったのですか？」

案内されたテーブルについて、紅茶を一口すすり、ネギが尋ねた。長瀬君は出された茶菓に夢中になっているが、話は聞き漏らしていないようだ。

「そうですね……一言で言うと、戦友、ですかね。仮契約もしてましたし、そこそこ仲はよかったと思います」

そう言って、胡散臭い笑みを顔に貼り付けたまま、懷からパクティオカードを取り出すアル。彼の所持する数十枚のカードのうち、唯一「生きている」カードだ。

「アルビレオ・イマと書いてありますが……？」

「アルビレオ？イヤだなあ、私の名前はクウネル・サンダースですよ。きつと見間違いですね」

そそくさとカードを懷にしまいなおすアル。ネギはと言えば、混乱して目をぱちくりさせている。

「まあ、私の名前なんてどうでもいいです。今日は、あなたの弟子

入り試験ですから」

「試験、ですか……？」

聞いてない、と言う風に僕に目を向けてくるネギ。僕もそのことは聞いていなかったので、とりあえず肩を竦めてみる。

「そんな大層なものじゃありませんけどね。とりあえず、私に対して3分間攻撃を加え続けて、僕が合格だと判断したら君の合格です。長瀬君も参加していいですよ」

「わかりました。では楓さんも手伝ってくださいませんか？」

「拙者は強い御仁と闘えるなら願ったり叶ったりでござる。クウネル殿、胸を借りるでござるよ」

「では、闘技場に案内するのでついてきてください」

アルが立ち上がり、いつもは僕との模擬戦で使っている闘技場へと僕達を案内する。

闘技場は小学校の校庭ほどもあり、修繕が簡単なように土を踏み固めて作られている。

「では、どこからでもどうぞ」

そう言って、浮遊術すら使わずに障壁だけを展開するアル。が、彼の発する圧力に、長瀬君とネギはごくりとつばを飲んだ。

「で、では行きます！ラス・テル・マ・スキル・マギステル、光の精霊37柱。集い来りて敵を射て、『魔法の射手・連弾・光の37

矢
』」

長瀬君の分身が5体、縮地を使って後ろから接近し、同時にネギの魔法の射手が正面からアルに襲い掛かる。

「短期間で身につけた連携にしては上々ですが、弾幕が薄いですね」
そう言って、アルは分身の攻撃をすべて裁き、光弾を障壁でかき消す。

「ならば、これなら！」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル、闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ、『白き雷』！」

楓君の分身が10体、四方八方からクナイを投げ、ネギが先程より強力な魔法を詠唱する。

が、クナイはアルの重力魔法によってすべて叩き落され、『白き雷』はアルが片手で張った障壁に防がれる。

「ネギ君は術式の無駄が目立ちます。忍者のあなたは及第点でしょうが、やはり一撃が軽すぎますね」

アルがそういった瞬間、ネギが放った無詠唱の『魔法の射手』がアルに命中する。しかし、やはり障壁で防がれてしまった。

続いて、長瀬君の分身が接近し、その隙に本体が巨大な十字手裏剣を投げつける。今度こそダメージを与えたかに見えたが、しかし重力魔法によって分身もろとも吹き飛ばされてしまった。弾かれた十

字手裏剣を回収しようとするが……その直前に拘束の魔法に捕まり、身動きが取れなくなった。

身動きが取れなくなった長瀬君を助けようと近寄ったネギを、アルの掌底が一蹴する。10mほど吹き飛び、立ち上がったネギの首に手刀を添えて、アルはいった。

「筋はいいようです。いいでしょう、合格を差し上げます」

「はあ、はあ、はあ……ありがとうございます……」

肺を強打した影響で呼吸が乱れているネギは、それでもしつかりとアルに対して礼の言葉を言った。

「長瀬君は基本は完成されているようですから、飛び道具の扱いに関してパリンから教わるといいでしょう。それと、咸卦法についてお教えしましょう。今すぐには使えるようにはならないでしょうが、あなたの才能なら一年もあればマスターできるかと」

「咸卦法、でござるか……」

まあ、鉄甲作用を教えれば彼女はすぐに強くなるだろう。分身による手数に、鉄甲作用による桁外れの威力が加われば中距離ではそれなりに強くなるはずだ。もっとも、飛び道具の扱いで負ける気はさらさらないが。

「というわけで、30分ほど休んだら君たちの戦闘スタイルや連携について多少レクチャーをしましょう。水と何か食べ物を持ってくるので、少し待っていてください」

汗ひとつかいた様子のないアルは、そう言っ
て台所へと向かっ
てい
った。

27話（後書き）

次話はアルビレオの戦闘講座に、修学旅行の前準備です。

28話（前書き）

少し短めです。

28話

「さて、ネギ君。われわれ魔法使いには、大まかに分けて2つの戦闘スタイルがあります」

弟子入り試験が終わり、休憩を挟んでから、アルの解説が始まった。

「一つ目のスタイルは、いわゆる『純・魔法使い』型。従者に前衛を任せ、自分は後ろで強力な呪文を詠唱する、というスタイルです。私なんかはこれに当たります」

「クウネル先生は体術もできるようでしたけど……？」

「いえ、私は浮遊術で空中から魔法を連発するのが本来のスタイルなんです。それに、あくまで格闘は『できる』というだけで、私にとっての決め手は魔法なのですよ」

「はあ、そうですか……」

「二つ目のスタイルは、いわゆる『魔法剣士』型ですね。身体強化の魔法を使って、前衛とともに武器を取りながら同時に魔法も使うタイプです。ですから、強い魔法剣士は従者を必要としない場合もあります。パリンなんかはこちらに該当します。サウザンドマスターも強力な魔法剣士でしたね」

「父さんが……」

「ですが、私としてはネギ君には『純・魔法使い』型を推奨します。長瀬君は前衛としては非常に優秀ですし、今からネギ君が近接戦闘

の訓練を始めても、恐らくは彼女の足を引つ張るだけでしょう。それより、彼女に足りない『一撃の重さ』や『空中への攻撃手段』を補いやすい魔法使い型のほうが彼女との連携も上手く行くはずですよ。そもそも、近接戦闘の訓練と魔法の訓練を同時に行うより、魔法の訓練だけを行ったほうが効率がいいのは自明ですしね」

「なるほど、そういうものですか……」

顎に手を当てて考え込むネギ。彼としては父親と同じスタイルを選びたいのだろうが、理性的な部分がそれを否定しているようだ。

「今すぐに結論を出さずとも結構ですよ。修学旅行までにいくつか役に立つ魔法を教えますが、修学旅行から帰ってきたら本格的に修行を始めましょう。そのときに結論を出してくればいいです。君一人の問題ではないので、長瀬君ともよく相談してくださいね」

「……わかりました」

コクリと頷くネギ。彼のことだから、考えすぎて深みにはまるかもしれないが……まあ、長瀬君がついていれば大丈夫だろう。

「それでは、現時点での君の評価をしましょうか」

「はい、おねがいします」

「まず、ネギ君は扱える呪文の数が少ないのが難点ですね。魔法使い型を目指すならせめて20種は攻撃魔法を扱えなくてはいけません。また、魔力量の多さでごまかしているようですが、魔力制御と魔法の術式がだいぶ雑です。これを改善するだけでも燃費はだいぶよくなるでしょうし、修学旅行までの短い時間でもある程度向上さ

せることはできると思うので、頑張ってください。わからないところがあつたら私がパリンに訊いてくださいね」

「魔力制御は一応教科書を一通りさらったんですけど……」

「いえ、君の場合は元々の魔力量が大きすぎるので、教科書どおりの方法だと非効率的です。後で私が基本的なことは教えるので、それを元に自分で調整してみてください」

「なるほど、ありがとうございます」

まあ、くしゃみで武装解除を発動するような有様なのだ。処置としては適切だろう。

出されたモンブランを食べ終わり、帰ろうと立ち上がる。ネギたちはまだアルと話をするようなので、一足先に『影の転移門』で地上へ帰った。

夕食を食べようと超包子へ向かい、カウンター席について五目焼きそばとあんかけチャーハン、フカヒレスープを注文する。先生だからということか割引してくれるし、中華の店としては麻帆良で一番気に入っているのだから、週に3回は通っているのだ。

「お、パリン先生じゃない力。こんな時間まで仕事とはご苦労様ネ」
カウンターで四葉君に注文を伝えると、厨房に戻った彼女と入れ違

いに超君が厨房から出てきた。僕がスーツを着ているのを見て、学校帰りだと思っただのだろうか。

「いや、今日は用事があってネギと長瀬君を図書館島の司書に会わせていたんだ。学校を出たのはいつもより早かったよ」

「おお、そうだったの力。しかし、あそこに司書がいるなんて話、初めて聞くネ」

「人見知りするからね、彼。仕事はちゃんとやってるみたいだよ」

適当な理由をでっち上げて誤魔化す。アルの存在は一応機密事項ということになっていてらしいので、裏の事情に幾分か通じているとはいえ、魔法使いでも従者でもない超君に本当のことを話すのは気が引けるのだ。もっとも、彼女の情報網はかなり優秀なようだからアルのことも何か知っているのかもしれないが。

「そういえば、今日は珍しく1人できたネ。美空には振られたのかな？」

「だから、美空君とはそういう関係じゃないんだってば。君といい早乙女君といい、どうしてみんなそういう発想しかできないかな」

「それは先生、うら若き乙女の考えることなんて色恋しかないネ。相変わらずアナタは女心をわかってない」

「10歳の子供に女心を理解しろと？それに曲がりなりにも僕は聖職者だ、間違っても教え子に手を出したりはしないさ」

超君とは、超包子に通うようになってから大分仲が良くなった。こ

うして、店が空いているときはカウンターを挟んで会話するのが習慣になっている。茶々丸を破壊した件についても打ち明けたが、「所詮ロボット、同じものは何度でも作れるネ」と笑って許してくれた。

下らない会話を続けていると、古君がお盆に料理を乗せて厨房から出てきた。

「パリン老師、ご注文の品をお持ちしたアル」

古君には、以前戦った時以来「老師」などとよばれて大変困っている。実戦で磨いてきた部分もあるものの、体術に関してはほとんどが自分の力で身につけたものではないのだ。だから、こうして素直に尊敬の目で見られるとどうにも居心地が悪い。

「ありがとう、古君」

一言礼を言ってから、料理に箸をつける。

四葉君の料理の腕は最近ますます上達し、そこんじよらの中華料理屋など足元にもおよばないほどに美味しい料理を出すようになってきた。朝食をわざわざ用意するのが面倒な僕は毎朝彼女の販売する肉まんを食べているのだが、毎日食べ続けているからこそ彼女の料理の腕が日進月歩で進化しているのが分かる。宿題のプリントを見ても分かるが、彼女は地道な努力が苦にならない性格なのだ。

超君もちょうど夕食時だったようで、ちょうどいいやといわんばかりに僕の隣に座って五目チャーハンをパクついている。その様子だけを見ていると、彼女が学園都市でもっとも優秀な頭脳の持ち主だとは到底思えない。

「そういえば修学旅行の行き先は京都で決まりのようだけど、向この協会には話を通しているの力ナ？」

ご飯を食べおわり、出されたジャスミン茶に口をつけると、同じくチャーハンを食べ終わった超君が話しかけてきた。

「ああ、その件ならネギが関西への親書を預かったみたいだよ。修学旅行にかこつけて学園長が面倒ごとを押し付けたりしないね」

「なるほど、まあ英雄の息子なら向こうの反発も少ないのかもしれないネ。しかし学園長も人が悪い、ネギ坊主に試練を与えるためだけに私たち一般人まで巻き込みかねないような計画を実行に移すとは、教育者が聞いてあきれるネ」

「まあ、瀬流彦先生も同行するし、僕も付いてるから一般人に手は出させないさ。せいぜいデカブツや犬に絡まれる程度なんだ、君たちはゆつくりと修学旅行を楽しめばいい」

「……西の過激派がスクナの復活をもくろんでる、というのは知ってるようだネ。そこまで知っててなんで余裕でいられるの力……なるほど、13課、そしてスクナ……大体わかった、今回は関わらずにいた方が賢明なようネ」

たったそれだけの情報から真実を見抜ける超君のほうが、僕にとってはスクナよりよほど恐ろしい。どうにも、頭が回る人間には勝てる気がしないのだ。

「やっぱり君の情報網は侮れないな。でも、ただでさえ魔法先生には目を付けられているんだ、下手なことはしないほうがいいよ。どのみち、僕がこうしてくつろいでるということは、それなりに勝算があるということだからね」

「疑ったわけじゃないヨ。ただでさえ私の知ってる流れとは相違点が多すぎるから、神経質になっていただけネ。アナタは私の敵にはなりえないからこそ、こうして腹を割って話しているヨ」

ヴァチカン上層部に判断をあおいだところ、超君の計画には一切邪魔立てをするな、とのことだった。仮に彼女が時間旅行者だとしても証拠はないし、ヴァチカンとしては魔法がばれようがばれまいがどうにでも收拾は付けられるので問題はない、とのことだった。僕個人としては超君は嫌いではないし、魔法バレに関してはやはりどうでもいいと考えているので彼女の邪魔をするつもりはない。そのことは既に、彼女に伝えてあった。まあ、彼女の計画を知っているとおもわれるわけにはいかなかったのでかなり遠回しな表現ではあったが。

「……それじゃ、今日はそろそろ帰るよ。じゃあ、また明日学校で」
それから10分ほど、また下らない話に戻り、店が混みはじめてきたので退散することにした。

「また明日、ネ」

手を振って見送ってくれる超君に手を振り返し、自宅まで歩く。

自宅にたどり着くと、おもむろに宝石を取り出し、魔力を貯め始め

る。

京都で移用する予定のいくつかの大規模な魔法には、僕の最大魔力容量の15倍ほどの魔力が必要になる。現在、魔力のストックは僕の魔力量の11倍ほどまでしか貯まっていけないので、修学旅行までには少し余裕があるくらいにまでは貯めておきたいものだ。幸い、ヴァチカンから下りた予算を使って大粒で質のいい宝石をいくつか買い求めたので、宝石の数には余裕がある。魔力を抜き出した宝石は再利用できるから、予算で購入した宝石は返却しなくてはならないのが惜しい気もするが、もともと敬虔な信徒が出したお金で賄われているのだ。そう考えれば、宝石をちよるまかしたいという欲望に打ち勝つのは簡単な事だった。

宝石に魔力をため終えると、どつと疲労感が押し寄せる。が、まだ寝るわけにはいかないので熱い紅茶を淹れ、眠気覚ましの代わりにする。前世からずっとコーヒーには馴染めないのです、眠気覚ましといえは紅茶だ。

『影の倉庫』から銃器を取り出して、点検を始める。先日ヴァチカンから届いた試作段階の兵器、『ハルコンネン?』も一度解体して、隅々まで徹底的に点検する。何回か試し撃ちをして十分実用に耐えうると報告したので、ヴァチカンでは既に量産が始まっている。先行型は既に百個ほど生産されたようだ。

銃器の点検を終え、次は『結界石』と呼ばれる特殊な石に結界の術式を掘り込む作業を始める。スクナや闇の福音とやりあうなら一般人に認知されないようにしてはならないので、各種の結界は絶対に必要なのだ。持続時間等もずいぶんと余裕を持って設定したため、使う魔力の量がなかなか多くて弱っている。が、元々の魔力

量が規格外な上に、豊富な資金によって魔力をためておける宝石や貴金属も大量に準備できたので、必要な魔力という点に関してはほぼ解決したと見ていいだろう。

3つの結界石に術式を刻み終わり、あまりにも疲れたので横になる。そして、僕の意識はそのまま闇へと落ちていった。

28話（後書き）

超とは結構仲良しかったりする主人公。

29話（前書き）

ついに修学旅行編。今回は刹那視点です。

29話

修学旅行初日の朝、私は集合時間の10分前に大宮駅に到着し、お嬢様の様子を確認してから文庫本を読み始める。こんな人通りの多いところで関西の刺客が事を起こすはずもないし、関東に来てからはお嬢様の護衛で友人を作っている暇などなかったため、空いた時間は時代小説か武俠小説を読むのが常だった。

しばらくするとパリン先生が大声を張り上げ、騒いでいた3-Aの面々を静める。彼個人は嫌いだ、教師としての優秀さは一目瞭然だ。兄であるネギ先生に比べて、生徒を取りまとめて静かにさせる手腕は新田先生すら一目置くほどだ。もつとも、だからといってあの男を認める気などさらさらないが。

集合時間になり、学年主任の新田先生から諸注意を聞いた後、生徒はそれぞれクラスごとにわかれて新幹線に乗車する準備を始める。班ごとに別れ、新幹線の席を確保することになっているのだが、やはりエヴァンジェリンさんは来ていないので私はザジと2人きりだ。2人で4人分の席を独占するのもどうかと思ったので、担任であるネギ先生にそのことを相談しに行く。

「ネギ先生、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんが来ていないので私の班は2人になってしまうのですが……」

「そうですか、困りましたね……では、桜咲さんは5班に、ザジさんは3版に合流してください。神楽坂さん、あやかさん、大丈夫ですか？」

「ええ、問題ないわよ」

「構いませんわ、席には空きがありますから」

ネギ先生がそういうと、雪広さんの後ろにいたお嬢様がこちらに声をかけてきた。

「あ……せつちゃん、一緒の班やなあ……」

縋りつくような目でこちらを見てそうおっしゃったお嬢様は、やはりどこか無理をしているようで——そんなはずはないのに、まるで化物である私に嫌々ながら作り笑いをして接してきているように見えてしまう。お嬢様がそんな狭量な人間であるはずがないと信じたのが、幼少のころから親しい人には何度も裏切られてきたのだ。

「あ……」

なんと言っていていいかわからずに、結局いつものように慇懃に一礼して、お嬢様に背を向ける。クラスメイトに背を向けると、彼女達の陽気な笑い声が耳に入ってくる。彼女達が化物である私を嘲笑っているような気がして、道場での居心地が悪い毎日を思い出した。どうにもいたたまれなくなつて、手早く席に着き、他人と会話することを拒否するかのように窓の外を見始めた。なんのことはない、私に話しかける人間がいらないのはいつものことだ。そう、だから辛くない。ない。

電車が発車し、ネギ先生とパリン先生からの伝達が終わると、電車の中はとたんに喧騒に包まれる。この車両は3・Aで借り切ってい

るので気兼ねなく騒げるのだ。

段々と関西に近づいていくことを自覚し、不安な気持ちが頭をもたげ始める。修学旅行先が京都だということには一抹の不安を覚えるが、憎たらしいことにパリン先生はかなりの実力者だ。認めるのも忌々しいが、彼がいるならお嬢様は安全だろう。

認めたくはないが、パリン先生は教師としても戦闘者としてもその実力はトップクラスだ。あの刀子先生を圧倒するほどの剣技の冴え、学園のほとんどの魔法先生をしのぐほどの魔法の技巧と魔力量、それに謎の多い投擲技術に強力な銃器。あの高畑先生をして「本気で戦えばどうなるかわからない」とすら言わせるほどの実力者なのだ、お嬢様の護衛としてはこれ以上の人材を望むことはできない。

私とて、河で溺れるお嬢様を助けられなかったあの日から鍛錬は欠かしていないし、それなりに才能には恵まれているつもりだ。しかし、私よりはるかに年下である彼の足元にもおよばない。それを思うと、悔しくて悔しくて仕方がない。龍宮はなぐさめてくれるし、鍛錬にも付き合ってくれるが、それでも私の実力があの男の足元にもおよばないというのは揺るぎのない事実なのだ。

窓の外を眺めながら鬱々として気持ちに駆られていると、ふと車内に妖の気配を感じた。探ってみると、どうやら程度の低い式神が大量に仕掛けられている。お嬢様に害をなすことはないだろうと判断し、私は混乱に乗じて西の刺客が来たときに備え、車両の入り口付近で警戒することにした。

車両の入り口を出ると、驚くべきことにそこには先客がいた。憎たらしい狂信者、パリン先生だ。

先程まで彼は超さんや春日さんとともに携帯ゲームの通信プレイに興じていたはずなのに、いつの間に移動したのか。おそらく、彼も妖の気配を感じ取って警備のために車両を出たのだろうが……彼のほうが早く異変に気付いていた、その事実には少し悔しさを感じる。

刺客を警戒するなら反対側の車両の入り口に向かうのがベストなのだろうが、ふと沸いた対抗心からあえてその場に残る。パリン先生はちらりとこちらを見やったが、すぐに興味を無くしたかのように視線を外した。

お互いに目を合わせず、無言で気配を探る。しばらくしてから、扉の向こうから叫び声が上がった。どうやら、式神が発動したらしい。

パリン先生をちらりと見ると、懷から小振りなナイフを取り出していた。彼自身は車両に通じる扉をじっと凝視している。

しばらくすると、扉が開き——中から、ツバメを模した式神が飛び出してきた。

居合いでツバメを斬ろうと夕風の鯉口を切った瞬間、その式神にナイフが突き刺さり式神が啞えていた親書をパリン先生が奪い取る。

反応速度が違いすぎる。私とて気を練って、いつでも夕風を抜けるよう構えていたというのにこの反応速度の差はなんなんだろうか。

駆けしてきたネギ先生に親書を渡し、ネギ先生があわてて車両に戻るのを温かい笑顔で見守るパリン先生。が、扉が閉まった瞬間、彼はこちらに向き直り、小ばかにしたかのような顔で嘲るように言い放った。

「フン、護衛が聞いて呆れる。剣士が護衛対象のそばを離れてまともに護衛が務まるはずもなかるうに。それなりの実力があるならばまだ許せるが、その程度の腕前では、な」

流石に、この一言は聞き流せなかった。

「なん、だと？」

殺気を抑えられない。私の事情を知ってるくせに、のうのうとそんなことを言つてのける目の前の男を、今すぐにでも斬りたい、と思った。激情を押さえきれず、右手が夕凧の柄に伸びる。

「だ・か・ら、お前は護衛失格だつて言ってるんだよ、頭悪いな。近衛詠春がなんでよりもよつてお前を護衛に選んだのか分かってるのか？お前以上の腕利きなんざ神鳴流には吐いて捨てるほどいるのに、わざわざ未熟なお前を護衛に選んだのは、友人として誰よりも近い立ち位置で護衛を務められるからだろう？」

反論は、できない。彼のいつてことは正論で、だからこそ——こんなにも、腸が煮えくり返る。

「黙れっ、お前なんか何が——」

「お前の気持ちなんて知らんし、知りたくもないがな。ひとつだけいえるのは、お前は恩人の期待を裏切り、それを知っていながら未練がましく護衛ごっこを続けているということだよ。お前のやり方で護衛を遂行しようと思えば神鳴流にはもっと適切な人間がいるし、お前のやっていることは不合理なこと甚だしい」

「ッ——」

言い返したいのに、言い返せない。認識阻害の結界が張ってあるのか、先程から妙に人気がないが——それでも、私は言い返せなかった。だって、彼のいったことは私も自覚していて、私が未練がましくお嬢様の護衛に執着していたのは事実なのだから。

「ま、今回の修学旅行では西の本山にも寄るから、自覚があるなら護衛は辞めて他の人をつけてもらえよ。じゃ、僕は美空君たちを待たせてるから」

そう言っつて、パリン先生は扉を開けて中へと入っていった。

悔しさと悲しさに、目から熱いものが零れる。あわてて、目をぬぐい、しかしそれでも涙はとまらないので一旦トイレに避難することにした。

トイレに籠もり、自分の浅ましさを、惨めさに声を押し殺して泣く。思えば、幼少のころから麻帆良に来る前までは、自分には居場所と

いうものがなかった。鳥族の集落では白い目で見られ、神鳴流でもどこか居心地の悪い思いをしながら過ごしていた。だが、3-Aの教室はそんな自分さえ受け入れてくれているようで——私は、お嬢様の護衛にかこつけて、自分の正体を隠しながら受け入れてもらえる場所を失いたくなかったのだろう。先程、神楽坂さんがあつさりと私を班に入れてくれたときは、凄く嬉しかったのだ。自分の正体を隠しているという負い目からクラスには溶け込めていないが、やはり正体を隠してのことも、輪の中に受け入れてもらえるというのはとても嬉しいことだ。与えられた任務をおろそかにして、その自覚がありながらも改善しようと思わないほど。

今だって、お嬢様の護衛をやめて関西に戻るのを恐れるあまり、長の期待を裏切りながら麻帆良に留まっている。これを浅ましいといわずしてなんと言うのか。パリン先生は私が化物だから嫌っているものとはばかり思っていたが、私のこうした浅ましさを知っているからこそ私を嫌悪しているのではないだろうか。

彼に面と向かって指摘され、護衛をやめるという選択肢を突きつけられ——私の心は揺れ動いている。

自分の浅ましさ、惨めさをはっきりと自覚し、あまつさえ他人に指摘されてしまった今、いくら居場所があるとはいえこのままお嬢様の護衛を続けるのは苦痛でしかない。私のような化物がお嬢様のそばに控えるなどんでもないことだし、やはり護衛を辞めて道場に戻るべきか。しかし、一旦東に行き、任務をろくに果たせずに帰還した私に対して道場の皆はどういう態度をとるだろうか——それを考えると、護衛を辞めて西に戻るというのも怖い。

考え込んでいるうちに涙は止まったので、目元を拭いて涙の跡がな

いかどうかを確認し、席へ戻る。

「桜咲さん、体調が悪いようですが大丈夫ですか？顔色が少し悪いですよ」

「少し酔っただけですので、問題ありません。心配していただいてありがとうございます、ネギ先生」

席に戻る途中、ネギ先生が心配そうな顔で声をかけてきたので、少し嬉しくなり、できるだけ柔らかい表情で返答する。微笑を浮かべた私を見て、大丈夫そうだと判断したらしいネギ先生は言った。

「よかった、大丈夫みたいですね。体調が悪くなったら、いつでも言ってくださいね」

本当にあのパリン先生の兄弟なのだろうか、と疑ってしまうほど純粹な笑顔だ。そういうえば容姿もぜんぜん似てないし、もしかしたら本当に義兄弟なのかも知れない。

そんなことを思いつつ、席まで戻る。隣席の神楽坂さんは私の顔を見て体調を気遣ってくれ、わざわざ酔い止めの薬を渡してくれた。あまり人から優しくされたことのない私は、それだけで少しどぎまぎしてしまって、それを誤魔化すためにそっぽを向いた。けれど、頬が熱くなっていたのでごまかせたかどうかはわからない。

29話（後書き）

修学旅行編は全12話を予定しております。

30話（前書き）

修学旅行一日目・後編

30話

『——まもなく京都です。お忘れものがございませんよう、ご注意ください』

車内アナウンスが流れ、3 - Aの生徒達がいつせいに荷物をまとめ始める。

「では皆さん、いざ京都へ！」

ネギが声を張り上げると、生徒達も歓声を上げた。駅のホームで叫ぶものだから、目だっしょうがない。

「さて、最初は清水寺か……」

旅行のしおりを見ながら今日の日程を再び確認する。

そういえば、前世では京都に来たことはなかった。仕事があるから気は抜けないが、それでも中々に楽しめそうだ。

「イヤー、日本の寺っていうのは風流でいいものネ」

清水寺に着くと、僕の隣で興味津々な顔をして辺りを見回していた超君がそう言った。

「僕も初めて来るけど、いいものだねえ。仏教の寺院だってことを

除けば最高だよ」

眼下に京の町を一望しながら、ため息をついて言う。ヴァチカンの聖堂のような荘厳な寺院も好きだけど、侘びさびのある日本の寺も捨てがたい。

「これが噂の飛び降りるアレッ！誰か飛び降りれっ！」

「では拙者がひとつ……」

「楓さん、飛び降りたら怒られちゃいますよー？」

「むむ、そうでござるか……ならネギ坊主も一緒に飛び降りれば大丈夫ではござらんか？」

「先生だからって飛び降りていいわけじゃないんですよー！」

「騒がしい生徒がいなければ言うことはないんだけどね……」

生暖かい目で騒いでいる面々を見て、首を横に振った。

「ハハハ、中学生なんだから風情なんて分かるほうが少数派ヨ、パリン先生。それより、朝倉に頼んで清水寺をバックに写真を撮って

もらっネ」

「いいのかい、記念写真に先生が混ざっても？」

「平気平気、気にしないネ」

2班の面々と一緒に朝倉君に写真をとってもらい、綾瀬君の蒔蓄に耳を傾ける。彼女はどうかやら寺社仏閣に興味があるらしく、僕や超君も知らないような知識を披露してくれた。

「そうそう、ここから先に進むと恋占いで女性に大人気の地主神社があるです」

「へえ、恋占いねえ……」

背後から不穏な空気を感じ、振り向いてみると――長瀬君と雪広君がネギの肩をつかみ、争っていた。そばでは佐々木君がうるたえている。

「ネギ坊主、ここはひとつ拙者と一緒に恋占いなど」

「長瀬さん、抜け駆けはよしませんこと？」

長瀬君はいつからそんな目をネギに向けるようになったのか。さすがはネギ、女性を落とす手管は僕をはるかに上回るようだ。

「ちなみに、その階段を下るとあそこ！有名な『音羽の滝』に出ます。あの三筋の水は飲むとそれぞれ健康・学業・縁結びが成就するとか……」

「縁結び!？」

佐々木君が声を上げる。長瀬君と雪広君も興味を持ったようで、ネギの肩から手を離し滝に目を向けた。

「むむつ、あれは……」

「どうしたの、長瀬さん？」

滝のほうを見た瞬間、眉を顰めた長瀬君に美空君が問いかけた。

「見るでござる、あそこの滝の上に酒樽が仕掛けられているでござるよ」

長瀬君が指差したほうに目を凝らすと、確かにそこには酒樽らしきものが置いてあった。

「……いたずらにしては悪質だな。兄さん、僕は滝のほうを見てくるから引率お願い」

「わかった、じゃあ僕たちはあっちのお寺にいつてるね」

ネギに引率を任せ、音羽の滝へと足早に向かう。途中、すれ違った観光客が奇異なものを見る目でこちらをじろじろと見てくるが、かまっている暇はない。

滝のほうに近づき、関係者を探してきよろきよろしていると和服を着た中年の男に英語で声をかけられた。何気に発音がいいのは、観光地だからか。

「Do you speak Japanese?」

「ああ、日本語は話せますからお構いなく。こちらの滝の上に酒樽が置いてあるのを見つけたのですが、どなたに言えばいいのだろうかと思っていたところです」

大方、西洋人の子供がきよろしているのを見て、迷子だとも思ったのだろう。日本語を話せることをアピールし、用件を切り出す。

「ええっ、滝の上に酒樽が！？ちょっと待ってください、責任者に話してきます」

そういつて、中年の男は足早に去っていった。

5分ほど待ちぼうけを食らってから、再び男は戻ってきた。

「確認したところ、悪質ないたずらだったようです。酒樽からホースが伸びていて、滝の水に酒が混入していたようです。わざわざ教えていただいてありがとうございます」

「ああ、やはりいたずらでしたか。災難ですね」

「いえいえ、幸い未成年の方などは飲んでいなかったようなので助かりました。こちらはお礼の品です。どうぞお受け取りください」

男から菓子折りをもらい、ネギたちが行った神社へと向かう。

急ぎ足で神社へと向かった僕が目にしたのは、落とし穴にハマった雪広さんと佐々木さん、それを引っ張り上げるネギと長瀬君だった。

「……………何があつたの？」

こちらに気づいて駆け寄ってきた美空君に問いかけると、美空君はあきれた様子で答えた。

「くだらないいたずらツスよ。落とし穴が仕掛けてあつて、あの二人が落ちたツス。長瀬さんだけは目を瞑ったままジャンプして避けましたけどねー」

忍者マジパネエっす、などとつぶやく美空君。長瀬君が若干勝ち誇った表情なのは、一人だけ縁結びの岩に触れたからなのか。なんだ、なかなか年相応なところもあるじゃないか。

落とし穴についても神社の責任者に知らせておき、引き続き古都の観光を楽しむ。

音羽の滝ではみなこぞって縁結びの水を飲み、ありがたがっていた。聖職者としては教え子が異郷の施設ではしゃいでるのを見るのは微妙な気分だ。寺院そのものには趣があるから、僕もなんだかなだ言いつつ楽しんでいるのだが。

「皆さん、修学旅行一日目、お疲れ様でした！」

嵐山のホテルに着き、夕食の席でネギが話をしていた。

「今日一日、とくに怪我人や迷子も出ず、とても楽しめたと思います！明日もこの調子で楽しみましょう！それでは、いただきます！」

大広間に麻帆良中の生徒が集められ、その目の前でネギがあいさつをする。

いただきます、と生徒たちが唱和し、がやがやと騒がしい食事が始まった。

「しかし、ネギ先生もだいぶ威厳が出てきましたなあ。パリン先生と比べればまだまだですが、彼もなかなか期待できる」

僕の右隣に座った新田先生が、しみじみとした調子でそんなことを言った。

「まったくです、最初のころは生徒に遊ばれている感じだったのに、今は遊ばれながらもうまく取りまとめていますからね。ああいう風に生徒に親しまれるというのは簡単そうに見えてなかなか難しいものですよね」

左隣に座った瀬流彦先生が、ジョッキに並々と注がれたビールを飲

み干し、新田先生に賛同した。

「しかし、まだ一日目ですからねえ。まだまだ気は抜けませんよ」

たくあんをご飯に乗せ、頬張りながら口を挟む。ほかのクラスへの嫌がらせは瀬流彦先生がすべて事前に防いだという話なのに、3 - Aは魔法先生が2人もついていたながら落とし穴を防げなかったのだ。実害はなかったとはいえ、明日はもう少し警戒しなければいけない。

「ははは、3 - Aは特別に元気な生徒が多いですからねえ。パリン先生も大変でしょう」

「まあ、基本的にみない子なんですがね……いかんせん、元気すぎて」

「わかりますよ、その気持ち。僕も最初にあのクラスの授業をしたときは愕然としましたから」

先生方と仕事の話をしながら食事を楽しみ、食事が終わったら割り当てられた部屋に戻る。教員は一人でひとつの部屋を占拠できるので、いろいろとやりやすい。

ホテル全体を覆うように侵入者探知の結界を張り、敵が侵入してくるのを待つ。カソックに着替え、懷にはジャッカルを忍ばせている。戦闘の準備は万全だ。

部屋に戻ってから一時間ほどすると、侵入者がきたことを結界が探知した。

偵察のために使い魔を飛ばし、様子を探る。脱衣所で近衛君がさらわれかけ、ホテルから連れ出されるようなら駆けつけるか、と腰を浮かしたが、どうやら例の混じり物と長瀬君が式神を追い返したらしく、騒ぎは収まった。

が、肝心の侵入者はどうやらいまだホテルの中に残っているようだ。忌々しいことに、隠蔽の術式を発動させているらしく居場所はわからない。

部屋に残っているとホテルの外に近衛君が連れ出された場合にすばやく対応できないので、ホテル内の生徒たちの警護を瀬流彦先生に任せ、自分は屋上へ出る。

ホテル周辺に10体の使い魔を飛ばし、侵入者が出てこないかどうかを見張る。しばらくすると、ホテルから巨大なサルの着ぐるみが飛び出してきたので、そこに陰陽術の痕跡を読み取った僕は追跡を開始した。

上空100mから着ぐるみを追跡し監視していると、着ぐるみが駅に逃げ込んだところでネギと長瀬君、混じり物が追いかけてきた。僕も使い魔から降りて、ネギたちと合流する。

「パリン、どこいったの!？」

「ごめん、あの着ぐるみの仲間がホテルに隠れてたらいけないから、ホテルの中を一通り調べて遅くなった」

適当にごまかして、ネギたちとともに追跡を続ける。着ぐるみは駅に入り、発車した電車に飛び乗った。僕たちもそれを追い、電車へ

と突入する。

「待てー！」

混じり物が声を張り上げる、が、着ぐるみはこちらを振り向き、陰陽術を行使した。

「お札さんお札さん、ウチを逃がしておくれやす」

着ぐるみを着た女がそう言うと、札から勢いよく水が飛び出す。

「フン、未熟な」

そう呟いて、影からマギウスの杖を取り出し、無詠唱の『闇の奔流』で水を押返し、着ぐるみを着た女を電車の外に押し出す。

「おお、すげえじゃねえかパリンの兄貴！」

ネギの懷からカモミールが顔を出した。というか、お前いたのか。気づかなかった。

「クッ、このかお嬢様は返しまへんえ」

着ぐるみを脱ぎ捨てて逃走した女を追い、街中を駆ける。

「このかお嬢様、というのはどういふことでしょうか？ただのいやがらせではないようでございますが」

着ぐるみが近衛君を抱えていたのを見て、長瀬君が混じり物に問いかけた。

「実は以前より関西呪術教会の中にはお嬢様を東の麻帆良へとやったことを快く思わないものがいて、今回やつらはお嬢様の力を利用して関西呪術協会を牛耳ろうと企んでいるようです」

「むむ、大事でござるな」

「え、何ですかそれーっ!？」

長瀬君が深刻そうな顔になり、ネギは驚いて叫ぶ。

「まあ、あの女はそれほどたいした使い手じゃあなさそうだ。さつさと近衛君を取り戻せばいい話だろう」

そう言つて、走るスピードを上げる。身体強化の上限の違いか、僕は最大速度の半分も出していないのに、ネギはこの速度が限界なようだ。帰ったらアルに頼んでちゃんとした身体強化を教えなければ。

「フフ、よーここまで追つてくれましたなあ……そやけど、それもここまでですえ」

女は余裕の笑みを浮かべて、札を掲げる。

「お札さんお札さん、ウチを逃がしておくれやす。喰らいなはれ、三枚符術『京都大文字焼き』」

札から巨大な炎が出でて、女と僕たちの間を遮る。が、この程度の炎、退けること造作もない。

「『闇の暴風』」

マギウスの杖を掲げ、『風』の性質を持たせた闇で炎を吹き飛ばす。

「クツ、ちょこざいな！」

女はそう吐き捨てると、間抜けな外見の二匹の鬼を召喚した。

「長瀬君たちはあの二匹を、お前は近衛君を取り返せ。僕は新手がきたようだからそれと戦う」

そう言つて、洋服を着た二刀流の少女剣士に目をやる。

「どうも〜神鳴流どす〜、おはつに〜」

間の抜けた格好のその剣士は、見たところたいした実力があるようには見えない。

懷からジャッカルを抜き、右手で構える。

ネギと長瀬君が鬼と戦い始め、混じり物が女を追いかけたのを確認し——おもむろに、ジャッカルの引き金を引く。

「神鳴流に飛び道具は——きゃあっ！」

ジャッカルから放たれた弾丸は、それをはじこうとした剣士の短刀を逆に弾き飛ばした。

続いて2回、引き金を引き——1発が女の刀を弾き飛ばし、もう1発が脇腹を抉った。肉片が飛び散り、血が噴き出す。まあ、気で防御したようなので致命傷にまでは至らないだろう。

「ハン、そんな細腕でジャッカルの弾丸を防げるものか——今日のところは見逃してやる、さっさと帰れ」

そう言つて、影から取り出した救急治療キットを放り投げ、鬼と戦うネギたちの様子に目を向けた。

ちょうど彼らも鬼を倒したようで、2匹とも煙を上げて還るところだった。

「ネギ先生、パリン先生、お嬢様は取り戻せました。ご協力ありがとうございました。ありがとうございます」

「別段お前に協力したわけじゃない。じゃあ、僕はホテルの警備があるからこれで失礼する」

瀬流彦先生一人では強力な術者が責めてきた時に対応しきれないかもしれないので、『影の転移門』でホテルの自室へと戻る。

自室からホテル内の隅々までを使い魔に調べさせ、異常がないことを確認してから、僕は風呂に入りに行った。

30話（後書き）

フェイトがいないと敵一味が弱すぎて困ります。かといって主人公は現段階じゃフェイトには勝てませんし。

31話

「——それでは麻帆良中の皆さん、いただきます!」

ネギが音頭をとると、何百人もの女生徒ががいっせいにいただきます、と唱和する。

「ハハハ、ウチの生徒は朝から元気ですねえ」

「まったくです、若いというのはうらやましい」

僕の両隣に座っている新田先生と瀬流彦先生がそんなことを言いながら目を細めている。

修学旅行の2日目の朝はすがすがしい、とてもいい朝だった。

ネギはなにやら生徒と一緒に騒いでるし、近衛君は例の混じり物と追いかけてっことをしているし、3-Aは全クラスの中で最もうるさかった。

先生方と談笑しながら朝食をとり、早めに食べ終わった僕は自室で準備を整える。

顔を洗って歯を磨き、携帯電話を充電器からはずしたそのとき、部屋のチャイムが鳴った。

「はい、あいてますよー」

空間拡張の魔法をかけた鞆に持ち物をつめつつ、ドアのほうに声をかける。

「せんせー、美空ですけど、今日の自由行動一緒に回りませんか？」
ドアを開けて入ってきたのは、制服姿の美空君だった。後ろには超君・葉加瀬君と四葉君、古君に長瀬君がいる。

「うん、特に予定はないから大丈夫だけど……ほかの皆はいいのかい？」

「みんな大歓迎だってさ。ロビーで待ってるから、準備できたら来てよ」

「わかった、急いでいくから先に行つてくれ」

ロビーでまってまーす、という美空君に背を向け、荷造りを急ぐ。影の倉庫を使えば鞆など持ち歩く必要はないが、魔法の隠匿のためにはカモフラージュの鞆を用意しておかないといけないのだ。

荷物を整理し終わり、急いでロビーへと向かう。

「パリン先生、肉まん食べる力？」

「ひとつもらつよ。300円だっけ」

肉まんを差し出してくる超君に代金を差し出し、出発する。

「でも、今日は奈良に行くんだよね？6人で行くなら、バスか電車かい？」

「フッフ、この天才少女がそんな初歩的なミスをするはずもないネ。

今日は私の自腹で車をチャーターしたヨ、これで移動は楽になるネ」

超君がそう言つて携帯電話取り出し、メールを送信する。すると、一分もしないうちにホテルの前に黒塗りのロールス・ロイスが現れ、運転手と思わしき背広を着た老紳士がドアを開けた。

「うひゃー、さすがお金持ちは違うスねー」

美空君が、どこか遠いところを見るような目をしている。

「むむ、拙者こんな車に乗るのは初めてでござる」

「おお、これが例の『ろーるす・ろいす』アルか！初めて見るアル！」

ほかの面々も驚いているようだ。というか、周りの生徒や先生からの視線が痛い。

「ささ、とつと乗るヨロシ。時間がもつたいないネ」

超君が呆けている僕たちの背中を押し、黒塗りの超高級車に押し込む。彼女が目配せすると、運転手は一礼して扉を閉め、車を発車させた。

「さて、今日は飛鳥を中心に回る予定ヨ。お昼はどうするネ？」

ブルジョワジーの権化が、赤紫色の液体が波打つグラスを片手に頬杖をつきながら僕たちに尋ねた。本人曰く、ぶどうジュースらしい。車の中に冷蔵庫があるなんて予想外すぎる。

「飛鳥駅の近くにおいしい蕎麦屋さんがあるから、そこがいいと思う」

四葉君が飛鳥の観光ガイドから目を上げて言った。

「フム、五月のおすすめならぜひとも行きたいネ。ほかの皆はどうする力？」

「私はいつぱいたべられればなんでもいいアル！」

「拙者も蕎麦は好きでござるからな。蕎麦屋なら言うことはないでござる」

「わたしも五月ちゃんのオススメなら大丈夫だよー」

「僕は君たちに任せるよ」

話し合いの結果、昼食は四葉君オススメの蕎麦屋で取ることになった。

「じゃあ、とりあえず最初は高松塚古墳に行くネ！運転手さん、飛ばすヨロシ」

超君が運転手さんに行き先を伝えると、運転手さんはカーナビを起動させて高松塚古墳を目的地に設定した。

午前中の行程を消化し、お昼ご飯を食べた後、僕達はまた車で移動していた。

「運転手さん、次は酒船石遺跡に向かうヨロシ」

超君が地図を見ながら組み立てた観光ルートは中々効率的で、班の皆にも好評だった。お昼の蕎麦もおいしかったし、天気がいいこともあいまって少し眠くなる。

岡寺駅の近くの駐車場に車を止め、春の陽気で暖かい飛鳥を歩く。

この時期は杉の花粉がひどいらしいが、幸い花粉症持ちはいないので暖かな日差しの下、京都とはまた違った趣のある風景を楽しみながら散策する。

が、歩き続けること20分。超君がそろそろ着いてもいいはずだと首を捻り、地図を取り出して道を確認する。

「アレ、この道はさっき通ったはずネ……」

「魔法、でしょうか？」

一般人だと思っていた四葉さんが聞き捨てならない単語を口にしたので、驚いて振り向く。

「五月は一応魔法のことを知ってるヨ。とはいっても、関係者ではないがネ」

超君が肩を竦めてそういった。

辺りを探してみると、確かに結界の類が張られているようだ。術式の運用に気を用いていることが原因で気付かなかったらしい。

「魔法！？そんなの初耳アル、詳しく聞かせるアルよー！」

目を輝かせて騒ぐ古君を、超君と葉加瀬君が取り押さえる。結界につかまってしまった以上、むやみに騒いで居場所を知られるのはまずい……が。

「なんや、英雄の息子やて聞いてたけど、まだガキやんけ」

……どうやら、結界を仕掛けた張本人のお出ましのようだ。巨大な蜘蛛の式神を従えている。頭の上に生えた耳を見るに、どうやら人外のような。ならば、ここで抹殺するべきか。

「人払いは済ませてあるんだろ？生徒は関係ないんだから、結界を解きなよ。相手はしてあげるから、さ」

「姉ちゃん達にはワリイが、お前を逃がすわけにはいかんのや。つーわけで、ねーちゃんたちは下がるときなや」

どうやら、一般人に対する魔法の隠匿義務を守る気はないらしい。襲い掛かってきたことと併せれば、殺してしまっても大義名分はできるな。

「パリン殿、助太刀はいるでござるか？」

「いや、この程度なら目を瞑っても相手できるね。超君たちは下がって見てて、とっと片付けるから」

流石に生徒の目の前で殺すのは教育上よろしくないな。なら、倒してから結界を解いて、生徒を先に行かせてから殺すのがベストだろう。

「ハン、強がりも大概にしときなや。行くでえ！」

超君たちが後ろに下がったのを見て、犬耳の少年は蜘蛛をけしかけ

てきた。

無詠唱で『戦いの旋律』を発動させ、突っ込んできた蜘蛛に真正面から掌底をかます。

突進をとめられ、よろめいた蜘蛛に連続して肘撃と蹴りを叩き込み、後方に吹っ飛んだ蜘蛛に裾から取り出した黒鍵を3本、投擲。鉄甲作用によって脚を4本と胴の一部を抉り取られた式神は、煙を上げてそのまま消滅した。

「へえ、やるやないか。でも、これならどうや！」

そう叫んで飛び掛ってきた少年をかわして、浮遊術で空へと舞い上がる。上空20m、氣いよる身体強化を用いても拳がとどかない距離だ。

「飛ぶなんて卑怯や！男なら降りてきて魔法で勝負せい！」

地上でわめいている少年に向かってマギウスの杖をかざし、無詠唱で重力魔法を発動させる。殺さないように手加減しつつ相手の自由を奪う魔法となるとこれしかないのだ。魔力の消費効率がいいとは言えないが、僕の戦闘スタイルは相手を殺すことを第一にしているので仕方がない。

「ぐっ——」

コンクリートが円形に陥没し、重力に押しつぶされている少年はくぐもったうめき声を上げる。たとえ気による身体強化を行って

も、これほどの重圧を身に受けてはあばらの1・2本は折れているだろう。

影の倉庫から黒鍵を取り出し、地面に押さえつけられている少年の周囲に12本のそれを突き刺す。浮遊術と重力魔法を解除し、地面に降り立ち、マギウスの杖を少年に向ける。

「さて、誰に雇われて何の目的で僕達を襲撃したのか、答えて貰おうか」

尋問するまでもなく想像はつくが、とりあえず聞いておく。大方、こちらの戦力調査といったところだろう。

「ケツ、わざわざ敵に情報を与えるような馬鹿がおるか」

「じゃあ、とりあえず結界を解けよ。負けたんだから大人しく従ったほうが身のためだよ」

地面に這い蹲っている少年にジャッカルを向け、威圧する。

「……ここから30mほど進んだところにある電柱の上に、札が張ってある。結界を解きたかったらそれを取りいや——ただし、ワイを倒せたらやけどなあ！」

そう言つて、少年は『獣化』し、再び襲い掛かってくる。後ろに控えている生徒達が息を呑むのが聞こえた。

「『影の多重障壁・20層』」

飛び掛ってくるソレを力任せに展開した障壁で防ぎ、魔法で迎撃する。

「来たれ奈落の女王、五首の竜。其は奈落に充る怨嗟の響き也。」
『黒の衝撃』」

正面から障壁を突破しようとむちゃくちゃに腕を振るうソレに、暗黒の衝撃波を叩きつける。まともに叩きつけられればタンクローリーすら吹き飛ばすようなその一撃を受け、その人外は血を吐きながら吹き飛んだ。若干上方に吹き飛ぶよう魔法を調整したので、飛距離は100mほどは出ているだろう。

遠見の魔法で確認すると、起き上がってくる様子はない。頭を打ちつけたらしく、どくどくと血が流れ出しているが、いい気味である。

「長瀬君、僕は結界を解いてくるから、超君たちの護衛を頼む」

「あいあい」

長瀬君に超君たちを任せ、お札が張ってあるという電柱を探す。気が行使された形跡を追って使い魔に上空から探らせると、お札が張ってある電柱が見つかった。

電柱に登るのも億劫なので、使い魔によってお札をはがす。そのついでに、吹き飛ばしたから遠くから使い魔に殺させればいいじゃない

いかと気付き、善は急げとばかりに影の使い魔を人外の元にやり、頭と心臓を潰す。それほど再生力が高いようには見えなかったが、化物というのは倒したと思ったときに背後から襲い掛かってくるものなのだ。念を入れておくに越したことはない。

「ごめんごめん、まさか真昼間からお客さんが来るとは思わなくて」

超君たちの元へ戻り、開口一番に謝った。敵が来るとしても親書を持ったネギのほうだろうと思っていたので、まさか襲撃を受けるとは思わなかったのだ。

「パリン先生が悪いわけじゃないから、誰も責めたりしないネ。それはそうと、あの少年はどうしたの力ナ？」

「ああ、彼なら逃げたよ。多分、今日はもう手を出してこないと思う」

死んだら手を出すも何もないからね、と心の中で付け加える。

「なににせよ、面白いものが見れたアル！魔法なんてそんな面白そうなもの秘密にするなんて、超も葉加瀬も水臭いアル！」

「魔法は隠匿義務があるからしょうがないよ。それより、一般人が魔法を知った場合は記憶を消すか魔法関係者になって一緒に隠匿義務を負うか、どっちかを選ぶんだが、君はどうしたい？まあ、今すぐに結論を出す必要はないけどね」

はしゃぐ古君に釘を刺す。個人的には問答無用で記憶を消してしま

いたい、古君の場合その実力があれば裏社会に関わっても十分に生きていけるだろうし、周囲の環境や彼女の性格を考えると、今記憶を消去してもいずれまた別の形で魔法を知ることになるのは十分に想像できる。

「記憶を消されるなんて嫌に決まってるアル！」

「古ならそう思うたネ。パリン先生、見逃してやってくれな
い力？」

「まあ、僕としても嫌がる生徒の頭をいじくるのは気が引けるからいいけども……絶対に、他の人に魔法のことを話すなよ？最悪、殺さなきゃいけないから」

ジャッカルをちらつかせてそう言うと、古君は凄まじい勢いでうなづいた。わかってくれてなによりだ。

「さて、少々ハプニングがあっただけど、観光を再開しようか」

「そうするのが一番ヨ。さ、皆もさっさと歩くネ」

そうして、僕達は超君に引っ張られ、2日目の行程を満喫した。

31話（後書き）

小太郎は犠牲になったのだ……

32話（前書き）

修学旅行二日目が終了。

32話

修学旅行2日目の夜、僕はホテルで騒ぐ生徒達への対処におわれていた。

「枕投げはせめて部屋の中だけでやれ！廊下やロビーで乱闘なんて他のお客さんに迷惑がかかるだろうが、少しは考える！」

どうも朝倉君の企画で、班対抗で枕投げ大会を行っているようだ。騒ぎたい気持ちはわかるが、せめて一般客に迷惑をかけないようにして欲しい。景品はネギの唇だとかほざいているので、カモミールが何かたくらんでいたのだろう。もっとも、宿に仕掛けてあった魔方陣はとつくに破壊したのだが。

「長谷川、お前は常識をわきまえてると思ってたんだが……」

消灯時刻を過ぎているにもかかわらずホテル内をうろつく生徒を見つけては、ロビーで正座させている。新田先生、瀬流彦先生とも共同戦線を張っているので戦果は上場だ。

「先生、あたしは無理やり参加させられただけです！」

「知るかくそたわけ。いいからとっととロビーに行って正座して来い」

今日の夜は京都の町を回って境界石を設置しなければいけないのに、こんなことで無駄な時間を食うなど論外だ。任務のためなら仕方ない」と割り切り、認識障害と透明化を重ねがけした使い魔でホテル内

を搜索する。

「雪広、お前もか！」

「ネギ先生の唇のために、ここで倒れるわけには行きませんわっ！
パリン先生、覚悟っ！」

馬鹿な事を叫んで襲い掛かってきた雪広君を取り押さえ、ロビーで正座している連中のところへ放り投げる。これで捕まえた人数は5人、使い魔からの情報によればホテル内を歩き回ってるのは10人だから、あと5人を捕まえればいいのか。

捕まえたのは明石君、長谷川君、雪広君、鳴滝姉妹だ。まだホテル内をうろついているのは、長瀬君、古君、綾瀬君、宮崎君、佐々木君。
「楓、捕まえるアル！」

「あいあい」

天井から降ってきた長瀬君と正面から突撃してくる古君、2人の攻撃をいなしてそれぞれ胴に掌底を一発。おちろん、身体強化は使っていないのでダメージはそれほどでもないはずだ。

「うぐ、やはりかなわないでござるか……」

「はいはい、2人ともロビーで正座ね」

武闘派2人をロビーに連行し、瀬流彦先生に監視を頼む。

そのとき、ホテル内に走らせた使い魔からの視覚情報で、ネギがホ

テルを抜け出して身代わりを5体おいていったことが判明した……なぜ5体も身代わりを作ったのかは理解に苦しむが、そちらへの対処もしなければいけないだろう。いくらなんでも、同一人物が5人も出歩くななんて怪しすぎる。下手をすれば魔法ばれの可能性だってあるかもしれない。

「コラ！宮崎に綾瀬、とつくに消灯時刻は過ぎてるぞ！2人とも、ロビーで正座しなさい！」

「のどか、ここは私に任せて先に行くです！ネギ先生の唇が欲しくはないのですか！」

「ゆえ……」

目の前ではなにやら感動的な友情演出が行われているが——いったい、ネギはいつ宮崎君にフラグを立てたのだろうか。

「馬鹿なこと言っていないで2人とも正座だ、正座」

綾瀬君の振り回す枕を避け、宮崎君の腕をつかむ。宮崎君は必死に振りほどこうとするが、あいにく非力な女子に力負けするような鍛え方はしていない。

宮崎君と綾瀬君の首根っこをつかみ、暴れる2人をずるずるとロビーまで引きずる。途中で合流した新田先生に2人を引き渡し、そろそろ眠気が限界なので寝てもいいですか、と聞いてみる。

「流石に10歳の子供に徹夜させるわけには行きませんよ。今日はもう寝てくださって結構です」

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えて寝ることにします。おやすみなさい」

「ああ、おやすみなさい」

新田先生と挨拶を交わして、部屋に戻る。

部屋に戻り、それまで着ていたスーツからカソックへ着替え、戦闘の準備を整えた。昼間から襲撃してくるような連中なのだ、用心しておくに越したことはない。

『影の転移門』を用いて、33個の結界石をあらかじめ調べておいた場所に埋める作業を開始する。

33という数はキリストが磔にされたときの年齢で、教会魔法においては最も強力な魔法数字のひとつとされている。これを用いて京都全体を強力な教会魔法を使用し、スクナに対する切り札とするのだ。

地図を片手にあちこちに転移し、地面を掘り返して結界石を埋め込む。1つ埋め込むのに5分ほどかかるので、すべての結界石を設置し終わるころには午前2時を過ぎたころになるのか。

「障壁突破・石の槍」

18個目の結界石を設置し終わり、転移門を発動しようとした瞬間――背後から魔法の詠唱が聞こえた。

「くっ——」

強力な地属性の魔法に左肩を挟まれ、久しく味わったことのなかった激痛に顔をしかめる。

「so that you come behind in no
gift; waiting for the revelation
of our Lord Jesus Christ」

嵌めていた手袋によって治癒魔法を発動し、たちまち傷は消えた。

「へえ、今のをかわすんだ——でも、これならどうかな」

そう言つて、襲撃者は近接戦闘を仕掛けてくる。この動きは中国拳法か。

身体強化を発動し、様子を見るためにひたすら攻撃をかわし続ける。暗視の魔法も発動し、襲撃者の顔を見ると——そこには人形のように無表情な白髪の少年がいた。

襲撃者のクンフーは見事なものだが——しかし、技のキレに関してなら僕のほうがよほど上だ。

肘撃をいなし、大きく空いたわき腹に掌底を叩き込む。が、多重展開された強固な障壁によってダメージは与えられなかった。

距離をとろうと後ろに跳び下がるも、襲撃者はしつこく接近してくる。カマイタチのような鋭い猛攻を避けつつ、蹴りや肘撃を放ったが、すべて障壁に止められ、ダメージは与えられない。

やむなく懷からジャツカルを抜き放ち、続けざまに10回引き金を引く。6発の実弾と4発の魔力弾は襲撃者の障壁を削り、2発の魔力弾はその左腕に命中したが、致命傷というには程遠かった。

障壁を抜かれて警戒したのか、襲撃者が一端距離をとる。続いて、詠唱とともに石化の光線を放ってきた。

「小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ。その光、我が手に宿し、災いなる眼差しで射よ。『石化の邪眼』」

「——ッ！」

多重展開していた影の障壁がみるみる崩壊していく。マズい、石化を喰らってはまともに戦闘などできなくなる。

「我掲げるは抗魔の翠玉、具現化せよ『闇の大障壁』」

やむなく、僕の最大魔力量の3倍もの魔力がこもった宝石を使い捨て、現状で利用できるもつとも頑丈な障壁を展開する。魔力の完全物質化を使ったおかげで、全身が激しく痛む。

闇の大障壁によって襲撃者の石化魔法を防ぎ、お返しとばかりに黒鍵を6本、投擲した。

「……その術式、現代では見なくなって久しいものだね。君、何者だい？」

「『過去と現在の主』の名前くらい、聞いたことがあるだろ？強いと言うのなら、彼の弟子さ」

正直、この襲撃者には勝てる気がないのでマジエーレ師の名前を出して虚勢を張る。転移に継ぐ転移で魔力も残り少ないし、このまま戦えば負けは確実だ。影の倉庫からマギウスの杖を取り出し、握り締めて魔力をこめる。

「何を馬鹿な、大フィスタンティラスは最後に目撃されてからもう100年以上が――」

襲撃者はそういいかけて、僕が影の倉庫から取り出したマギウスの杖に目を留める。

「その杖、文献では見たことがあるけどまさか――まあいい、いずれにせよ今日は君の力も見れたことだし、退散するとするよ、パリン・スプリングフィールド」

そう言い捨てて、襲撃者の少年は『水の転移門』で転移し、眼前から消えた。

「ふう、死ぬかと思った……」

マギウスの杖によりかかって、ずるずると地面にへたりこむ。

あれほどまでに強力な戦力がいるとは思いつかなかった。明日本山に行ったら、まさきに西の長に報告し、警戒するべきだろう。あるいはあの少年なら、本山の結界をも破れるかもしれない。

魔力が枯渴しかけていたので、影の倉庫から宝石を取り出し魔力を回復させる。多少余分に宝石を用意しておいてよかった、と心の底から安堵する。

魔力を回復させ、しばらく休んで心と体を休めてから再び結界石を設置し始める。

地面を魔法で掘り返し、結界石と遠隔操作で結界石に魔力を流し込める魔力充填済みの宝石、それに探知魔法を妨害する術式を刻み込んだ羊皮紙を地面に埋め、再び土をかぶせ、掘り返した痕跡を魔法で隠蔽する。だいぶ慣れてきたので、最初よりも手際よく作業が進む。

結局、午前4時までかかって作業を終え、ホテルに戻ることになった。

今すぐにも寝巻きに替えてベッドに飛び込みたいところだが、仕事の都合上そうはいかない。準備を整えたことを上司に報告しなければいけないのだ。

「――もしもし、機関長ですか？こちらスプリングフィールドです」
懐から携帯電話を取り出し、ちょっとした魔法を使ってヴァチカンにいる上司に電話をかける。

『ああ、私だ。首尾はどうだ？』

「敵の妨害はありましたが、石の設置は終わりました。敵戦力に関しては少なく見積もってもA A A級の魔法剣士が1人に、雑魚の剣士と陰陽師です。人外の構成員もいたようですが、そっちは処理しました」

『ご苦労だったな、スプリングフィールド司祭。では、私は聖下に最終報告を済ませてくる。Amen!』

「Amen」

報告を終え、電話を切る。

いよいよ作戦の決行が迫っている。切り札の準備は終わり、あとは敵が動くのを待つだけだ。

明日の自由行動では、家庭訪問の口実で僕と近衛君、混じり物が最初に本山まで行き、夕方になってからネギと長瀬君が本山を訪れる予定だ。

いよいよ目障りな吸血鬼と不敬にも神を名乗る化け物を殺せるかと思うと、歓喜に体が打ち震える。

ロザリオを手に取り、興奮を鎮めるために小声で賛美歌を歌う。パイプオルガンによる伴奏がないのが残念だが、ひっそりと静まり返った暗い部屋で、控えめに歌う賛美歌もいいものだ。

『アヴェ・マリア』を歌い終わると、気持ちが安らいできたので寝巻きに着替えてベッドに入る。明日に向けて体力を温存しなければならぬから、速いところねてしまうに限るのだ。

ベッドに入ってから数分もたたないうちに、僕の意識は深く沈んでいった。

32話（後書き）

感想・評価などいただけると嬉しいです。
活動報告を付け始めました。よろしければごらんください。

33話（前書き）

こんな展開はプロットになかったはずだ……どうしてこうなった……！

33話

修学旅行3日目の朝、朝食と着替えを済ませた僕はホテルの裏口で近衛君たちを待っていた。

建前上、自由行動は班ごとで行動することになっているので、教師が堂々と生徒2人を連れて歩くのは気が引けるのだ。一応、彼女らは実家が京都にあるから家庭訪問もかねて僕が引率しますと先生方には報告してあるが、他の生徒達がついてきたりしたら厄介だ。スナ戦に巻き込まれれば下手をすると死ぬ可能性があるので、一般生徒がついてくることだけは阻止しなければいけない。

待つこと10分、そろそろ来てもいいはずだと思い始めると、ちょうど彼女らが裏口の扉を開けてやってきた。

「じゃあ、行こうか」

遅れてすいません、と謝る2人を引きつれ、本山からよこされたハイヤーに乗る。徒歩で行くという手もあったが、体力は温存しておくにこしたことはない。昨日は睡眠時間が十分でなかったから眠いし、車の中で寝ようと考えている。ホテルから本山までは車で1時間かかると言うし、せっかくの好意を無碍にするのも気が引けたのだ。

「ではこのかお嬢様、お乗りください」

和服を着た運転手らしき老人がドアを開け、後部座席に近衛君と混じり物がり込む。混じり物と同じ車に乗るなんて怖気がするが、

計画のためなら仕方がない。

助手席に乗り込み、運転手さんに一言断ってから目を閉じる。疲労を抜くため、まほネットで買い求めた魔法薬を飲んでから僕は目を閉じた。

「スプリングフィールド様、総本山に着きました。起きてください」
運転手に起こされると、時刻は既に午前10時だった。

「途中渋滞があつて少々遅くなりましたが、無事に本山に着きましたぞ。ささ、どうぞこちらへ」

車から降りて、勝手知った様子の3人についていく。途中、すれ違う人全員が近衛君に深々とお辞儀をしていくのを見て、どうにも住んでいる世界が違うらしいと肩をすくめた。

馬鹿みたいに大きな門を通り抜けると、そこには数十人の巫女さんがずらりと整列していた。敬虔なカトリックとしては少々胸糞悪くなる光景だが、事前に聞いた話では巫女服は女の陰陽師の制服のよ

うなもので、宗教的な意味合いはないのだとか。とにかく、整列した全員が近衛君に対していつせいに頭を下げ、挨拶した。

「おかえりなさいませ、このかお嬢様」

巫女さんたちに囲まれてもみくちやにされる近衛君を遠い目で見つ、運転手さんに案内されるまま奥へと進む。どうやらこのまま詠春氏と会合する手はずになっているようだ。娘との再会を後回しにしているのでしょうか、と運転手に聞くと、襲撃者について詳しく話を聞きたいので僕を先にするということらしい。

公私の区別ができるような人物で何よりだ、などと内心で思いつつ桜並木の下を歩く。どうやら遅咲きの桜らしく、ちょうど満開だった。よくよく化け物と桜は縁があるらしい。

「はじめまして、パリン・スプリングフィールドです」

「ようこそ、パリン先生。このかの父親の詠春です」

運転手さんに通された茶室で待っていたのは、少々顔色の悪い痩せ気味の男性だった。外見こそ生きるのに疲れた中年のサラリーマンのようだが、佇まいや気配は一流の武人のそれだ。前線から離れて十数年とはいえ、やはり英雄なのだと実感させられるような覇気のある人物だった。

「いつも娘が世話になっています。最近の手紙ではあなたのことも

書かれていましたよ。厳しいけど、頼りになる先生だと」

「いえ、僕などはまだまだ未熟者ですよ」

出されたお茶に口をつけ、存外に日本茶も美味しいものだ、と思う。普段はもっぱら紅茶ばかり飲んでいるため、日本茶の味わいが新鮮に感じられた。

「……本題に入りますが、襲撃者のレベルは予想以上に高いですね。昨日の夜たまたま交戦しましたが、相手が本気を出していれば恐らく死んでいました。少なく見積もってもタカミチ以上の実力者、この結界を抜くことも造作ないでしょう」

しばらく当たり障りのない話題に興じた後、用件を切り出した。

「それほどですか？義父からパリン君の実力は聞いていますが、それほどの相手が向こう側についているとなると厳しいですね。うちの実力者達はいずれも出張中で手が離せないのです、関東から応援を呼べませんか？」

「あいにく、関東の魔法先生も修学旅行の生徒の警護のために出払ってしまって……タカミチは海外に出張中ですし、難しいですね」

男2人で顔を突き合わせて唸る。

「詠春さんは『紅き翼』のメンバーだったんでしょう？どうにかなりませんか？」

「私も往年よりはだいぶ衰えているので、そのレベルの実力者と闘えるかといわれればだいぶ不安ですね。最近は忙しくて稽古もままならない有様です」

「いえ、失礼なことをお聞きしました。それより、敵方の目的についてはお聞かれていますか？」

「ええ、彼らはどうやらこの近くに封じられた『リョウメンスクナノカミ』の復活をもくろんでいるようです。書庫からスクナに関する巻物がいくつも盗まれましたし、間違いはないかと」

「わかりました。では、とりあえず片っ端から応援要請を試みます」

「お願いします。私は得物を準備して、比較的近くにいる協会の構成員を呼び戻します。こんな場合でなかったらパリン君とはもっと色々な話をしたいのですが……」

「上手く事態を収拾できたら、ゆっくりと温泉にでもつかりながら語らしましょう。では、私は電話をかけてきます」

とにかく、これで「どんな援軍を呼んでもいい」という言質は取ったことになる。詠春氏には悪いが、これで作戦を実行する上で障害はなくなった。あとは、近衛君が誘拐されるのを待ち、スクナが復活したら大規模な協会魔法を発動させるだけだ。

「もしもし、機関長ですか？ スプリングフィールドです」

『スプリングフィールド司祭か。こちらは準備完了した、そちらはどうだ』

「現地の魔法組織の了承は得ました。経過は順調、何もかも計画通りです」

『わかった。報告ご苦労だったな』

「ありがとうございます。では、また」

上司へ電話をかけ、経過を報告する。向こうも作戦実行の準備は整ったようだ。

現在、こちら側の戦力は僕、詠春氏、ネギ、長瀬君、混じり物。ほかに色々いるが、使い物になるのはこの面子だけだろう。瀬流彦先生は警備のためにホテルからはなれないし、本山の有象無象は石化魔法の一撃で使いものにならなくなるような雑魚ばかりだ。

一方、敵側は陰陽師の女に白髪の少年、二刀流の神鳴流剣士。頭数だけはこちらが勝っているが、こちら側の戦力だけでは白髪の少年一人にすら勝てないだろう。この状況ならば、近衛君が奪われても僕の落ち度にはならない。全く自然な流れだ。

理想的な展開は、近衛君をさらいにきた白髪の少年に詠春氏がやられ、僕とネギたちがそれを追いかけるというものだ。これならば関西呪術協会は実質機能停止状態となり、ヴァチカンの名代として好き勝手にできる。

懸案事項は、果たしてあの白髪の少年から無事に逃れることができ

るか、ということだ。マジエーレ師から見ればあの少年などミジンコのようなものだが、現状では僕の実力はそのミジンコ以下。一番痛いのは、石化魔法を防ぐだけの強度がある障壁を展開できないということだ。寶石に蓄えた魔力はもう余裕がないから使えないし、どうしたものか。

つらつらと考え込んでいると、ふと名案を思いついた。闘ってかなわないなら、逃げればいいじゃないか。

アリアドネー時代には無詠唱・遅延呪文ともに最上級の講座まで取っていたから、その二つを併用することもできる。現在の僕の最大遅延時間は4時間、ならば『影の転移門』をあらかじめ遅延しておけば、少年と会ったときにも逃げ切ることができるだろう。

桜並木の下でマグウスの杖を掲げ、本山の結界の強度を確かめると、後ろから声をかけられた。

「なにをしているのですか、パリン先生」

例の混じり物だった。ちらりと後ろを見ると、どうにも暗い表情をしている。いい気味だ。

「工作中だ。僕が殺意を抑えていられる間に立ち去れ」

つつけんどんにいって、再び結界の術式をなぞり始める。大規模な儀式魔法によるものなのだろう、使用されている魔力は人のそれではなく、土地に流れる魔力の脈を流用しているようだった。なるほど、一流の魔法使いなら竜脈を乱すことができれば簡単に破れるだろう術式だ。もっとも、土地の竜脈を乱すなど相当な実力者でもな

けばできないことなのだが。

「あ、せつちゃんこんなところにいたんかー。探したえー」

黙々と作業を続けていると、向こうから近衛君がやってきた。あわててマギウスの杖を影の倉庫にしまつて、『透明化』の魔法を発動させて隠れる。

「お、お嬢様！」

「なあ、せつちゃん。ウチ、ようやくせつちゃんに避けられてる理由、わかったよ。せつちゃん、たかだか翼が生えてるだけでウチが嫌うんやないかと思うてるん？」

「お嬢様、どうしてそのことを……」

いつものように笑っている近衛君だが、目が笑っていない。どうやら、珍しいことに怒っているようだった。

「お父様から全部聞いたえ。魔法のこと、せつちゃんがずっと守ってくれてたこと、ウチが狙われてること……やから、隠す必要なんてないんよ？な、昔みたいに仲良くしようや」

じりじりと、混じり物との距離をつめる近衛君。追い詰められている方はいえ、背後の桜の木と近衛君に挟まれて怯えている。

「せつちゃんの馬鹿。せつちゃんは——化け物なんかやない」

笑うのをやめて、表情を消した近衛君がそうささやいた。今すぐにも立ち去るべきだと本能が警告しているが、少しでも物音を立てたら気付かれてしまいそうで、動くことができない。

「わからないよ……このちゃんみたいな綺麗な子に……私みたいな薄汚い化け物の——」

涙を流しながら、追い詰められた彼女はそう言いかけた。

「せつちゃんに、ウチの何がわかるの？」

しかし、無表情な顔をした近衛君は冷たく言い放った。

「昔みたいに仲がいいわけでもないのに、せつちゃんにウチの何がわかるん？」

近衛君は追い詰めた彼女の腕をつかみ、無表情のまま爪を立てる。

「痛っ——」

「痛いやろうなあ、でも、ウチの心はもつと痛かったんや。このくらいは我慢してもらわんとだめやえ」

ぎりぎりと言首に爪を立てながら、尚も近衛君は続ける。

「自分だけが汚いだなんて思わんという——綺麗なだけのウチを見るのはやめにしいや」

「こ、このちゃん……」

爪を立てた手首から流れた血を、近衛君は顔を近づけて舐め取る。その仕草がどうにも妖艶で、一瞬だけだが目を奪われた。

「なあ、せつちゃん。目、瞑ってみい」

近衛君は正面から顔を近づけ、抵抗をやめた彼女の目を覗き込む。

「このちゃん……そんな、やめ……」

近衛君は両手で彼女の頬を包み込み、ゆっくりと顔を近づけ——唇を、重ねた。

「んっ……この、ちゃん……」

軽く唇を触れ合わせ、近衛君が唇を離すと——無理やり唇を奪われたにもかかわらず、どこか名残惜しそうな顔をしていた。

「ふふっ、せつちゃんも物欲しそうな顔しとるえ」

「なっ、ななな、お嬢様、こんなこといけませ——あ……ん……」

彼女は顔を赤くして取り乱すが、再び近衛君は顔を近づけ、今度は唇を触れさせるだけでなく、半開きの口に舌を滑り込ませ、むさぼるように舌を絡める。

「んっ……はぁ……せっちゃん、大好きやえ……」

近衛君が唇を離すと、つつ、と唾液が糸を引いた。

「このちゃん……」

近衛君は顔を赤くして俯いた想い人の顎を持ち上げ、再び唇を重ねる。

「あ……あんっ……」

目を蕩けさせ、甘い吐息を漏らす2人。

何分もそんな状態が続き、両者はお互いを求めるかのように腕を回し、舌を絡めていた。

近衛君が彼女を芝生の上に押し倒し、口付けを続けながら彼女の服をまさぐり始めたとき——ようやく、僕は影の転移門で離脱できることを思い出し、顔を真っ赤にしながらその場を離れたのだった。

33話（後書き）

ノクタで続き書こうと思ったけどまだ16歳だからやめときます。
大切ななにかを失う気がする。

34話（前書き）

バトル開始。

34話

「では、親書は受け取りました。東の長の意を汲み、我々も東西の関係の改善に尽力しましょう。任務ご苦労でした、ネギ・スプリングフィールド君」

「はい、ありがとうございます」

大広間にて、ネギが詠春氏に親書を手渡し、詠春氏がネギを労った。

「長瀬君もおつかれさまです。今日はこちらに部屋を用意したので、泊まっていてください。身代わりはこちらで立てておきましょう」

「そうですね、今からでは遅くなりますし……ご好意に甘えさせていただきます」

ネギと長瀬君が頭を下げ、会合はお開きになった。

「刹那君とパリン君は既に知っていますが、今回の件のこともあってこのかには全部話しておきました。麻帆良に帰ったら私の友人であるアルビレオに魔法関係教育を頼みたいので、会わせてあげてください」

「えっ、師匠に？わかりました、引き受けましょう」

「助かります。それと、今夜の警備についてお話したいことがあるので、パリン君と刹那君も付いてきてくれますか？」

「ええ、大丈夫ですよ」

「了解しました、長」

そう、修学旅行前にアルに頼まれて、彼が訳あって麻帆良にいる旨が書かれた手紙を詠春氏に渡す任を引き受けたのだ。ネギが到着する直前に思い出して詠春氏に手紙を渡すと、それならば、というところで近衛君はアルに教育させることになったのだ。本人もヒマだろうし、断られたら僕が教えればいいので問題はない。

そこそこの広さの和室に通され、お茶と茶菓をいただく。

「それで、話したいこととは何でござるかな、詠春殿？」

ネギの隣に座った長瀬君が、お茶を一口啜ってから口を開いた。

「先ほどパリン君とも話し合ったのですが、敵方にかなりの遣い手がいるようで、正直に言うといまの戦力では対抗できない可能性があるのです」

詠春氏は正座して難しい顔をしながらそう言った。

「あいにく、本山の腕利きの術士は皆出払っております。敷地内の一般人は最優先で避難させて、未熟な者たちも順次山を下りさせているのですが、しかし敵方の狙いはこのかです。このかが奪われてしまえば、大鬼神『リヨウメンスクナノカミ』が復活してしまう可能性があります。そうなれば、応援が駆けつけても総本山は落ち、悪くすれば一般人に万単位の被害を出した末に魔法バレの原因となりますね」

「ふむ、そのリヨウメンスクナとやらはそれほどまでに強いのでこ

ざるか？」

「全力状態なら、3分の制限がないウルトラマンみたいなものです。伝承では一撃で山を崩したとも言いますし、全盛期の私ならともかく衰えた今では時間稼ぎができるかさえ怪しいですね」

苦々しい表情で詠春氏が言った。

重苦しい沈黙が場を支配する。万単位で人が死ぬと聞いて、ネギや混じり物は顔を青くしていた。長瀬君も目を見開いて、真面目な顔をしている。

「組織人の長としての目で見れば、このかを殺してしまうのが一番なのでしょうが……親として、それだけはなんとしても避けたいのです。どうか皆さん、このかの護衛にご協力ください！」

そう言って、深々と頭を下げる詠春氏。

「何人かに声をかけたらこちらに向かってくれるそうですし、そう悲観しないでください。嘆いてても仕方ないです、今は襲撃に備えましょう」

詠春氏に発破をかける。一応嘘はついていないのだが、やはりなんとなく居心地が悪い。まあ、元はといえば学園長の見通しの甘さが原因なのだし、僕にはこれっぽっちも責任なんぞありはしないのだが。むしろ、極悪吸血鬼と神話級の化け物をわざわざ狩ってやるのだから、感謝して欲しいくらいである。

「ありがとうございます、パリン君。では、歓迎の宴の準備ができています。こちらへどうぞ」

詠春氏に案内され、広間にて夕餉の席に着く。

「あ、せつちゃん。こっちこっち」

僕達が広間に入った瞬間、近衛君が凄まじい速さでこちらに気付き、手招きをした。

真っ赤になりながらもそそくさと近衛君のところへ向かう自分の生徒を見て、ネギは首をかしげ、長瀬君は得心したような顔でふむふむ、などと頷いている。まあ、確かに誰の目から見ても彼女たちの仲の良さは少々行き過ぎだった。

近衛君が護衛にぴったりと密着して甘えているのを見ても詠春氏はなにも気付かないようで、やはりアルの言っていたとおりどうも女性には疎いようだ。

ネギの隣には長瀬君が座っているが、やはりこちらも距離が近い。正面で桜色の雰囲気醸し出している2人ほどではないが、どうにも居心地が悪くなったので上座にいた詠春氏の隣に席を移すことにした。

「しかし、サウザンドマスターの息子が13課とは、誰も予想しなかったでしょうね」

詠春氏と談笑していると、彼はしみじみと呟いた。

「まあ、マギステル・マギにせよイスカリオテにせよ、世のため人のために尽くすという部分ばかりませんか、本質的には同じだと思いますよ。少なくとも、13課にいれば無実の相手を殺さなければいけない機会なんてほとんどありませんし、精神的には楽なんじゃないですかね」

事実、魔法世界における魔法生物・化け物・悪魔崇拝者などによる事件はその6割を13課が解決しているのだ。あまりにも思想が違いすぎるため民衆に広く尊敬されるということはないが、マギステル・マギ並みの功績を残したとして称えられる先人もいるため、魔法世界の有識者には13課というのはそれほど悪い印象をあたえないのだ。

「君たち兄弟には本当にすまないと思ってるよ。私やタカミチ君にもう少し力があれば、本国からの干渉を撥ね退けてもっと楽しい生き方をさせて上げられたのに、と常々考えている」

どうも詠春氏は自分を責める傾向が強いようだ。

「いえ、そういう意味では僕はネギより恵まれてますよ。自分の立場を自覚できる状況ですし、泥沼だった心を神に救われましたからいい友人や理解者もたくさんいます。教え子にも恵まれてますし、師匠も素晴らしい人でしたから……だから、そういう同情はネギにしてあげてください」

今の僕は、基本的に化け物さえ殺せばそれでいい。僕の戦いは無理強いされているものではないし、幸せかと問われれば幸せだと自信を持って答えられる自信がある。

「やれやれ、鳶が鷹を産んだとはこのことだね。君はナギよりよほ

ど賢い。もつと色々な選択肢を用意できなかったのは僕達の責だけど、そう言ってくれると嬉しいよ」

どこか複雑そうな顔でそう洩らす詠春氏。

「僕から見れば、あなたのほうがよほど辛そうに見えるのですがね。いつそ、協会なんて投げ出して自由に生きればどうです？」

「それができたらどんなに幸せだろうね。まあ、結局英雄なんて政治家の駒に過ぎないのさ。僕がいなくなればただでさえ内輪での争いが多い関西は空中分解してしまうだろうね。協会にはお世話になつてる人も多いし、今更投げ出すわけにはいかないんだよ」

我ながら損な性分だけどね、と彼は苦笑した。

「とりあえず、今回の件が片付いたらまとまった修行の時間をとることにするよ。娘一人守れないんじゃないからね。やっぱり、政治で闘おうなんていうのが土台無理な話だったんだ。剣術遣いは剣術遣いらしく、力で無理やりまとめていくのが性にあつてゐるみたいだ。」

食事が終わり、各自はそれぞれ部屋に帰った。混じり物は警護の為に近衛君の部屋に泊まるといっていたので、ネギと長瀬君が近衛君たちの隣の部屋に泊まり、反対側の隣に僕が泊まる手はずになっている。詠春氏は僕の部屋で待機するそうだ。

京都の町中に張り巡らした魔力の網とパスを繋ぎ、時が来ればすぐに魔法を発動する準備を整える。魔力の流れは質・量ともに予想以上だ。京都の町にもともと流れる魔力が、僕が設置した結界石と魔力をためた宝石による魔方陣に流れ込み、思った以上のコンディションになっている。これなら、僕の負担は想定したよりは軽いものになりそうだ。

詠春氏は黒のタートルネックにジーパンというラフな格好に着替え、刀を抜いて精神を統一している。少しでも往年の勘を取り戻そうと、イメージトレーニングをしているらしい。

僕といえば銃器と刀、黒鍵・聖書などの装備の確認を終え、使い魔を本山周辺に飛ばして索敵を行っている。

刻一刻と時間は流れ、時刻が午後十時を過ぎたとき――本山の結界が、破られた。

「――！ パリン君、どうやら来たようです」

「ですね、避難が完了しててよかった」

既に、一定以下の戦闘力しかもたないものは山から降りさせている。死人が出てしまっただけは色々と面倒だし、ありがたいことだ。

戦いへの期待に、胸が躍る。化け物を狩れる期待と作戦を上手く実行できるかどうかの不安が旨のうちに複雑に入り混じるが、しかし高揚感は収まることを知らなかった。

「このかつ！大丈夫かつ！」

壁を切り倒し、隣室に踏み込む詠春氏と、それに続く僕。混じり物もどうやら異変を感じ取ったらしく、刀を抜いて周囲を警戒していた。

「このかさんつ、桜咲さんつ！大丈夫ですかっ！」

すぐに、ネギと長瀬君もやってきた。これで、本山の戦力のほとんどはこの部屋に集結したことになる。

結界が破られて僕達が近衛くんの部屋に集結してから数分後――背後に、白髪の少年が転移してきた。

「――ッ！」

ネギと長瀬君、混じり物が近衛君を抱えて逃げ、僕と詠春氏は少年の足止めに残る。

詠春氏の放った斬撃によって広い室内に障害物は無くなり、少年はこちらを警戒して後方に飛び下がった。

「喰らえっ――」

ジャッカルを6発続けざまに打ち込み、黒鍵を投擲する。が、やはりすべて障壁に弾かれてしまった。どうやら、最初から多重障壁を展開しているようだ。

詠春氏が目にも止まらぬ速さで接近し、刀を振るう。が小年はそのすべてを見切り、カウンターで掌底を詠春氏に叩き込んだ。

「小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ。その光、我が手に宿し、災いなる眼差しで射よ。『石化の邪眼』」

後方の壁に激突し、吐血した詠春氏に向かって石化魔法が放たれる。

「障壁、展開——」

影の使い魔を変化させ、障壁として詠春氏の前面に押し出すが——少年の放った光線はいともたやすく障壁を射抜き、詠春氏の左手をかすった。

しかし衰えたとはいえ歴戦の英雄か、石化の進行を遅らせ、両手で刀をふるって最大級の奥義を発動させる。

「神鳴流奥義、極大雷鳴剣！」

呪文詠唱後の硬直を狙われ、多重障壁ごと後方に吹き飛ばされる少年。が、空中で浮遊術を使い、地面に激突する前に持ち直した。

「詠春さん、大丈夫ですか!？」

その隙に詠春氏に駆け寄り、石化の進行を調べる。

「くっ、どうやら持って2分ですね。衰えたものです、大戦の英雄が聞いて呆れる」

情けなさそうに首を振り、石化していく右腕をさする詠春氏。ろくに時間稼ぎもできなかったことが悔しいのか、唇を？み締めるあま

り食い千切ってしまったっている。

襲い掛かってきた少年の蹴りを肘でいなし、障壁の上から掌底を叩き込む。障壁こそ突破できないものの、戦いによる高揚感とこれから始まる宗教裁判への期待から、いつもより激しく、冴えた動きで次々と打撃を叩き込む。

体制が崩れたところに膝蹴りからの回し蹴りを決め、少年を大きく後方へと吹き飛ばす。

「パリン君、学園長に連絡を——このかを、頼みます」

詠春氏を振り返ると既に石化は首まで進行しており、僕が見ているうちに首から上も完全に石化して、詠春氏は物言わぬ石像と化した。

「パリン・スプリングフィールド——君は得たいが知れない。ここは引かせてもらうよ、僕はこのか嬢をさらにいく」

少年はそう言い残して、『水の転移門』で去っていた。拳動を見るに、詠春氏の一撃が少しはダメージを与えたようだ。少年の左脚は焼け焦げ、びっこを引いていた。

「さて、それでは狂信者の手管をご覧に入れようじゃないか——」

三日月に向かってそう呟き、僕は高笑いをしながらネギたちを追いかけた。

34話（後書き）

油断しなかった分だけ詠春が少しだけ強くなってました。

そういえば、今日の朝巡回した2chのスレでこのssの名称が拳がっててびっくりしました。嬉しいものですね、面白いといってくれる人があるというのは。励みになります。

35話（前書き）

修学旅行編は予定より短くなるかもです。

35話

「ああ、素晴らしい夜だ。素晴らしい、実に素晴らしい」

左手にジャッカルを、右手に黒鍵を握り、カソックに着替えて呪術協会の本部を歩く。

既に協会の構成員はそのすべてが石像にされている。非常に都合がいいことに、死人は一人も出ていない。なんと素晴らしいことか。

先行させた使い魔に近衛君たちと白髪の少年を追跡させ、僕は三日月の下を悠々と歩く。

近衛君たちは現れた敵の神鳴流剣士を退け、休憩しているようだった。全員傷はないが、体力は消耗しているようだ。

1kmほど先の儀式場では、陰陽師の女がスクナ復活の準備を進めていた。

白髪の少年と近衛君たちの距離は残り700m。放っておけばネギたちは石像にされ、近衛君は拉致されるだろう。素晴らしい、何もかもが順調だ。

ネギの上空に転移し、浮遊術を使いながら使い魔によって地上の様子を探る。

開けた水辺で、ネギと長瀬君、混じり物と近衛君が休憩していた。

「どうしよう、逃げるといつてもどこに逃げれば……」

ネギが弱気な声でそう洩らす。

「現状、救援が来るまでひたすら追っ手から逃げつつけるしかないでござるな。しかし、詠春殿とパリン殿は大丈夫でござるうか」

周囲を警戒しながら、長瀬君が言った。

「とにかく、ここからもそろそろ逃げなければ――」

混じり物がそう言つて、近衛君が不安そうに混じり物に抱きついた瞬間――森の中から声が聞こえた。

「逃がすと思うのかい？」

白髪の少年が、森の中から歩き出てきたのだ。左足はびっこを引いているが、多重障壁は健在だ。今のネギたちでは少年の多重障壁を抜くのはまず不可能だろうから、このままでは一方的に敗北するだろう。

長瀬君と混じり物が瞬動で襲い掛かり、クナイを投擲し刀を振るう。が、少年は張り巡らした障壁でそのすべてを防ぎ、掌底の一撃で混じり物を吹き飛ばし、長瀬君は後方に飛び下がった。

長瀬君の分身とネギが近衛君を逃がそうとするも、転移で回りこんだ少年によって分身はかき消され、ネギは肘撃によって吹き飛ばされ、うずくまった。

「ネギ、大丈夫でござるか!？」

冷静さを失った長瀬君が思わずネギに駆け寄るが、その隙を見逃す少年ではない。

「小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ。その光、我が手に宿し、災いなる眼差しで射よ。『石化の邪眼』」

恐るべき石化の光線が、ネギを抱き起こそうとする長瀬君に迫る。

「楓さんっ!」

長瀬君の腕に抱かれていたネギが長瀬君をかばって、石化の光線をその身に受けた。

「ネギっ!」

まともに光線を受け、みるみる石化していくネギとそれを見て顔を青くする長瀬君。

「かえで、さん……このかさんを、たのみ、ます……よわく、て、ごめんなさい……」

そう言い残して、ネギは完全に石化した。

長瀬君は少年に向き直り、研ぎ澄まされた氷のような殺気を放つ。
一見冷静なように見えるが、しかしその目は烈火のような怒りを湛えていた。

少年はといえば、相変わらずの無表情で呪文の詠唱を始めていた。

「小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ——」

長瀬君は縮地で背後に回りこみ、同時に20を越える分身が一斉に襲い掛かる。爆符を貼り付けた多数の鎖で少年を絡めとり、極限まで練られた気によって威力を高められた掌打を連続して叩き込み、巨大十字手裏剣を投擲する。大爆発が少年を襲った。

が、多重展開された障壁には一切の攻撃が通用せず、立ち込める土煙が晴れると少年は無傷で立っていた。

「——時を奪う毒の吐息を。『石の息吹』」

攻撃を受けながらも詠唱を止めなかったらしく、長瀬君は石像と化してしまった。

「じゃあ、お姫様は貰っていくよ」

眠りの魔法で近衛君を眠らせ、近衛君を抱きかかえた少年は混じり物に言った。

「くっ、お嬢様をお前なんか——」

「悪いね、眠っていてくれ」

無詠唱の石化呪文により、混じり物も石像と化す。

少年は近衛君を抱えたまま水の転移門で儀式場へと転移した。

「素晴らしいぞ、ああ素晴らしい。こいつは素敵だ、ぞくぞくする」
計画があまりにも順調に運ぶので、嬉しくなつてつい独り言を洩らす。

「待つてろよ化物ども、今から殺しにいくぞ」

そう呟いて、僕は儀式場の近くへと転移した。

儀式場では、ちょうどスクナの復活儀式が行われている最中だった。

「パリン・スプリングフィールド。やはり来たか」

「そうだ、来てやったぞ異教徒ども」

僕の前に立ちふさがる白髪の少年に、笑いかけながら言う。

援軍の第一陣が到着したようで、ポケットに入れた携帯が震えた。

「戦う前に、電話に出てもいいか？」

「好きにするといい、どのみち儀式は八割方終わっている」

「そうか……はい、スプリングフィールドです。そうか、到着しましたか。では、白髪の少年との交戦をおねがいします」

電話の相手に僕がそう言った瞬間、複数の箇所から白髪の少年に対して砲撃が行われる。

「——ッ！」

祝福儀礼を施した30mm劣化ウラン弾の嵐に、さしもの多重障壁も削られ、少年は後方へと吹き飛んだ。

援軍として遣わされた、ヴァチカン13課・総勢50名が整列し、攻撃を始めていた。

体勢を立て直した少年に黒鍵を投擲し、使い魔にハルコンネンを構えさせ、僕も砲撃を開始する。50名の援軍のうち10名が装備するハルコンネン？——ヴァチカンの工房の最新作、30mmセミオートカノン2門と巨大なコンテナボックスを繋ぎ合わせた、冗談のような兵器。射程距離4km、総重量345kgというスペックだが、身体強化の魔法を使うことを前提に設計されているため、コンテナを背負って持ち運ぶことも可能な兵器である——で全力の砲撃を行う。

凄まじいまでの砲撃の雨に、耐えかねた少年は障壁に全力を注ぐ。ペットボトル大の劣化ウラン弾が雨あられと襲い掛かる中、40名の神父も各自2丁の拳銃を懐から取り出し、撃ちまくる。

「くっ——」

少年が苦し紛れに放った石化の光線も、数人の神父が展開した教会魔法による光の盾によって防がれる。

これでは拉致があかないと、少年は神父隊の背後へと転移する——が、すばやく反応した3人の神父によって転移後の硬直に攻撃を打ち込まれ、吹き飛ばされた。

「「「「「 And the dove came into him in the evening; and, lo, in her mouth was an olive leaf plucked off: so Noah knew that the waters were abated from off the earth.」」」」」

12人の神父による同時詠唱によって威力を高められた光の津波が少年へと襲い掛かる。

「地を裂く爆流」

少年も負けじと、溶岩を噴出させ光の津波を防ぐ。

溶岩と光の津波が激突し、互いを喰らいつくさんとのたうつ。一瞬、溶岩が打ち勝つかに見えたが——ハルコンネン？を構えた神父たちの砲撃によって、たちまち少年は呪文に力を注ぐことをやめざるをえなくなり、障壁を展開しつつ宙へと舞い上がった。

「They have sown the window, and
they shall reap the whirlwind」

宙に舞い上がった少年に、見えざる風の刃が襲い掛かる。『刈り取る』という概念によって強化された風の斬撃は、少年の障壁を刈り取って彼の左腕を切り裂いた。

どくどくと血が流れる左腕を無表情に眺めて、砲弾の雨を防ぎながら少年は言った。

「……ヴァチカンの特務部隊が相手では分が悪い。ここは引かせてもらうよ」

白い骨の露出した左腕を不快そうに摘み上げて、顔をしかめながら彼は転移した。数秒後、砲弾の雨も止む。

少年が消え去った後、援軍として使われた神父たちが一斉に僕に向かつて跪き、代表格の男が恭しく言った。

「ヴァチカン特務局第13課イスカリオテ機関、50名——機関長の御命により、我ら参陣いたしました。我らの参陣と同時に スプリングフィールド司祭は昇進、スプリングフィールド司教になります。それとともに、イスカリオテ機関の副長に就任されます」

「——Amen！ 全力で任務を遂行しよう」

昇進の件は初耳だ。おそらく、上司が裏で手を回してくれたのだろう。前線を退くつもりは微塵もないが、これでより大きな仕事ができるようになる。素晴らしいことだ。

「くッ、くくくッ、くくくッ、くくッ、くくくくッ、くくくくッ、くくくくくくくくくくくくくくくくくくくッ——素晴らしい、素晴らしいぞっ！ ああ、化け物と異教徒はすぐそこにいる、すぐにでも殺せるんだ！ 素晴らしい、本当に素晴らしい！」

腹の底から高笑いする。化け物を倒せる歓喜から、跪いた神父たちも徐々に笑い始め、ついには全員が歓喜を共有して高笑いを始める。

しばらくして皆の高笑いが収まると、僕は宴の開始を宣言する。前方では、身の丈100mはあろうかというバケモノが封印を食い破り、出てくるところだった。

「「「「「Out of the deep have I called unto thee, O Lord」」」」」

51人による大詠唱によって、僕が京都中に張り巡らした魔方陣が発動する。

地面が振るえ、正面でいまにも封印を破らんとするバケモノに勝るともおとらない大魔力が振動する。

やがて京都の上空にいくつもの魔法陣が現れ、光り輝き始めた。

僕が用意した切り札、ヴァチカン11番空中艦隊——空中要塞『アヴェ・マリア』を旗艦とする全50隻からなる空軍が、京都上空に転移を始めていた。

大規模な認識阻害が発動し、魔法抵抗力をもたないものは一切の異常を認識できなくなる結果が京都市中を覆う。

空中要塞『アヴェ・マリア』を中心に、10隻の空中空母、15隻

の巡洋艦、25隻の戦艦が隊伍を組み、その周囲を無数の軍用ヘリが覆い尽くしている。

魔方陣の光で照らされた空を白塗りの艦隊と黒の軍用ヘリが埋め尽くし、生意気な異教徒にヴァチカンの威容を思い知らせる。

「なんや、なんなんやこれは！」

陰陽師の女がスクナの胸の前で取り乱し、わめいている。

「ヴァチカンの誇る12の艦隊のうちのひとつ、エンリコ・マクスウェル大司教率いる第11番艦隊さ。では、近衛君は返してもらおう」

女の目の前に転移した僕は、近衛君を取り戻し、近衛君を抱えて再び地上に転移した。

『我らは死の天使の代行人である！これより宗教裁判の判決を行う！』

拡声の魔法によって、ヘリの爆音をしのぐほどの大声が響き渡った。

『被告！ 異教徒！ 被告！ 化け物！ 判決は死刑！ 死刑だ！ 死

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

35話（後書き）

これほど感情移入できないオリ主も珍しい、と書いてて思った。

36話（前書き）

寝てたら日付が変わってました。

36話

近衛君を眠らせ、本山の館に転移させて戦闘の準備を整える。

上空では、封印を完全に食い破ったスクナと空中艦隊による戦争が始まっていた。

「武装神父隊はあくまでサポートに徹しろ——我々の真の獲物は『闇の福音』だ。今のうちに魔力・体力を回復させておけ」

「了解しました、司教殿」

武装神父隊を待機させ、僕は使い魔を通して戦争の経過を見つめる。

『全艦隊構成員に告ぐ——歌え！主を褒め称えよ！』

マクスウェル大司教の命令が響き渡り、数秒後——3万人の信徒が一斉に賛美歌を歌い始める。

『Ave, Maria! Maiden mild! Oh listen to a maiden's prayer; For thou canst hear tho' from the wild, And Thou canst save a mind despair, Amid despair……』

狂信者のささげる祈りが光り輝く熱衝撃波となつて、スクナに襲い掛かる。荘厳な金色の光が2面4腕の化け物を焼く様は、まるで神話の一風景のようだった。

「グガアアア！」

化け物は焼かれる痛みには耐えかね、叫び声を上げる。が、この手の化け物の最も恐ろしいのはその再生力だ。事実、150mを超えるスクナの巨躯は、その半分が焼け爛れていたにもかかわらずものの数秒で元の姿に復元する。

スクナが腕を振り上げ、手近の軍艦に腕を叩きつける。が、狂信者の祈りは全てを阻む光の壁を出現させ、巨大なビルほどもあるスクナの腕を正面から防いだ。

『全艦、砲撃開始！』

荘厳な賛美歌が響き渡り金色に照らされた空間で、軍艦の艦砲が次々に炸裂し、ミサイルがスクナに襲い掛かる。

祝福儀礼を施された大砲やミサイルですら、与えたダメージが数秒もすれば全快してしまう。それでも、大艦隊による砲撃の嵐は巨大な化け物をひるませるのに十分だった。

『Amid despair. Safe may we
sleep beneath thy care. Tho' bani

sh' d outcast and reviled, Oh, M
aiden hear a maidens prayer. O
h Mother, hear a suppliant chi
ld! Ave Maria! Ave, Maria! Und
e filed! The flinty couch we no
w must share,.....」

3万人の狂信者達の合唱は、使命を遂行しているという歓喜からさ
らに激しさを増し、聖性そのものを音波に乗せてスクナに叩きつけ
る。

空間そのものが聖化され、スクナはそこにいるだけで表面が焼け爛
れる。しかし、化け物の再生力はすさまじく、焼け爛れるそばから
再生し、また焼け爛れる。

空中空母から戦闘機と爆撃機が飛び出し、編隊を組んでスクナの上
空を飛び回り攻撃を始めた。50の戦闘機によつて100発のA I
M-54（空対空ミサイル）がスクナに叩き込まれ、上半身を吹き
飛ばす。

上半身を吹き飛ばされたところを爆撃機による爆撃と艦隊からのミ
サイルが襲うが、しかし再生速度のほうが速い。凄まじい弾雨の中、
スクナは再生し続ける。

「撃てー！撃ちまくれー！」

上空を覆いつくすほどの軍用ヘリの群れから、いつせいに対艦ミサ
イルがスクナめがけて撃ち込まれる。500機以上のヘリからミサ

イルを撃ち込まれ、さらに艦砲による砲撃や賛美歌による攻撃も加わり、ついに攻撃と再生のペースが拮抗する。

『どうだ化物！これが我々の！これがヴァチカンの力だ！ひれ伏して許しを請え、泣き叫んで救いを求める！虫ケラ風情が神の軍団に適うと思うなよクスが！死ね！豚のような悲鳴を上げて死ね！異教徒は皆殺し！汚物は消毒！我々こそが唯一絶対の神の地上代行者なのだ！貴様ら汚らわしき異教徒が調子に乗りやがって、死ね！今すぐ死ね！クス雑巾ども！ゴミども！神に逆らう豚ども！アヒヒ、ヒヒヒ、ヒヤハハハハハハハハハハ！』

マクスウェル大司教が、非常に興奮した様子で絶叫する。

「まったく、素晴らしいですな、あのお方は」

武装神父隊のリーダー格の男が、僕に話しかけてきた。

「ああ、まったく。本当に素晴らしい方だよ、マクスウェル大司教様は。異教徒どもに我々の力を見せ付けることに關しては一流だ」

心の底から同意する。上昇志向が強すぎるのが玉に瑕だが、それ以外はとてもいい方なのだ、マクスウェル大司教様は。素晴らしい、ああ素晴らしい。

上空ではガンシップが陰陽師の女に機銃掃射を加え、女を肉片と化していた。それを見たマクスウェル大司教が歡喜に絶叫して、狂信者達も歡喜に打ち震え、よりいっそう高らかに賛美歌を歌い上げる。

信徒達の祈りによって光が巨大な剣として編み上げられ、スクナを

両断する。

スクナはすぐに再生するが、剣はそのたびに何度も何度も斬撃と刺突を繰り返し、化物を殺そうとする。

「実に素晴らしい光景だ、ああ、これが、これこそが僕の望むべきものだ」

化物が肉片を撒き散らし、血しぶきを上げる様をうつとりと見守り、嘆息する。

「いいぞ、これはいい。実にいい、素晴らしい。本当に美しいな、いいものだ」

ミサイルが、艦砲が、機銃が、爆撃が、光熱波が……付与された聖性によって金色に輝くそれらが薄汚い化物を押し潰し、粉碎し、切り裂くさまは、実に美しい。辺りに響き渡る賛美歌とあいまって、素晴らしく心が洗われる風景だ。カメラを忘れたのが実に惜しい。

「君、カメラを持っていないかね？」

隣で涙を流して感動する神父に、そう問いかける。

「あいにくと自分は持っておりません。しかし、マクスウェル大司教様は撮影班も連れてきているそうです」

「そうか、ありがとう。しかし、実に素晴らしい風景だな」

「ええ、まるで天使が降臨したかのようです。本当に、惚れ惚れするほど美しい」

そろって深々とため息をつき、光景を心に焼き付ける。

「そうだ、だから——この場に部外者がいるのは許されないと、そう思うよな？」

「はい、そのとおりです」

ボソリ、と呟いて、右手にある森の奥を凝視する。

先程から何者かが紛れ込んだのは察知していたが、さて侵入者は誰か、と使い魔をやって探してみると——超君だった。

「やあ先生、いい夜ネ」

発見されたことを察知して、微笑みながら歩いてくる超君。

「貴様、何者だ！」

一瞬で十数名の神父に囲まれ、拳銃を突きつけられるが、しかし彼女は平然と微笑んだままだ。

「よせ、彼女は僕の知り合いだ」

「はっ、了解いたしました、司教殿」

僕が声をかけると、の海網殺気を放っていた神父たちは一斉に銃をしまい、元の場所へと戻る。

「私はただ見学に来ただけネ。そう邪険に扱うのはよくないヨ」

「知るか。一般人がこんなところまで来るかよ」

物見を邪魔された不快感を殺気として叩きつけるも、彼女は涼しい顔でそれを受け流す。食えない女だ。

「いや、正確に言うとアナタの力を見に来たネ——私の計画にとって最大のイレギュラーであるアナタが、どれほどの力を持っているのか。非常に気になる命題じゃない力」

「フン、僕は君の邪魔をするつもりはないさ——時間素行の是非を教義に照らし合わせていたら、あっという間に麻帆良祭は終わってしまうだろう。人死にがでない程度なら協力してやってもいいくらいだ」

「へえ、そこまで知ってるとは——」

超君の顔から微笑が消え、鋭い眼光が僕の目を射抜く。

「ならば話は早い。金はいくらでも積む、協力してくれない力？」

「ああそうだな、だがそれだけでは足りん。僕は13課だ、言いたいことはわかるな？」

そう、これならば僕も超君も互いに損をせず、目的を遂行できる案を提案する。

「マナを殺す、力……」

「ご名答。やはり君は天才だ、頭の回転でかなう気はしない」

そう、僕を雇用する代わりにあの混じり物を超君が消す。時間逆行の魔法が使えるならアリバイなどいくらでも作れるし、魔法が使えるなら証拠隠滅はたやすい。

「——わかたネ。必要な犠牲、と思うことにする」

「ずいぶんとまた物分りがいいな。もう少し粘るかと思ったが」

「アナタを味方にすることで救えるかもしれない多くの人間と、それほど親しいわけでもないクラスメイト1人——どちらを選ぶべきかは明白ネ」

感情を押し殺した声で超君は言った。

「——お邪魔してわるかたネ、先生。では、いい夜を」

再び微笑んでから、超君はホテルのほうへと去っていった。

上空では、スクナが守勢に回っている。空中要塞『アヴェ・マリア』の主力魔導砲が魔力充填を始めているので、あれが完全に充填されきり、発射されれば僕達の勝ちが確定するわけだ。

『Shall seem with down of eider
piled If Thy, if Thy protection
n hover there. The murky cavern's
heavy air shall breathe of Balm
if thou hast smiled; Then, Maiden
hear a maiden's prayer. Oh Mother,
hear a suppliant ch

ild! Ave Maria!

大合唱も大詰めを迎え、光の帯が鞭のようになってスクナにおそいかり、引き裂き、焼き尽くす。傷つくそばから再生する化物もここまで来てようやくその回復力は落ちてきていた。それでもまだ再生速度のほうが傷つくスピードよりは速いが、しかし殺されるのは時間の問題だろう。『アヴェ・マリア』の主力魔導砲は、カタログスペックをちらりと見た限りではおおよそひとつの都市を一撃で滅ぼすだけの威力がある。純粹な威力だけでもそれだけのものがあるのに、祝福によって対化物の効果を授けられた砲撃は一体どれほどの効果をスクナに対して発揮することが。

『魔導砲エネルギー充填率、90パーセント!』

『100パーセント到達まで残り2分30秒をきりました!大司教殿、ご命令を!』

上空では、賛美歌にけされないために拡声の魔法を使ってやり取りをしている。

「——来たか、化け物」

そして、金色に発光しながら神の威容を知らしめようと魔導砲がひととき大きく輝いた瞬間——目の前の影がうごめき、真祖の吸血鬼が飛び出てきた。

36話（後書き）

マクスウェル「ヴァチカンの艦隊は全部で12個ある。そして、番号が若くなっていくほど強力で、大規模になる。この意味が、わかるな？」

37話(前書き)

V S エヴァンジェリン・前編

37話

「そうだ来てやったぞ狂信者、お前も存外に悪なのだな」

「——なに？」

「ジジイにいわれて救援に来てみれば、もう救援は必要ないではないか。これは貴様が仕組んだことなのだろう？」

「フン、そんなことはどうでもいい。それより——死刑だ、吸血鬼！」

叫んで、黒鍵を投擲し、ジャツカルの引き金を引きまくる。背後に控えた神父たちもいつせいに銃を構え、撃ち始めた。

「そうか、私の命が狙いか！それはいい、甘美だ！さあ、闘争を始めようではないか！」

吸血鬼が愉快そうに叫び、氷の盾によって銃弾が防がれる。

「砲兵！」

「Amen！」

10人の神父たちがハルコンネン？を構え、撃ち始める。

「いいぞ、そうだ！それでこそわが宿敵、イスカリオテのユダだ！
そうだ、もっと私を苦しめて見せる！」

吸血鬼がそう叫ぶと、彼女の背後に幾百もの氷柱が出現し、いつせいにこちらへと迫ってくる。

「来たれ黒の月、女王の息子。其れ織り成すは雷雲なり。『黒雷の嵐』」

マギウスの杖を掲げ、呪文を詠唱する。視界を埋め尽くすほどの氷柱と暗黒の雷が激突し、轟音とともに辺りを水蒸気が覆った。

霧の向こうから、吸血鬼の詠唱が聞こえる。

「出でよ我が僕！召喚、『人形騎士団』！」

吸血鬼が叫ぶと、彼女を中心に地面に数百の魔法陣が出現する。

「喰らええっ！」

神父たちがいつせいにグレネードランチャーを構え、吸血鬼の周囲に爆発が起こる。クレーターができるほどの大爆発も、しかし魔法障壁によって防がれてしまった。

「私を倒して見せろ！この私の、長い長い夢の狭間を終わらせて見せろ！」

吸血鬼が叫び、魔法陣がよりいつそう輝き——数百体の騎士甲冑が出現した。

上空を飛び回っていたガンシップが2機、吸血鬼のまがましい気配に吸い寄せられるかのようにこちらへと突撃してくる。

「死ね、化け物！死ね、吸血鬼！一片の肉片も残さず、一滴の血も残さず死ね！主に栄光あれ！」

操縦手はそう叫びながら、機銃とミサイルをやたらめったに撃ちまくりながら吸血鬼に特攻する。

ミサイルも機銃掃射も魔法障壁で防ぎ、特攻してきたガンシップは——吸血鬼の面前で銀系が輝いたかと思うと、縦に両断されて撃墜された。

「人形遣いの基本的なスキルさ、クリスチャンども」

ニヤリと笑った化け物に、神父たちはひるむことなく攻撃を仕掛ける。30mm劣化ウラン弾が、祝福を受けた454カスール弾が、金色の風の刃が、金色の炎が、吸血鬼を滅ぼさんと襲い掛かる。四方から襲い来るそれらを、あるときは人形で、あるときは魔法障壁で防ぐ吸血鬼。

「歌い踊れ狂信者！人形たちよ、突撃せよ！」

剣と盾を掲げた人間題の騎士甲冑が、まるで人間が中にいるかのような滑らかな動きで襲い掛かってくる。

神父たちはそれぞれ剣や槌、矛やバトルメイスなどといった近接戦闘用の武装を取り出し、襲い掛かってくる人形たちに挑みかかる。

あちこちで金属同士がぶつかり合う音が聞こえる中、僕も刀を抜き、人形たちを斬りまくっていた。

「島原抜刀流・秋水！」

居合いに魔力を乗せ、衝撃波で一気に5体の人形を斬り捨てる。

「お先に逝きます！」

叫び声の主を見ると、騎士甲冑の剣に腕を切り落とされ、残りわず

「来たれ黒の月、女王の息子。吼えよ赤竜、破壊の化身。『黒炎の顎』！」

吹雪と火炎が激突し、拮抗する。その余波で、地上の人形たちが何体か巻き添えになり、破壊された、神父たちは聖性の盾によってその身を守り、動きの止まった人形たちへ銃弾を撃ち込む。

マギウスの杖と魔力をこめた宝石によってブーストされ、暴走直前まで高まった魔力が黒炎を勢いづかせ、吹雪を押しつける。闇の炎によって形作られた竜の顎が吸血鬼を飲み込み、焼き尽くす。

「やったか!？」

「いや、まだだ」

若い神父が早まって吸血鬼の死体を確認しようとしたのを押しとどめ、周囲を警戒する。

「——賢明だな、カトリック」

「我々は何度も同じ手にやられてるんだ、今回こそは根絶やしにさせてもらおう」

上空より飛来した幾百もの蝙蝠が密集し、吸血鬼は復活する。

「かつて貴様を磔にし、火あぶりにしたときも、十字路に灰をまく前に復活され、惜しくも取り逃がした——今度こそは逃がしはしない」

そう、ヴァチカンに貯蔵されていた記録の中には、聖火に焼かれ灰にされてもなお、この吸血鬼は復活すると記述されていた。今回こそはその教訓を無駄にせず、この化け物を根絶やしにしてみせる。

姿を現した吸血鬼に、刀を抜いて襲い掛かる——が、しかし足元から出現した十数対の人形に行く手を阻まれ、吸血鬼は後方へと退避した。

「ガラクタ風情が、邪魔を——するなあー！」

叫びながら無詠唱の『魔法の射手・連弾・闇の1029矢』を発動させ、風の性質を付与した闇の矢で行く手をさえぎる人形を吹き飛ばす。

「飛べっ！」

呪文を叫び、影の倉庫から取り出した幾百、幾戦もの黒鍵を吸血鬼に向かって射出する。

降り注ぐ対化け物の概念武装に、さしもの真祖も障壁を削られ、体を貫かれていく。

「素晴らしい、なんて甘美な痛みだ！いいぞジューダス・プリースト、もっと、もっとだ！」

高笑いしながら、幾百もの氷柱で黒鍵を相殺する吸血鬼。

「死ねっ、死ねっ、死ねっ——」

がむしゃらに影の使い間を召喚しまくり、ハルコンネンで劣化ウラン弾の雨を降らせ、剣を持たせた使い魔が、槍を持たせた使い魔が吸血鬼に襲い掛かる。

またしても出現した騎士甲冑に阻まれるが、使い魔を編み上げた魔力を一点に収束させ、爆発させる。指向性を持たせた爆発が黒鍵を防ぐのに夢中だった吸血鬼を襲い、その右半身を吹き飛ばす。

「甘い、甘いぞ！この程度では死ねない、この程度では死ねないのだ！銃を構えろ、剣を取れ！狗ではだめだ、貴様自らが剣を取るのだ！」

一瞬で右半身を再生させ、お返しとばかりに闇の魔法の射手を撃ち込んでくる吸血鬼。

「魔法の射手・連弾・闇の3033矢！」

対抗して魔法の射手を撃ち、三日月の下視界を埋め尽くすほどの魔弾が激突し、競り合う。

ブーストした魔力によってようやく闇の福音と同等というのは少しまずい。宝石は残り14個、大規模な魔法の打ち合いは得策ではないか。

「魔法剣、闇の刃！」

和泉守国貞を魔力によって編まれた闇が覆い、闇によって刀身が延長され、巨大な剣となる。

全長6mあまりの巨大な闇の剣を振り回し、騎士甲冑を蹴散らしながら吸血鬼の障壁を削る。火炎の性質を付与された闇によって、金属製の騎士甲冑はかすただけで溶け、使い物にならなくなる。

「エクスキューショナーソード」

吸血鬼の手にも魔力によって編まれた剣が出現し——僕の剣と正面から激突する。

実体を持たないながらも火炎の性質を付与された剣によって、吸血鬼の魔力剣を止め、その隙に無詠唱で闇の火球を叩き込む。魔力障壁によって火球は消されたが、熱波が吸血鬼を襲う。

お互いに魔力剣のぶつかり合いは千日手だと察して、後方へと飛び下がった。

「死刑だ！死刑！化け物は死刑！Amen！」

飛び下がった吸血鬼に、艦隊から離脱したらしい戦闘機がマッハ2のスピードで迫り、激突する。さしもの吸血鬼も戦闘機に特攻を喰らってはひとたまりもないのか、魔力障壁を吹き飛ばされ、ぐちゃぐちゃの肉片が飛び散った。

戦闘機がまるで十字架のように地面に垂直に突き立ち、燃料に引火して燃える。

「ああ、やはり人間は素晴らしい。これほど甘美な闘争は久しぶりだ、礼を言つぞ狂信者」

燃え盛る戦闘機の下から、吸血鬼が体を再構築しながら歩み出てる。

「Amen！」

そう叫んで、手袋をはめなおして吸血鬼に殴りかかる。合気術をやっているらしいという情報のとおり、吸血鬼は僕の拳法に勝るとも劣らない完成度の格闘技能を持っていた。

掌底を受け流され、バランスを崩したところに鉄扇を撃ち込まれる――が、負けじと足で鉄扇を蹴り上げ、吸血鬼に向き直ってラッシュを加える。

過剰な身体強化によって音速に近いスピードで振るわれる蹴りや掌底、肘撃を吸血鬼はすべて受け流す。しかし、その衝撃波だけでもダメージを与えるには十分であり、吸血鬼はまわし蹴りの衝撃によって吹き飛ばされた。

「突っ込めー！敵は吸血鬼だー！」

先ほどの戦闘機の特攻が目立ったのか、上空より次々と戦闘機やガンシップが飛来し、吸血鬼に特攻をかける。

「主に栄光！」

「御国が来ますように！」

「Amen！」

3機の戦闘機がマツハの速度で吸血鬼に突っ込み、爆発する。僕ははるか後方へと跳び下がり、持っている戦闘呪文の中でもっとも威力の高い呪文を唱えていた。

「暗黒の体現者、奈落の主よ。今ここに竜殺しの槍を闇に染め上げ、わが宿敵を討ち滅ぼさん。五首の竜よ、これを祝福したまえ。『大・

竜殺しの槍』」

全長20mはあろうかという巨大な闇の槍を編み上げる。宝石を5つ使いきり、僕の最大魔力の18倍もの魔力を注ぎ込んで、大呪文を完成させた。

「——討ち滅ぼせ！」

槍が完成し、その威容を明らかにすると同時に——槍を射出し、戦闘機に特攻され、再生したばかりの吸血鬼へと叩きつける。

凄まじい勢いで射出された槍は、吸血鬼を抉り抜き、地面に突き立った。轟音とともに巨大なクレーターが形成され、槍を編み上げる魔力が爆散して大爆発が起こる。

「——っ、なるほどこれは凄まじいな。再生が阻害されるのか」

蝙蝠が集合し、ゆっくりと吸血鬼が再生するが——その速度が、格段に遅い。

「定命ならざる者に一撃を加えることに特化した槍だ。これで、もはや貴様の再生力はほとんど奪われたはず——」

37話（後書き）

10歳の女の子に戦闘機が特攻かけるって中々シユールかもしれない。

38話

僕の面前に、5体の騎士甲冑が立ちふさがる。

「Amen!」

神への祈りを叫び、そのすべてを一刀で斬り捨てて吸血鬼へと迫る。幾十もの魔法の氷柱が、凄まじい勢いで射出され、僕の体を貫かんと飛来する。

「Amen!」

右に避け、それでもよけきれなかった氷柱を刀で弾き、体勢を立て直す。

吸血鬼は数百対もの騎士甲冑を新たに召喚し、その向こうで高笑いをしながら僕を待っている。

「死刑だあ！お前ら全員、皆殺しだあ！」

もはや自分が何を叫んでいるのかもわからなくなるほどに、頭は熱くなっている。それでも不思議と周囲の状況はよくわかり、騎士甲冑の振るう剣を紙一重でかわし、甲冑の間接部分を切り落とした。

「司教殿！助太刀します！」

背後から、武装神父隊の面々が武器を構え、加勢する。大槌が振るわれ、金色の炎が噴射され、モーニングスターが破壊を振りまく。

ガンシップが上空より飛来し、甲冑に機銃掃射を加えていく。数瞬後、ガンシップは魔法の氷柱に貫かれ撃墜されたが、パイロットは爆弾を腹に巻きつけて騎士甲冑たちの真上へとダイブした。

いたるところで爆発が起こり、騎士甲冑は見る見るその数を減らしていく。が、吸血鬼も指をくわえてみているわけではなく、甲冑との戦いに夢中になっている神父たちを魔法で射抜き、次々に命を刈り取っていく。

「喰らえっ、喰らえっ、喰らえっ！」

黒鍵を投擲し、吸血鬼を牽制する。障壁も弱まっているらしく、貫通こそしないものの衝撃で吸血鬼は吹き飛んだ。

「ぐっ——」

背後から騎士甲冑の剣によって左腕を刺され、激痛が体を走る。ジヤッカルを抜き斬りつけて来た騎士甲冑に応戦する。13mm爆裂鉄鋼弾によって騎士甲冑は頭部を抉り取られ、崩れ落ちた。

左腕の治癒に回す魔力は残っていない。カソックの袖で手早く止血し、再び戦いの渦中に飛び込む。

斬って斬って斬りまくっても、騎士甲冑は沸いて出てくる。

「逝きます！」

また一人、若い神父が複数の剣に体を貫かれ、体に巻きつけた爆弾を爆発させる。十数対の騎士甲冑を巻き添えにして、青年は命を散らした。

周りの神父たちは、あるものは高らかに賛美歌を歌いながら、あるものは同僚を討ち取られた悲しみに涙しながら、力を振り絞って戦っていた。

騎士甲冑の剣を受け流し、甲冑に斬りつける——と、強化していた刀が使いすぎによって折れた。

「くそつたれ、地獄だなまるで！」

悪態をついて、素手で戦いに挑む。身体強化によって拳は傷まないが、それでも刀がないと消耗が激しいのだ。

肘撃で、膝蹴りで、掌底で、頭突きで——全身を戦いの武器としながら、甲冑を粉碎する。

もう、戦い始めてからどれほどの時間がたったかわからない。全身を痣だらけにして、斬り付けられた傷口から血を流し、それでもなお僕は戦い続ける。

神への賛美を高らかに歌い、前方で高笑いする吸血鬼を目指し、行く手を阻む甲冑を素手で蹴散らす。打撃を与えるたびに全身が悲鳴を上げるが、かまってはもらえない。義務感と使命感に突き動かされながら、僕は戦い続ける。

「ぐはあっ！」

槌を構えた騎士甲冑に殴り飛ばされ、宙を舞う。あばらが何本か折れたようだが、回復させる魔力はもはや残っていない。

それでもなお、接近してきた甲冑を吹き飛ばし、再び突撃する。

すでに何人かの神父が甲冑の凶刃にかかり、命を落としていた。

Amen! Amen! Amen!
 Amen! Amen! Amen!

ひたすらに神への祈りを叫びながら、突撃する。

そのとき、マクスウェル大司教の勝ち誇った声が聞こえた。

見たか化け物！ 思い知ったか！

ちらりとスクナのほうを見ると、主力魔導砲と間法の一斉攻撃によつて、スクナが完全に討伐されたところだった。

「AAAAAAAAAAAAAEEEEEEEE
EEEEEE!!!」

歓喜に吼え、体の底から活力がわいてくるのを感じた。

『諸君！神を騙る汚らわしき化け物は打ち倒した！だがしかし、いまそこでわれらの同胞が薄汚い吸血鬼と戦っている！諸君！信徒諸君！どうか、彼らのために歌ってくれたまえ！』

マクスウェル大司教がそう言うと、3万人の信徒が歓声を上げ、すぐに大声で賛美歌を歌い始めた。

信徒たちの祈りによって、金色の光が当たりに降り注ぐ。見る見るうちに魔力が回復し、傷が治るのを感じる。

「素晴らしい！これでまだ戦える！素晴らしいぞ！」

歓喜の雄たけびを上げ、極限まで身体強化に魔力を注ぎ込んで突撃する。魔法を放ちながら拳を振るい、凄まじいペースで甲冑を破壊する。

「H A M E E E
E E E E E E E E N ! ! ! !」

絶叫しながら拳を振るい、魔力弾をむちゃくちゃに放つ。吸血鬼めがけて飛んだ魔力弾は障壁によって防がれたが、しかし爆風とともに数体の甲冑を吹き飛ばす。

神父たちも回復したようで、歓喜に体を打ち震わせながら突撃する。ついさっきまで体を剣に貫かれて瀕死だった神父も、剣を腹から引き抜き、モーニングスターを振り回して突撃していった。

信徒たちの祈りによって、傷を負ってもすぐに癒える。目の前で腕を切り飛ばされた神父は、10秒後には新しい腕が生えたのいいことに再び突撃していった。

「化け物めえ！」

「神に栄光あれ！」

「死刑だ！死刑だあつ！」

ガンシップが3機飛来し、いつせいに吸血鬼に機銃掃射を加える。障壁によって機銃を防ぐも、上空より飛来した数十発のミサイルによって吸血鬼は吹き飛ばされた。

「素晴らしい！この私を！この『闇の福音』を！ここまで追い詰めるのは貴様らカトリックだけだ！いいぞ、もっと！もっとだ！」

吸血鬼は歓喜の声を上げ、広域魔法によって迫り来る戦闘機やガンシップを撃墜する。

僕は拳法の型を捨て、本能の赴くままにがむしゃらに拳を振るっていた。

「AMEN! AMEN! AMEN! AMEN!
! AMEN! AMEN! AMEN!

「はあああああ！」

神父たちも支離滅裂な雄たけびを上げ、がむしゃらに武器を振るう人形が現れる。ペースを殲滅するペースが上回り始め、甲冑はみるみる数を減らしていく。

壊し、壊し、また壊し——幾百もの騎士甲冑を破壊してもなお、吸血鬼は召喚し続ける。

「前へ！前へ前へ前へ！」

叫びながら拳を振るい、突撃する。神父たちも歓声を上げ、めっちゃくちやに暴れまわる。

激しい闘争は無限に続くかに思えたが、しかし——僕は、とうとう行く手を阻む騎士甲冑を殺しつくし、吸血鬼の前へと躍り出た。

「そうか、やはりお前は素敵だ。さあ、闘争を始めよう！」

吸血鬼は叫び、幾百、幾千もの氷柱が降り注ぐ。

AMEN!

祈りを拳に乗せ、巨大な衝撃波によって氷柱を弾き飛ばし、溶かしつくす。

H
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
!
!
!
!

吸血鬼に飛び掛り、拳を振るう。吸血鬼は避けるかと思いきや、魔力で強化した拳をたたきつけてきた。

音速を超える拳同士がぶつかり合い、衝撃波であたり一面がクレーターと化す。互いに魔力を限界まで拳に注ぐことで、拳は傷つきながらもさいせいし、凄まじいまでのぶつかり合いに耐えていた。

10秒ほど競り合い、互いに後方へ飛びのく。

パワーでは互角なら——技術で勝つ！

魔力を全身に浸透させて傷を癒し、再び拳法を駆使して吸血鬼と渡り合う。

鉄扇で転ばされ関節を極められるも、わざと関節を折って、驚いた吸血鬼に掌底をお見舞いする。関節が折れる激痛に悲鳴を上げかけるが、根性でこらえる。

祈りによって瞬く間に関節は治癒し、掌底でひるんだ吸血鬼にラッシュをくわえる。

1秒に5回のペースで殴り、吸血鬼の内臓にダメージを与える。が、夢中になりすぎて隙ができ、口の中に手をつ込まれて舌を引き抜かれ、喉をぐちゃぐちゃにかき回される。

吸血鬼の腕をつかみ、口から手を引き抜く。恐ろしいほどの出血に一瞬だけ立ちくらみがしたが、またたくまに傷は再生した。

お返しとばかりに目に指を突っ込み、眼球を抉る。互いに獰猛な笑みを浮かべ、悲鳴をこらえて相手の肉を抉り、噛み千切った。

しかし、僕は傷を追っても一瞬で再生するのに対し、吸血鬼は先ほどの魔法によって再生に時間がかかる。次第に弱まっていく吸血鬼と、常に全力全開な僕との間には徐々に差がつき始めていた。

吸血鬼は、目の前の狂信者をにらみつけ、口の端に笑みを浮かべて

腕を広げた。挑発するかのようなその仕草によって、数百の氷柱が出現し、襲い掛かってくる。

心臓が早鐘のように打ち続ける。興奮と歓喜によって手が震えるが、魔力の過剰供給によってそれを押さえつけ、飛来する氷柱を叩き落し始める。

恐ろしい氷の槍が下から、左右から、そして正面から襲い掛かってくる。対する僕は徒手空拳。しかし、祈りによって傷は回復する。だから、何も怖いものなどない！

氷柱を弾き飛ばし、たまに体を貫かれ、再生しながら前進する。吸血鬼は渾身の魔力を使って次々と氷柱を精製し、射出してくる。

歓喜と使命感にかきたてられ、拳を振るう。全身に傷を負うそばから再生し、氷柱を叩き落とし続ける。

そうしている間にも上空の合唱は一層激しくなり、金色の光が僕のみを包む。無限に湧き出る魔力に物を言わせ、拳から光熱波を叩き出して氷柱を弾く。

「いつまでそうしているつもりだ、狂信者！私を倒すつもりなら、本気になってかかって来い！」

吸血鬼が吼える。その声を聞いた僕は雄たけびを上げ、毛細血管が破裂するのにもかまわず全身に魔力を集中させ、力の限りに拳を振るう。

眼球の毛細血管が破裂し、視界が赤く染まる。が、眼球はすぐに再生し、視界はより一層クリアになっていく。

過剰すぎる魔力供給によって体が壊れ、壊れるそばから信仰によって体が作りかえられていく感触。力が満ち溢れ、魔力の奔流が体内でうねった。

ついに吸血鬼の眼前に立った僕は、血のような赤い眼をにらみつけ、憎悪と歓喜に染まった拳を振るう。吸血鬼はしかし、かつてないほどの魔力供給によって大砲の一撃と遜色ない威力を持った拳を受けてなお、その場に立っていた。

「どうした吸血鬼。かかって来ないのか？」

立ち尽くしたまま身動きをしない吸血鬼の目を覗き込み、問いかけると――吸血鬼は倒れ伏し、動かなくなった。

不審に思い、影の倉庫から黒鍵を取り出して滅茶苦茶に突き刺しまくる。あふれ出る魔力の奔流によって祝福を施した特別性の黒鍵を受けてなお、吸血鬼は身じろぎもしなかった。

「死んだ、のか……？」

心臓に耳を当ててみると、確かに鼓動は聞こえない。

再生を阻害する魔法と、黒鍵の概念武装としての効果によって――闇の福音は、斃れたようだった。

「うおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

歓声を上げ、腕を振り上げる。

神父たちが戦っていた騎士人形たちも、糸が切れたかのように崩れ落ちる。

それを見て、こちらに目を向けた神父たちは――斃れた吸血鬼と、

その背に突き刺さる黒鍵を見て、大歓声を上げた。

神父たちの大歓声によつて闇の福音が倒れたことを知つた3万人の狂信者が、合唱を辞めて勝利の雄たけびを上げる。

[illegible]

僕は腕を振り上げ、歓喜に絶叫して——そして、意識を失った。

38話（後書き）

V R M M O トリップモノ、連載始めました。よろしければ読んでください。評価・感想などもらえるとうれしいです。↓<http://ncode.syosetu.com/n0401x/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9598v/>

魔法先生ネギま！ 信仰する転生者

2011年9月25日16時35分発行